

平成30年度生涯学習・社会教育総合調査研究事業

# 青少年の体験活動に関する県民の実態調査 報告書

平成31年3月  
青森県教育委員会



## はじめに

近年、青少年を取り巻く環境は、少子化や核家族化の進行、地域力の低下などに加え、スマートフォンやSNSなどといった情報化社会の進展などにより多様化・複雑化しており、青少年の意識や行動に多大な影響を及ぼしています。

このような中、青少年期に、自然の偉大さや命の大切さ、他者との協働の重要性などを実感するための様々な「体験活動」がますます重要になっていくものと考えます。

このため、県教育委員会では、次年度以降のあおもりの未来をつくる人財の育成に関する生涯学習関連施策の方向性を検討するための基礎資料を得ることを目的として、児童生徒及び保護者を対象とした「青少年の体験活動に関する県民の実態調査」を実施しました。調査では、自然体験、手伝い、生活習慣など様々な体験活動の経験の有無のほか、自分自身に関する意識、携帯電話やスマートフォン、読書、塾や習い事に関する実態など、青少年の「今」をめぐる多岐にわたる設問項目としています。また、調査結果については、同様の全国調査との比較を行い、本県の青少年の実態や意識の特徴をまとめています。

本報告書が、未来の青森県づくりの基盤となる人財の育成を目指す生涯学習・社会教育に係る各種の施策や事業構築の参考となれば幸いです。

最後に、アンケートへの御回答をいただいた県民の皆様にご心から感謝申し上げます。

平成31年3月

青森県教育庁

生涯学習課長 渡部 靖之

## 目 次

第 1 章	調査の概要-----	1
1	調査の名称	
2	調査の趣旨	
3	調査対象	
4	調査方法	
5	回収結果	
6	研究顧問	
第 2 章	調査の結果-----	2
I	児童生徒対象調査	2
1	回答者の属性	2
2	体験活動について	3
3	手伝いについて	8
4	生活習慣について	11
5	自分自身のことについて	17
6	体験活動（学校の授業や行事以外）について	22
7	得意教科について	26
8	普段の生活について	27
9	家族構成について	30
10	自分専用に所有しているものについて	31
11	携帯電話やスマートフォンについて	32
12	青少年団体・部活動の所属状況について	33
13	塾や習い事について	34
14	アルバイト・卒業後の進路状況について	35
II	保護者対象調査	36
1	子ども、回答者の属性	36
2	子どもの体験活動について	37
3	子どもの体験活動に対する保護者の意識について	39
4	子どもの基本的な生活習慣について	43
5	子どもの人数、起床・就寝時間について	46
6	子どもが自分専用に所有しているもの	47
7	子どもの青少年団体の所属について	48
8	子どもの塾や習い事について	49
9	保護者の幼少期の体験活動状況について	50
10	保護者の地域との関わりについて	52
11	子どもの学校外の教育、世帯収入について	53

第3章	全国調査との比較-----	54
1	青少年の体験活動等に関する実態調査について	54
2	青少年の体験活動	55
3	青少年の意識	62
4	青少年の携帯電話・スマートフォンの所有や使用	68
5	世帯収入や子ども（小学生）の教育費（学校以外）	73
第4章	クロス集計について-----	75
1	自己肯定感	75
2	体験活動と道徳観・正義感の関係	79
3	世帯収入と子どもの教育費（学校以外）との関係	81
4	世帯収入や子どもの教育費（学校以外）と子どもへのしつけの関係	82
第5章	考察-----	84
I	あおもりの未来をつくる「人財」育成のために	84
II	子どもの自然体験参加や親のしつけを促す要因～保護者調査の結果から～	91



# 第1章 調査の概要

## 1 調査の名称

青少年の体験活動に関する県民の実態調査

## 2 調査の趣旨

本調査では、次年度以降のあおもりの未来をつくる人財の育成に関する生涯学習関連施策の方向性を検討するための基礎資料を得ることを目的とする。

## 3 調査対象

母集団 県内在住の小学校4年生、中学校2年生、全日制高等学校2年生

小学校2・4・6年生の保護者

標本数 児童生徒 3,035人、保護者 3,047人 計 6,082人

## 4 調査方法

上記母集団から、無作為に学級を抽出した上で調査票を学校へ送付し、直接記入した調査票を同封の返信用封筒に入れ、無記名で回収した。調査票の印刷・回収、調査結果の集計業務は、業者委託により実施した。

- ・調査業務委託先 株式会社サンブラッソ・エイティープイ
- ・調査票の発送 平成31年1月9日
- ・回答期限 平成31年1月22日

※調査票については、下記からダウンロードすることができます。

[http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/education/aomorimanabi-e\\_shogai.html](http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/education/aomorimanabi-e_shogai.html)

## 5 回収結果

有効回答数(率) 5,673人 (93.28%)

調査不能数(率) 409人 (6.72%)

## 6 研究顧問

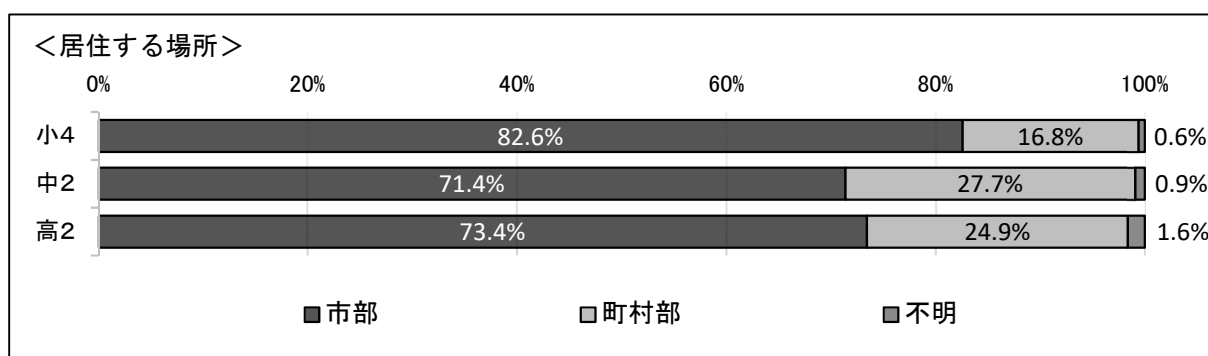
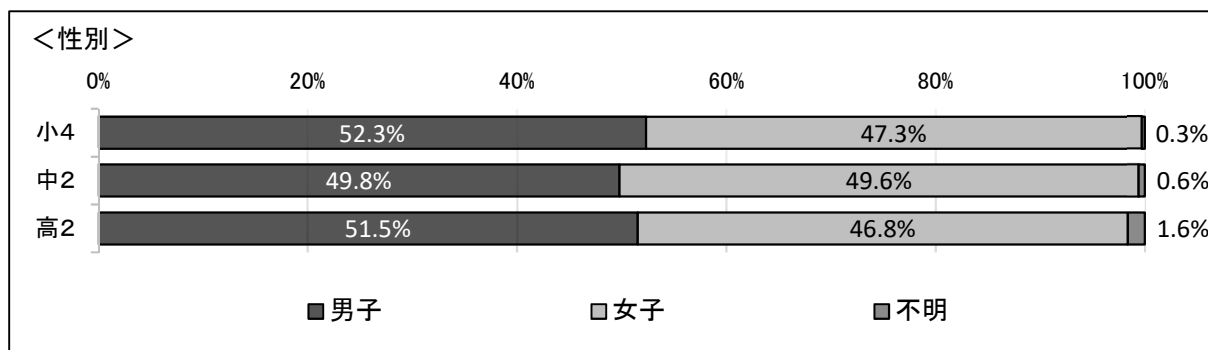
- ・宮崎 秀一 氏 (弘前大学教育学部 教授)
- ・柏谷 至 氏 (青森大学社会学部社会学科 教授)

<留意事項>本調査報告書では、比率を百分率(%)で表し、小数点第2位で四捨五入した値で表示している。単数回答項目及び複数回答項目については、回答者数を分母として百分率を算出しているため、合計が100%にならない場合がある。図表及び文章中において、選択肢の表記は複雑な表現を避ける目的で一部省略している。

## 第2章 調査の結果

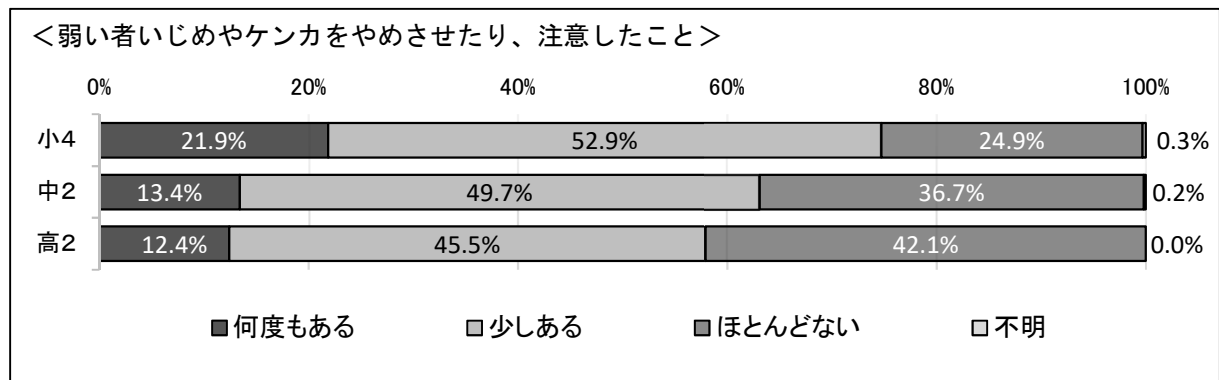
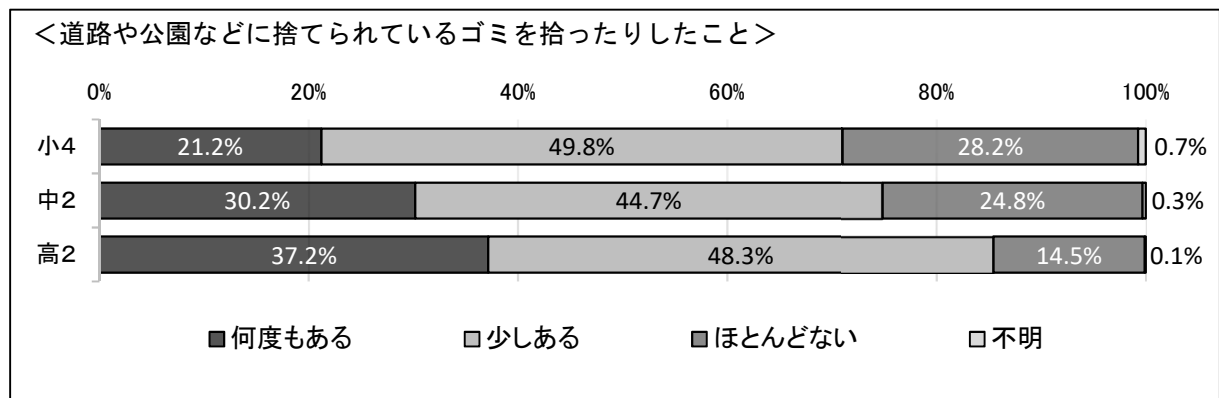
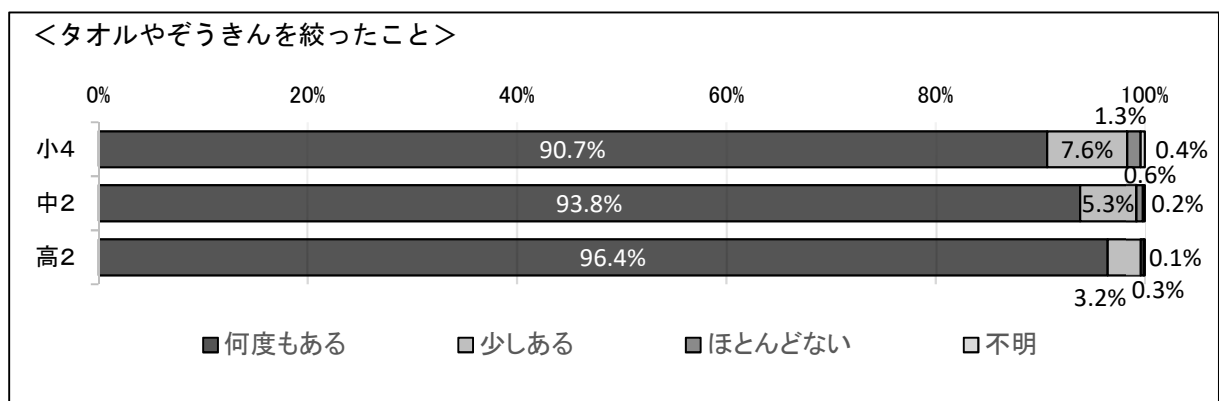
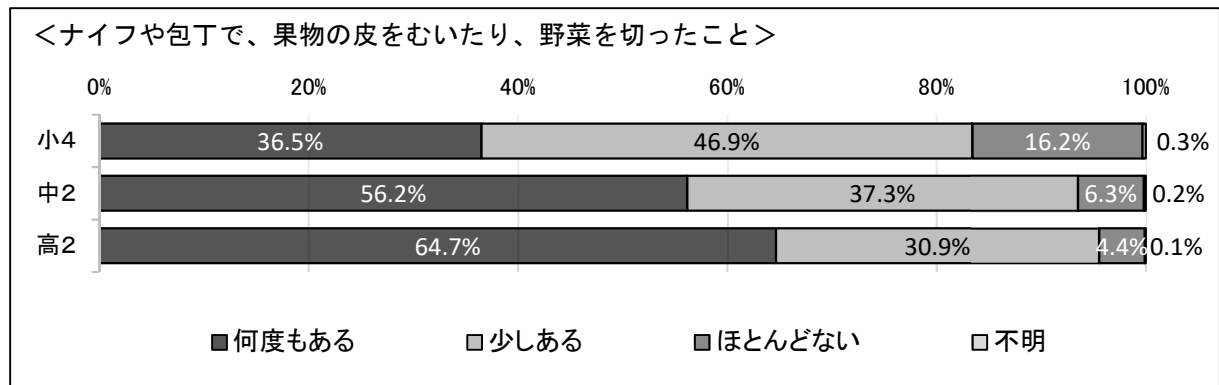
### I 児童生徒対象調査

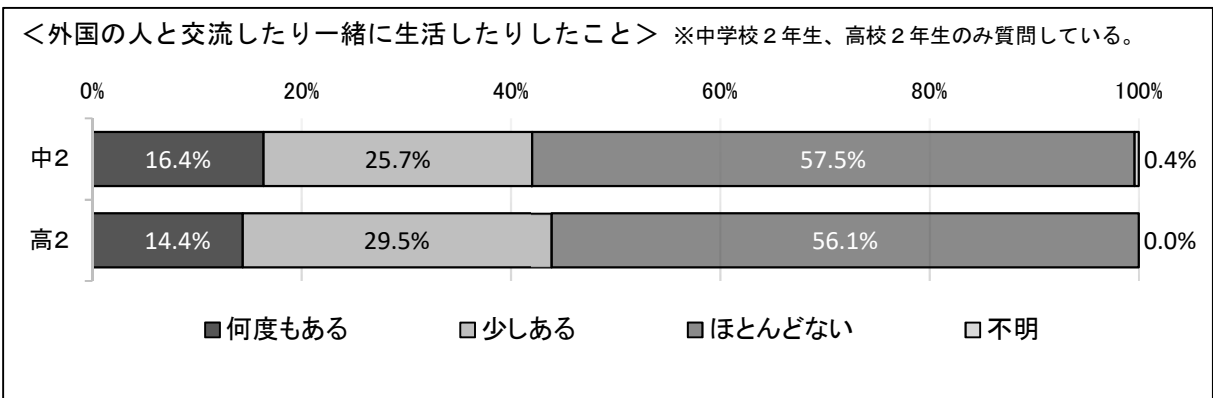
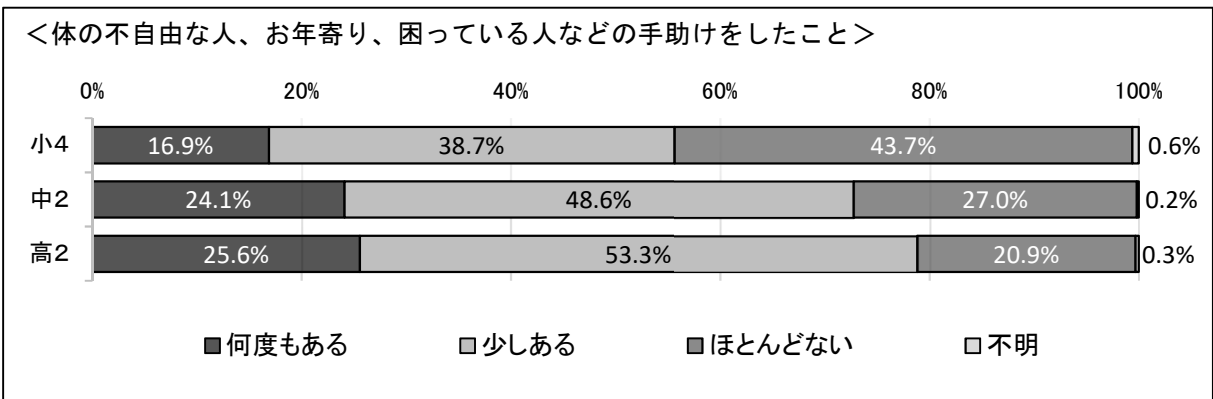
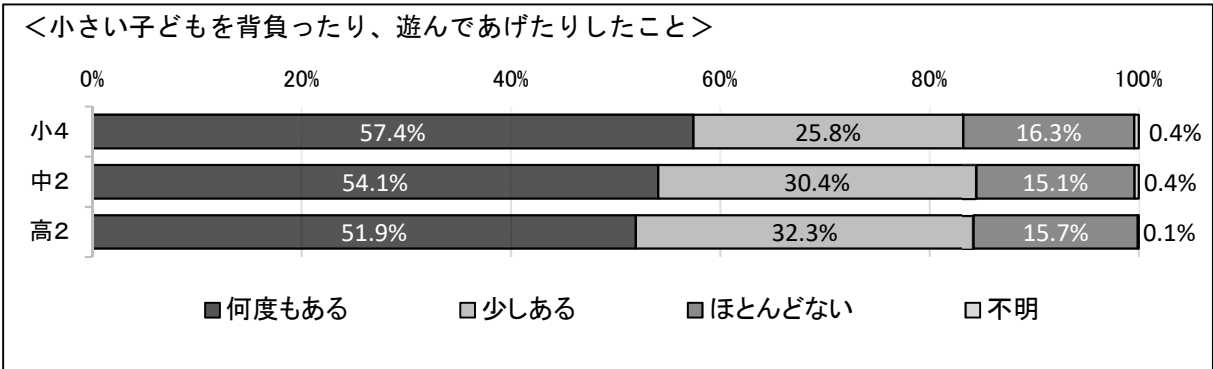
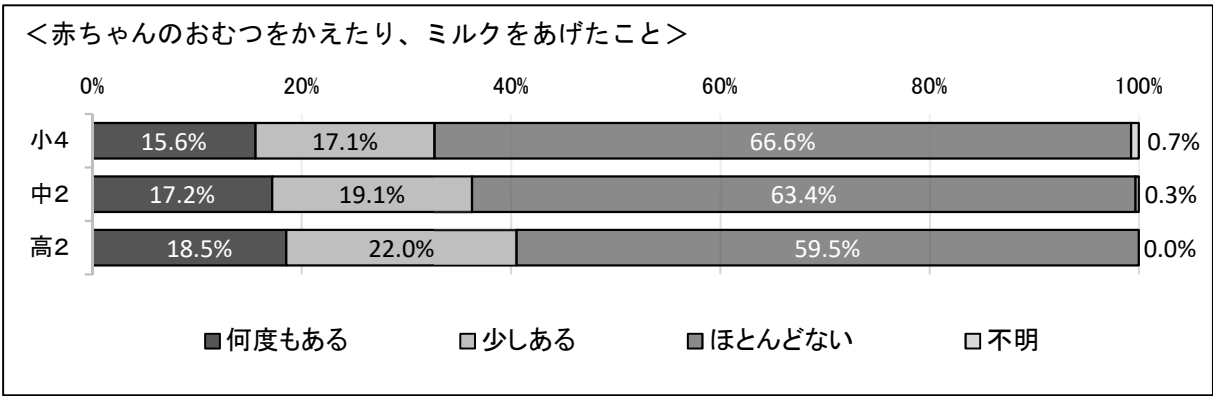
#### 1 回答者の属性

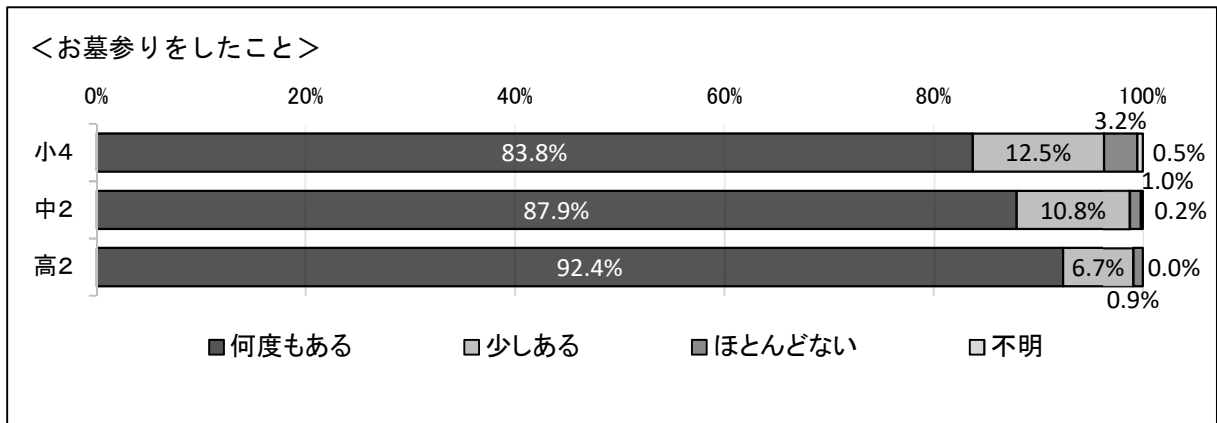




## 2 体験活動について

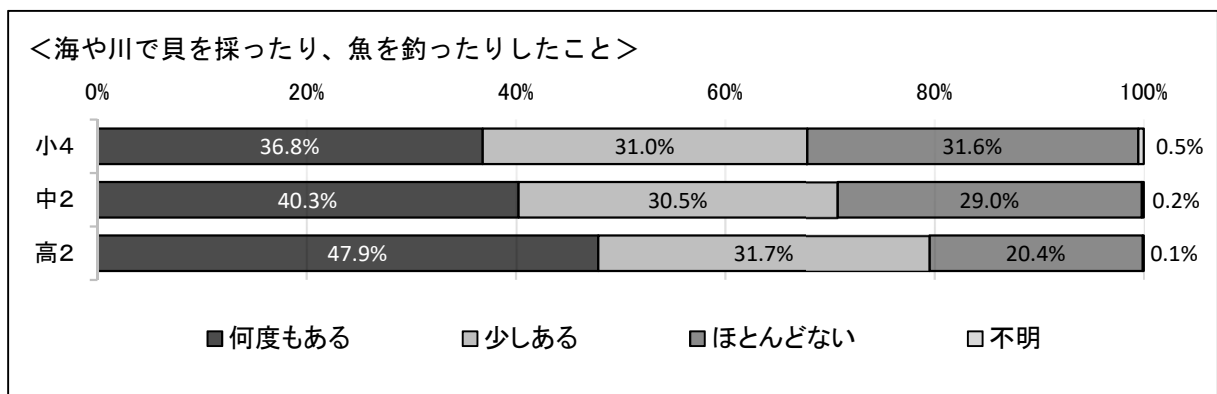
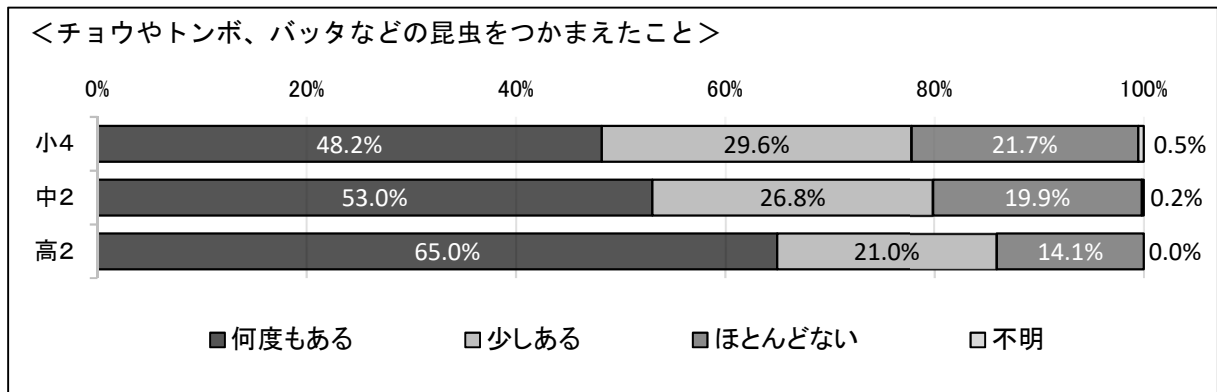


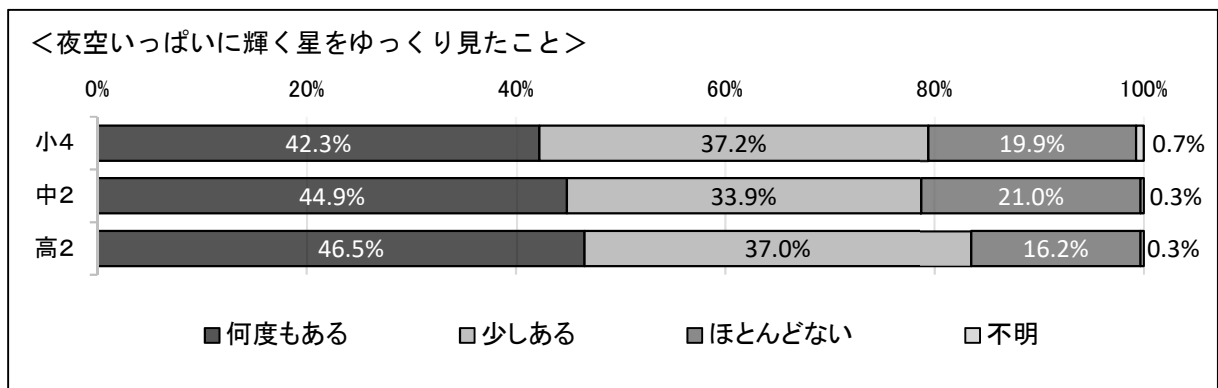
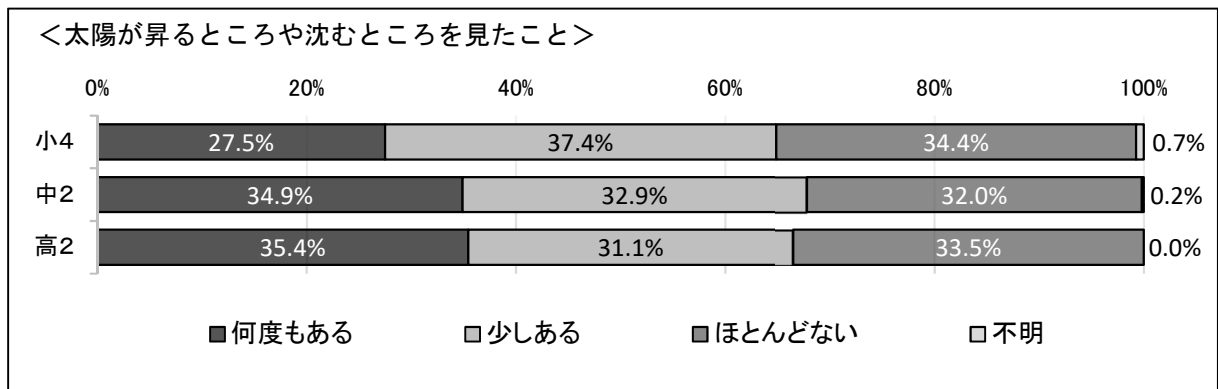
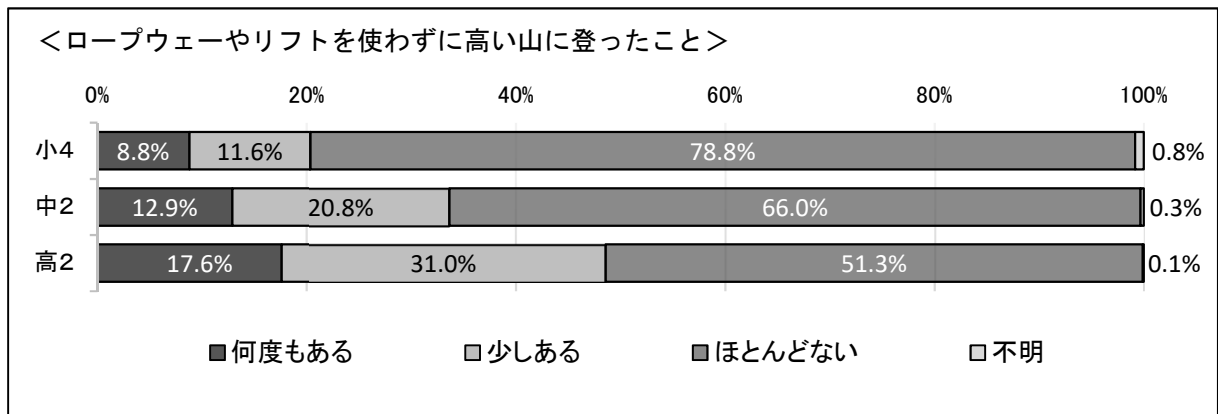
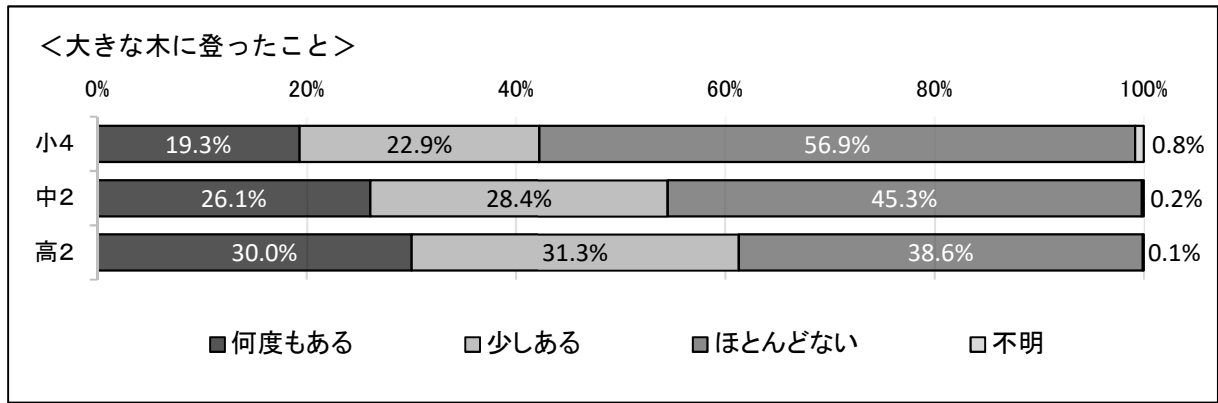


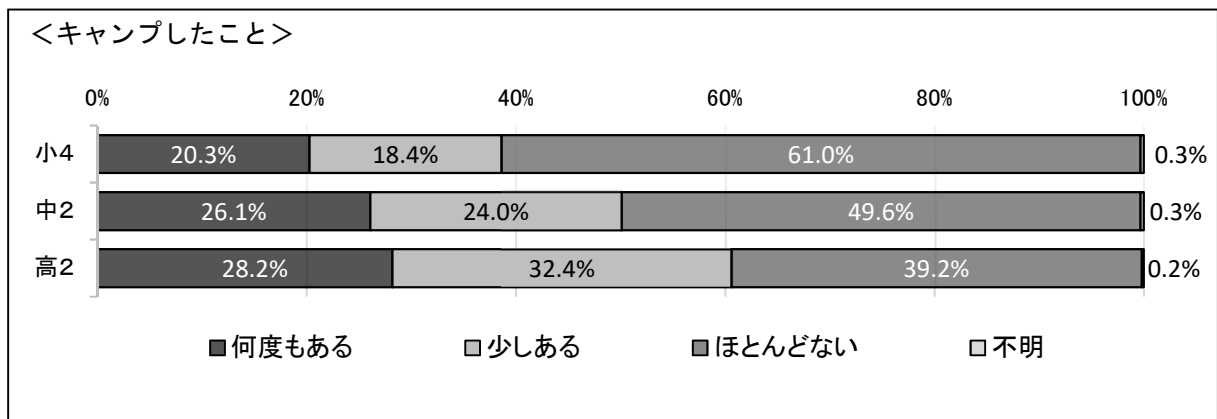
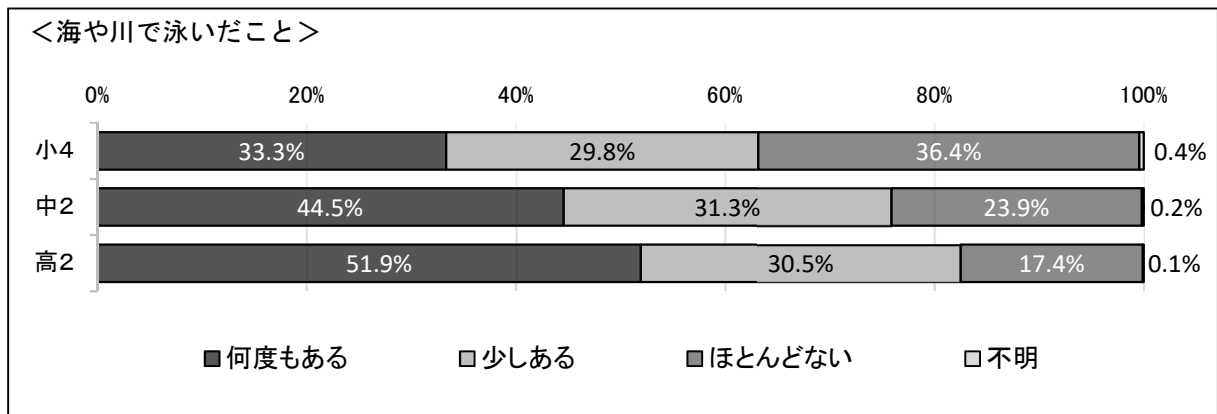
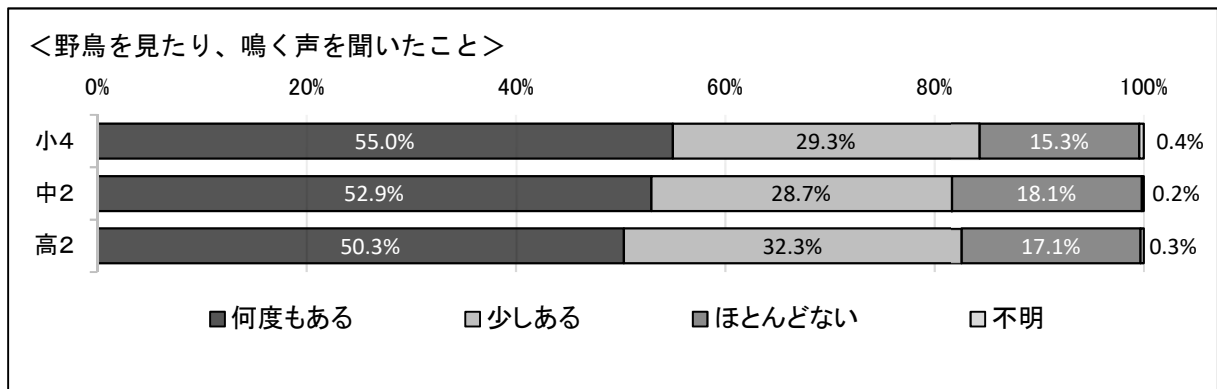


生活体験活動で「何度もある」と回答した割合が最も高かった項目はいずれの学年も「お墓参りをしたこと」であった。特に、高校2年生では9割以上であった。

「何度もある」と回答した割合が最も低い項目は、小学4年生では「赤ちゃんのおむつをかえたり、ミルクをあげたこと」(15.6%)であり、中学2年生、高校2年生では、「弱い者いじめやケンカをやめさせたり、注意したこと」(中2：13.4%、高2：12.4%)であった。



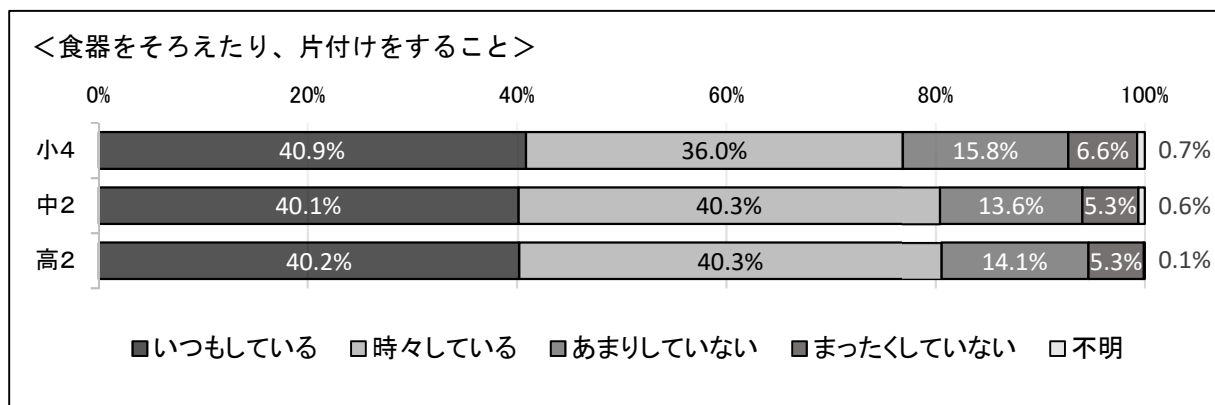
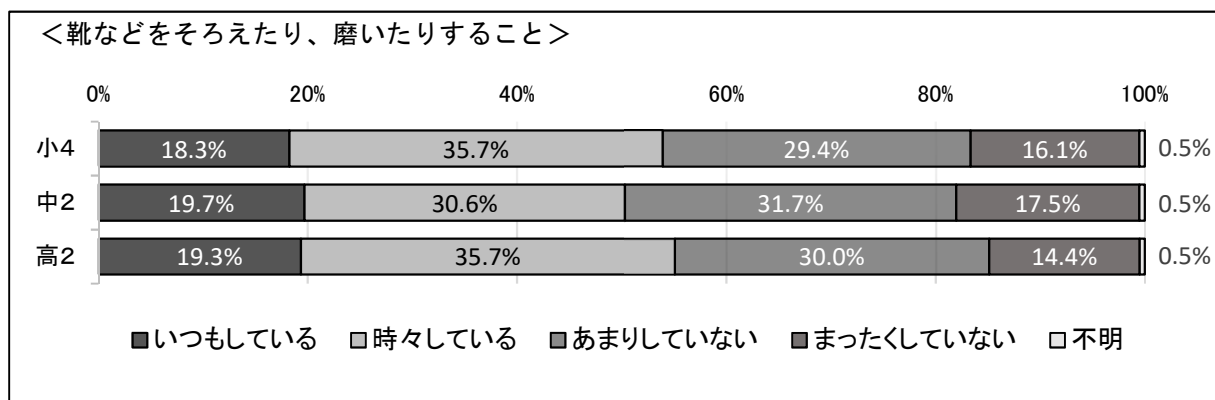
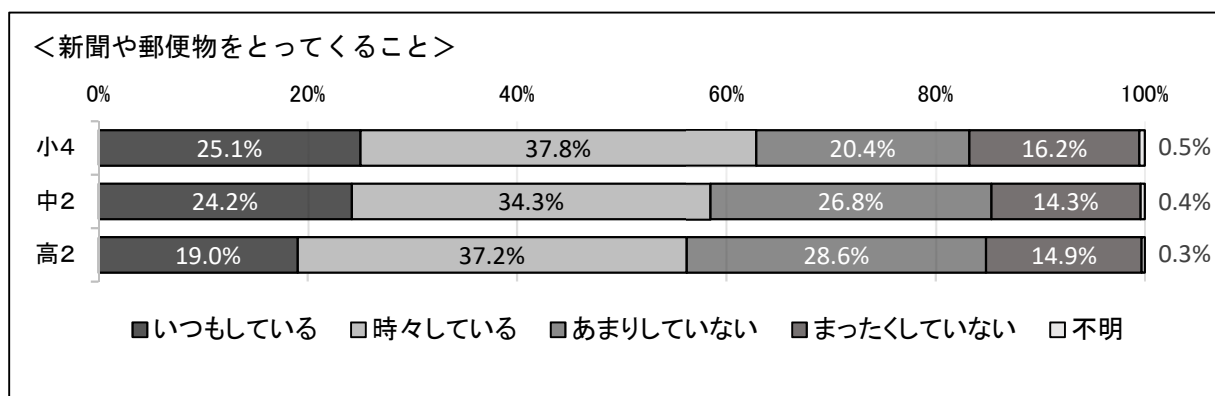
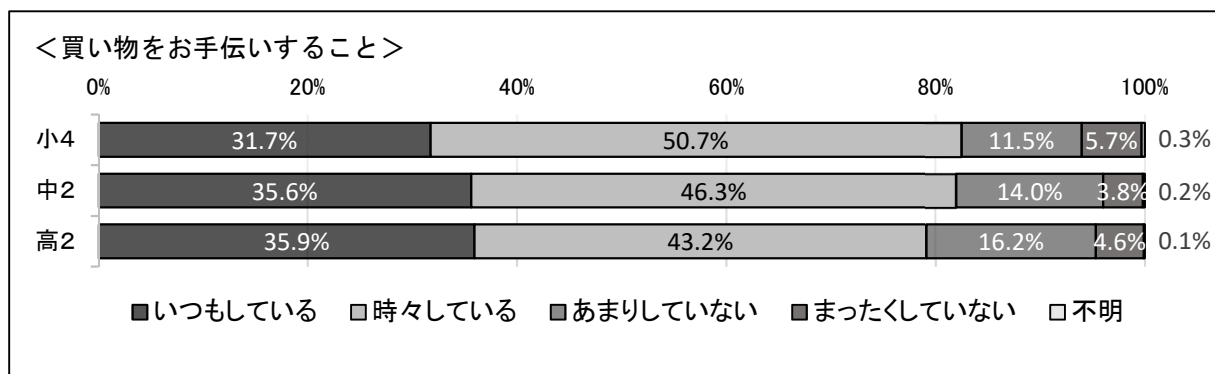


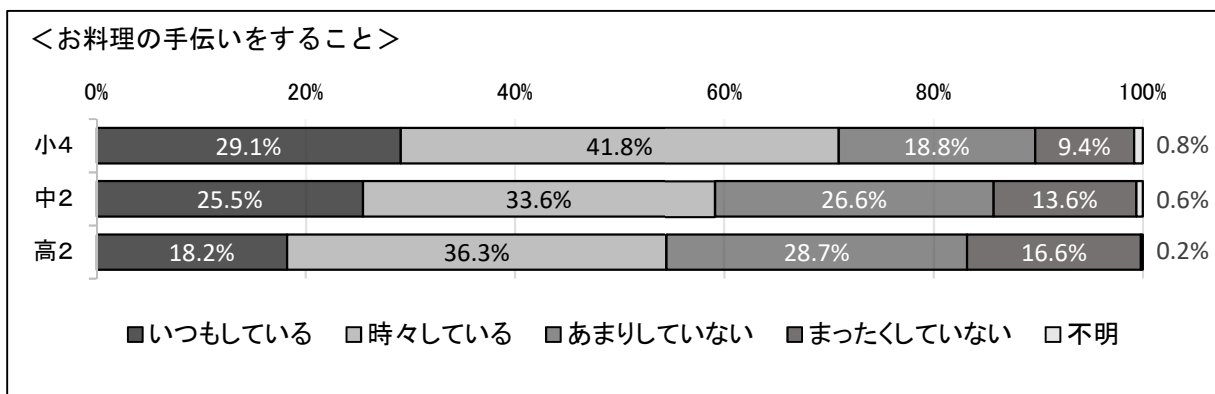
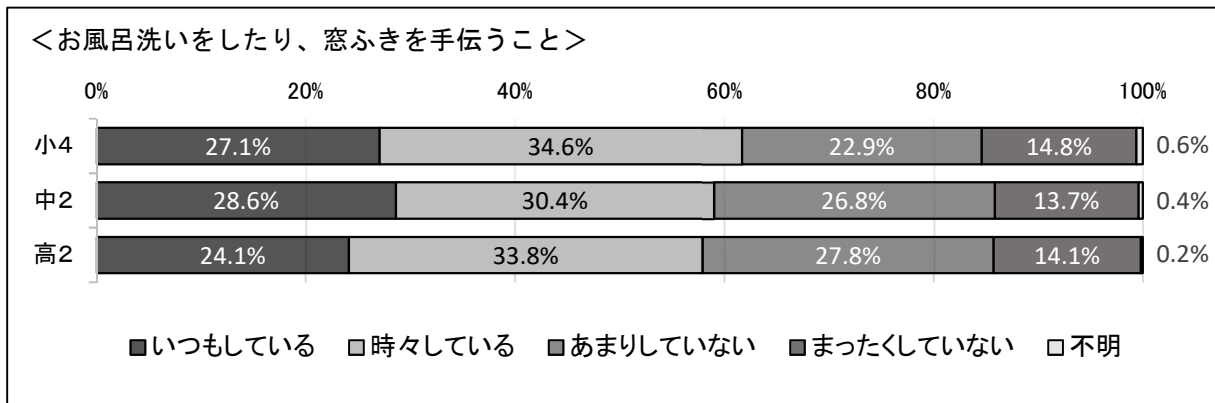
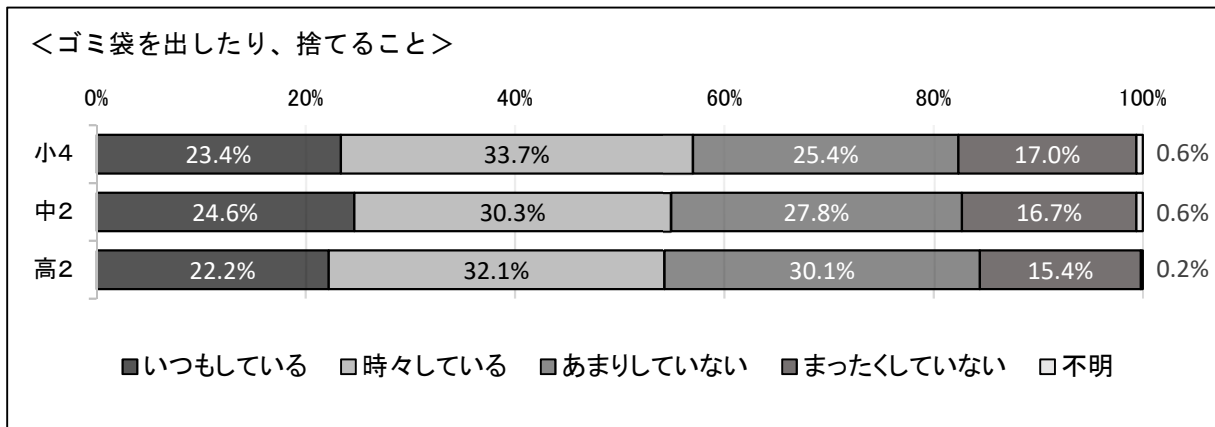
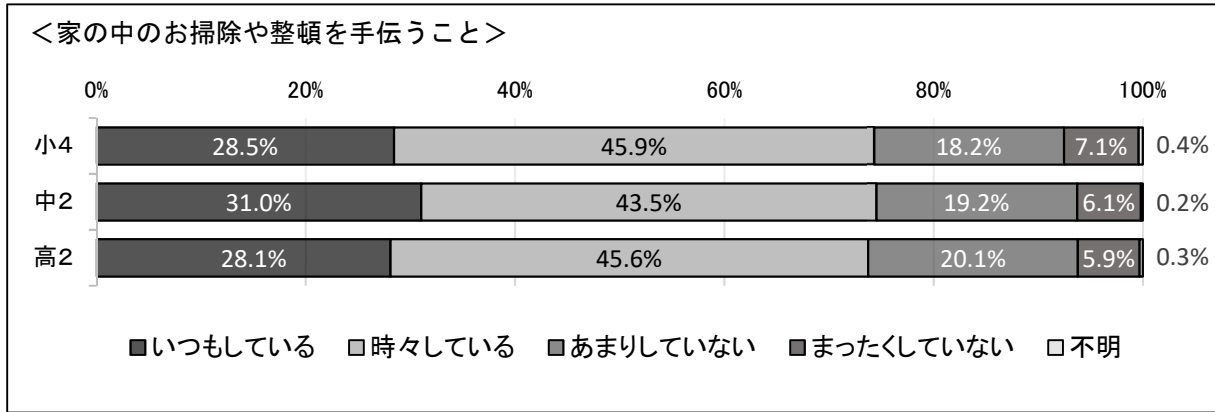


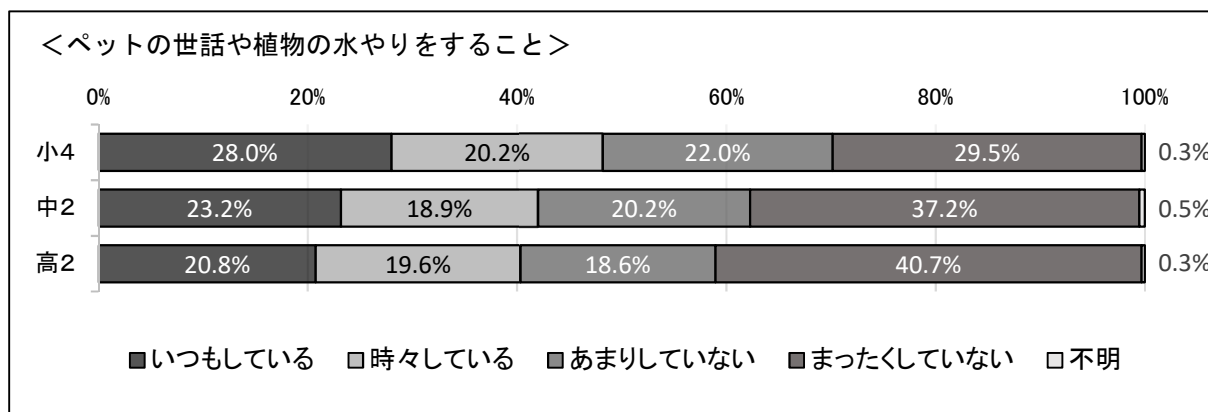
自然体験活動で「何度もある」と回答した割合が最も高かった項目は、小学校4年生では「野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと」(55.0%)、中学2年生、高校2年生では「チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと」(中2:53.0%、高2:65.0%)であった。

「何度もある」と回答した割合が最も低かった項目は、いずれの学年も「ロープウェイやリフトを使わずに高い山に登ったこと」(小4:8.8%、中2:12.9%、高2:17.6%)であった。

### 3 手伝いについて





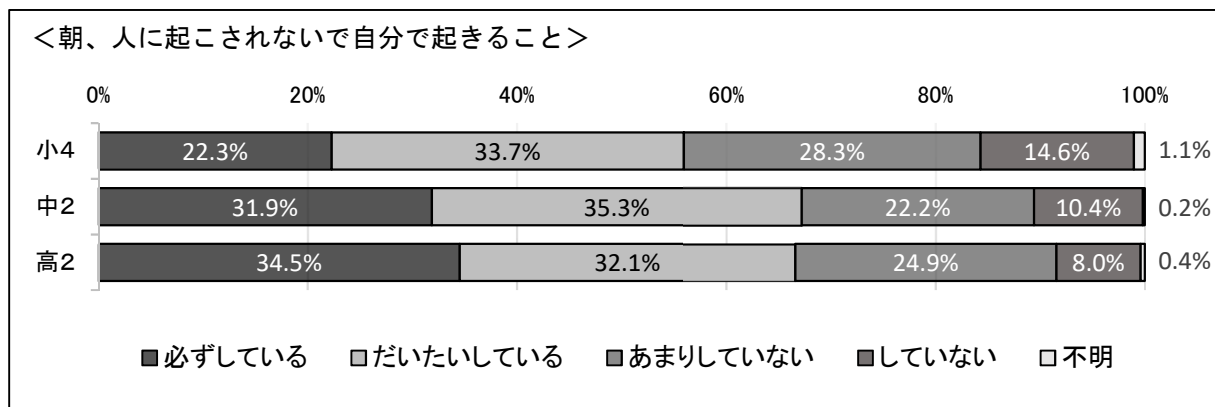
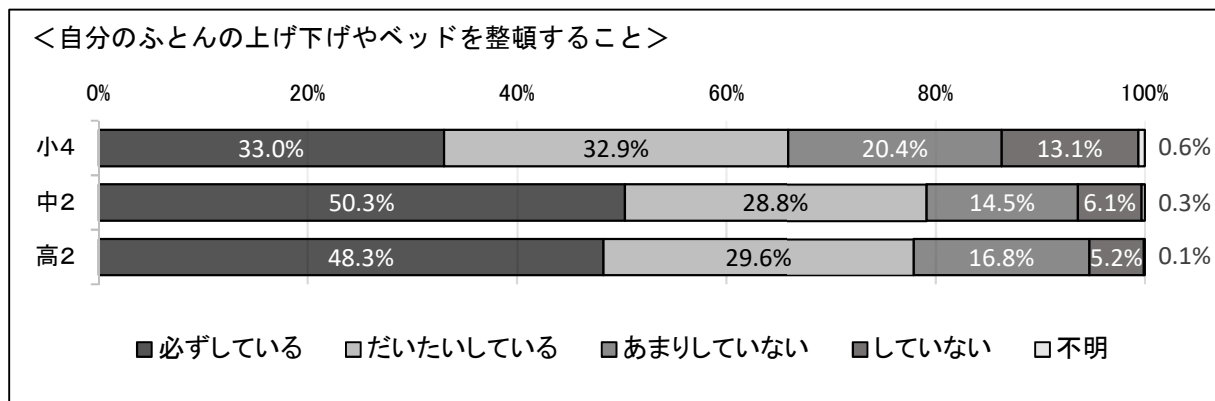
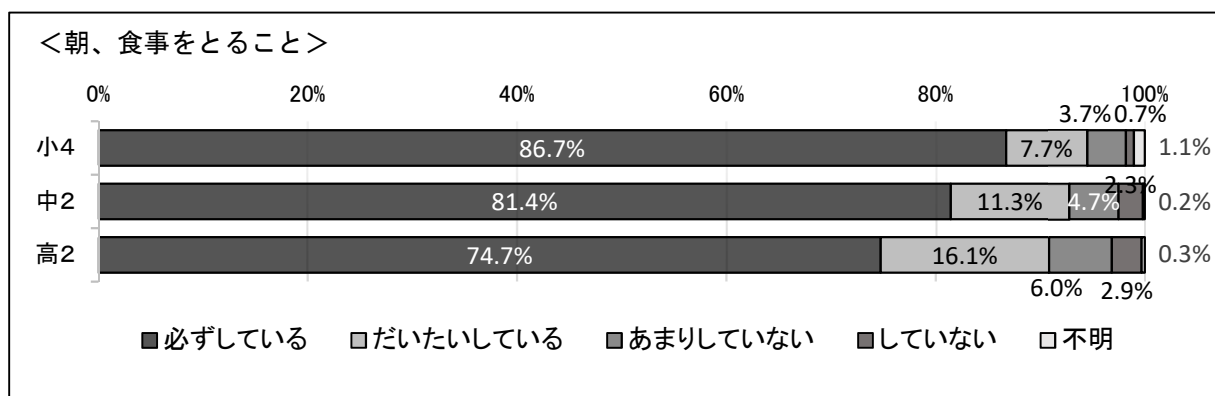
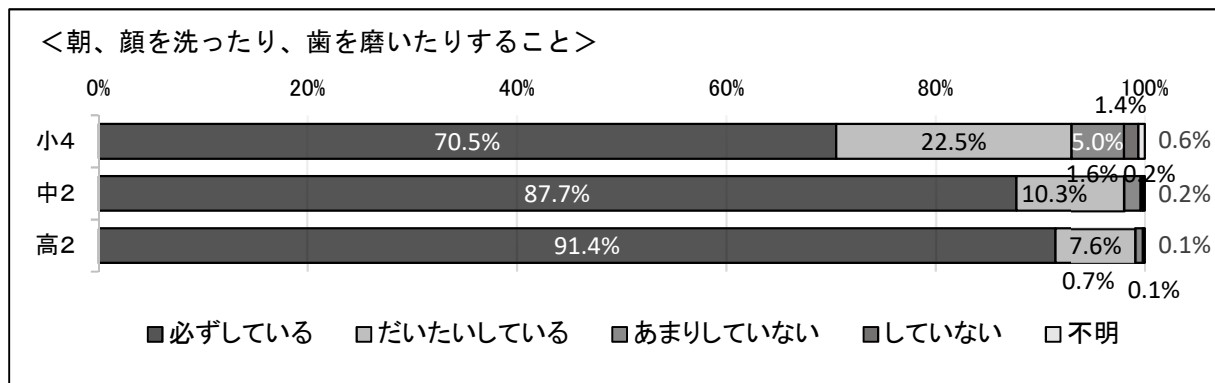


お手伝いについて、「いつもしている」と回答した割合が最も高かった項目は、いずれの学年も「食器をそろえたり、片付けをすること」(小4 : 40.9%、中2 : 40.1%、高2 : 40.2%)であった。

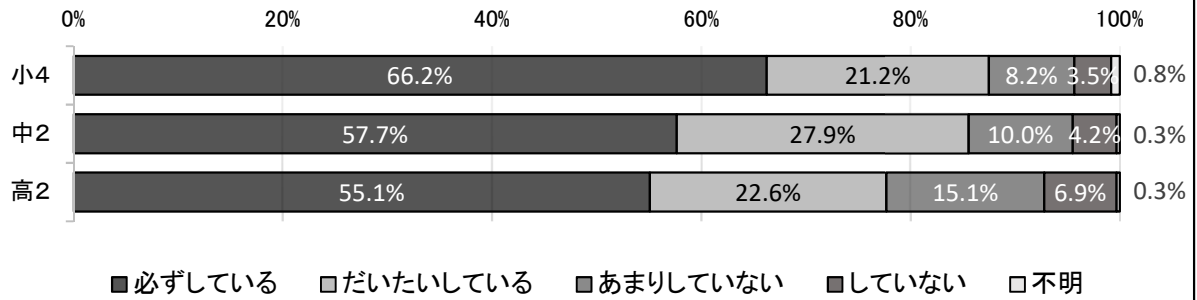
「いつもしている」と回答した割合が最も低かった項目は、小学4年生、中学2年生では、「靴などをそろえたり、磨いたりすること」(小4 : 18.3%、中2 : 19.7%)、高校2年生では、「お料理の手伝いをすること」(18.2%)であった。



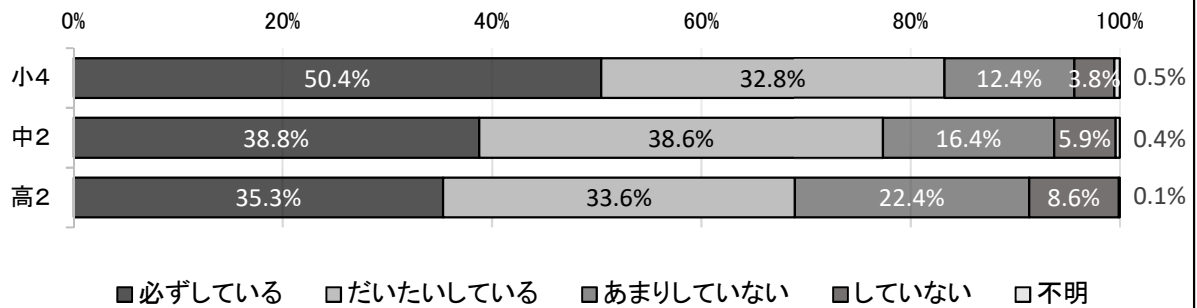
#### 4 生活習慣について



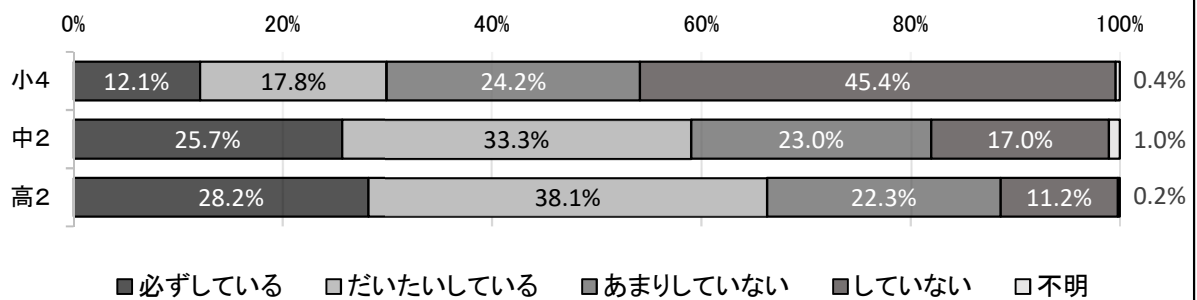
<家で「おはようございます」「いただきます」「いってきます」「ただいま」「おやすみなさい」などのあいさつをすること>



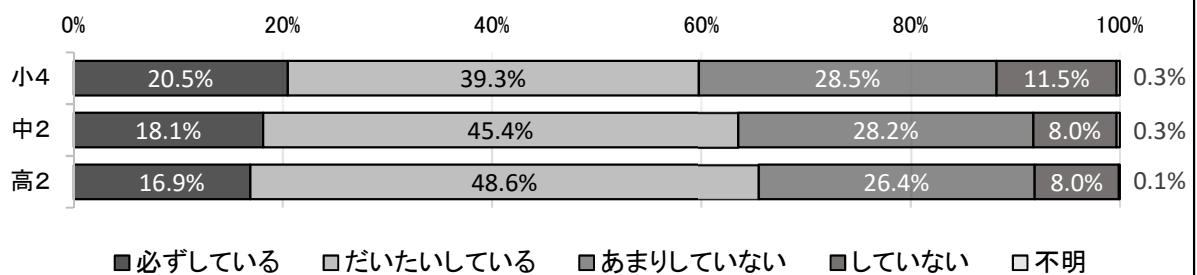
<近所の人や知り合いの人に「おはようございます」「こんにちは」「こんばんは」といったあいさつをすること>

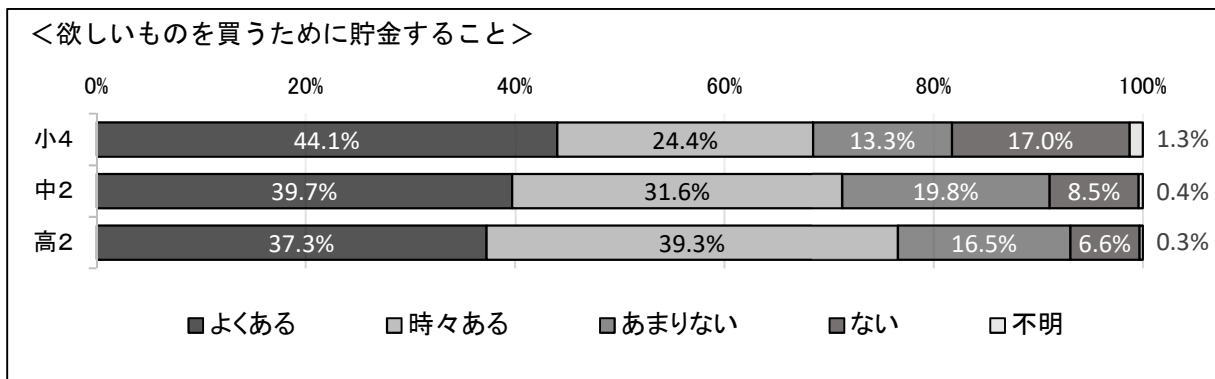
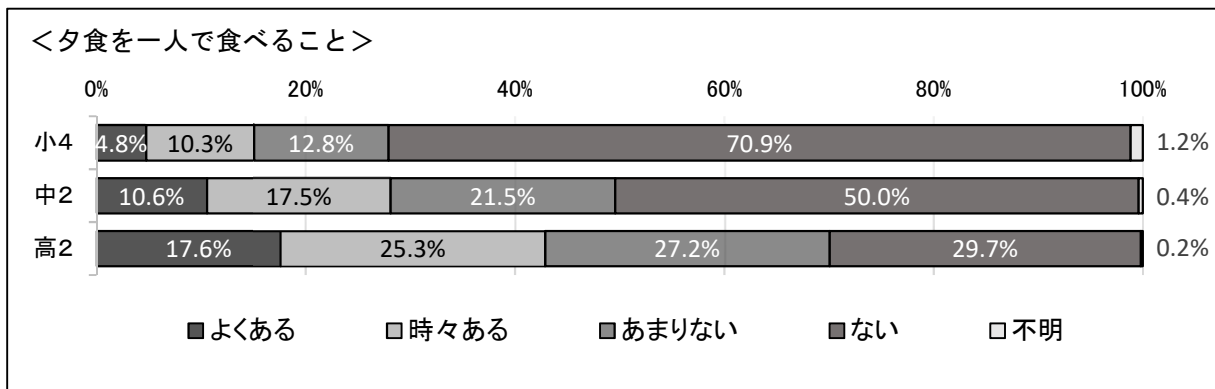
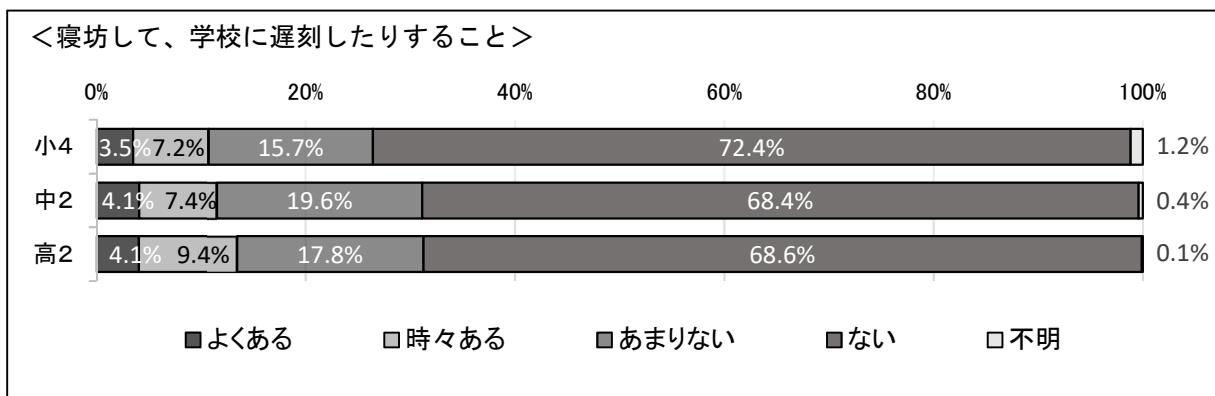
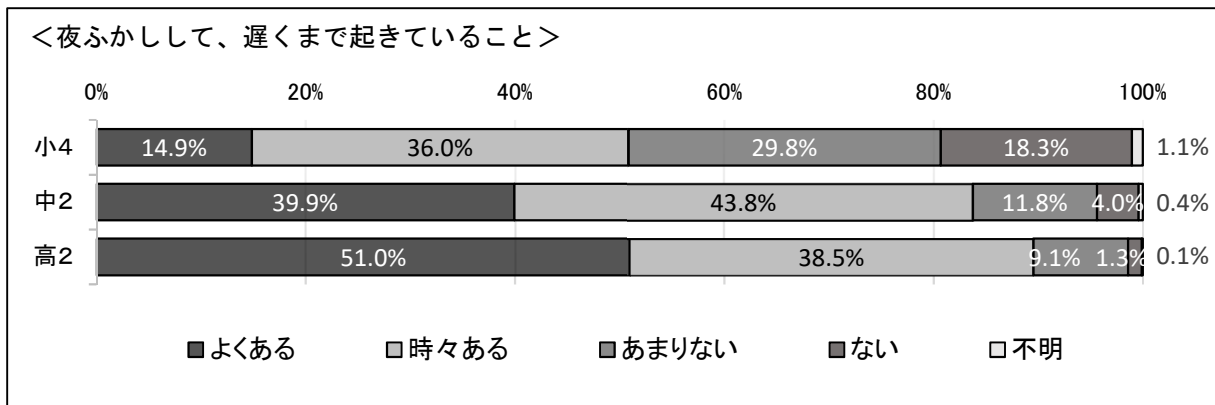


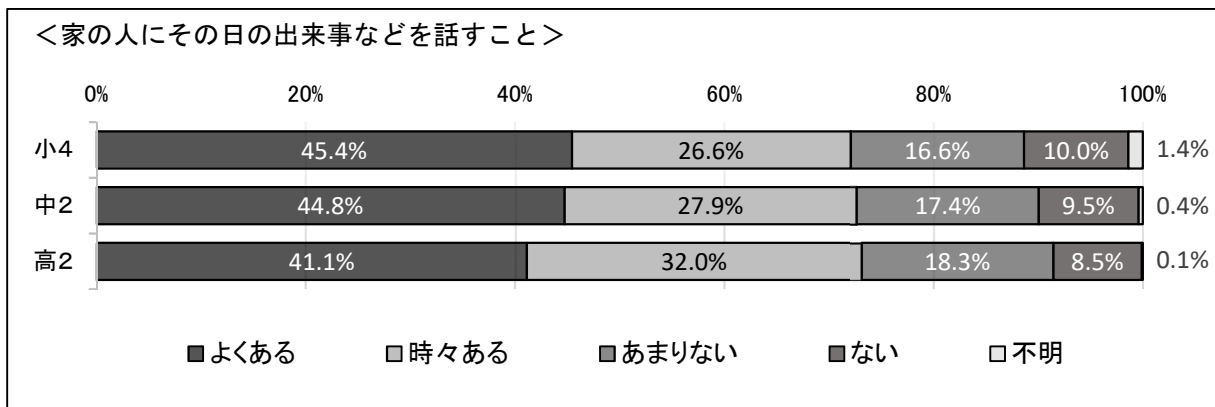
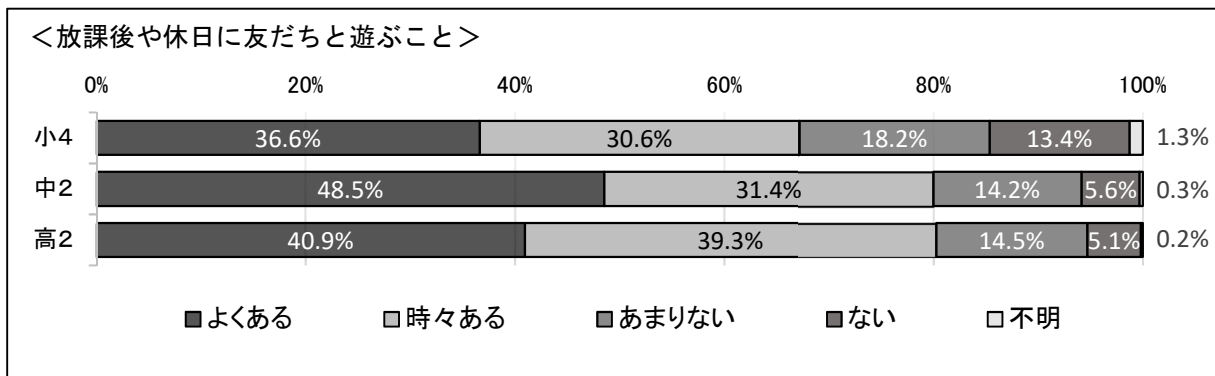
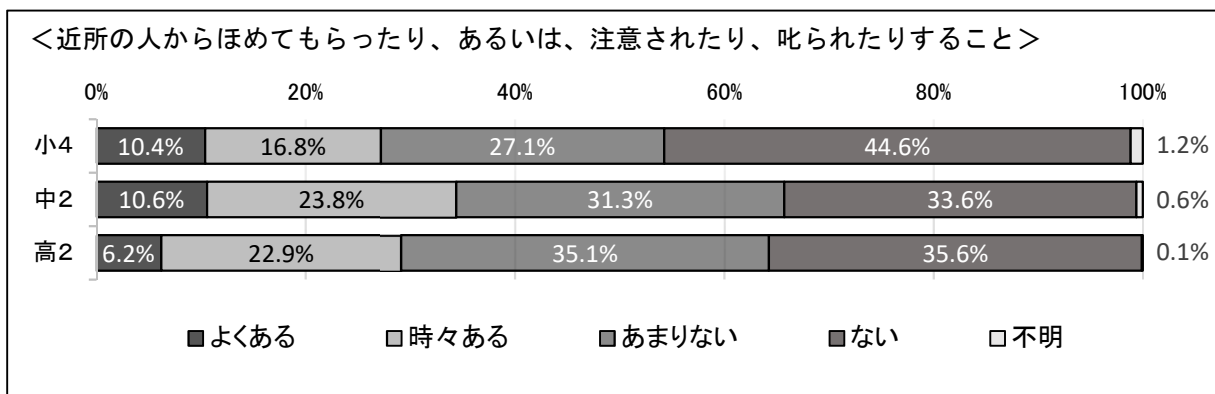
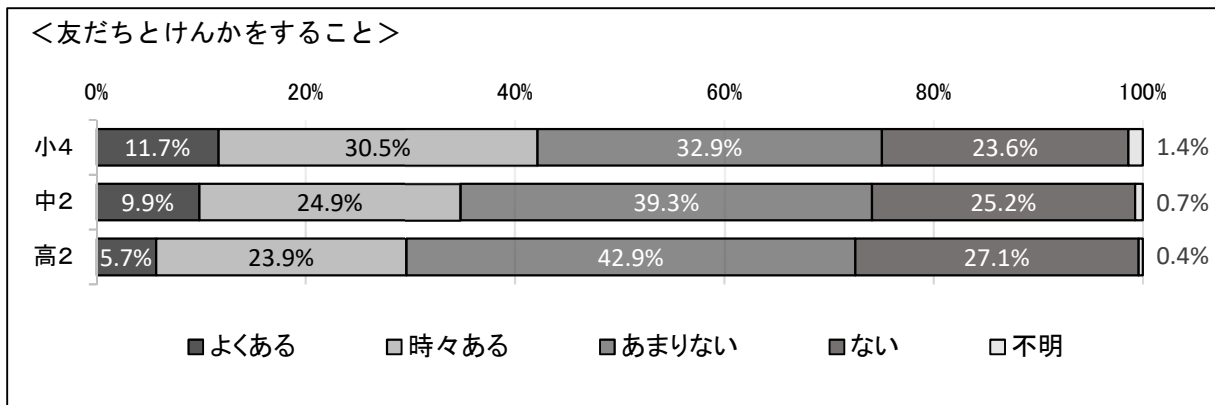
<バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずること>

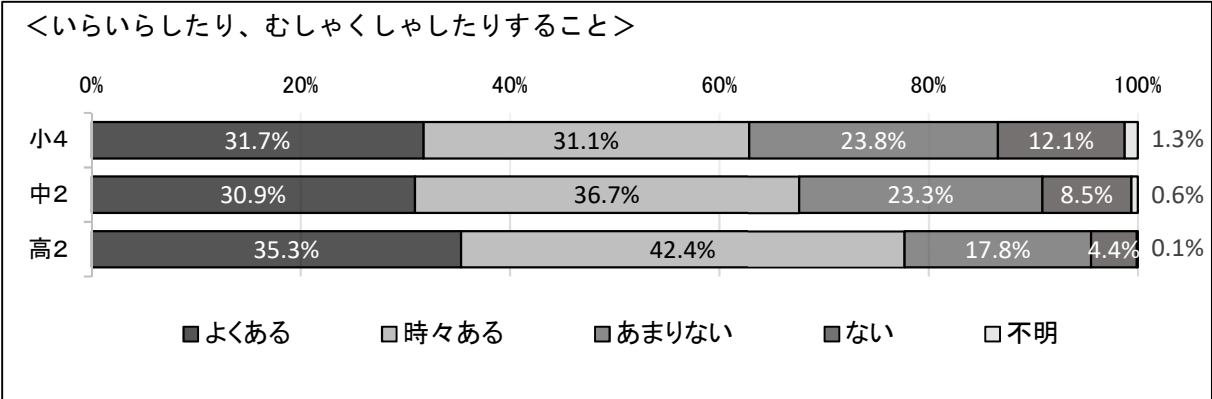
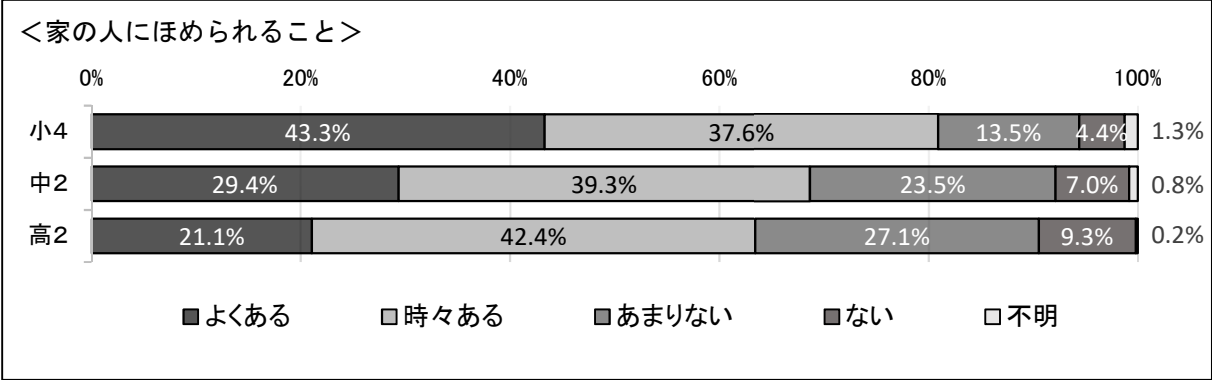
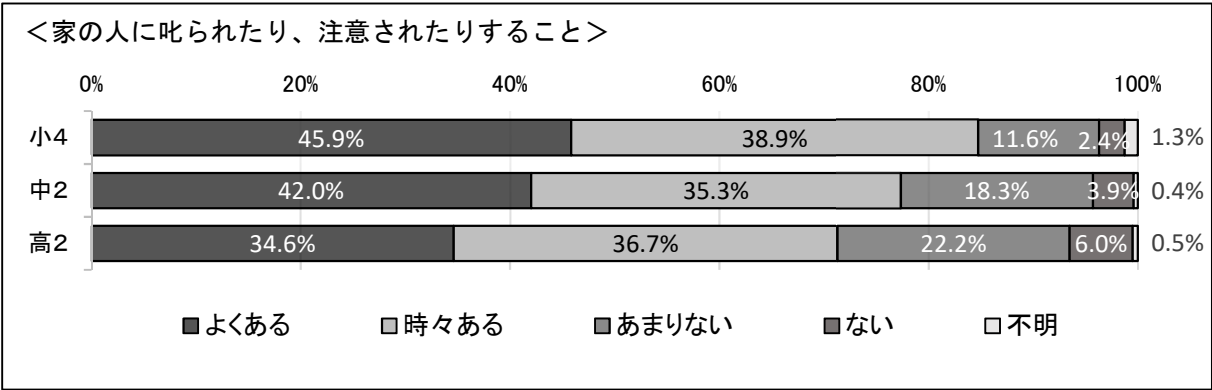
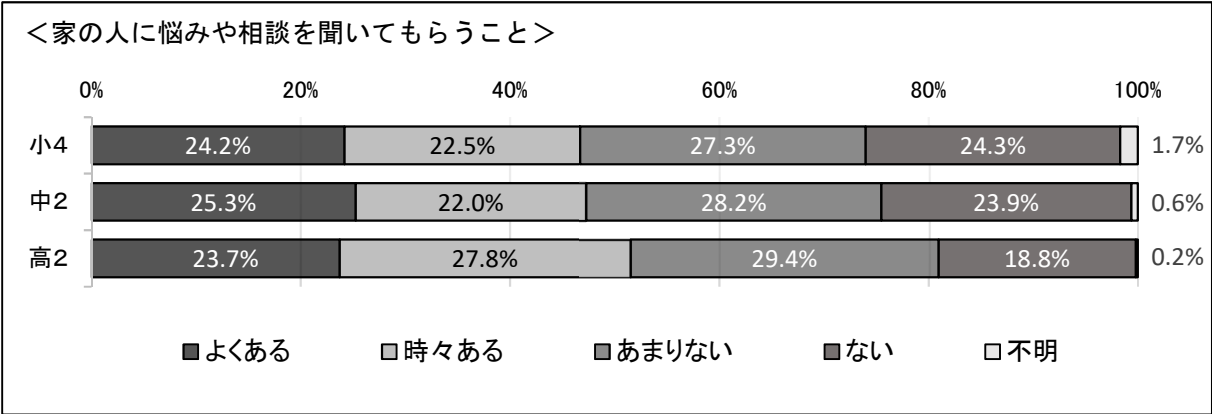


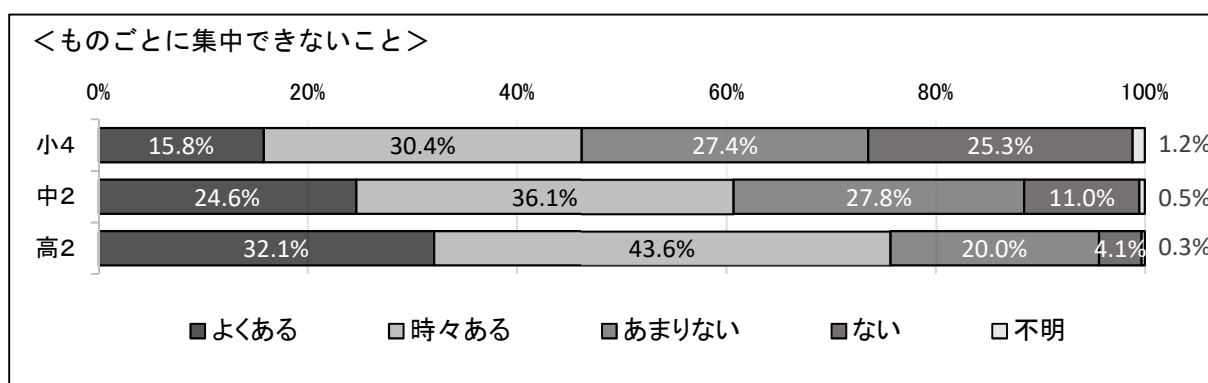
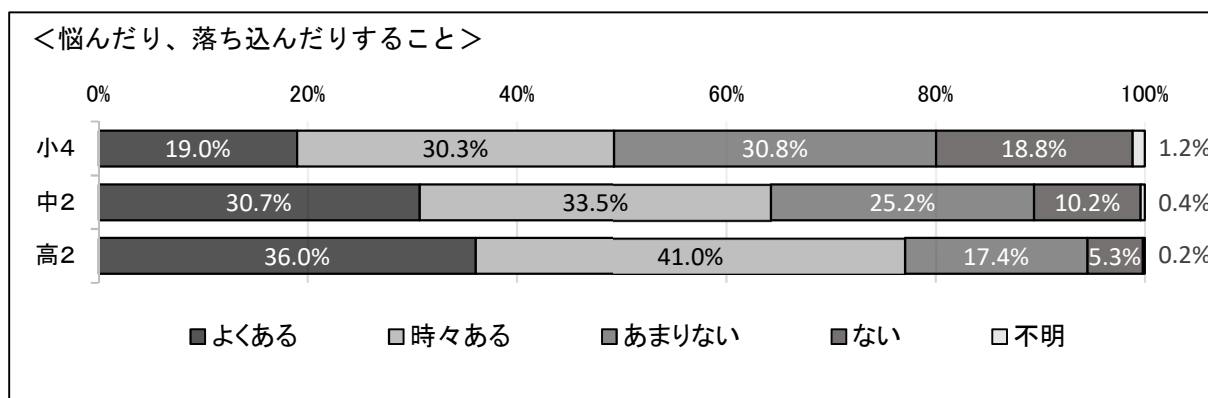
<友達が悪いことをしていたら、やめさせること>









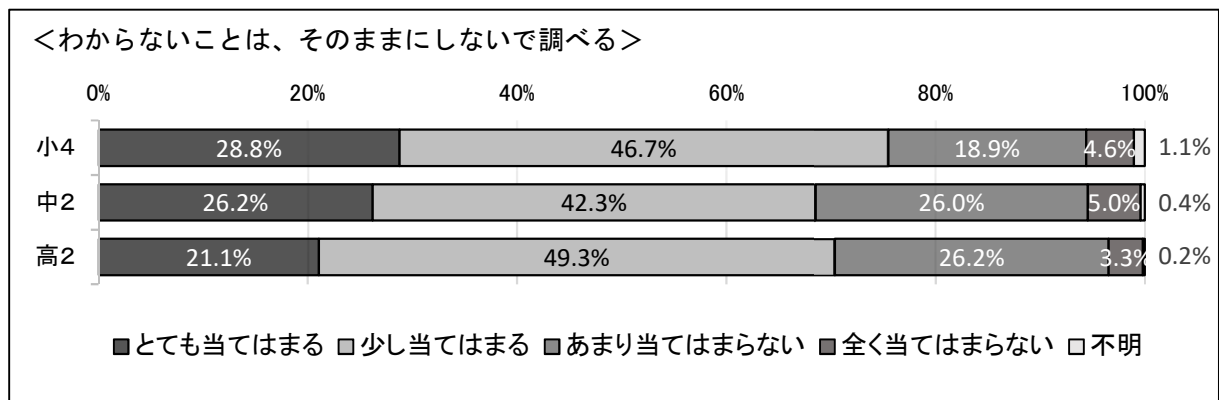
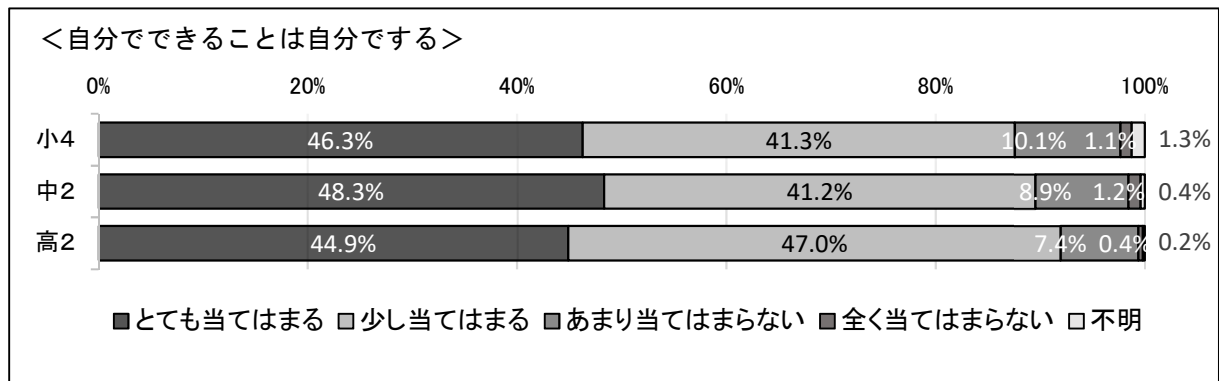
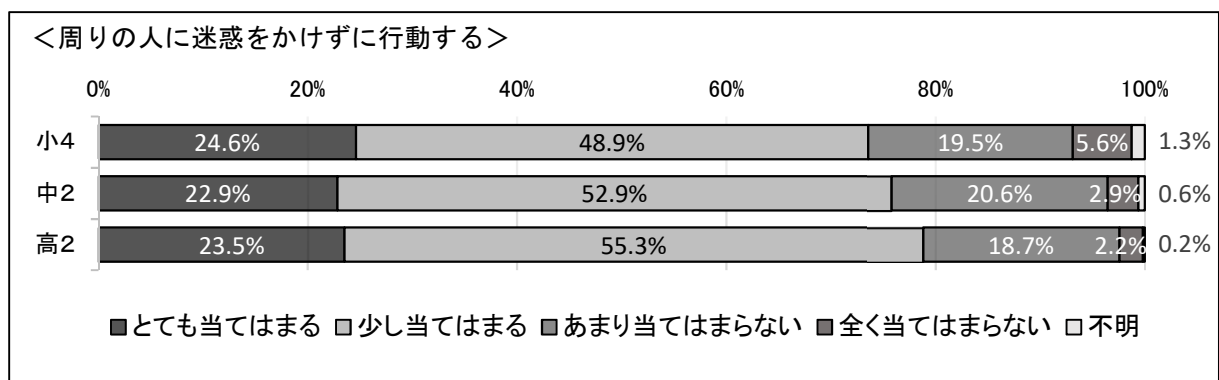
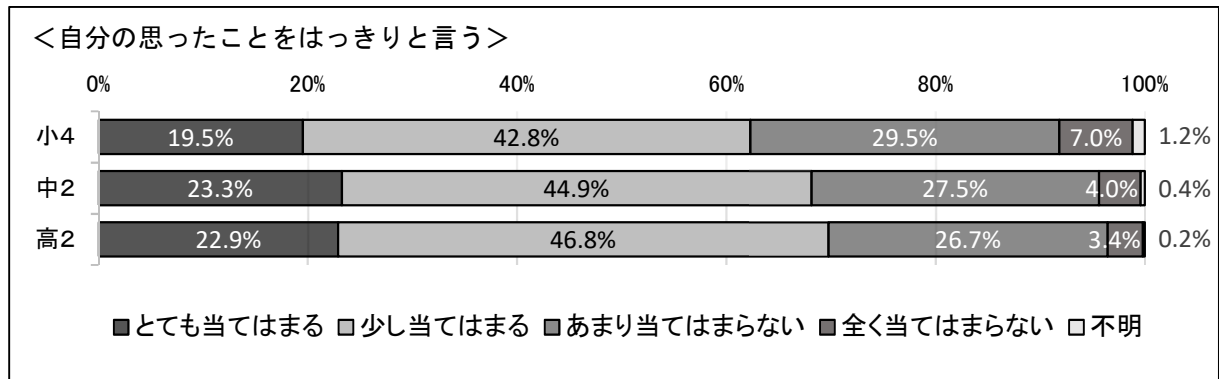


生活習慣については、「必ずしている」もしくは「よくある」と回答した割合が最も高かった項目は、小学4年生では「朝、食事をとること」(86.7%)、中学校2年生及び高校2年生では「朝、顔を洗ったり、歯を磨いたりすること」(中2：87.7%、高2：91.4%)であった。

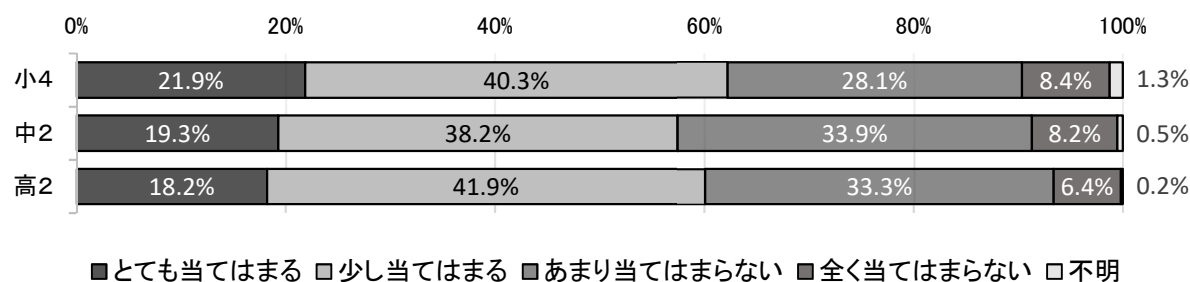
学校段階が上がるにつれて、「必ずしている」もしくは「よくある」と回答した割合が高くなる項目は「夜ふかしして、遅くまで起きていること」(小4：14.9%、中2：39.9%、高2：51.0%)、「夕食を一人で食べること」(小4：4.8%、中2：10.6%、高2：17.6%)、「悩んだり、落ち込んだりすること」(小4：19.0%、中2：30.7%、高2：36.0%)、「ものごとに集中できないこと」(小4：15.8%、中2：24.6%、高2：32.1%)であった。

学年が進むにつれて、「必ずしている」「よくある」と回答した割合が低くなる項目は「家の人に叱られたり注意されたりすること」(小4：45.9%、中2：42.0%、高2：34.6%)、「家の人にほめられること」(小4：43.3%、中2：29.4%、高2：21.1%)であった。

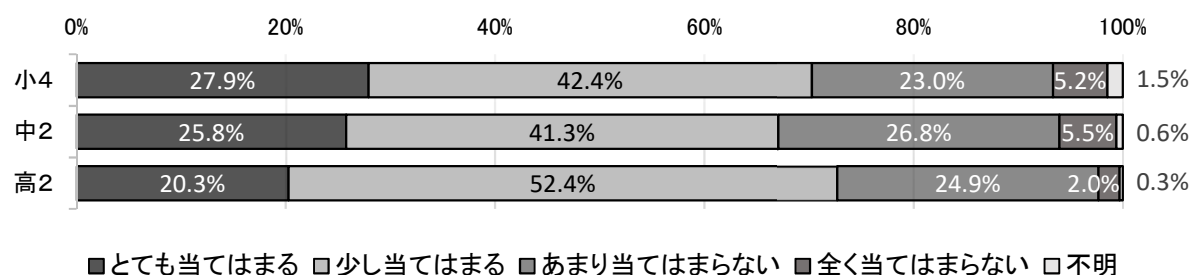
## 5 自分自身のことについて



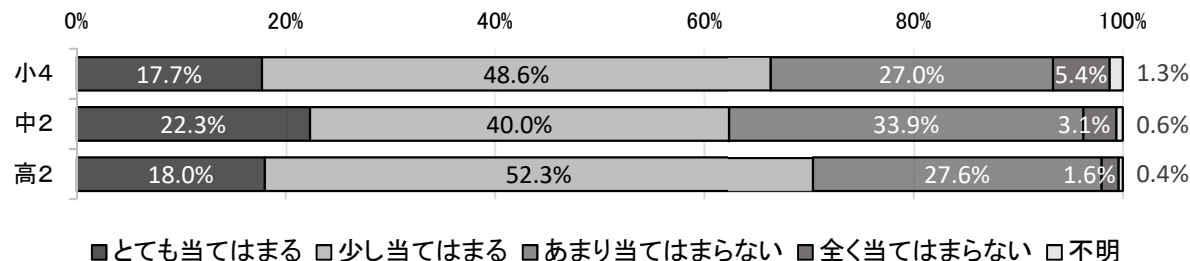
<先のことを考えて、自分の計画を立てる>



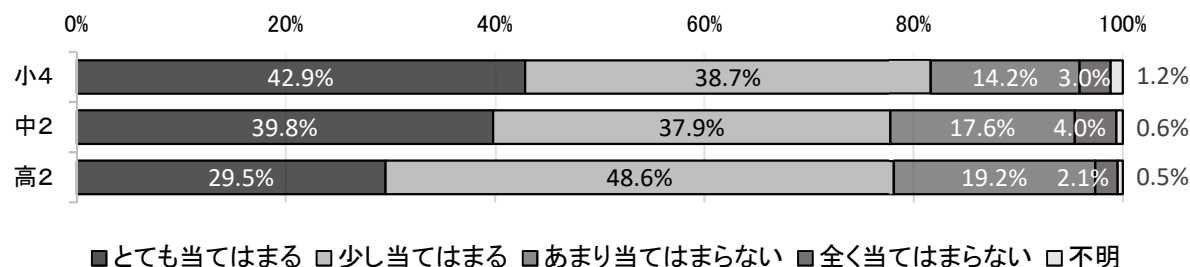
<困ったときでも前向きに取り組む>



<人から言われなくても、自分から進んでやる>

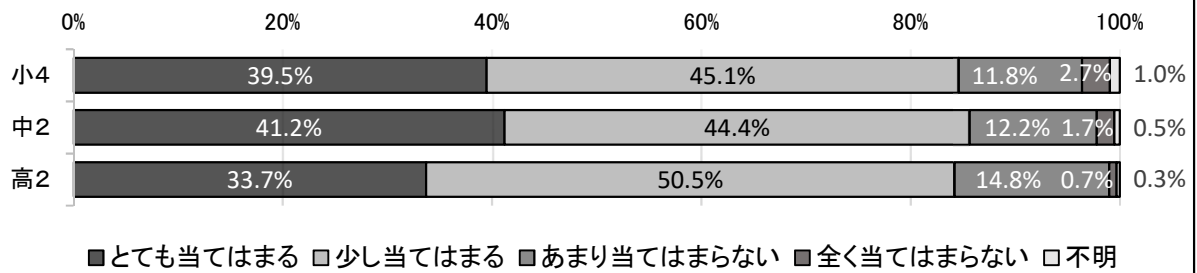


<誰とでも協力してグループ活動をする>

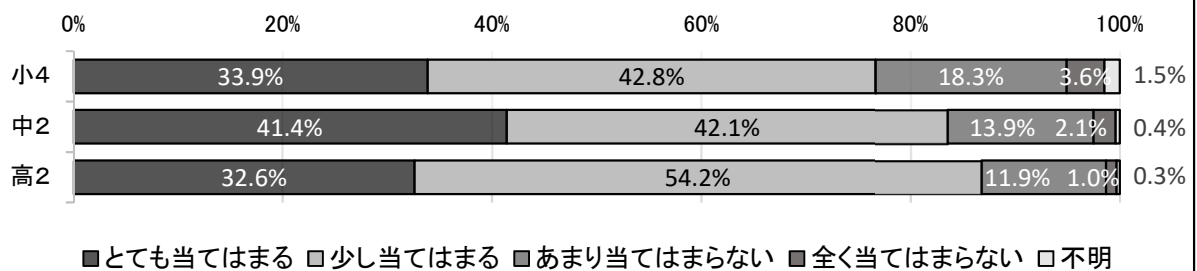




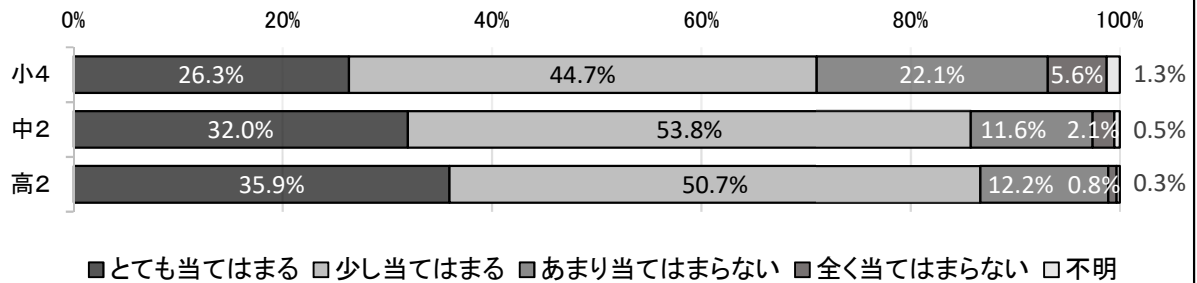
<人の話をきちんと聞く>



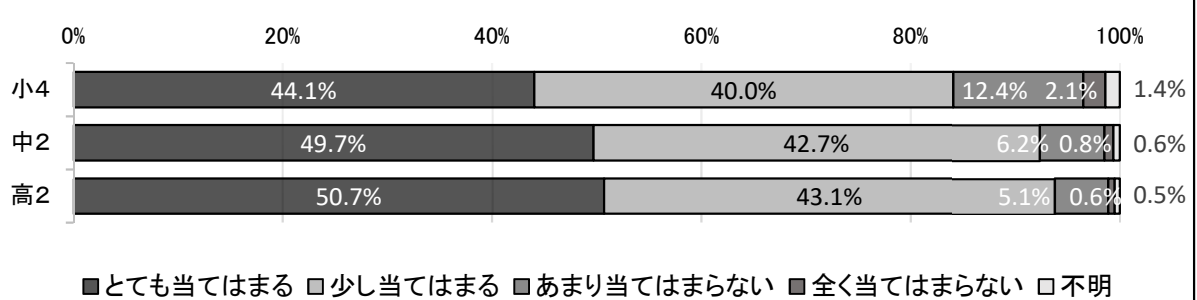
<困っている人がいたときに手助けをする>

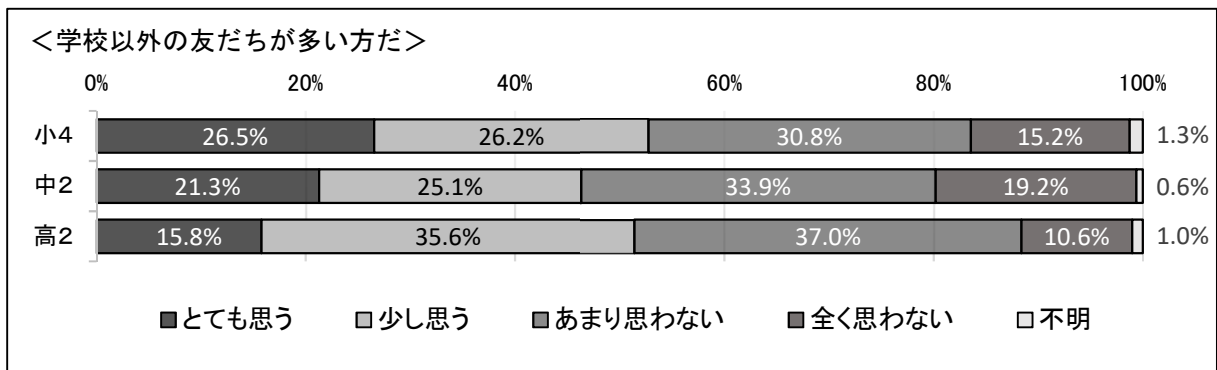
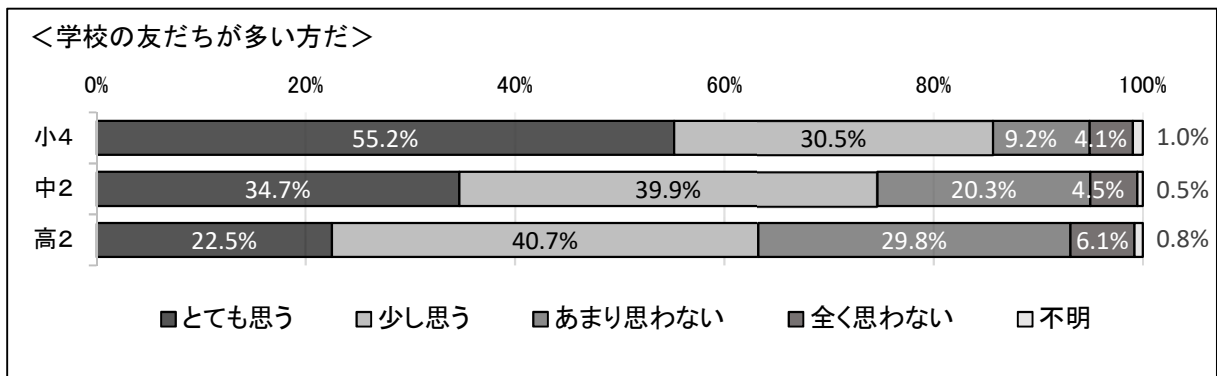
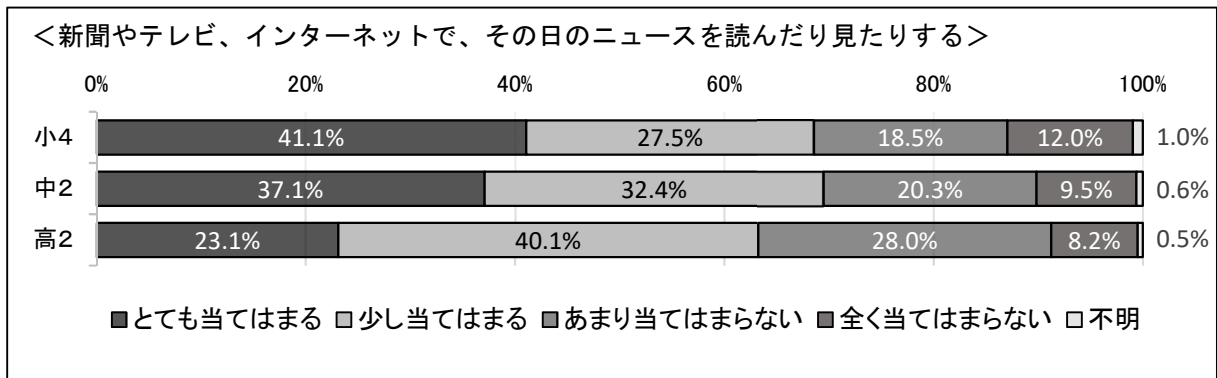
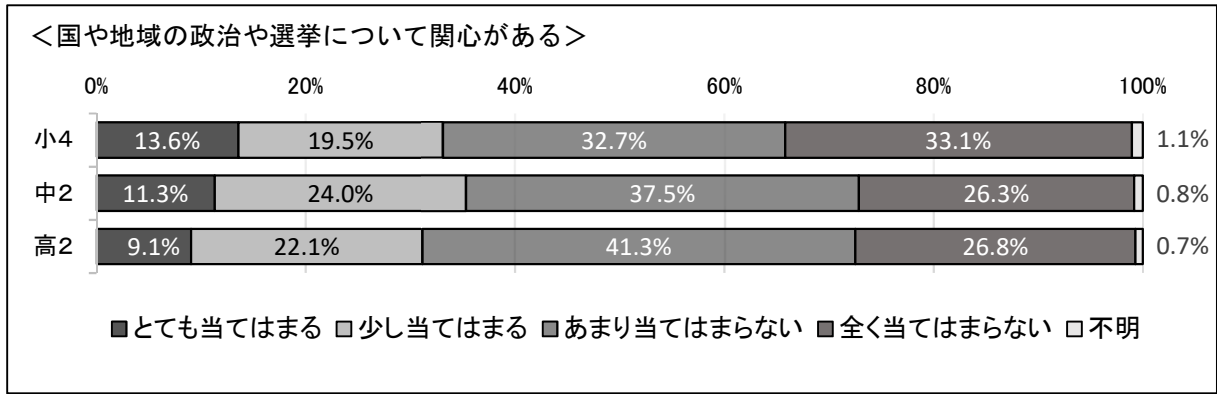


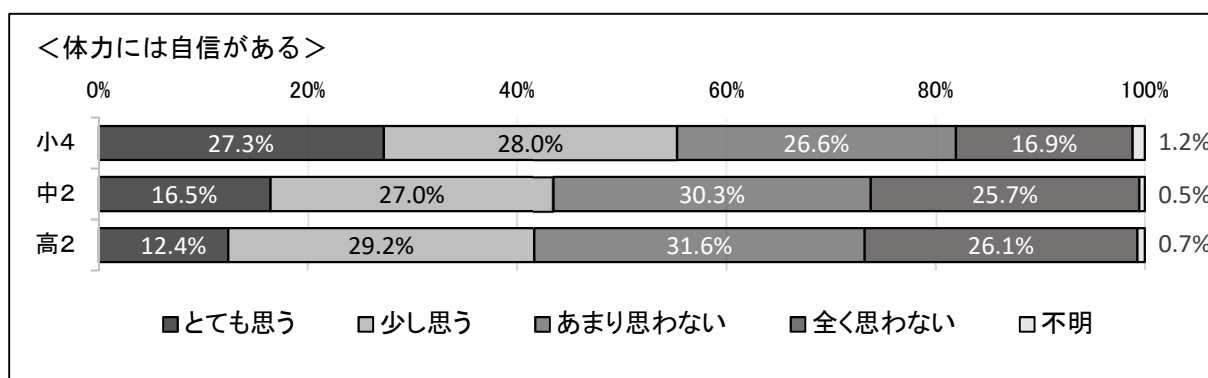
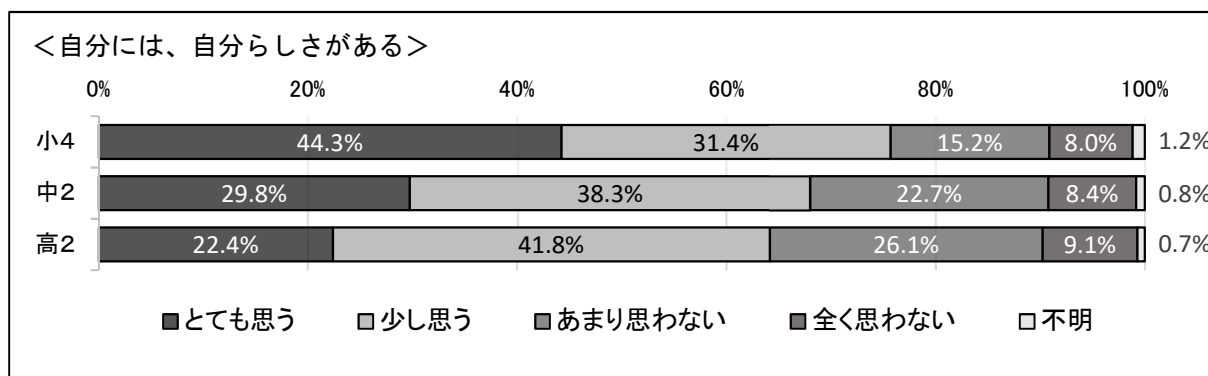
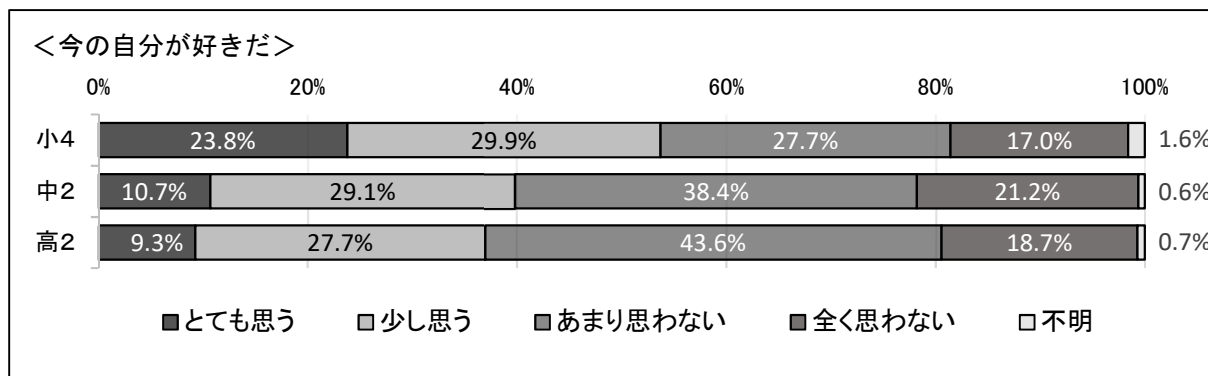
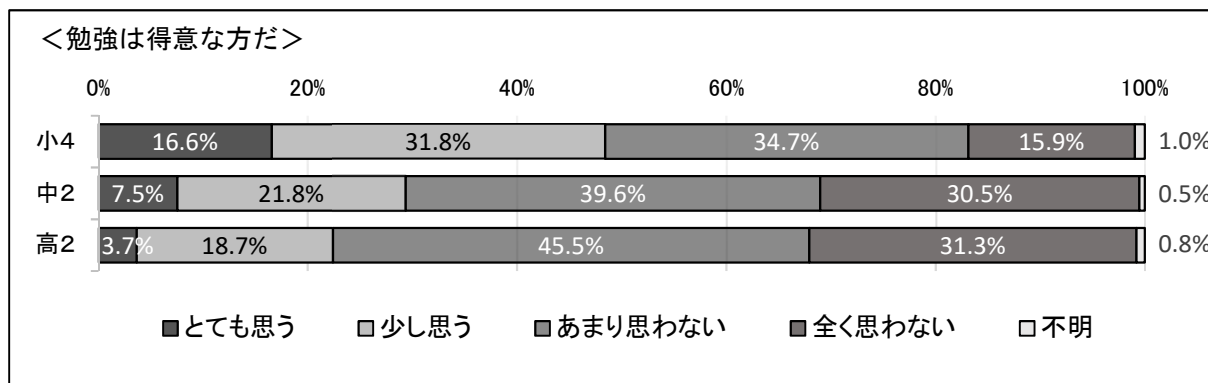
<相手の立場になって考える>



<ルールを守って考える>



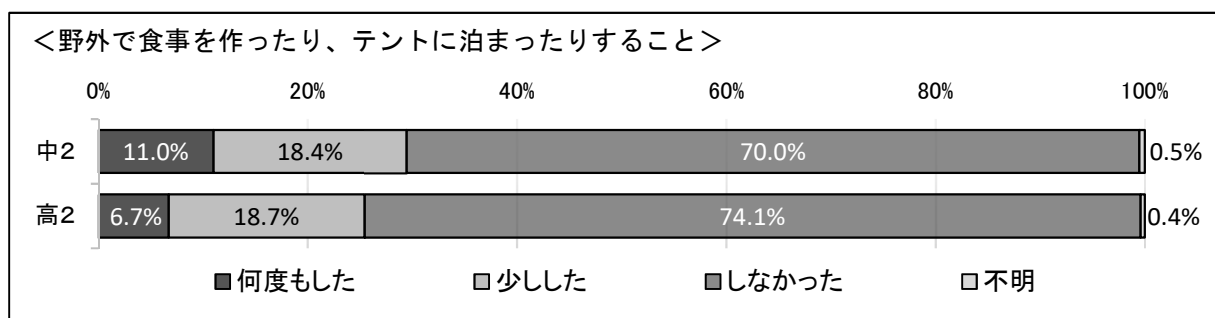
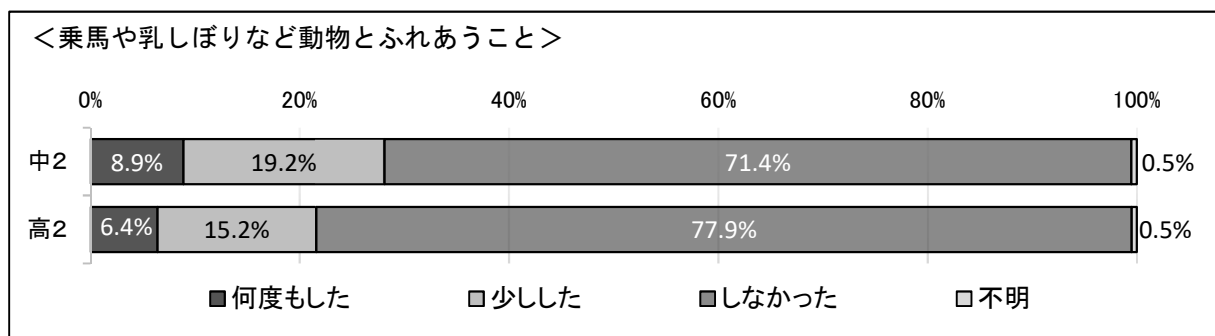
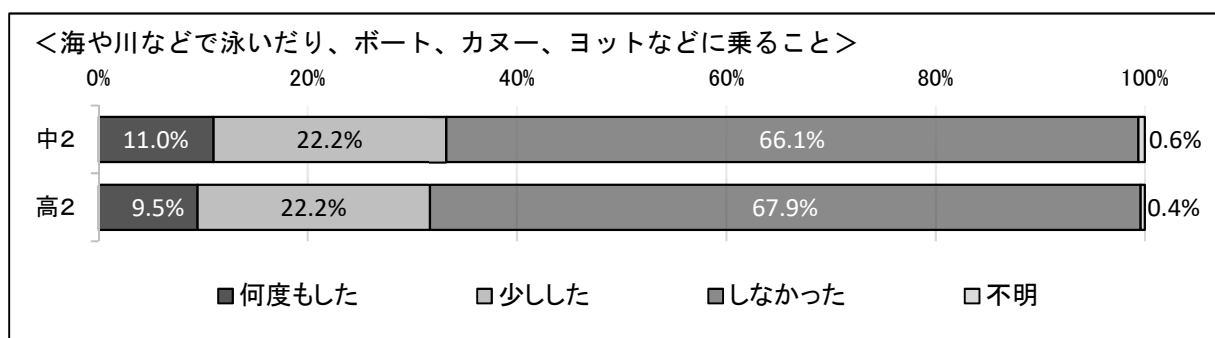
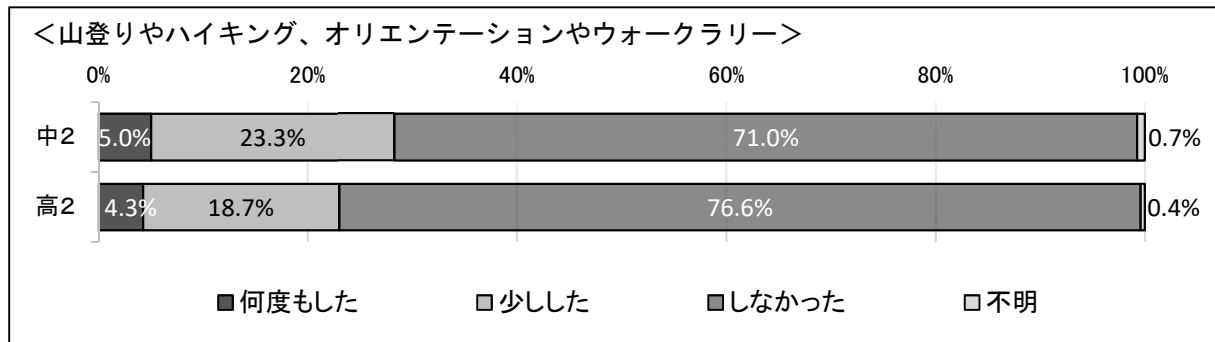


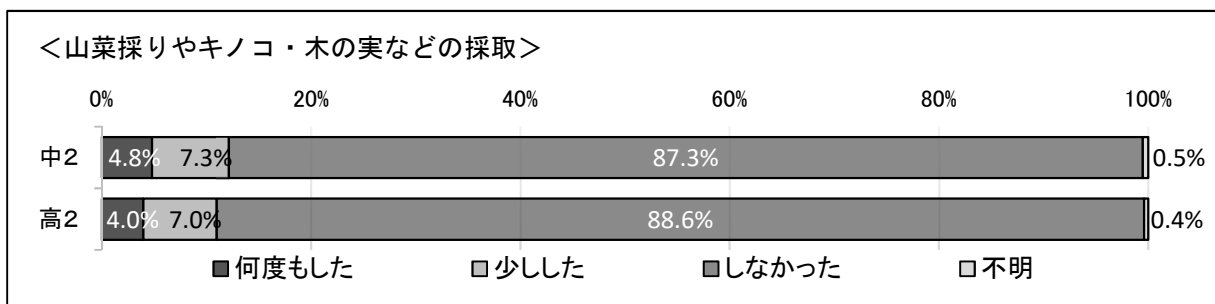
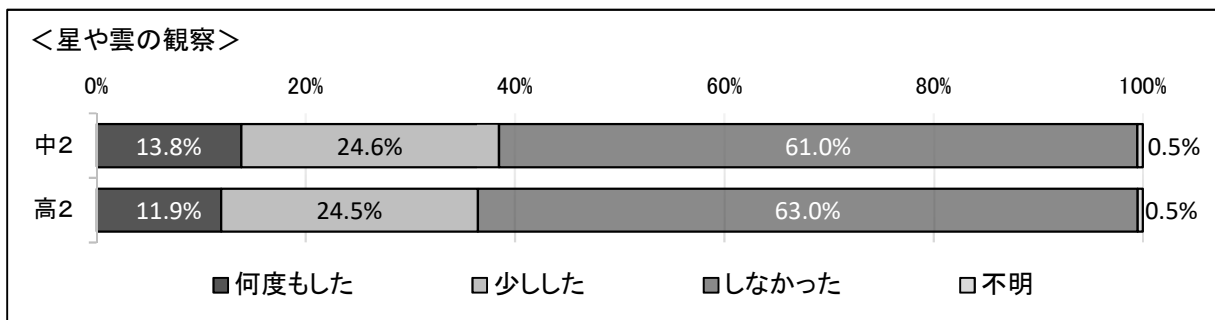
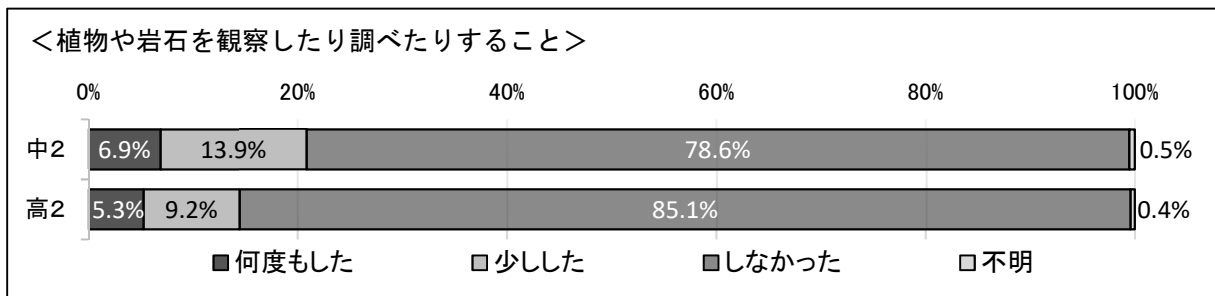
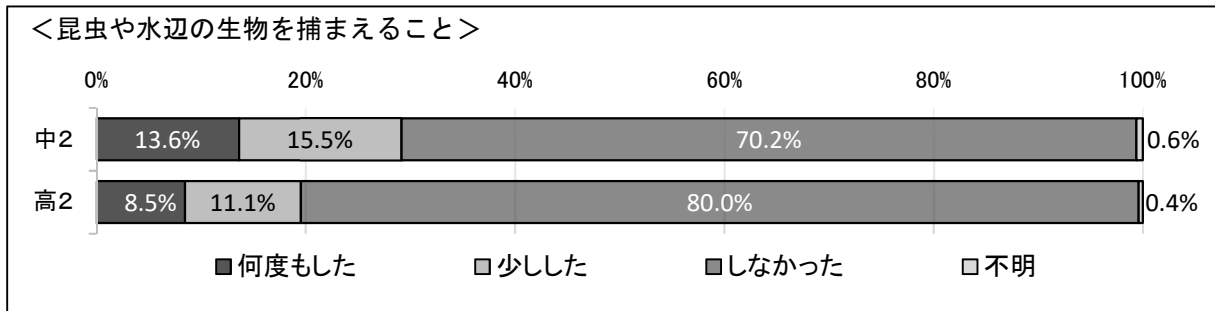
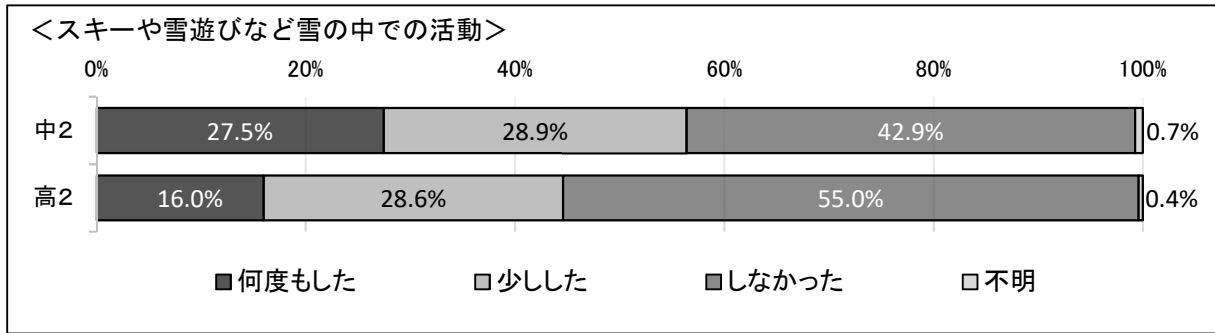


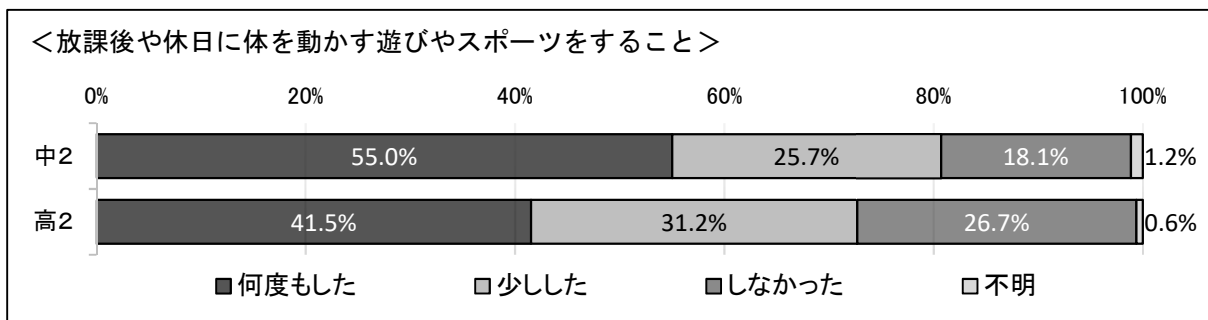
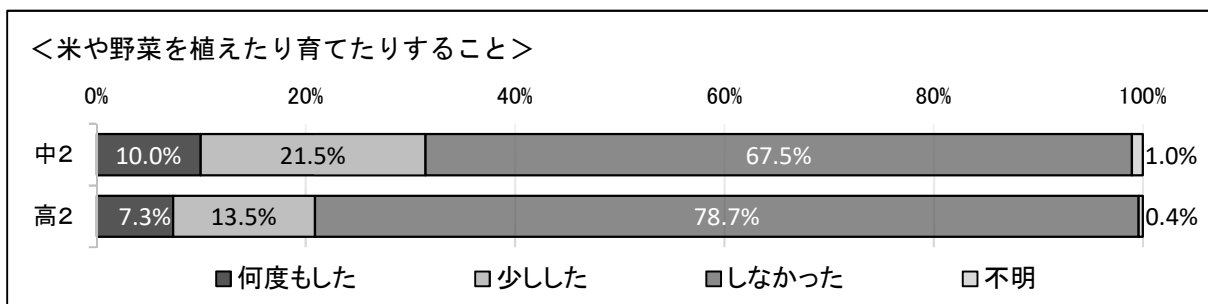
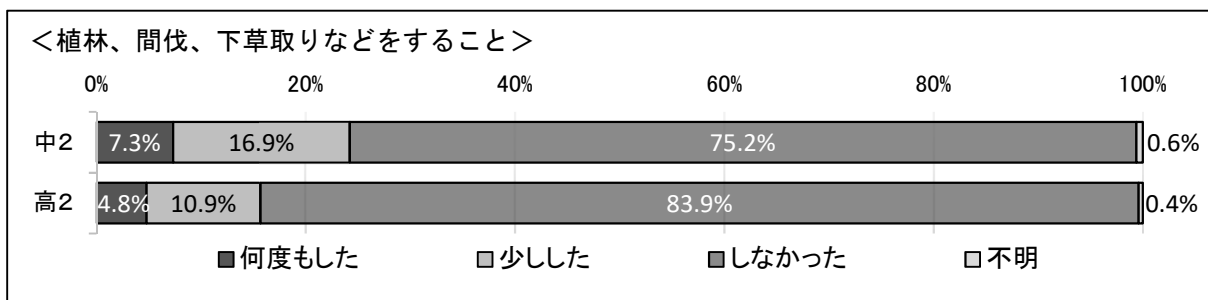
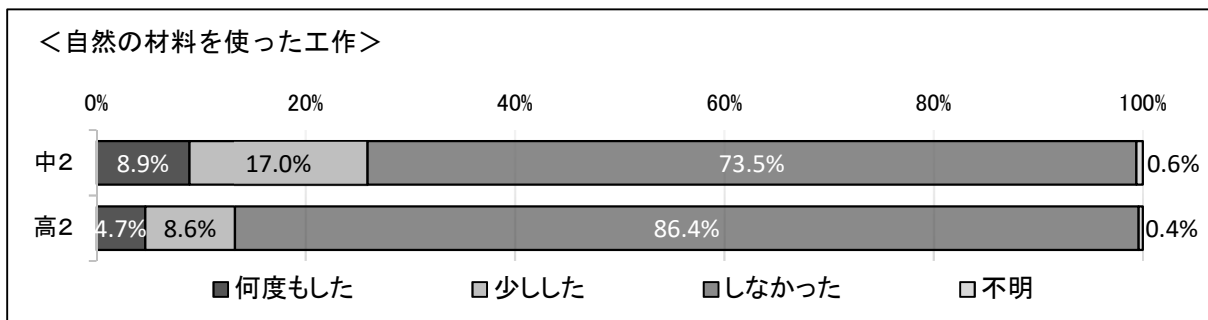
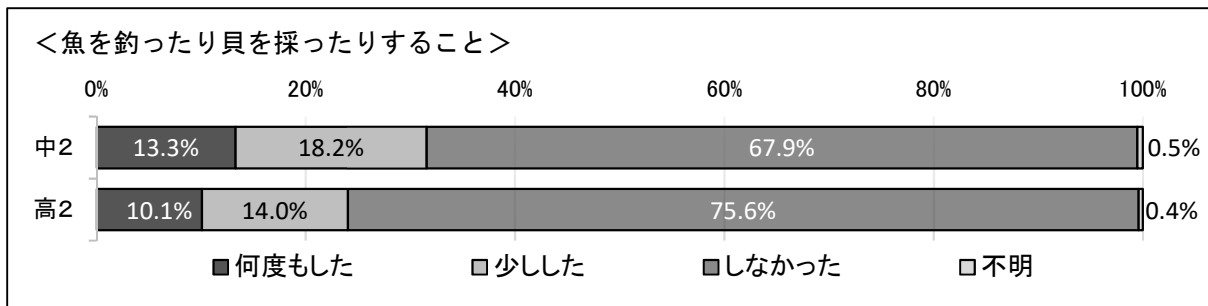
自分自身のことについて、「とても当てはまる」「とても思う」と回答した割合が最も高かった項目は、小学4年生では「自分でできることは自分でする」(46.3%)、中学校2年生及び高校2年生では「ルールを守って考える」(中2:49.7%、高2:50.7%)であった。

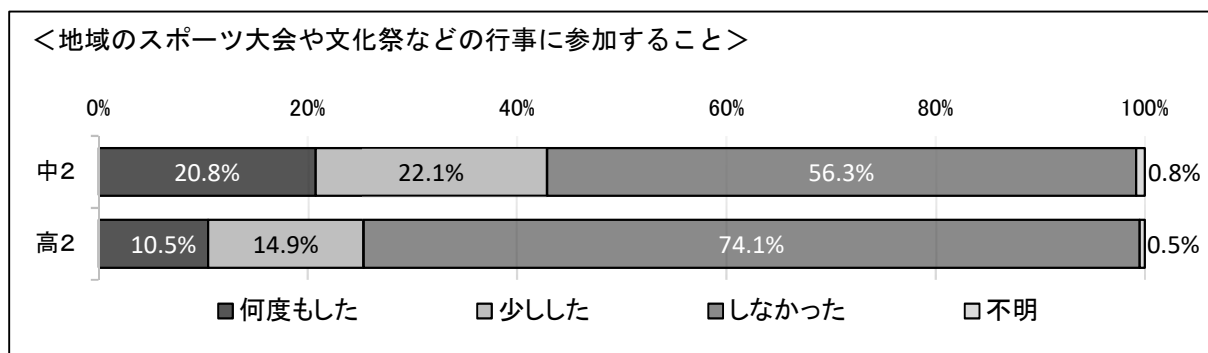
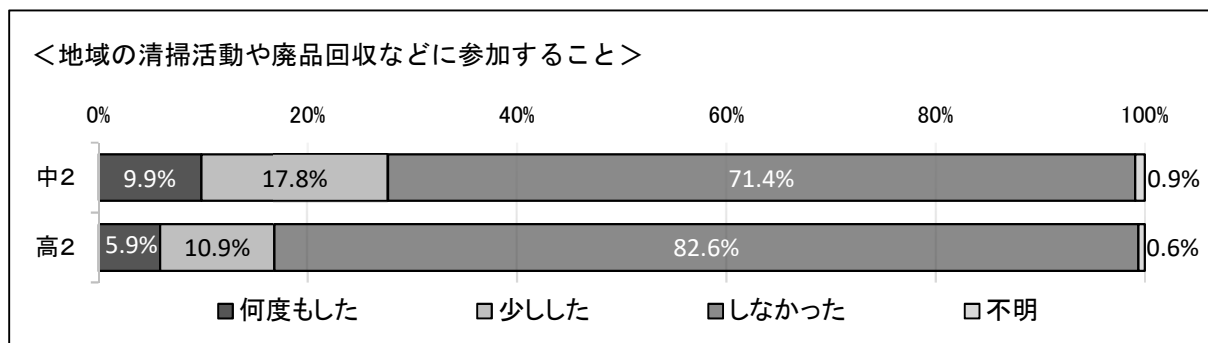
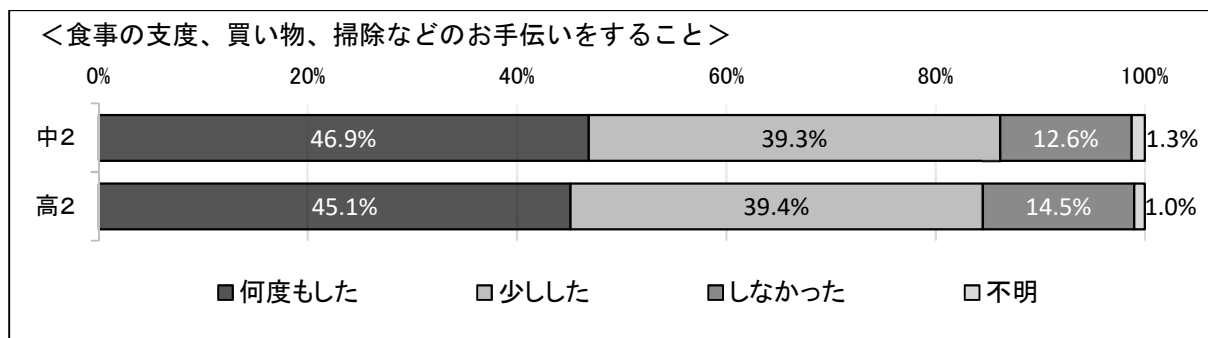
## 6 体験活動（学校の授業や行事以外）について

※中学校2年生、高校2年生のみ質問している。





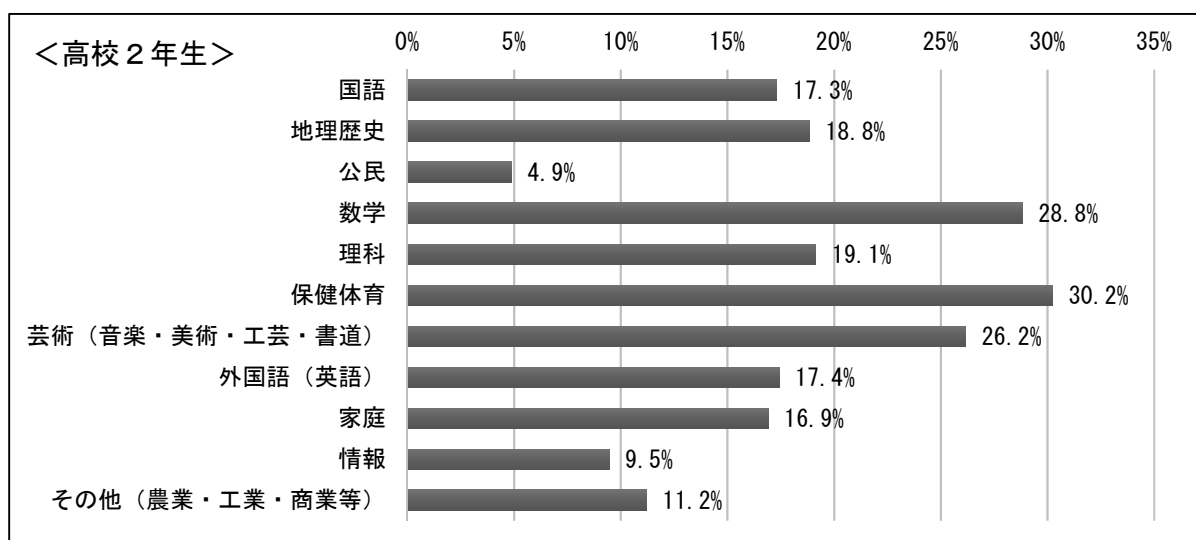
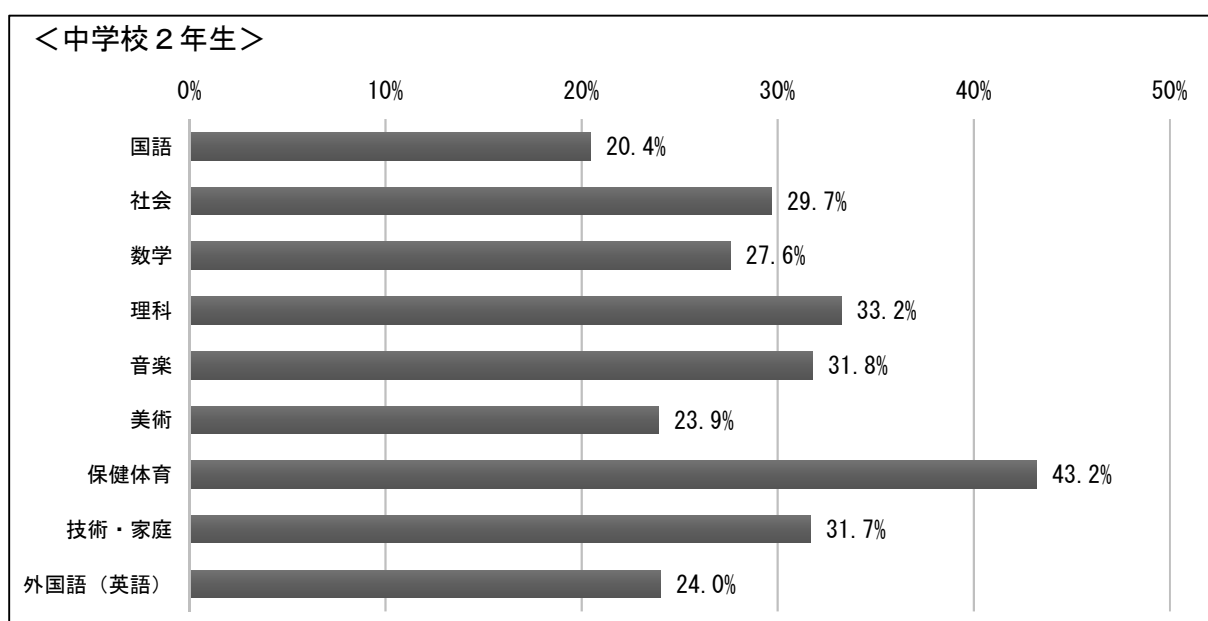
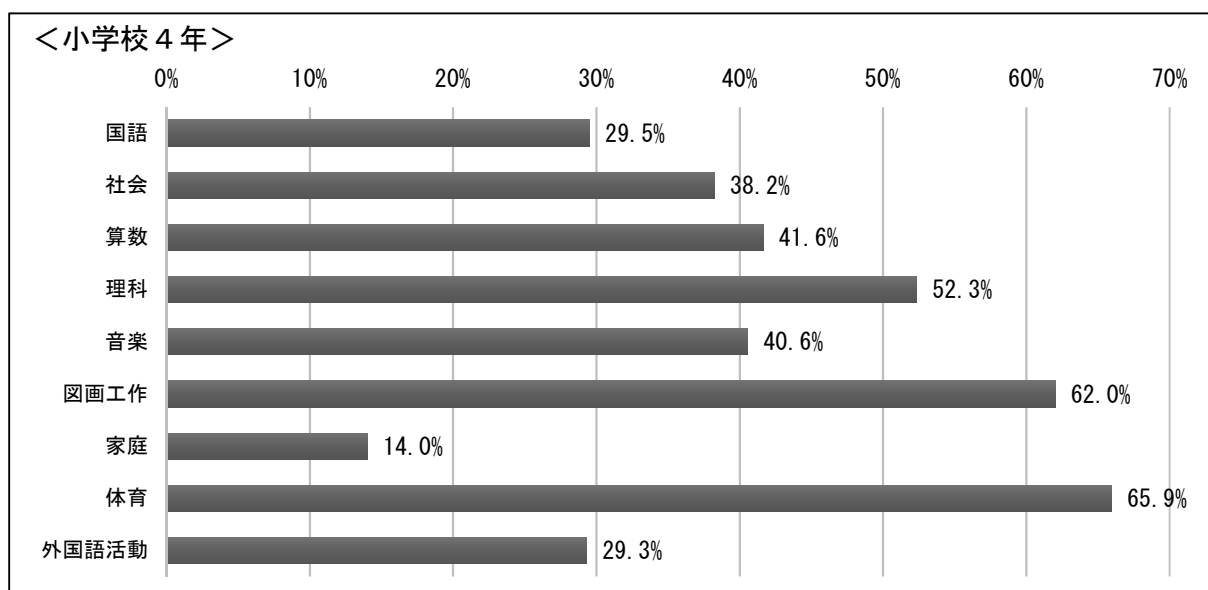




体験活動（学校の授業や行事以外）について、「何度もした」と回答した割合が最も高かった項目は、中学2年生では「放課後や休日に体を動かす遊びやスポーツをすること」（55.0%）、高校2年生では「食事の支度、買い物、掃除などのお手伝いをすること」（45.1%）であった。

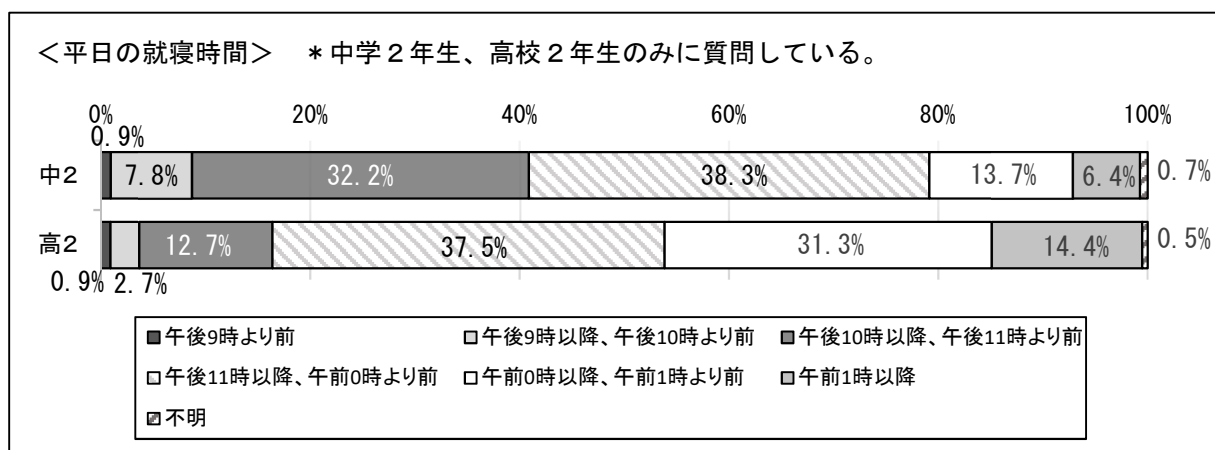
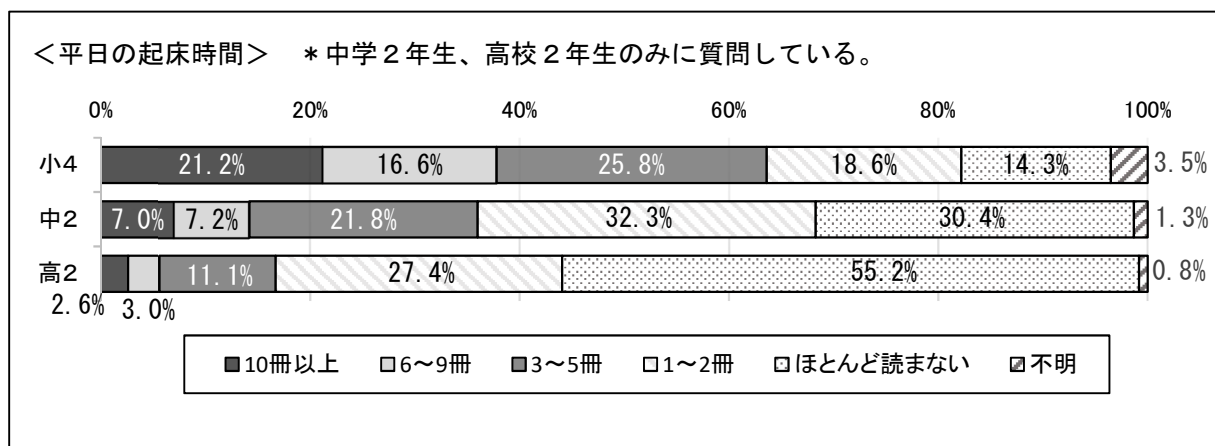
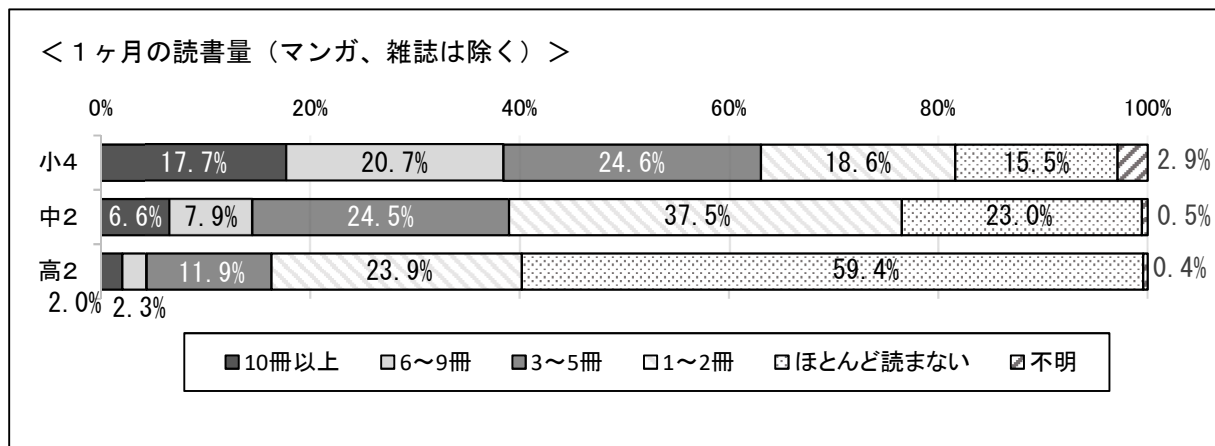
「何どもした」と回答した割合で、中学2年生と高校2年生の差が最も大きい項目は「放課後や休日に体を動かす遊びやスポーツをすること」（13.5ポイントの差）であった。

## 7 得意教科について \*複数回答

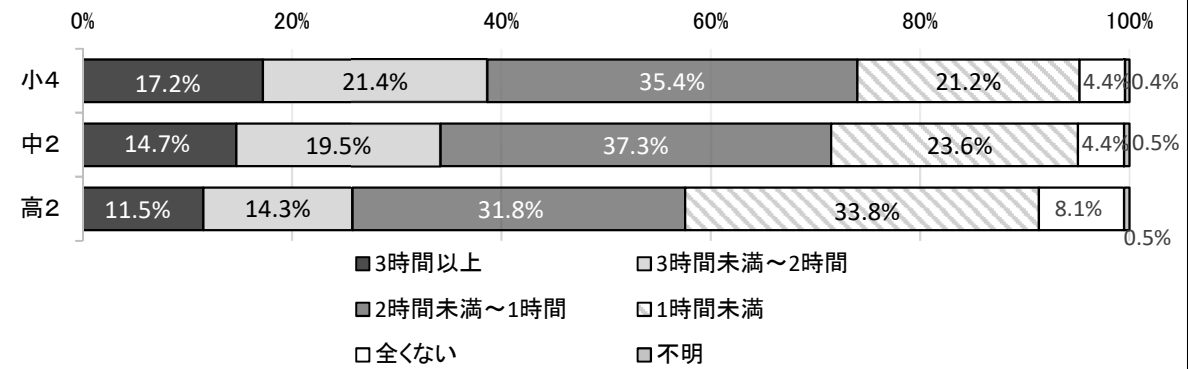




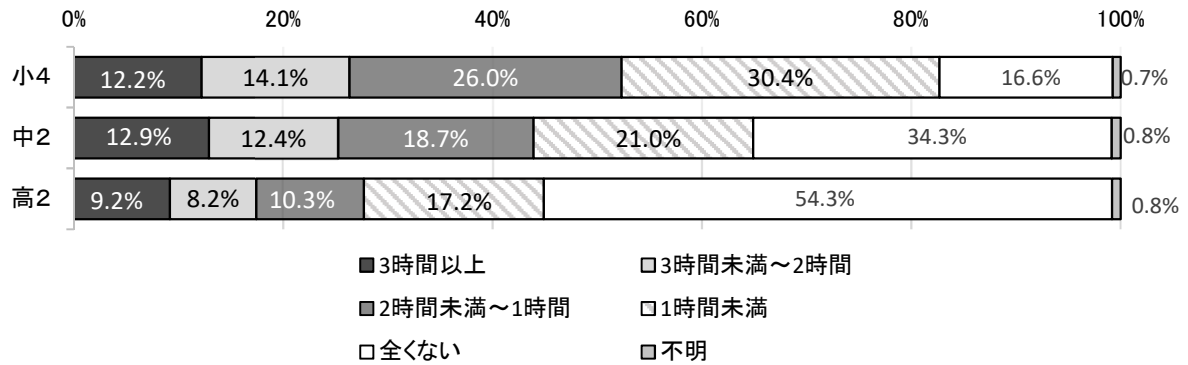
## 8 普段の生活について



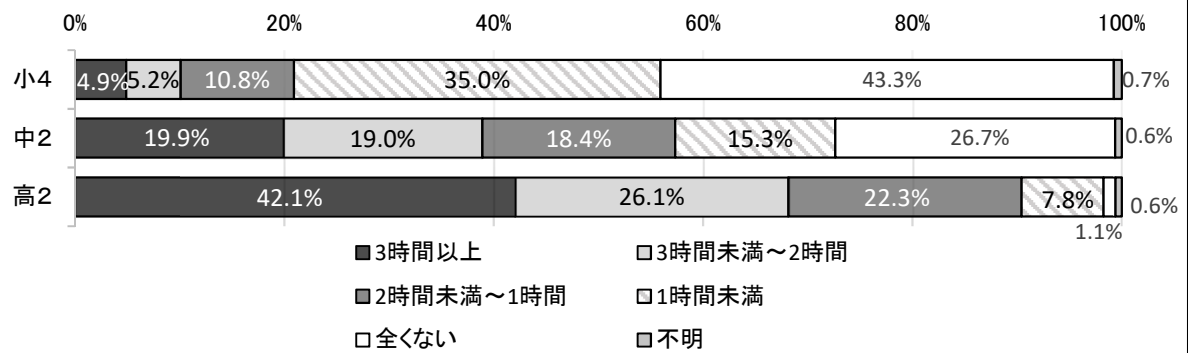
＜テレビやビデオ、DVDなどを1日に見る時間＞



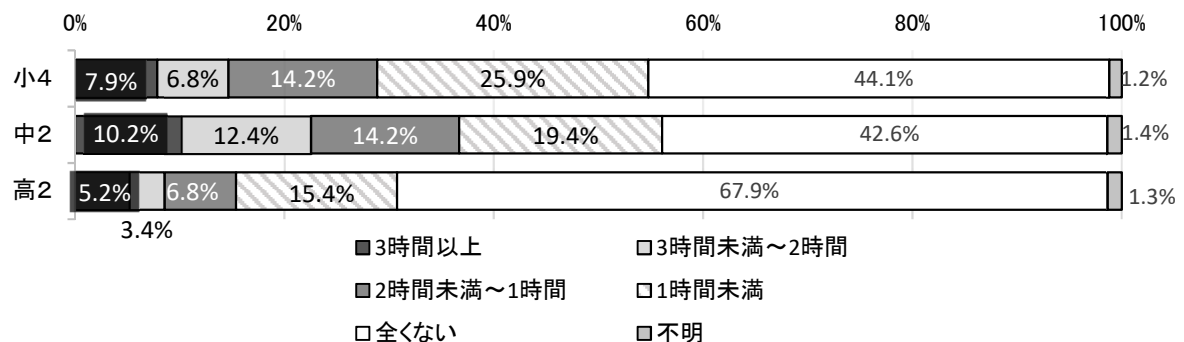
＜テレビゲームやコンピューターゲーム（Wii、PSP、DSなど）を1日にする時間＞

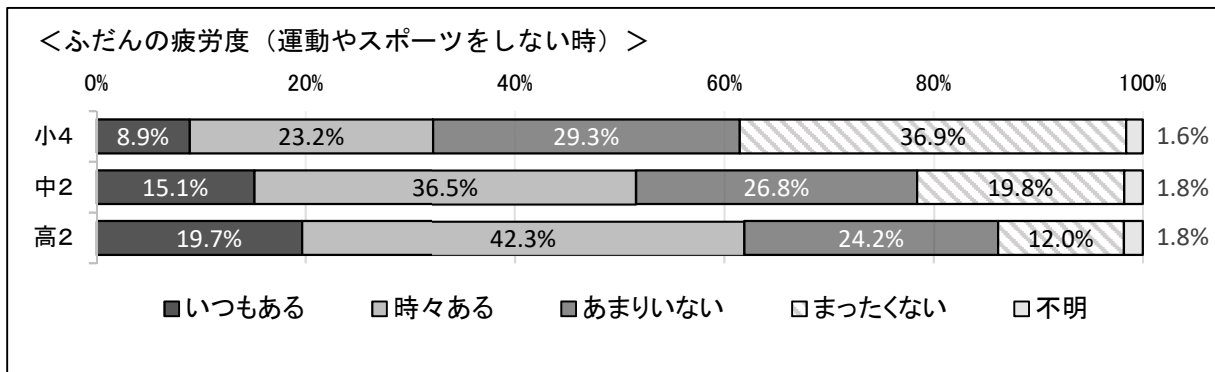
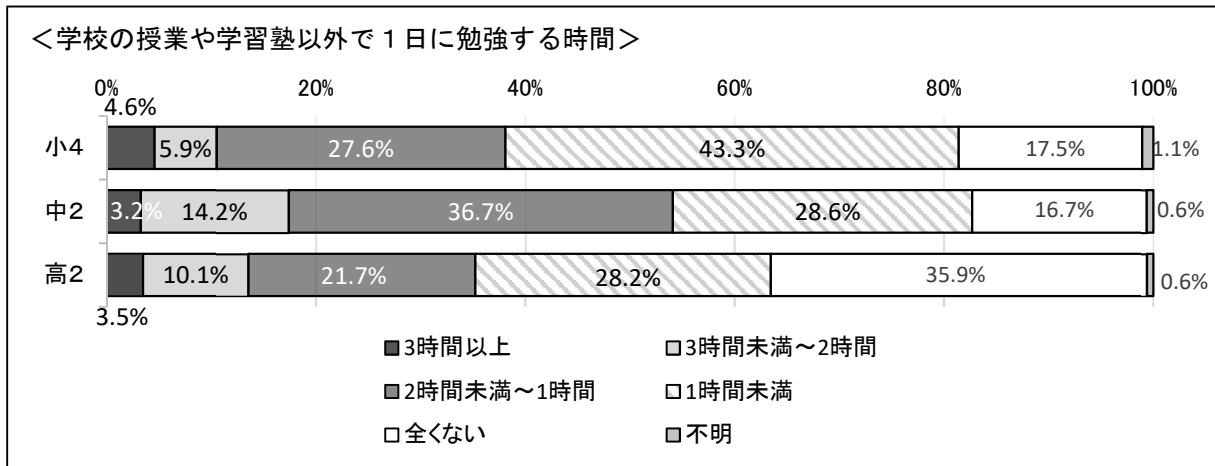
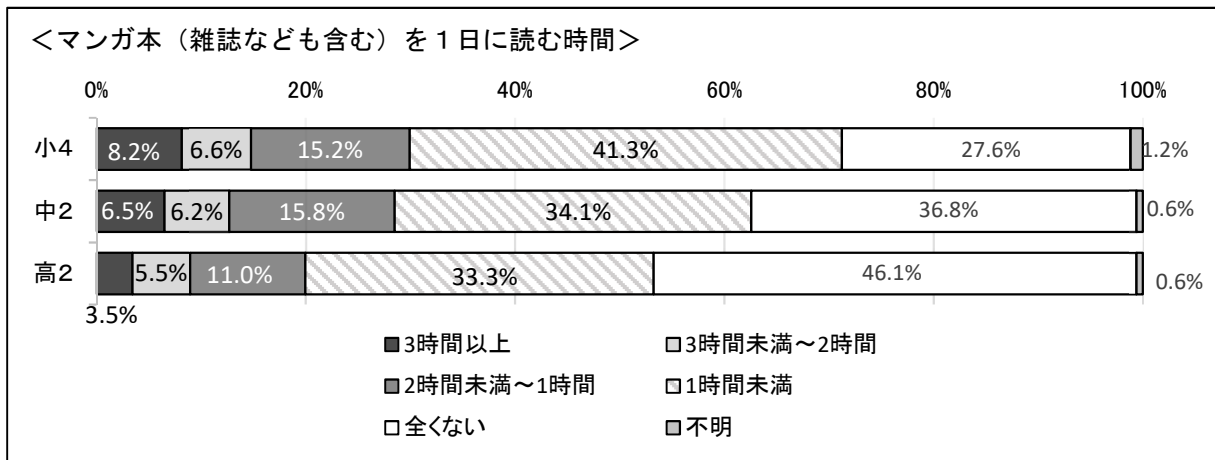
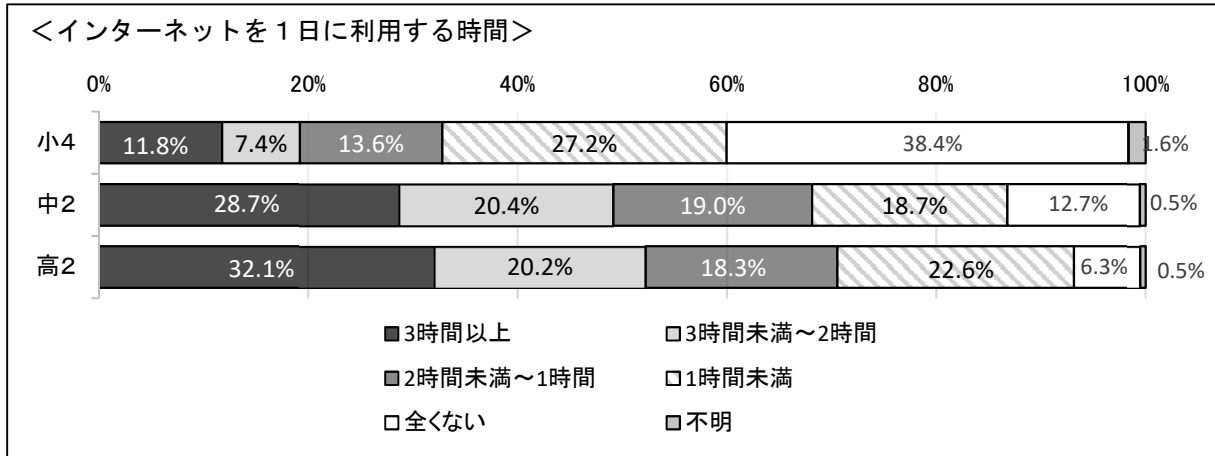


＜携帯電話やスマートフォンを1日に利用する時間＞



＜パソコンやタブレット端末（iPadなど）を1日に利用する時間＞

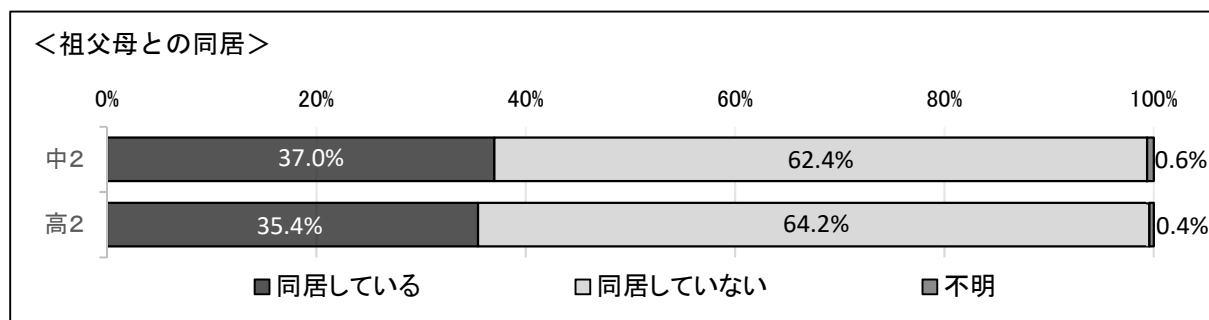
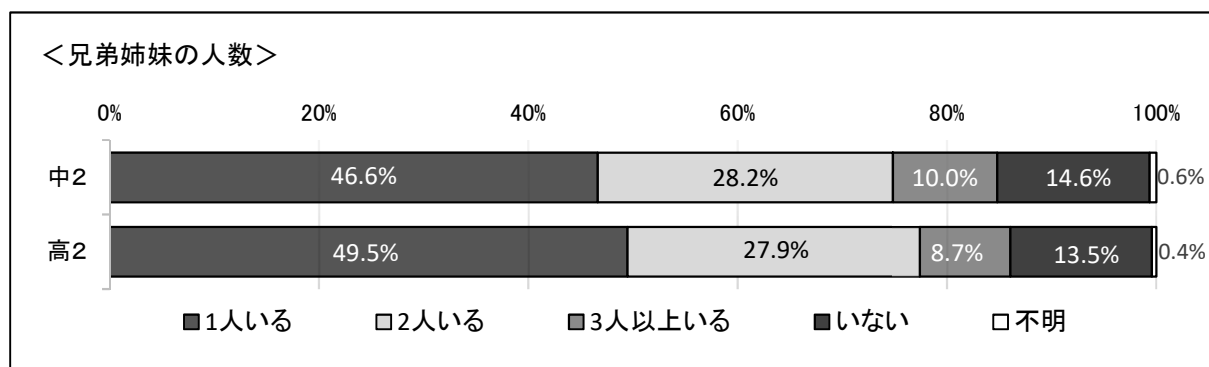




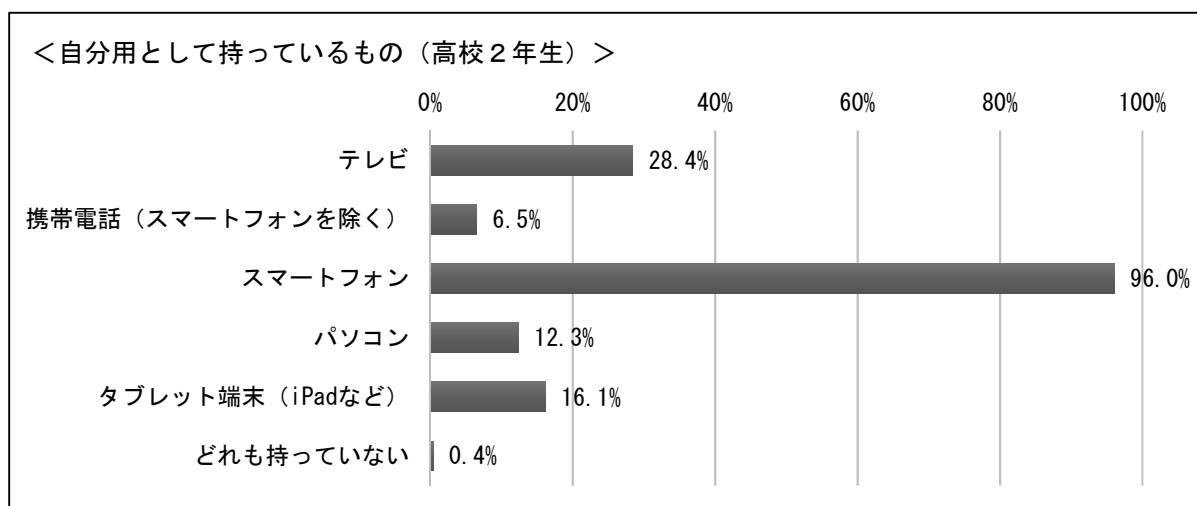
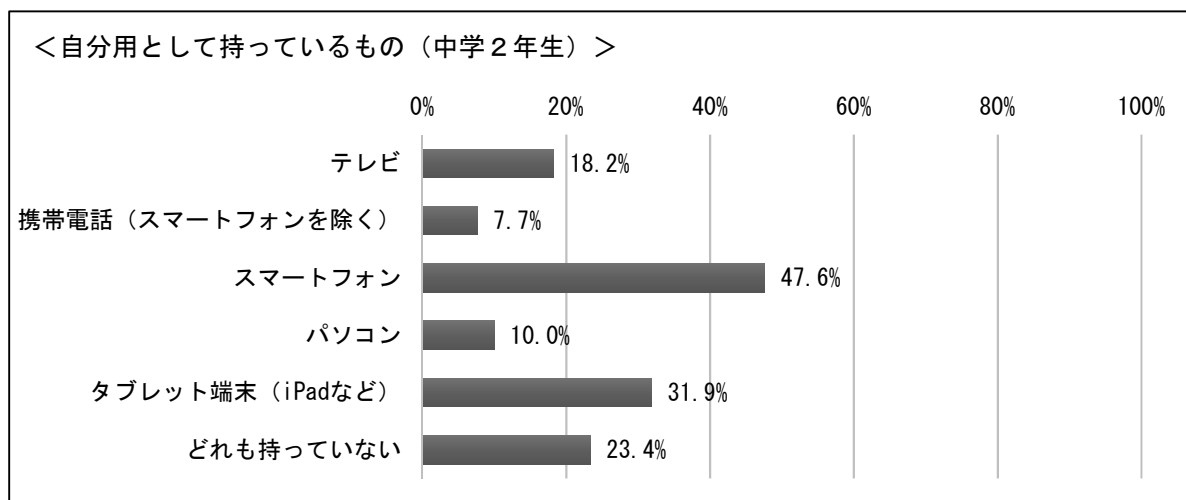
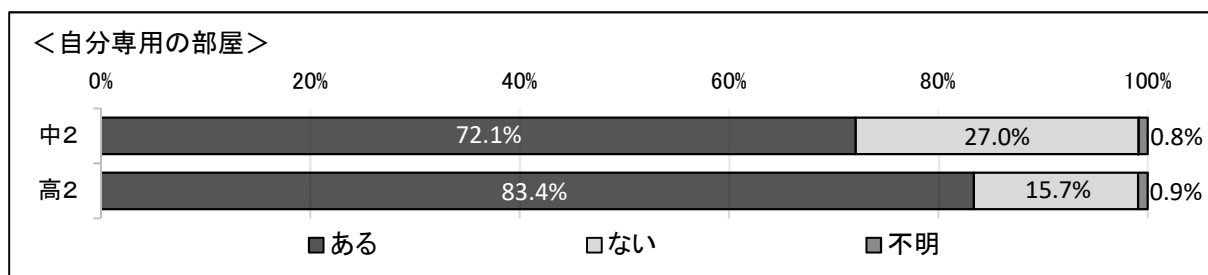
普段の生活について、「3時間以上」と回答した割合をみると、「携帯電話やスマートフォンを1日に利用する時間」、「インターネットを1日に利用する時間」は学年が進むにつれて高くなっている。一方、「テレビやビデオ、DVDなどを1日に見る時間」、「マンガ本（雑誌なども含む）を1日に読む時間」は学年が進むにつれて低くなっている。

また、「ふだんの疲労度（運動やスポーツをしない時）」においては、「いつもある」と答えた割合は、小学4年生と高校2年生を比較すると2倍以上になっている。

## 9 家族構成について ※中学校2年生、高校2年生のみ質問している。

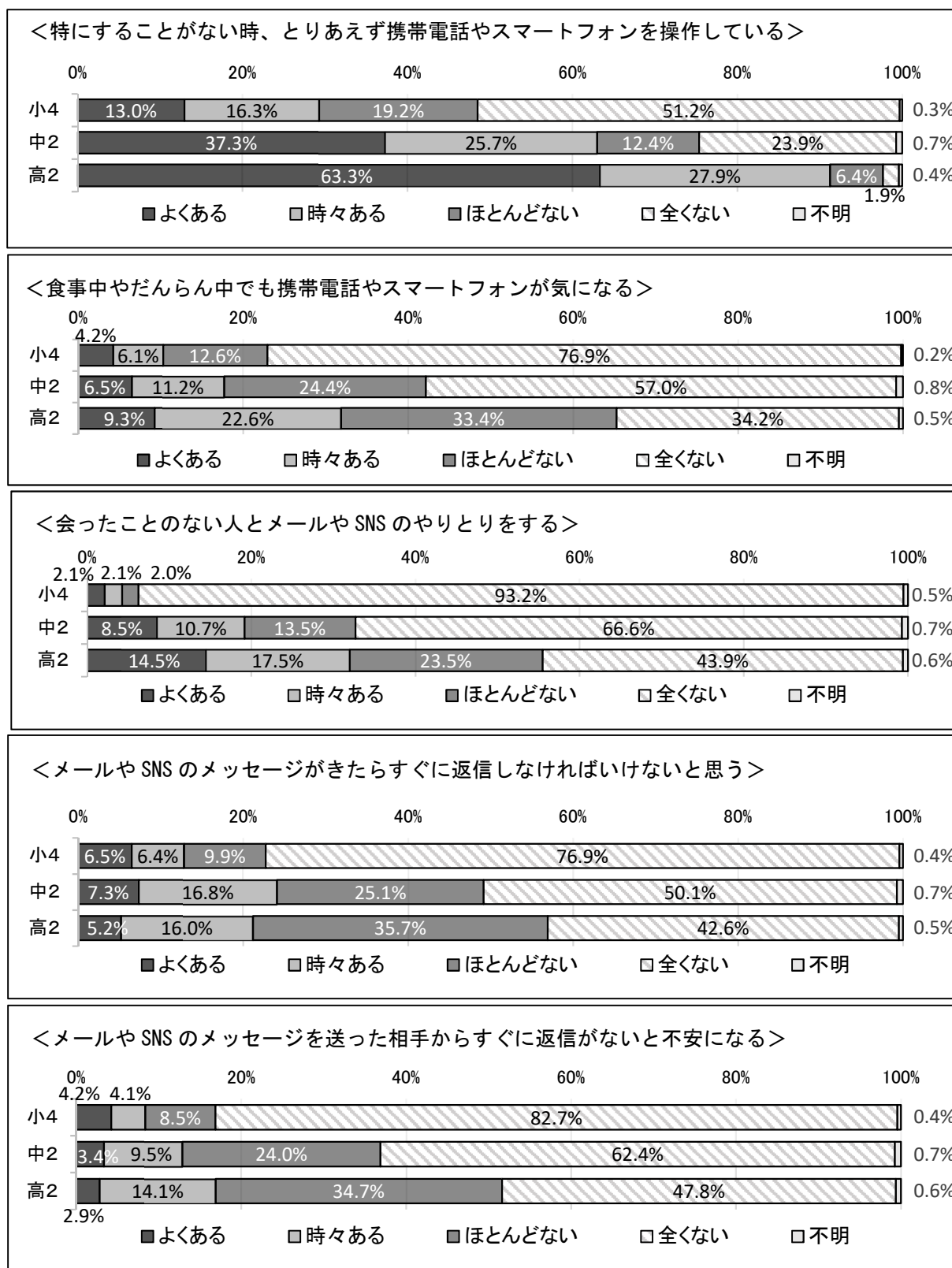


10 自分専用 to 所有しているものについて ※中学校2年生、高校2年生のみ質問している。



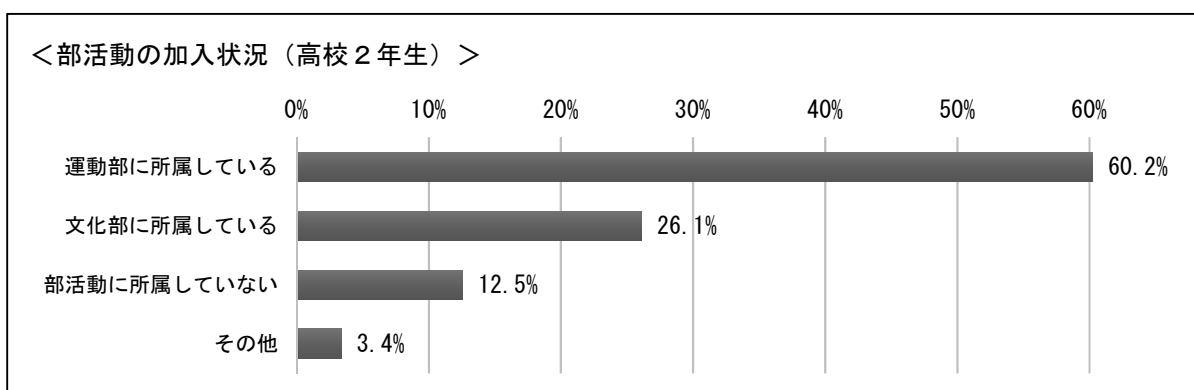
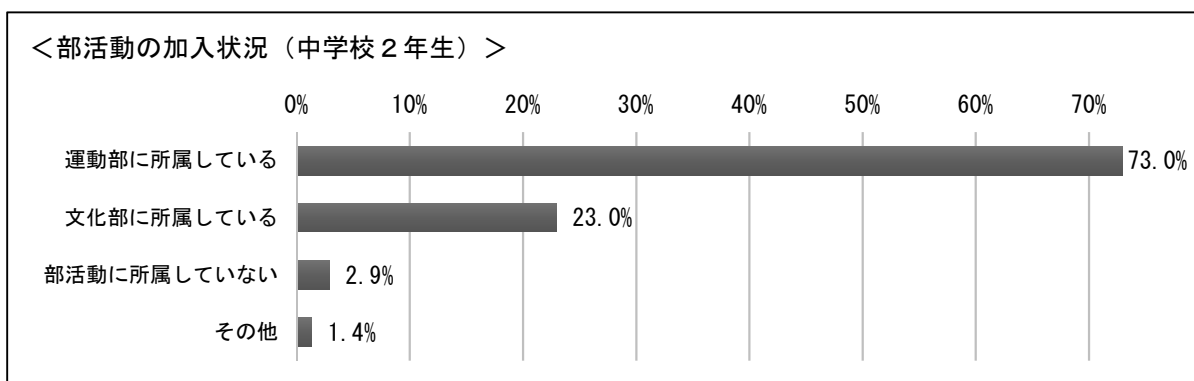
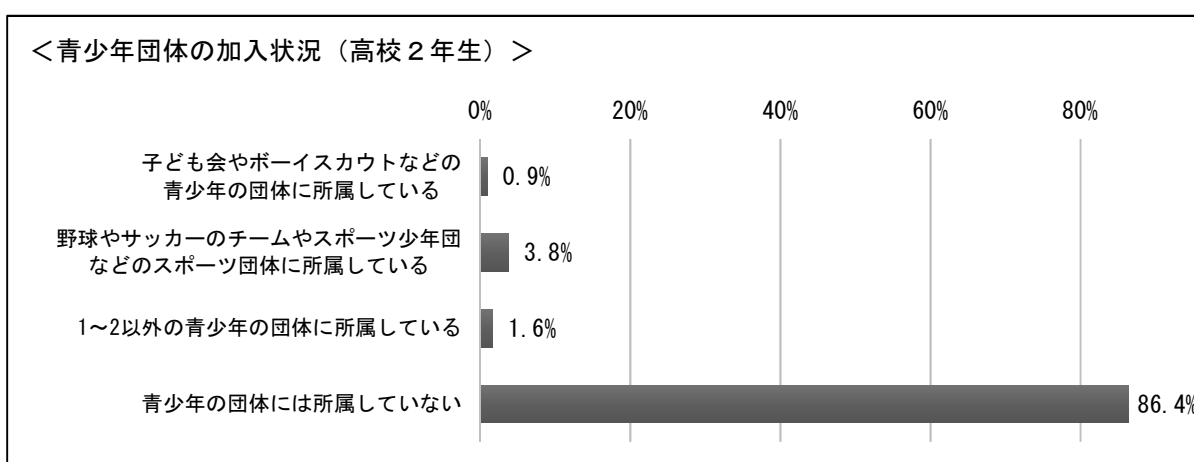
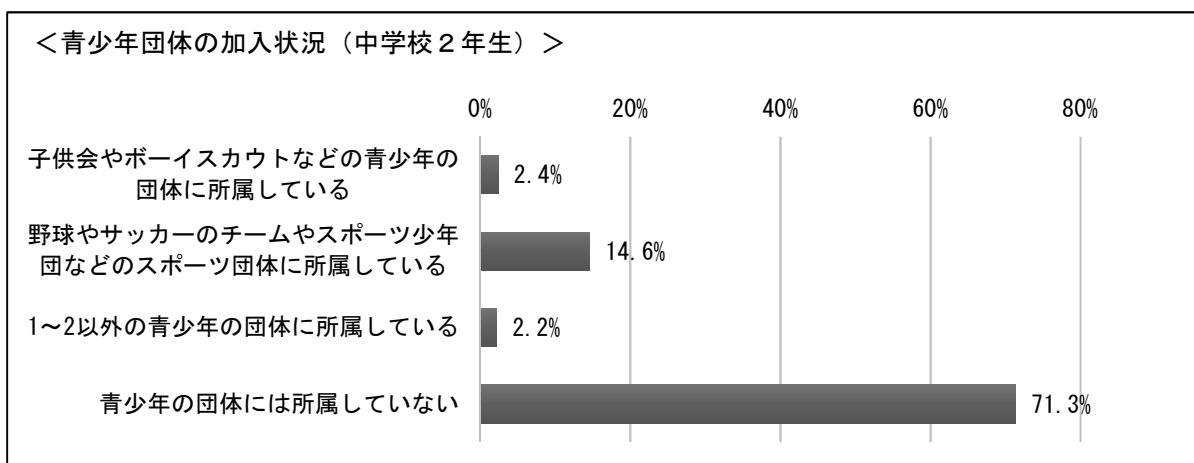
自分専用 to 所用しているものについて、「スマートフォン」についてみると、中学2年生では47.6%と5割弱であるのに対し、高校2年生では96.0%とほとんどの生徒が所有していることが分かる。

## 11 携帯電話やスマートフォンについて

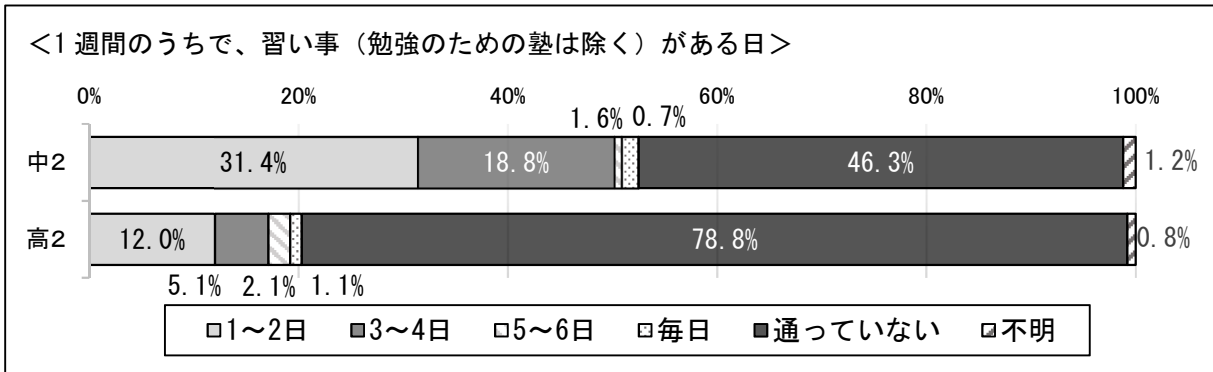
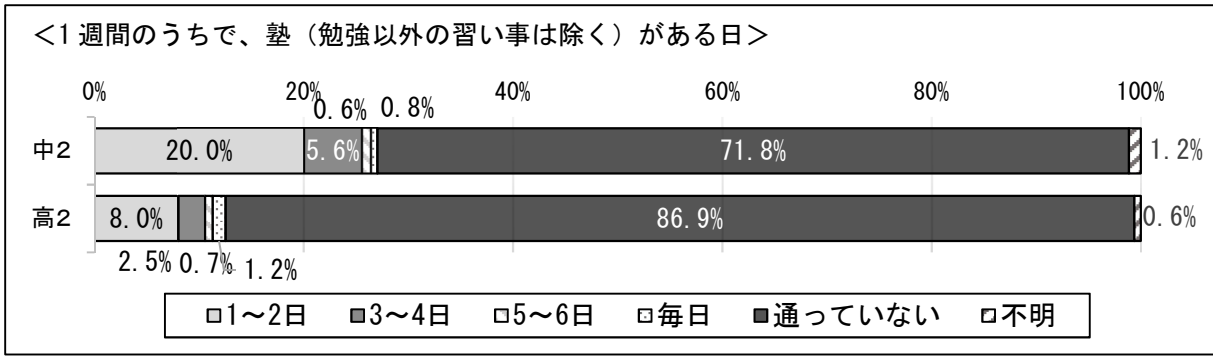


携帯電話やスマートフォンについて、「よくある」と回答した割合をみると、「特にすることがない時、とりあえず携帯電話やスマートフォンを操作している」については、高校2年生は63.3%と6割を超えている。

12 青少年団体・部活動の所属状況について※ 中学校2年生、高校2年生のみ質問している。

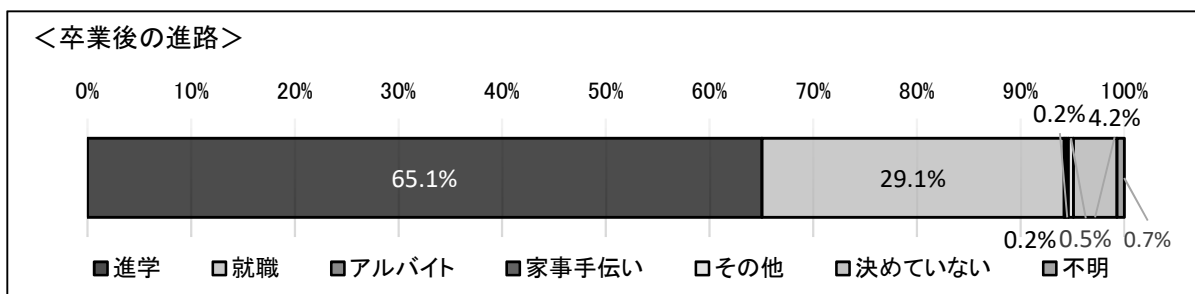
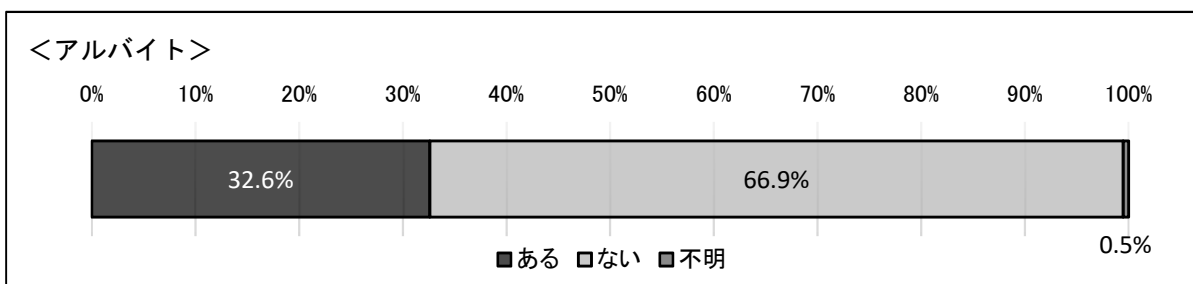


13 塾や習い事について ※中学校2年生、高校2年生のみ質問している。



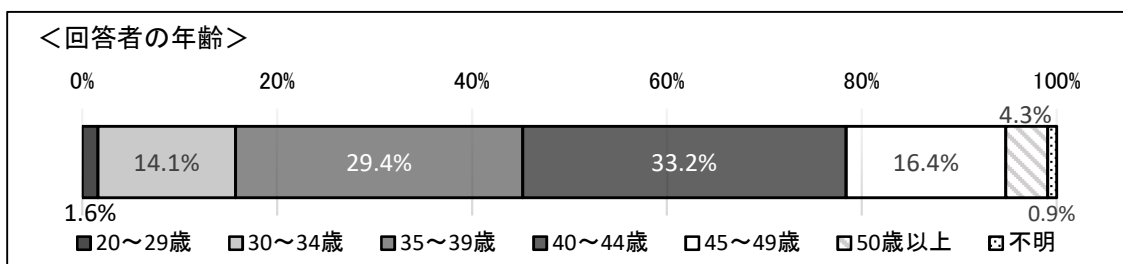
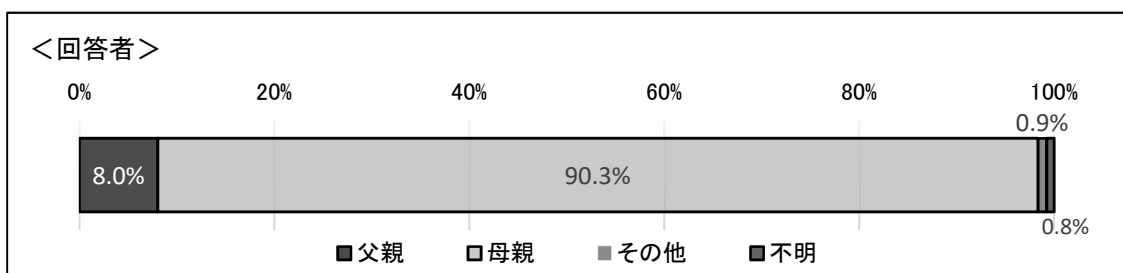
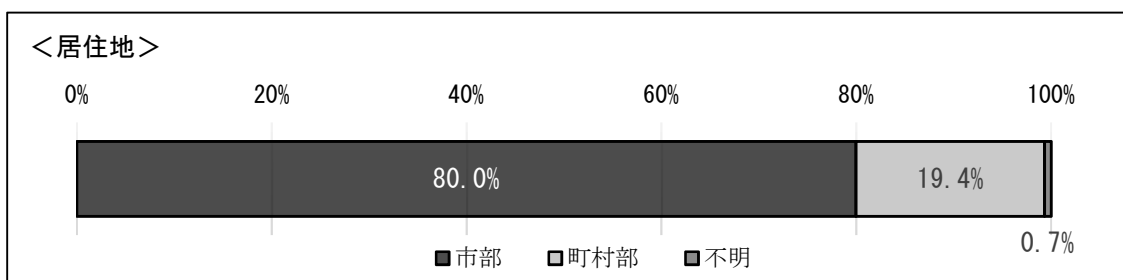
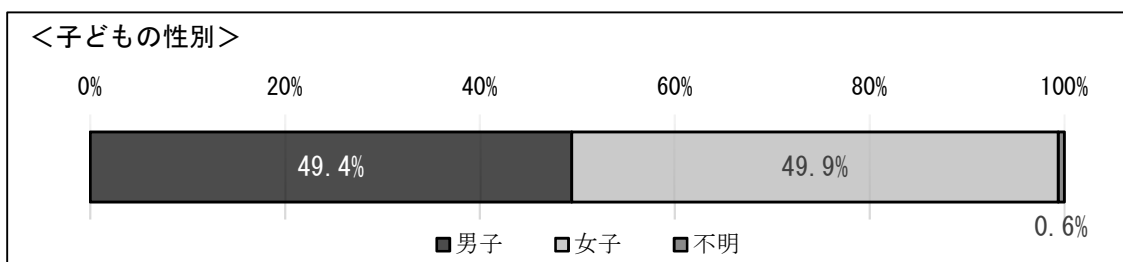
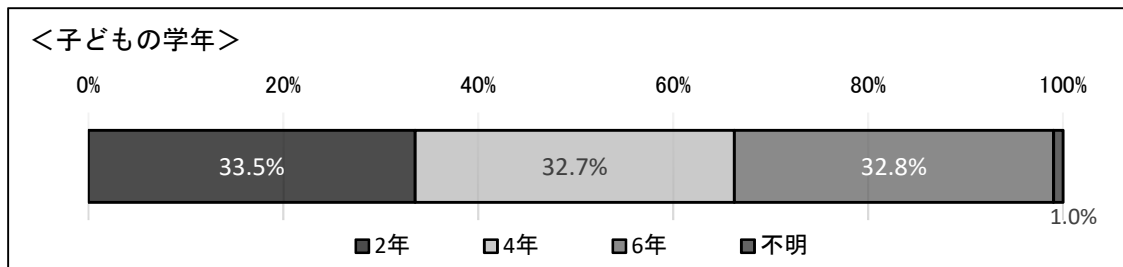


14 アルバイト・卒業後の進路状況について ※高校2年生のみ質問している。

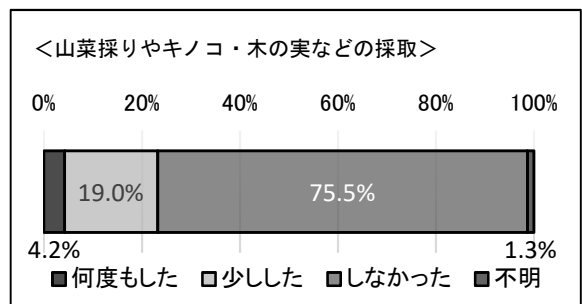
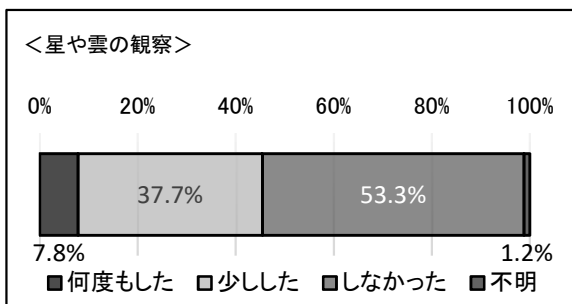
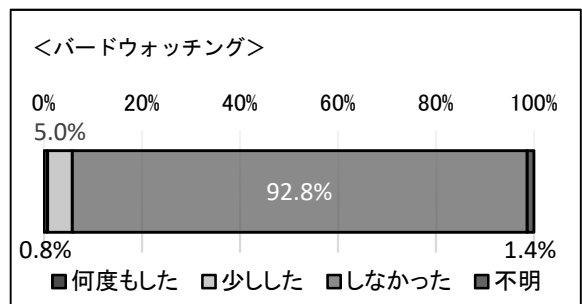
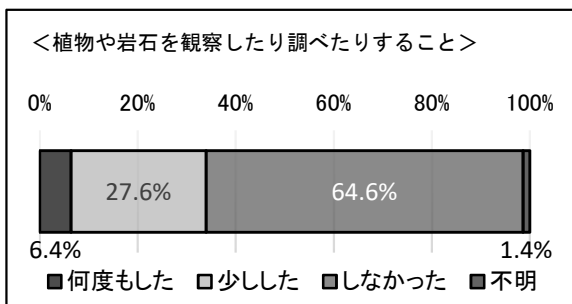
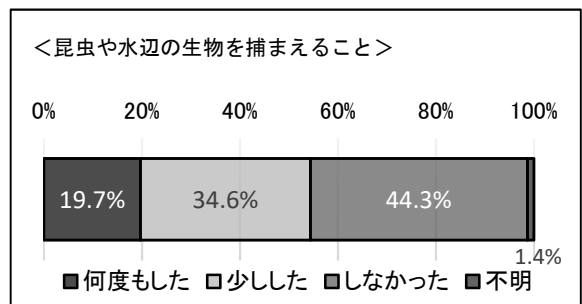
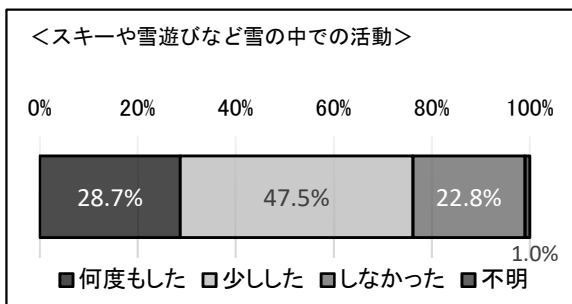
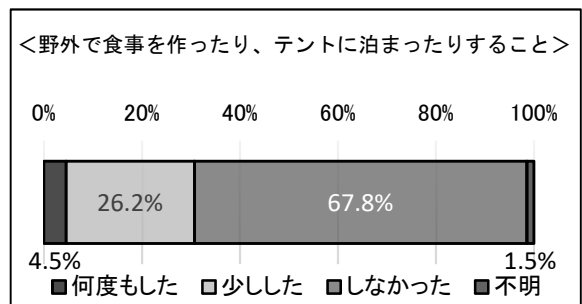
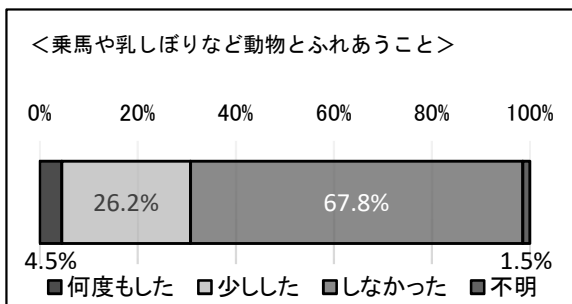
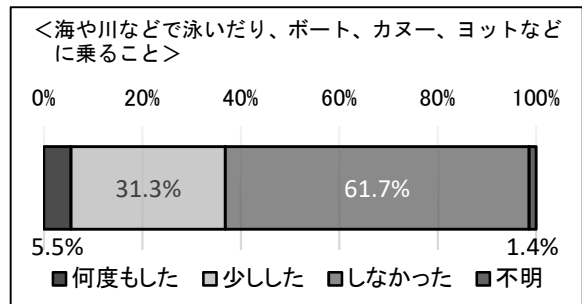
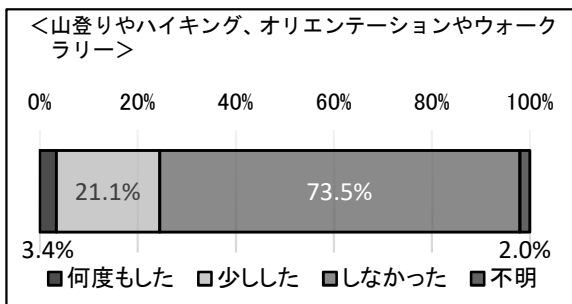


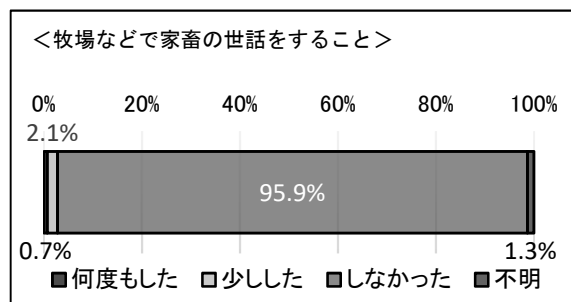
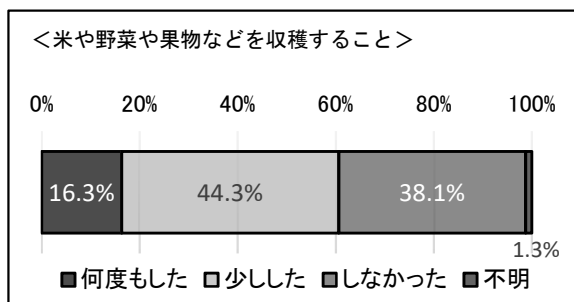
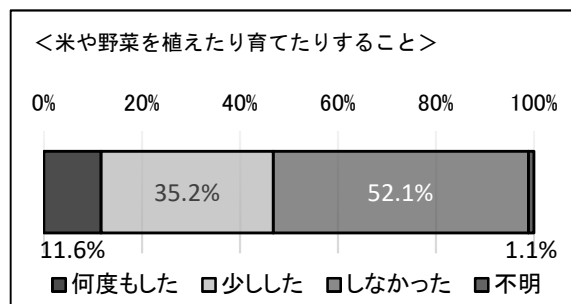
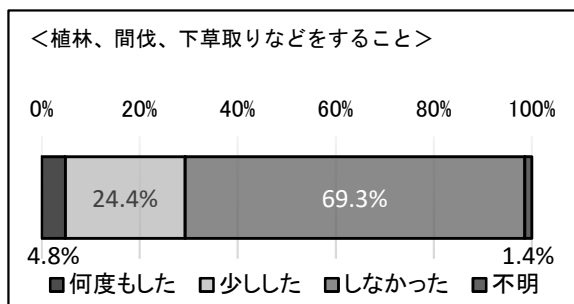
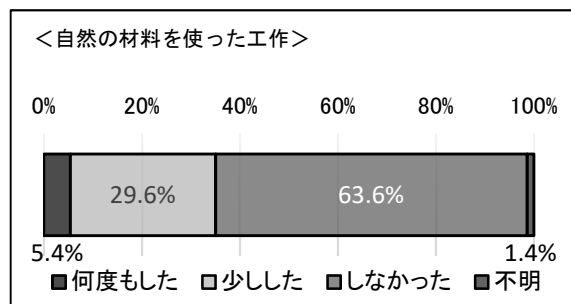
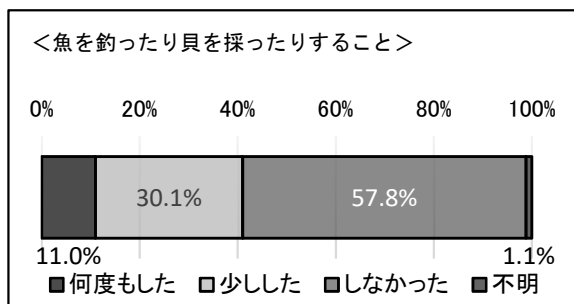
## II 保護者対象調査

### 1 子ども、回答者の属性



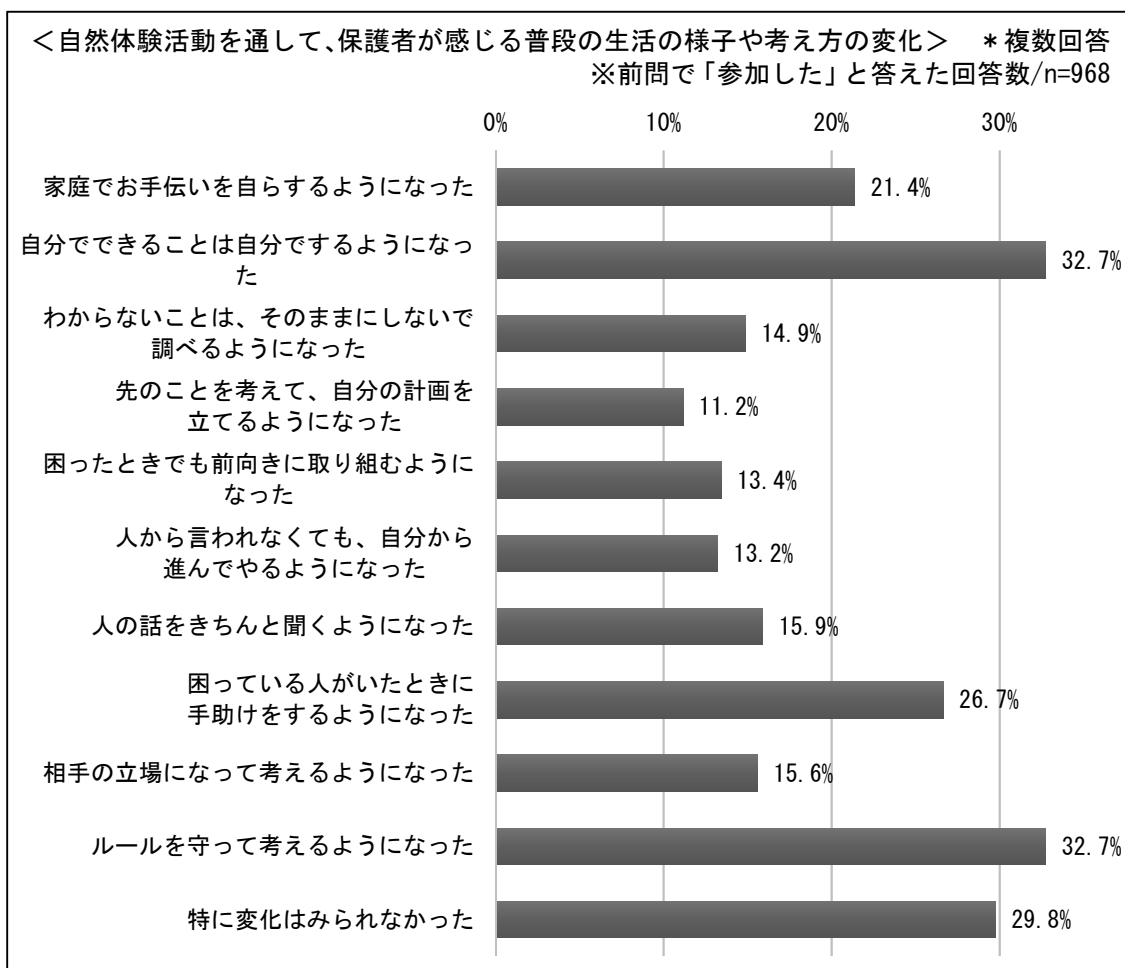
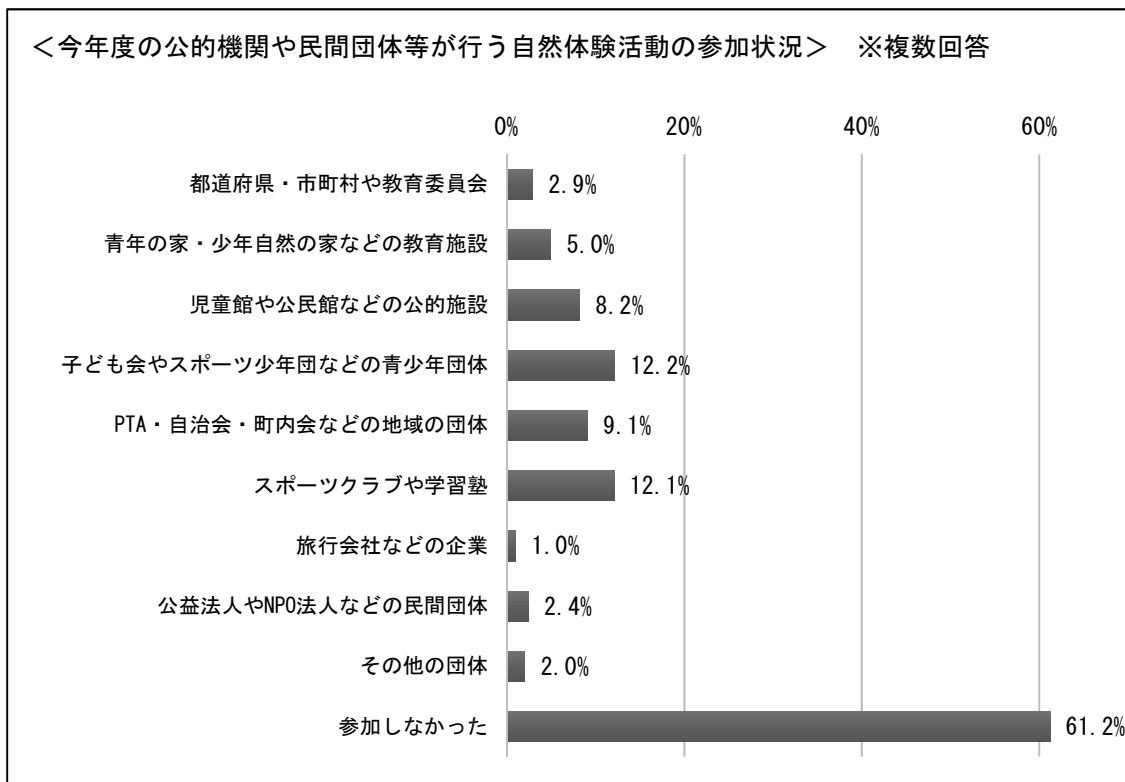
## 2 子どもの体験活動について



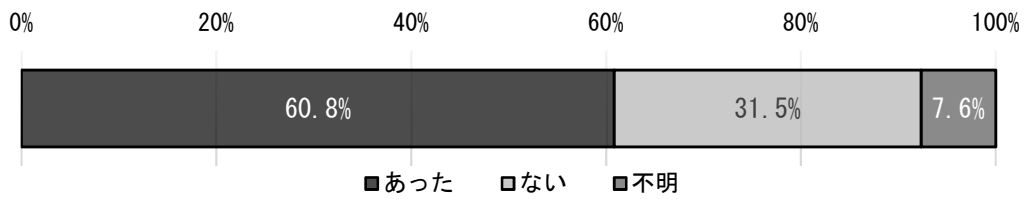


子どもの体験活動について「何度もした」と回答した割合を高い順にみると、「スキーや雪遊びなど雪の中の活動」(28.7%)、「昆虫や水辺の生物をつかまえること」(19.7%)、「米や野菜や果物などを収穫すること」(16.3%)となっている。

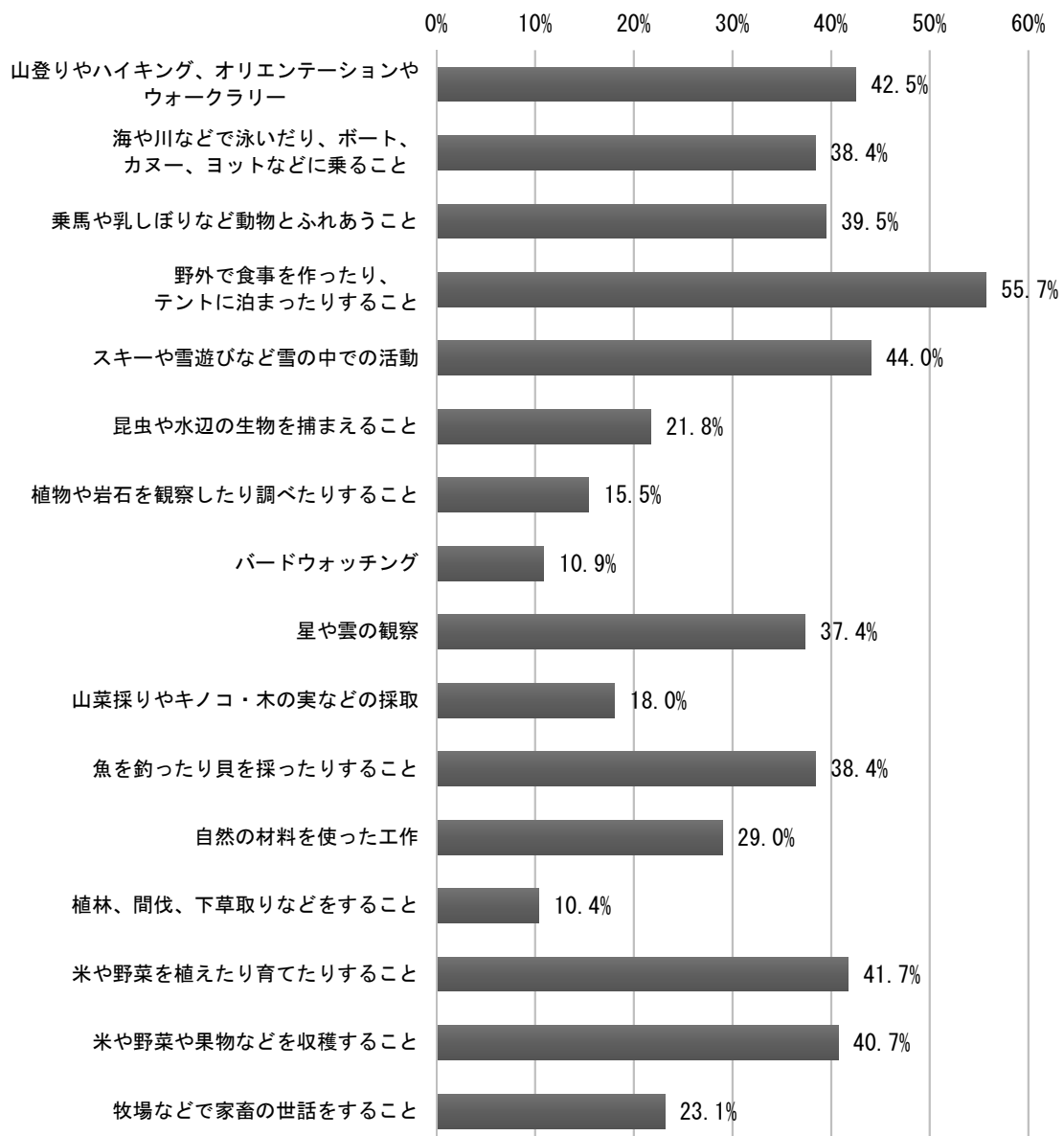
### 3 子どもの体験活動に対する保護者の意識について

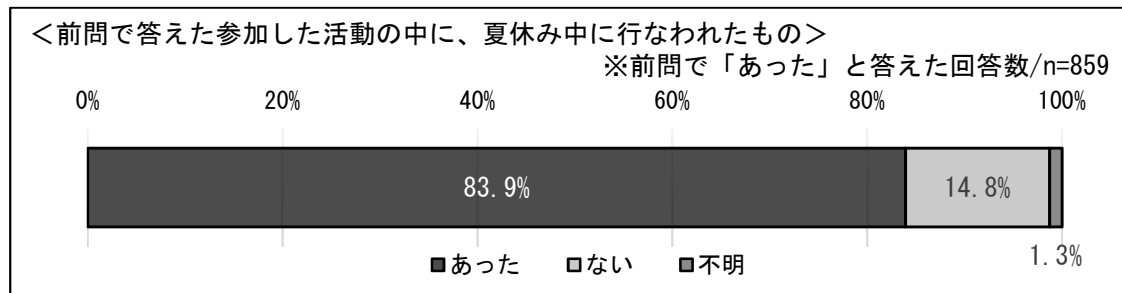
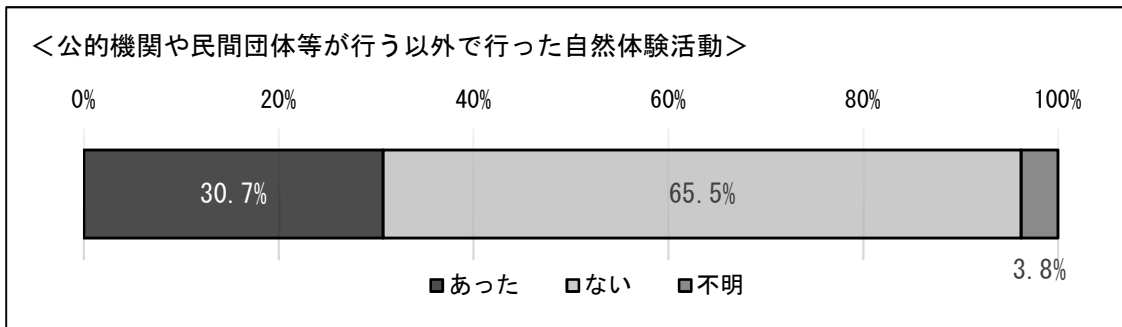


＜前々間で答えた参加した活動の中に、夏休み中に行なわれたもの＞

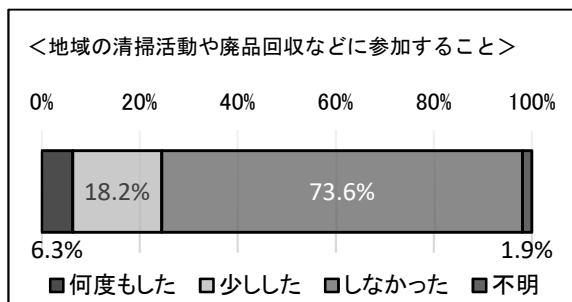
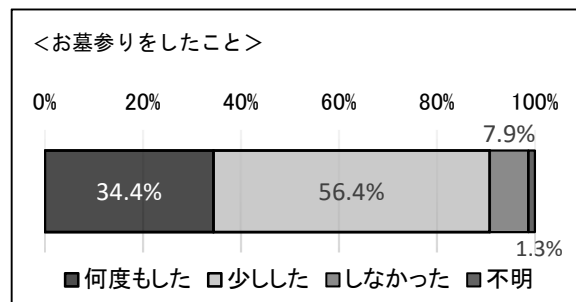
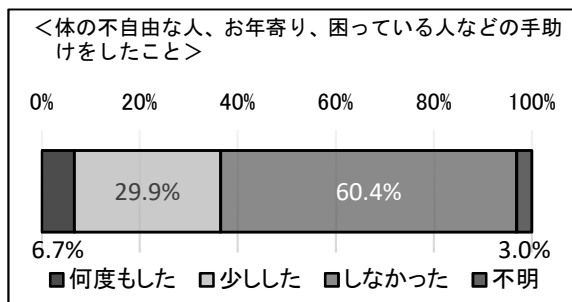
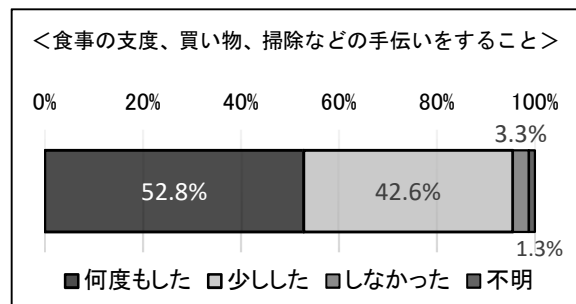
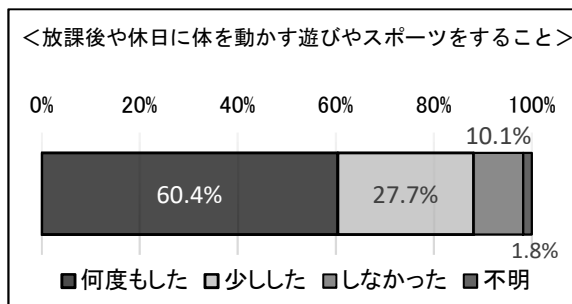


＜保護者が体験させたい自然体験活動＞ ※複数回答

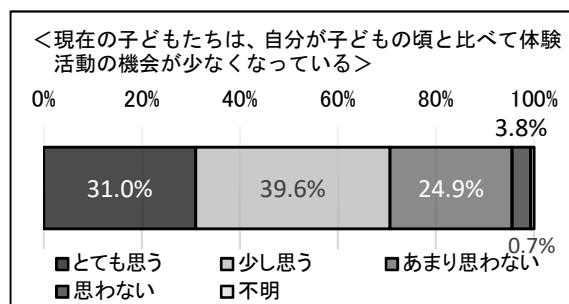
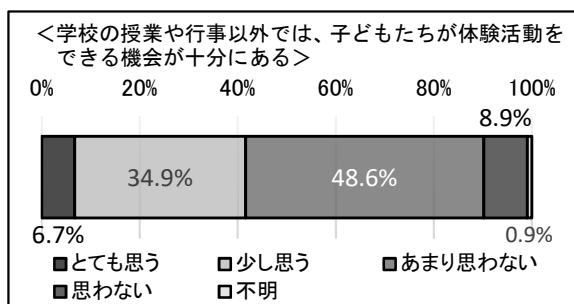
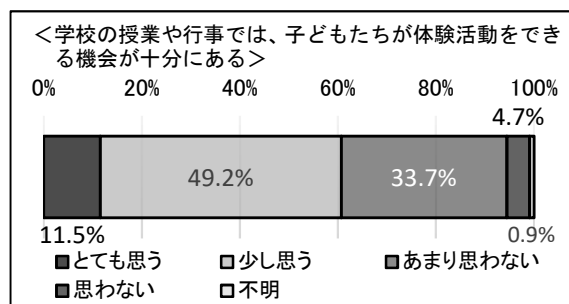
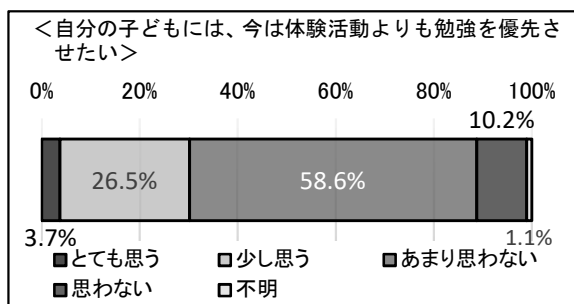




○今年度、子どもが体験したこと



## ○子どもの体験活動に対する意識



「子どもの体験活動に対する保護者の意識」について、「今年度の公的機関や民間団体等が行った自然体験活動」に参加しなかった割合が 61.2%であり、6割以上の児童が参加していない。

「自然体験活動を通して、保護者が感じる普段の生活の変化や考え方の変化」をみると、「自分でできることは自分でするようになった」、「ルールを守って考えるようになった」（どちらも 32.7%）が最も高かった。

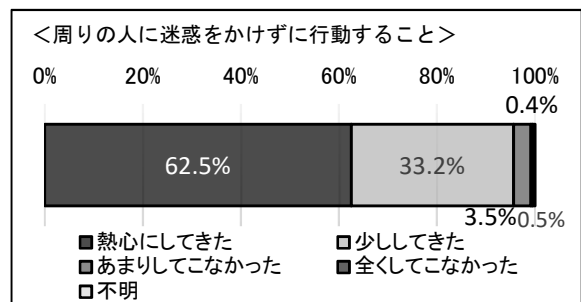
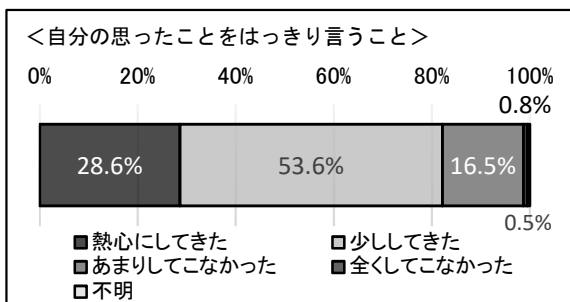
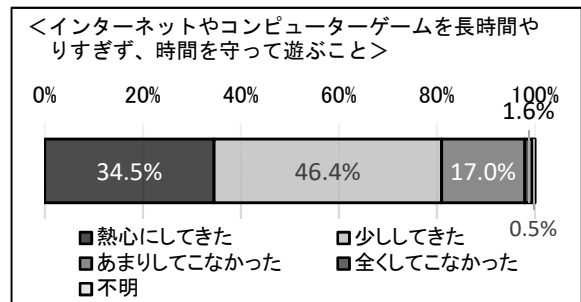
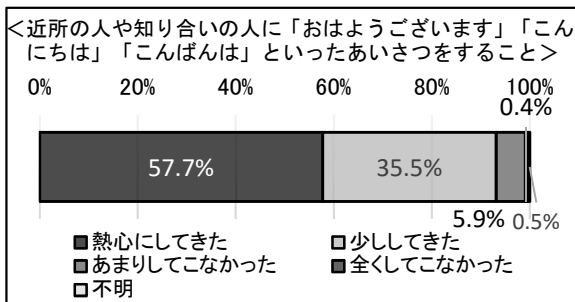
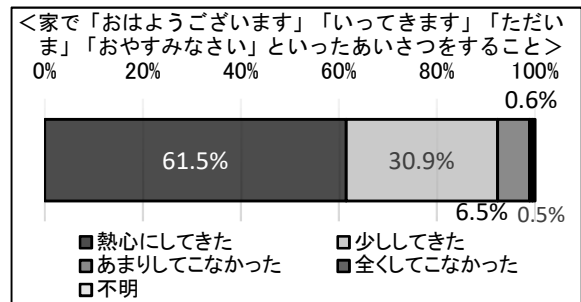
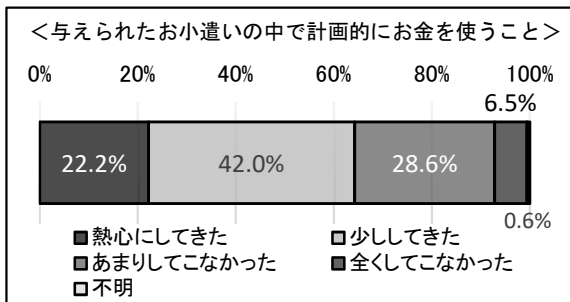
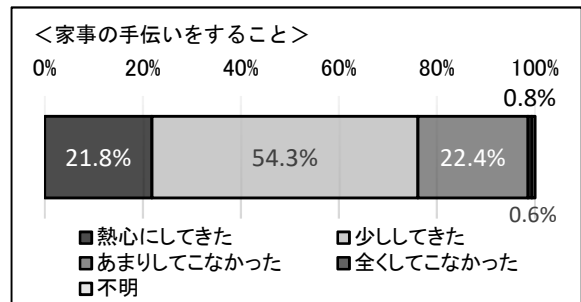
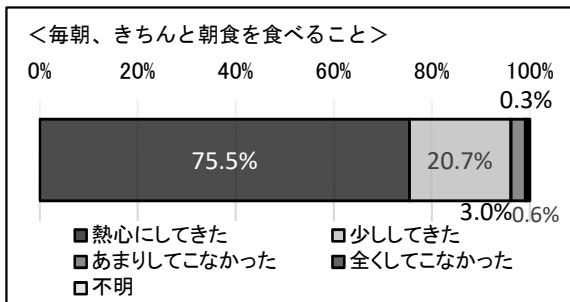
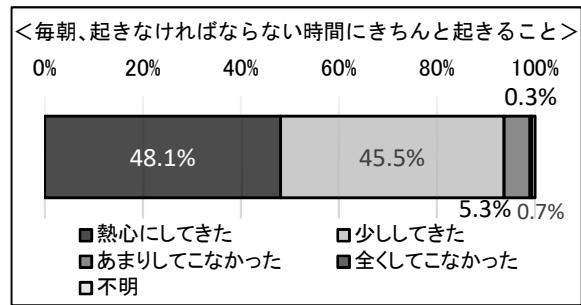
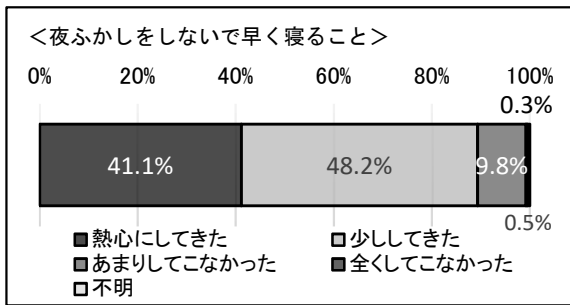
また、「保護者が体験させたい自然体験活動」を高い順にみると、「野外で食事を作ったり、テントに泊まったりすること」（55.7%）、「スキーや雪遊びなど雪の中の活動」（44.0%）、「山登りやハイキング、オリエンテーションやウォークラリー」（42.5%）となっている。

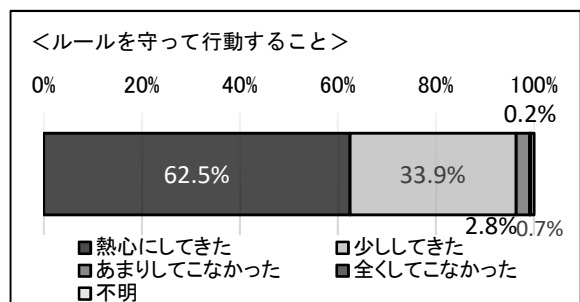
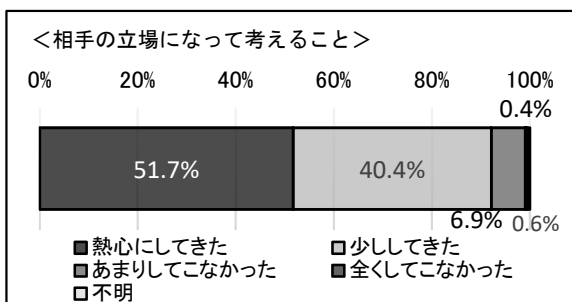
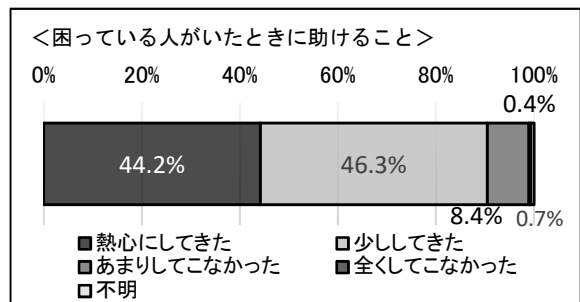
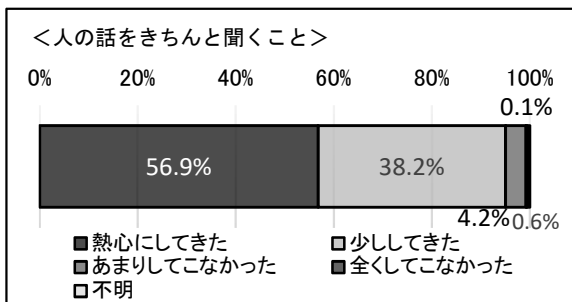
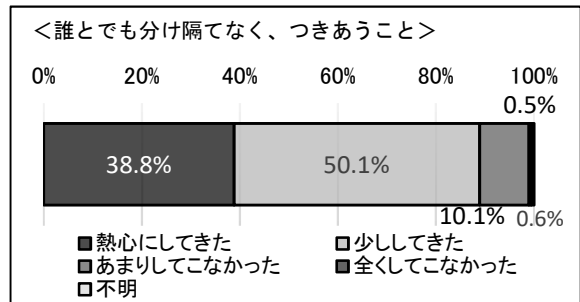
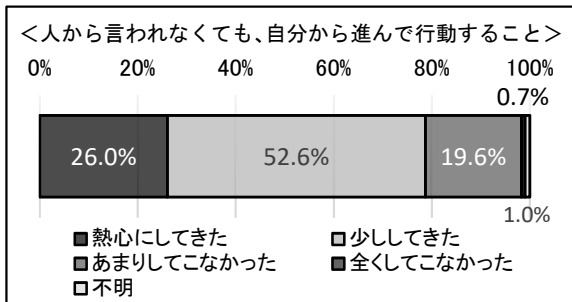
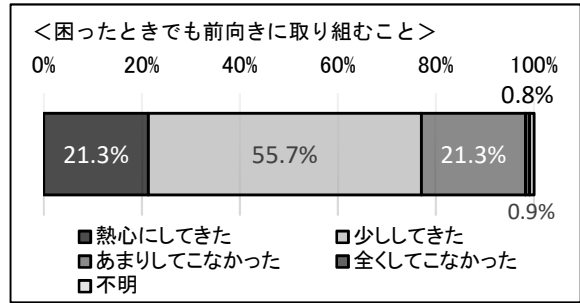
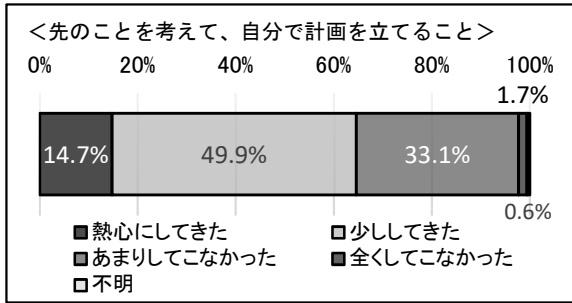
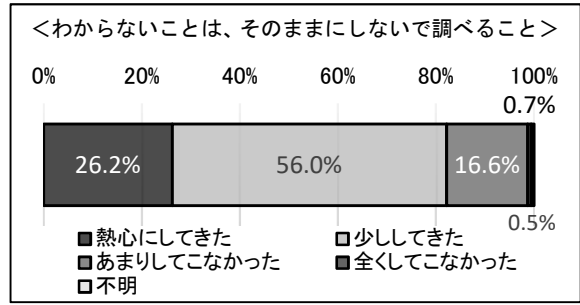
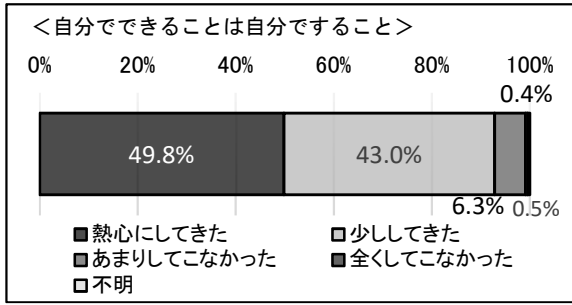
「今年度、子どもが体験したこと」をみると、「何度もした」と回答した割合が最も高かった項目は、「放課後や休日に体を動かす遊びやスポーツをすること」（60.4%）であった。

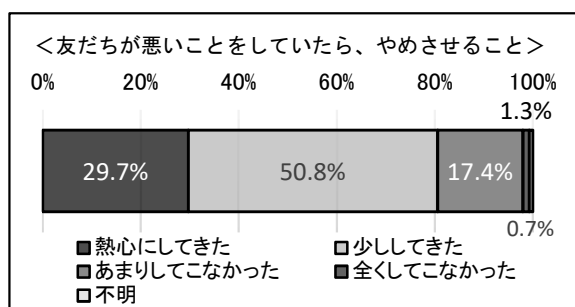
また、「子どもの体験活動に対する意識」をみると、「現在の子どもたちは、自分が子どもの頃と比べて体験活動の機会が少なくなっている」の質問に対し、「とても思う」（31.0%）、「少し思う」（39.6%）と回答した割合を足すと 70.6%であり、7割を超えている。



## 4 子どもの基本的な生活習慣について



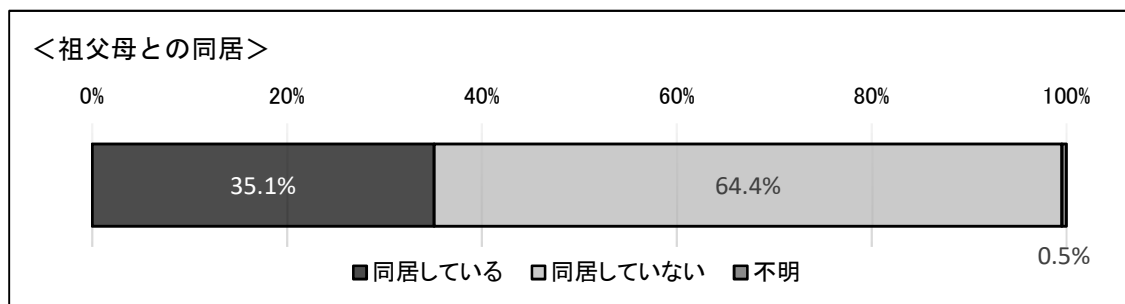
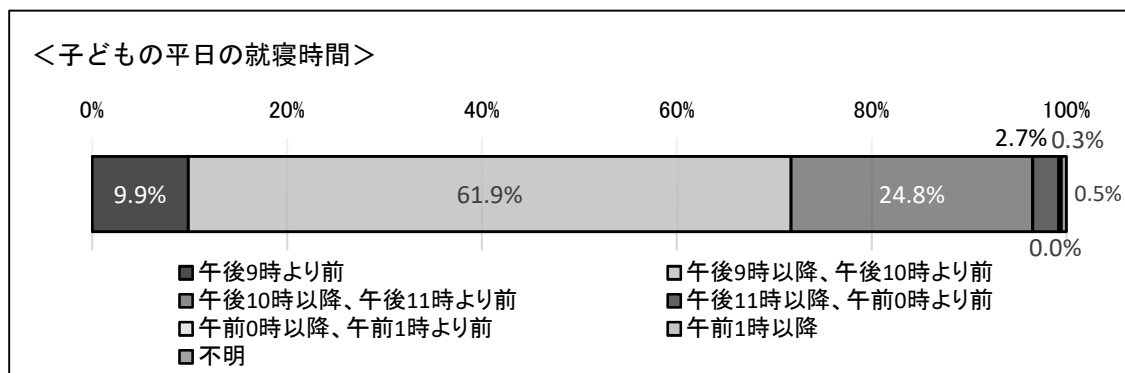
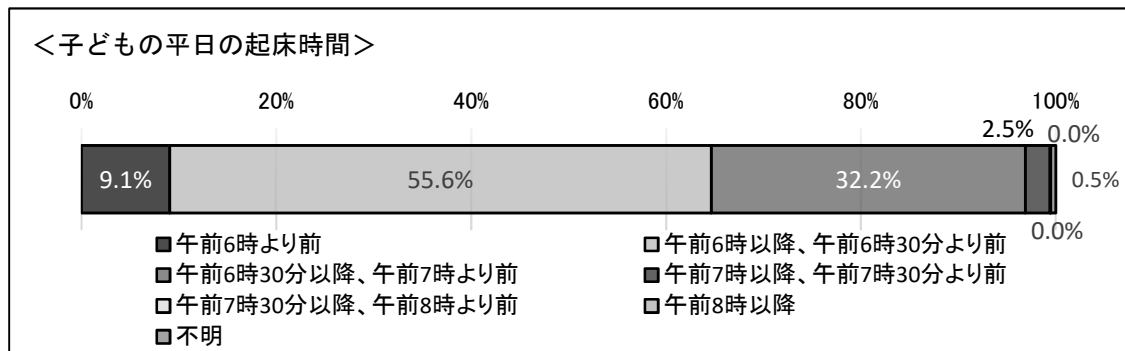
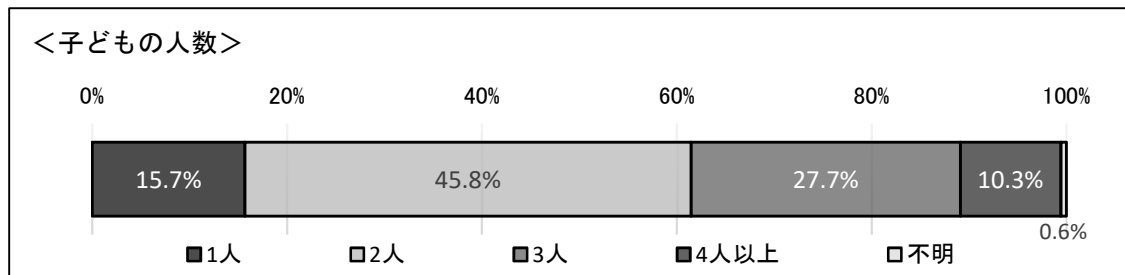




子どもの基本的な生活習慣についてみると、「熱心にしてきた」と回答した割合が高い順にみると、「毎朝、きちんと朝食を食べること」(75.5%)、「周りの人に迷惑をかけずに行動すること」「ルールを守って行動すること」(いずれも62.5%)となっている。

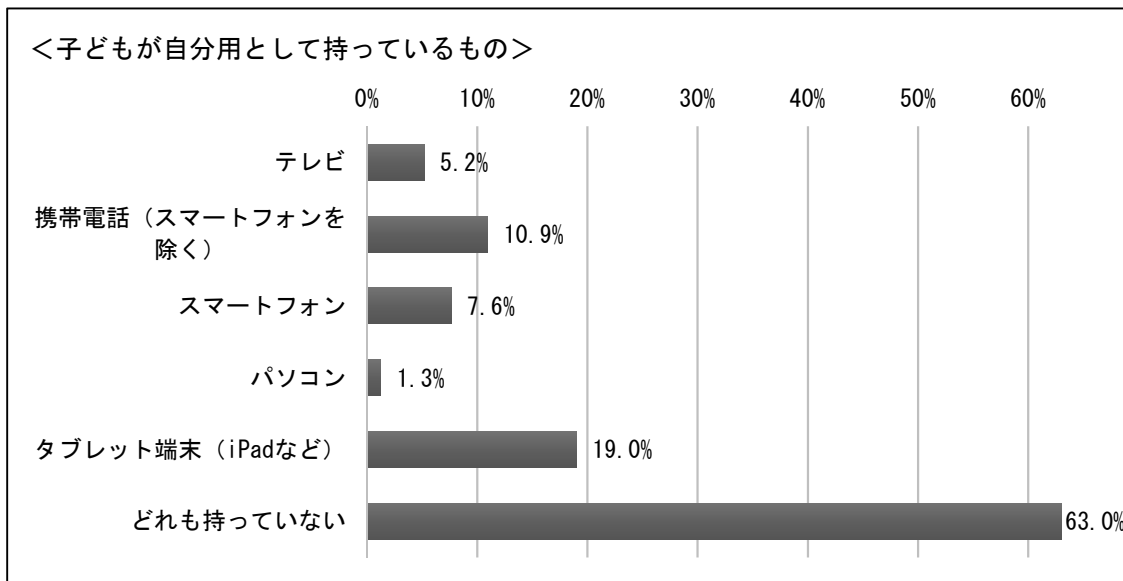
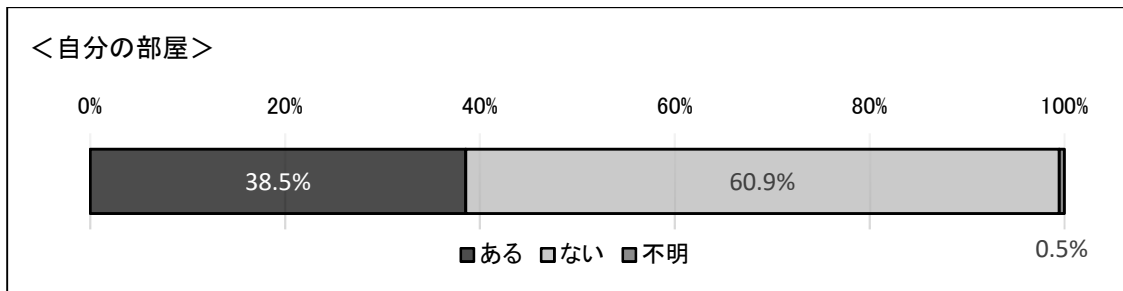
一方、「熱心にしてきた」と回答した割合が低い順にみると、「先のことを考えて、自分で計画を立てること」(14.7%)、「困ったときでも前向きに取り組むこと」(21.3%)、「家事の手伝いをする事」(21.8%)となっている。

## 5 子どもの人数、起床・就寝時間について



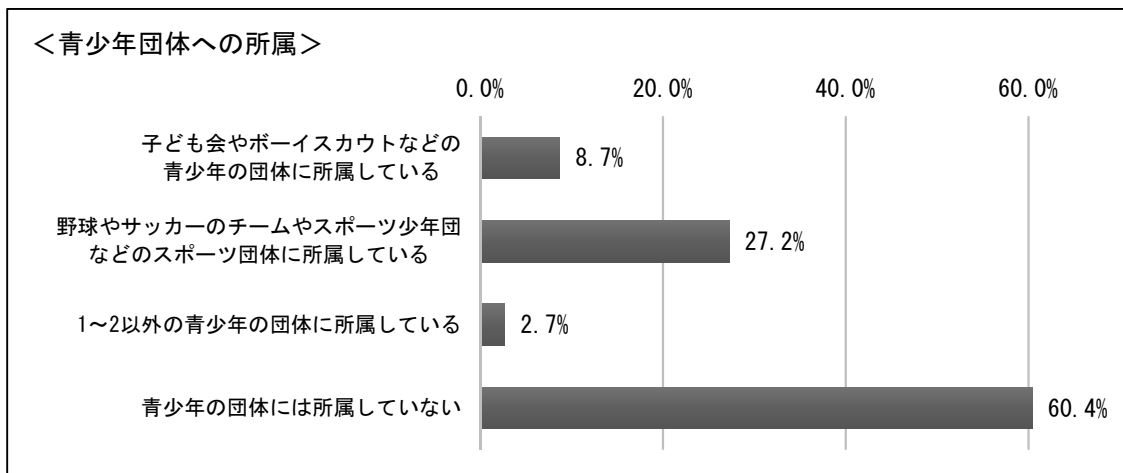
祖父母と同居していない家庭が64.4%であり、核家族が6割以上となっている。

## 6 子どもが自分専用に所有しているもの



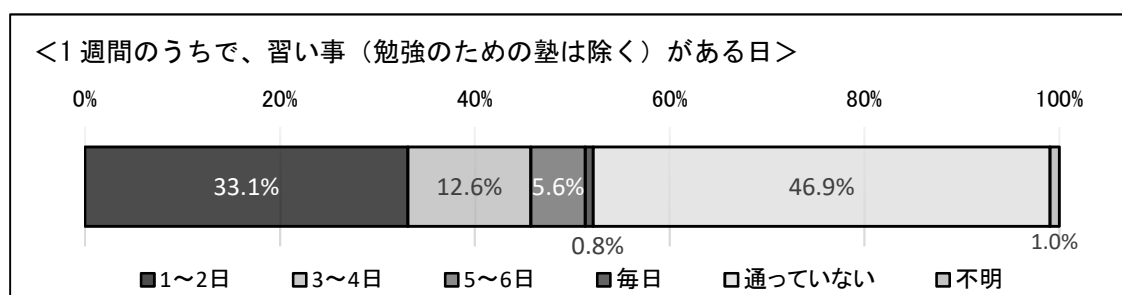
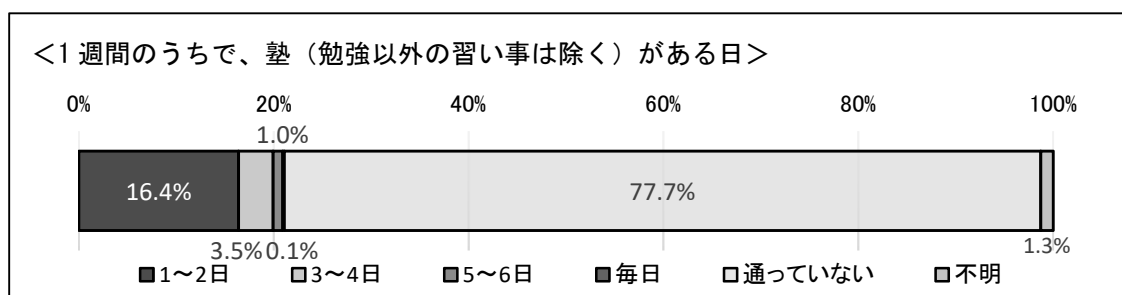
子どもが自分用として持っているものをみると、タブレット端末（iPad など）が最も多く、次いで携帯電話（スマートフォンを除く）となっている。

## 7 子どもの青少年団体の所属について



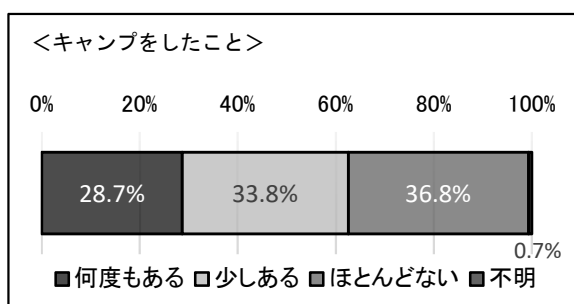
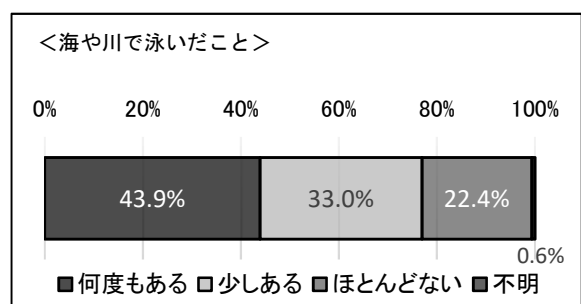
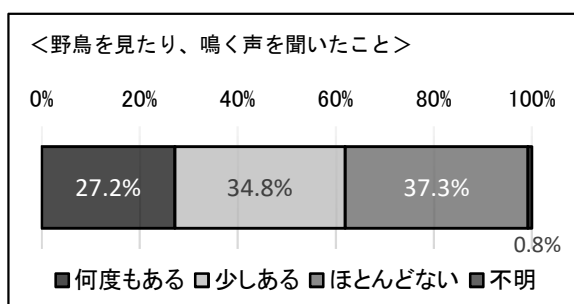
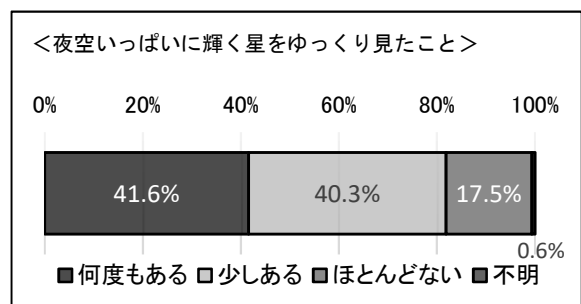
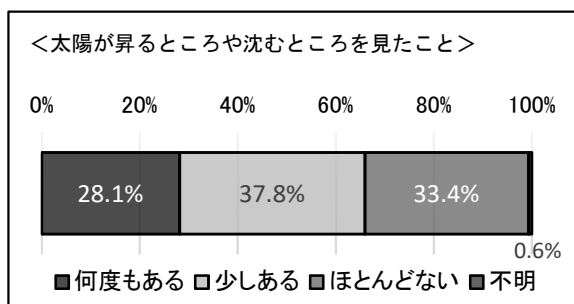
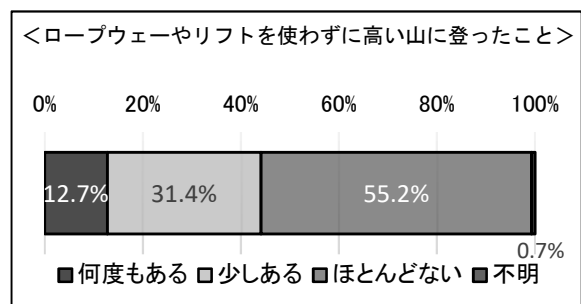
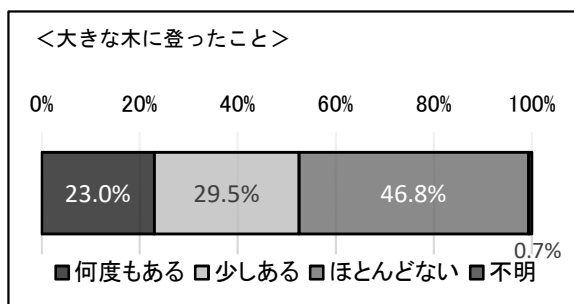
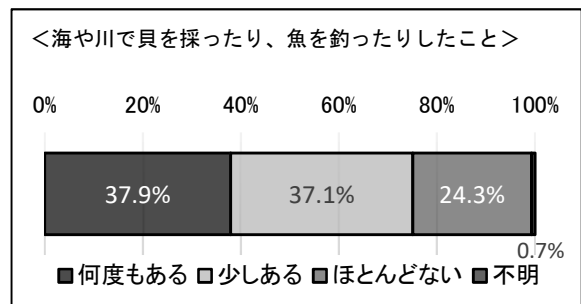
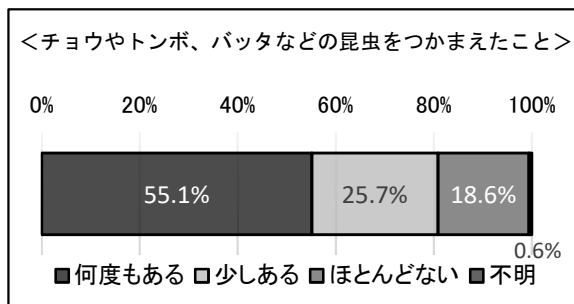
青少年団体に所属していない児童が6割を超えている。

## 8 子どもの塾や習い事について

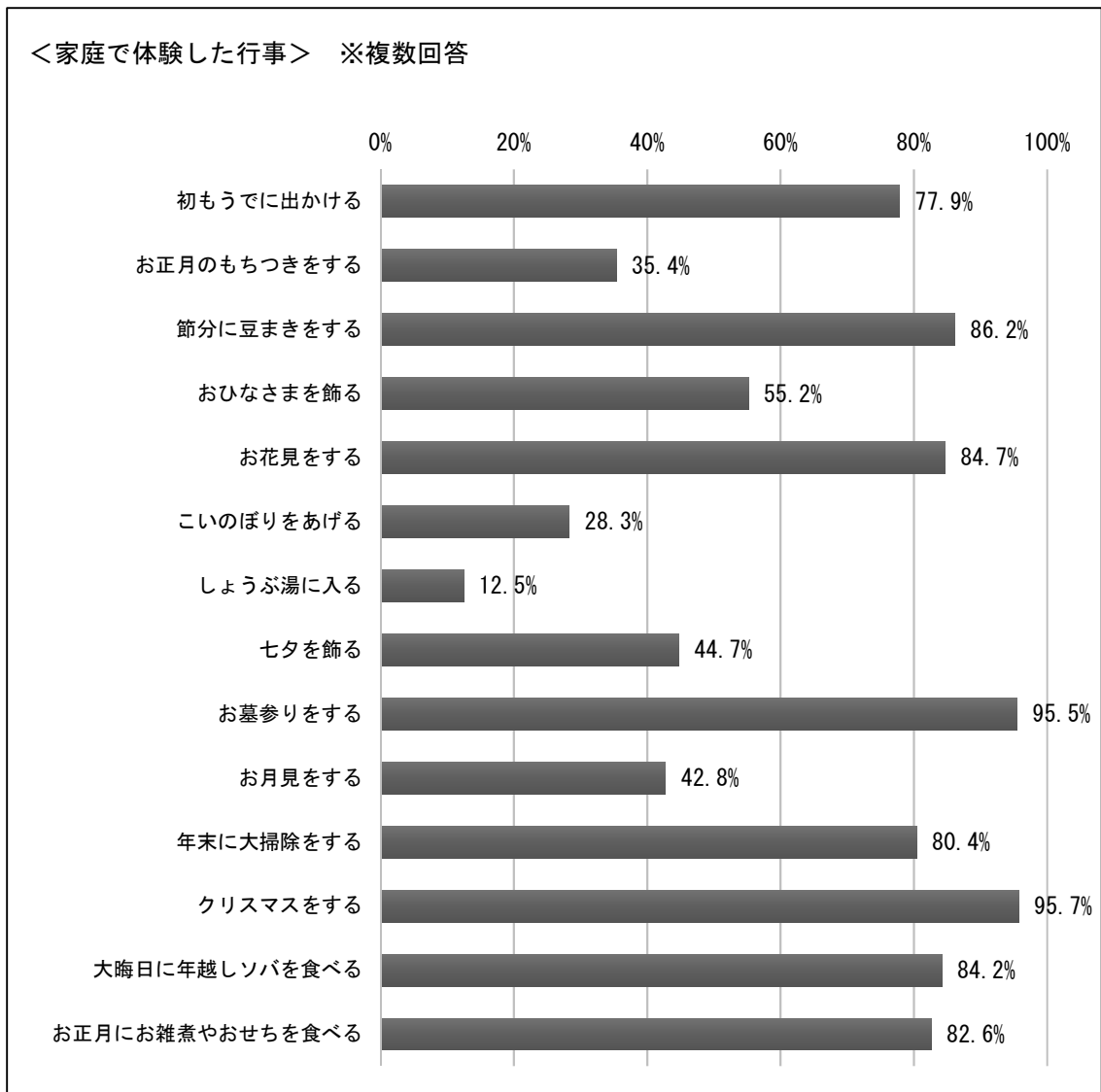


塾（勉強以外の習い事は除く）に通っていない児童は7割を超え、習い事（勉強のための塾は除く）に通っていない生徒は4割を超える。

## 9 保護者の幼少期の体験活動状況について



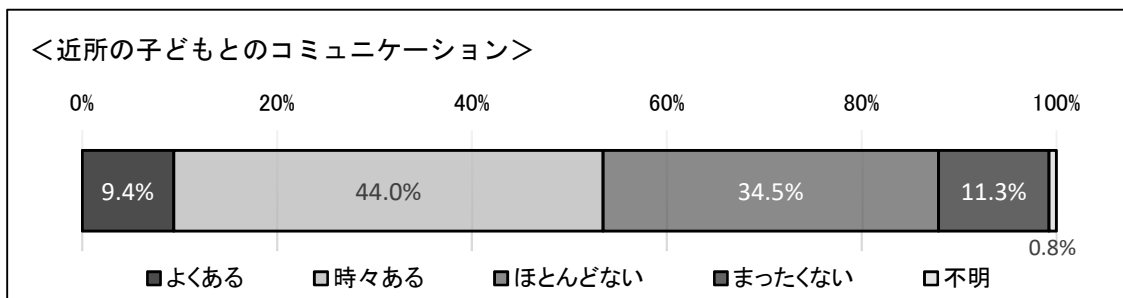
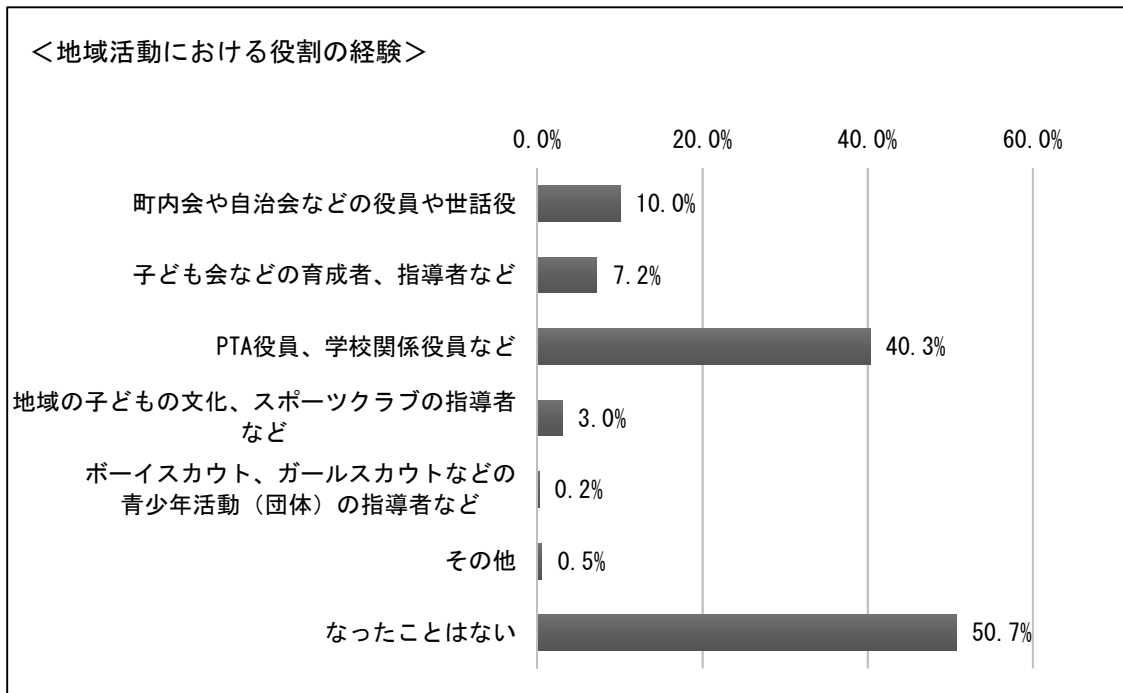




保護者の幼少期の体験活動状況を「何度もある」と回答した割合が高い順にみると、「チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと」(55.1%)、「夜空いっぱいに輝く星をゆっくり見たこと」(41.6%)、「海や川で貝を採ったり、魚を釣ったりしたこと」(37.9%)となっている。

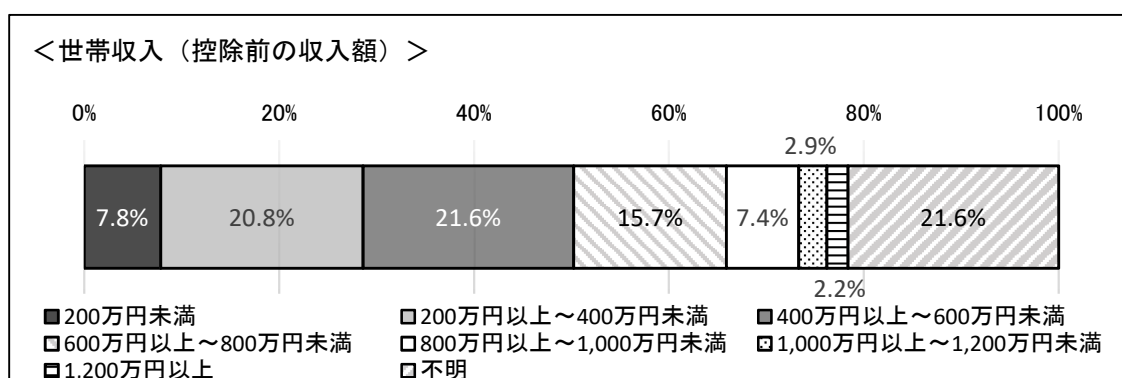
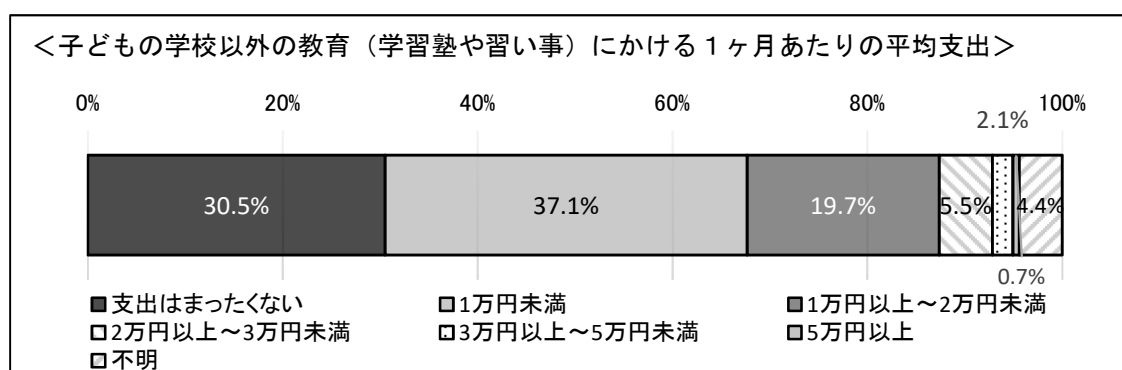
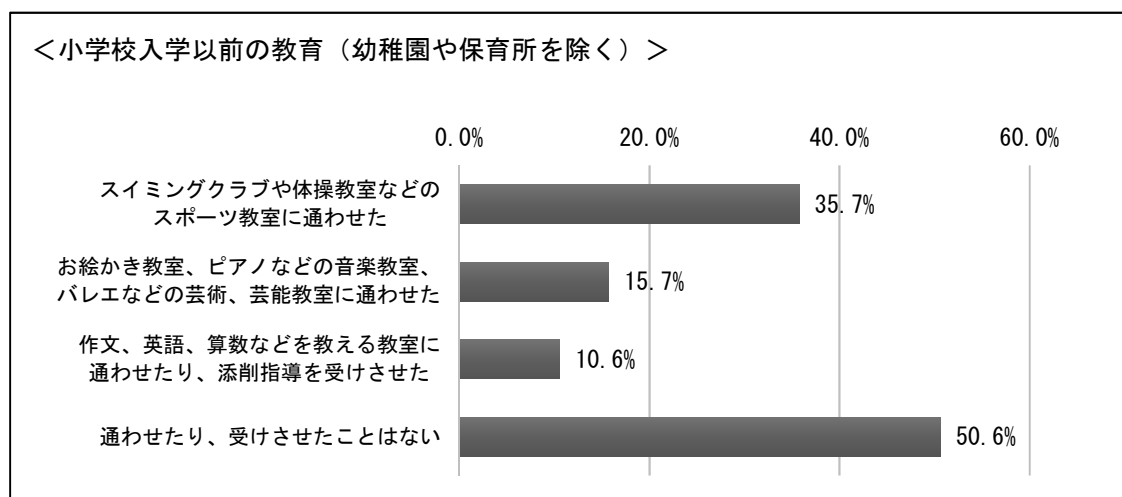
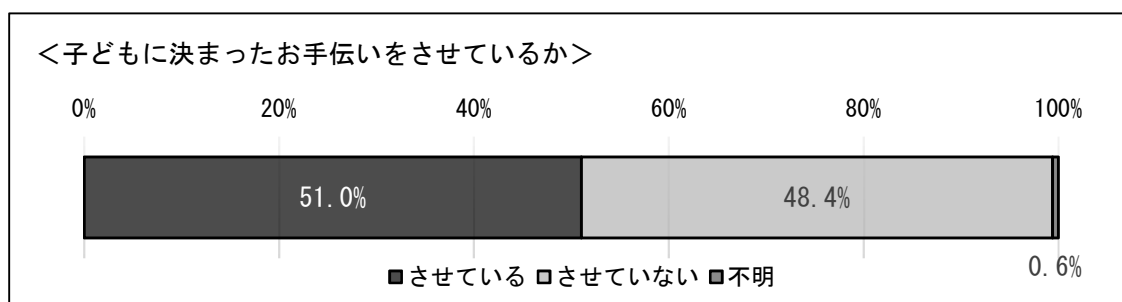
また、家庭で体験した行事を割合が高い順にみると、「クリスマスをする」(95.7%)、「お墓参りをする」(95.5%)、「節分に豆まきをする」(86.2%)となっている。

## 10 保護者の地域との関わりについて



保護者の地域との関わりについて、「地域活動における役割の経験」をみると、「PTA役員、学校関係役員など」（40.3%）が最も高くなっている。

## 11 子どもの学校外の教育、世帯収入について



子どもの学校外の教育をみると、「子どもに決まったお手伝い」をさせている家庭と、させていない家庭は、ほぼ同じ割合であった。また、小学校入学以前の教育に関しては、「通わせたり、受けさせたことはない」と回答した割合が6割を超えている。



### 第3章 全国調査との比較

#### 1 青少年の体験活動等に関する実態調査について

##### (1) 調査機関

国立青少年教育振興機構

##### (2) 調査の名称

青少年の体験活動に関する実態調査

##### (3) 調査の目的

青少年教育関係者が実施する事業の企画立案、運営等に資するため、青少年の体験活動等や自立に関する意識等の実態について全国規模の調査を実施し、基礎資料を提供する。

##### (4) 調査内容

###### <子ども調査>

- ・自然体験・生活体験・お手伝いの実態
- ・生活習慣等の実態
- ・自立に関する意識・行動
- ・生活環境・メディア接触
- ・携帯電話・スマートフォンの使用

###### <保護者調査>

- ・子どもの自然体験の実態
- ・子どもの体験活動に対する意識
- ・保護者の子どもへのしつけや教育等に関する実態
- ・保護者の自然体験の実態
- ・子どもの教育費や世帯収入 他

##### (5) 調査対象

- ・全国の公立小学校1年生・2年生・3年生の保護者
- ・全国の公立小学校4年生・5年生・6年生とその保護者
- ・全国の公立中学校2年生
- ・全国の公立全日制高等学校2年生

##### (6) 調査実施時期

平成27年2月～3月

##### (7) 回収数

学校種別	学年	子ども用		保護者用	
		回収数	回収率	回収数	回収率
小学校	1年			2,407	84.6%
	2年			2,507	87.3%
	3年			2,750	92.0%
	4年	2,705	87.7%	2,692	87.3%
	5年	2,788	88.5%	2,776	88.1%
	6年	2,726	89.6%	2,722	89.5%
中学校	2年	4,493	87.4%		
高等学校	2年	5,319	94.2%		
計		18,031	89.9%	15,854	88.1%

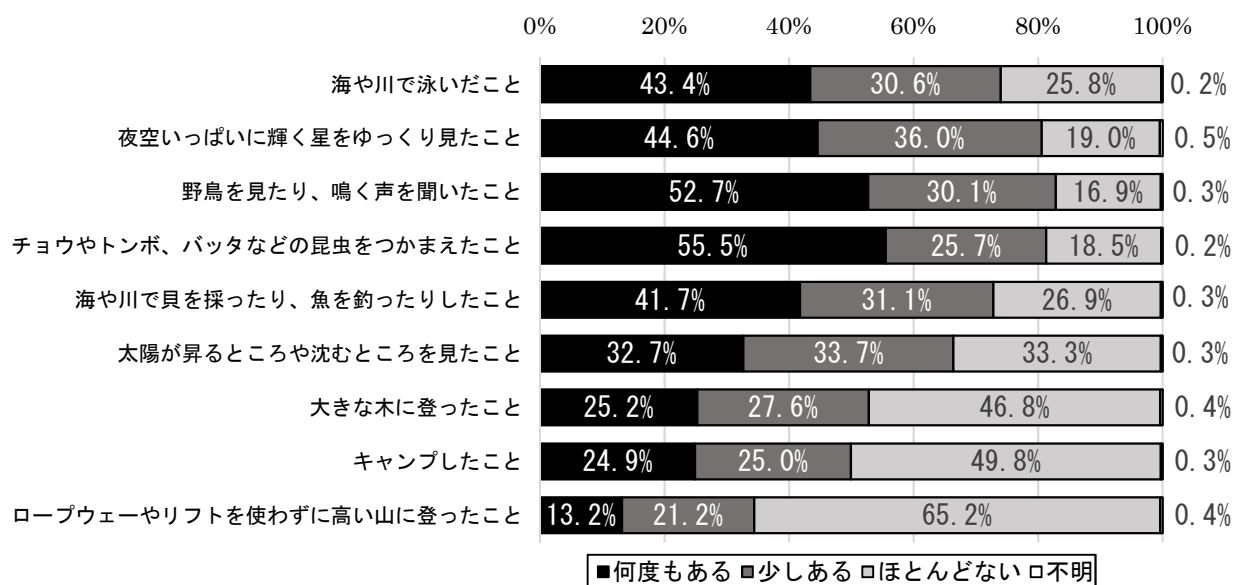
## 2 青少年の体験活動

### (1) 自然体験（小4、中2、高2）

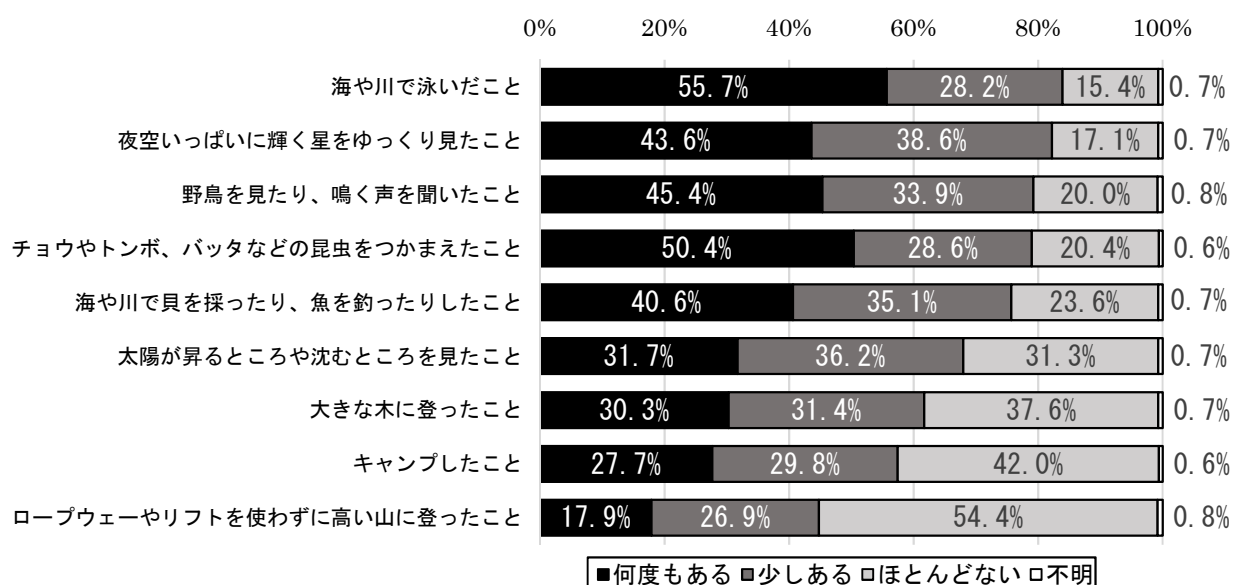
自然体験活動に関する項目（P5～7参照）に対して、「何度もある」「少しある」と答えた割合の合計を見ると、青森県の割合は全国の割合に比べて高かった項目は、「野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと」（3.5ポイント増）や「チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと」（2.2ポイント増）となっている。

一方、全国の割合と比べて特に低かった項目は、「ロープウェイやリフトを使わずに高い山に登ったこと」（10.4ポイント減）、「海や川で泳いだこと」（9.9ポイント減）、「大きな木に登ったこと」（8.9ポイント減）となっている。

#### 自然体験活動の項目別現状（青森県）



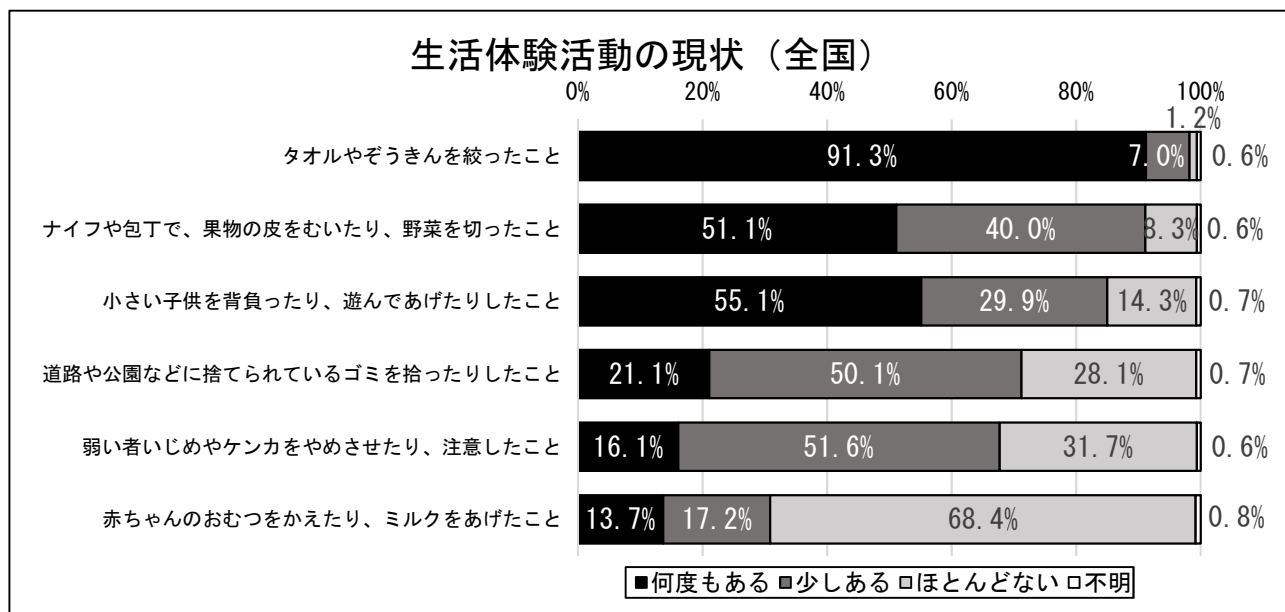
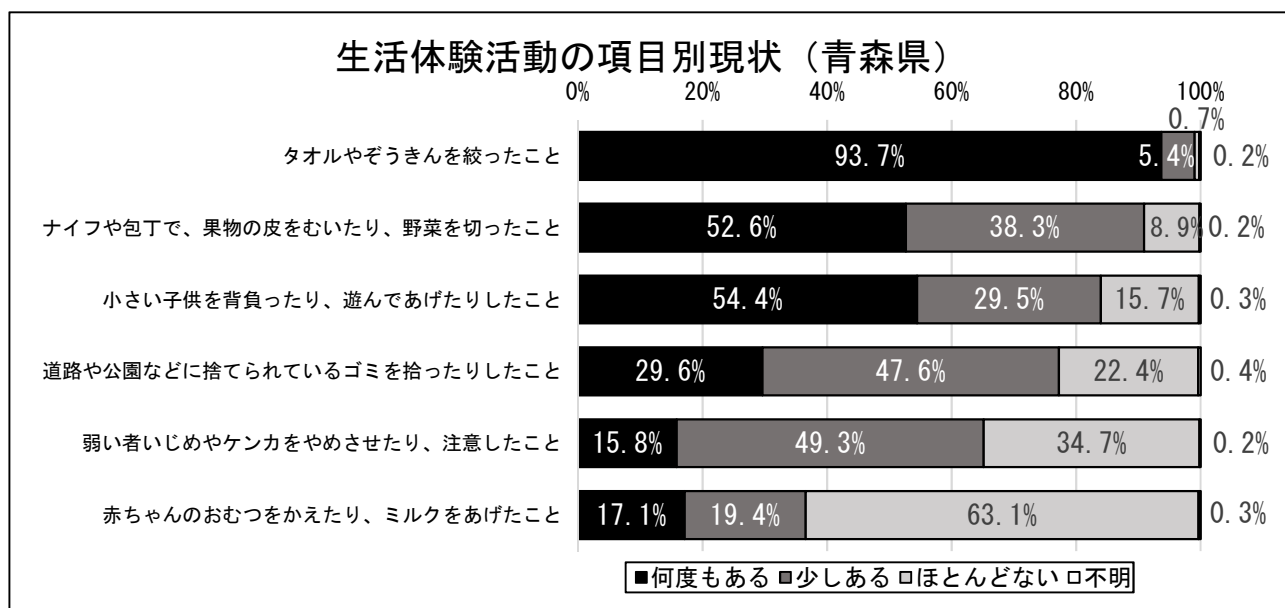
#### 自然体験活動の項目別現状（全国）



## (2) 生活体験（小4、中2、高2）

生活体験活動に関する項目（P3～4参照）に対して、「何度もある」「少しある」と答えた割合の合計を見ると、青森県の割合は全国の割合に比べて高かった項目は、「道路や公園などに捨てられているゴミを拾ったりしたこと」（6.3ポイント増）、「赤ちゃんのおむつをかえたり、ミルクをあげたこと」（5.6ポイント増）、「タオルやぞうきを絞ったこと」（0.8ポイント増）、「ナイフや包丁で、果物の皮をむいたり、野菜を切ったこと」（0.2ポイント増）となっている。

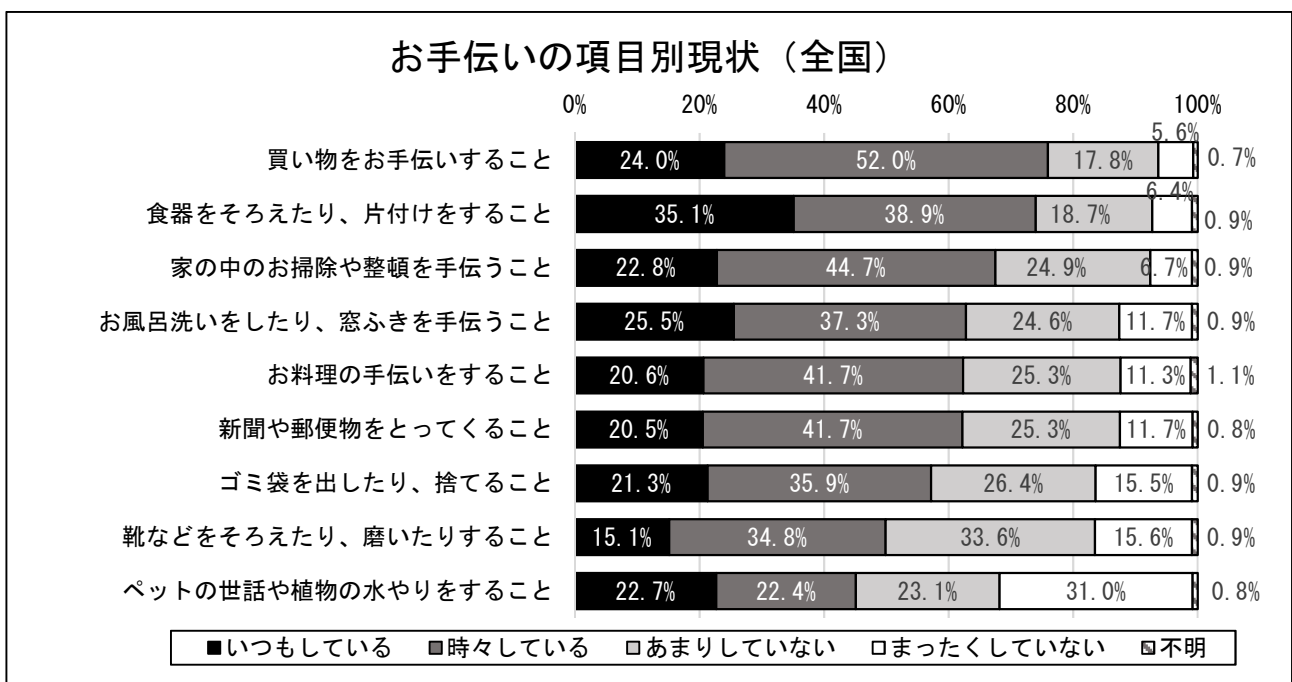
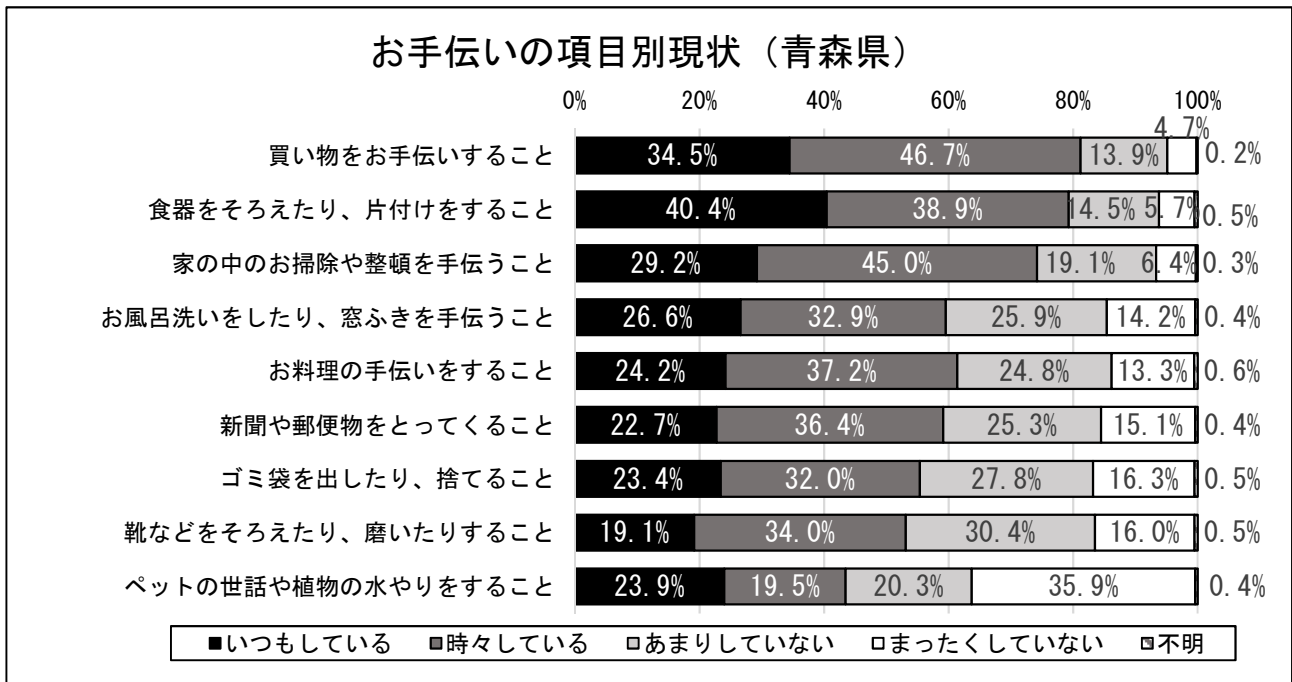
一方、全国の割合と比べて低かった項目は、「弱い者いじめやケンカをやめさせたり、注意したこと」（1.6ポイント減）、小さい子どもを背負ったり、遊んであげたりしたこと（1.1ポイント減）となっている。



### (3) お手伝い（小4、中2、高2）

お手伝いに関する項目（P8～10参照）に対して、「何度もある」「少しある」と答えた割合の合計を見ると、青森県の割合が全国の割合に比べて高かった項目は、「家の中のお掃除や整頓を手伝うこと」（6.7ポイント増）、「食器をそろえたり、片付けをすること」（5.3ポイント増）、「買い物をお手伝いすること」（5.2ポイント増）、「靴などをそろえたり、磨いたりすること」（3.2ポイント増）となっている。

一方、全国の割合と比べて低かった項目は、「お風呂洗いをしたり、窓ふきを手伝うこと」（3.3ポイント減）、「新聞や郵便物をとってくること」（3.1ポイント減）、「ゴミ袋を出したり、捨てること」（1.8ポイント減）、「ペットの世話や植物の水やりをすること」（1.6ポイント減）、「お料理の手伝いをすること」（0.9ポイント減）となっている。



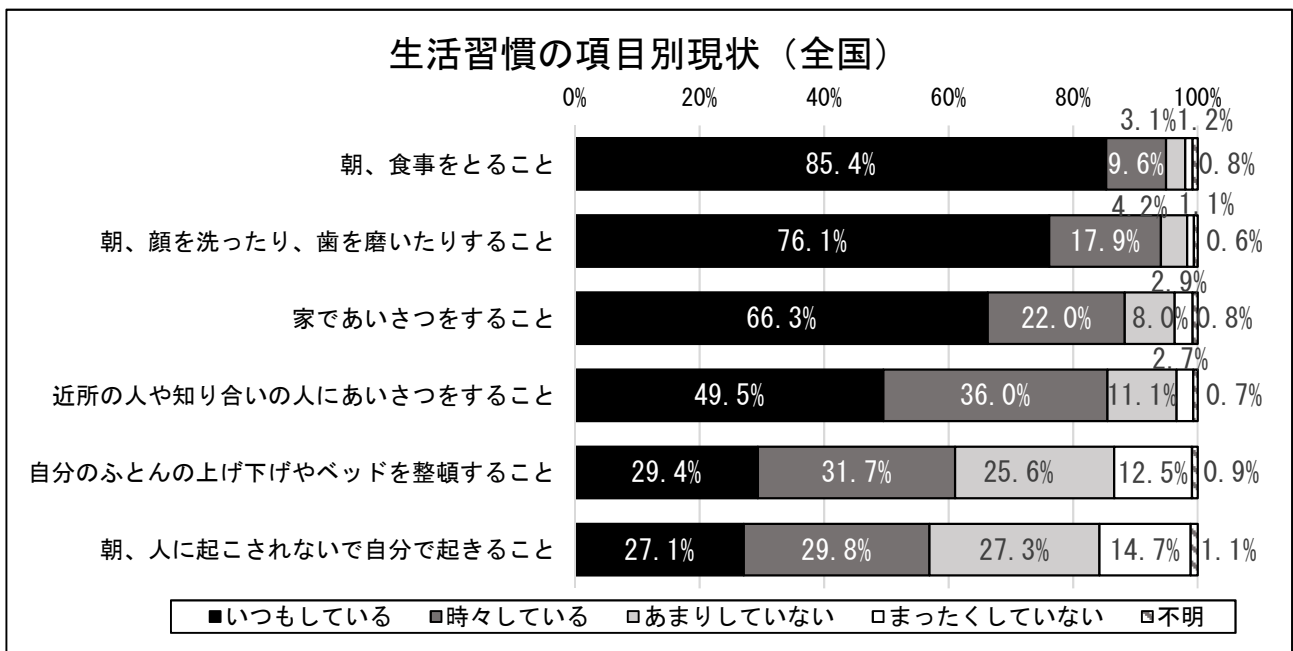
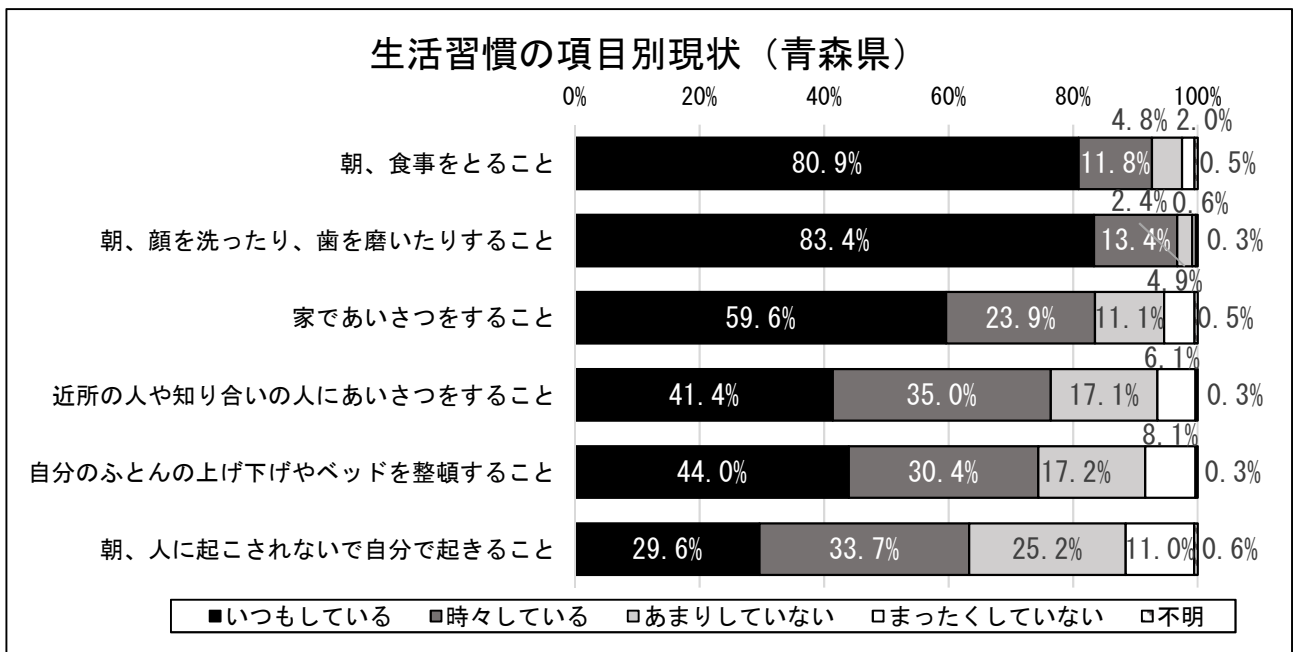


(4) 生活習慣

① 生活習慣（小4、中2、高2）

生活習慣に関する項目（P11～12参照）に対して、「何度もある」「少しある」と答えた割合の合計を見ると、青森県の割合は全国の割合に比べて高かった項目は、「自分のふとんの上げ下げやベッドを整頓すること」（13.3ポイント増）、「朝、人に起こされないうで自分で起きること」（6.4ポイント増）、「朝、顔を洗ったり、歯を磨いたりすること」（2.7ポイント増）となっている。

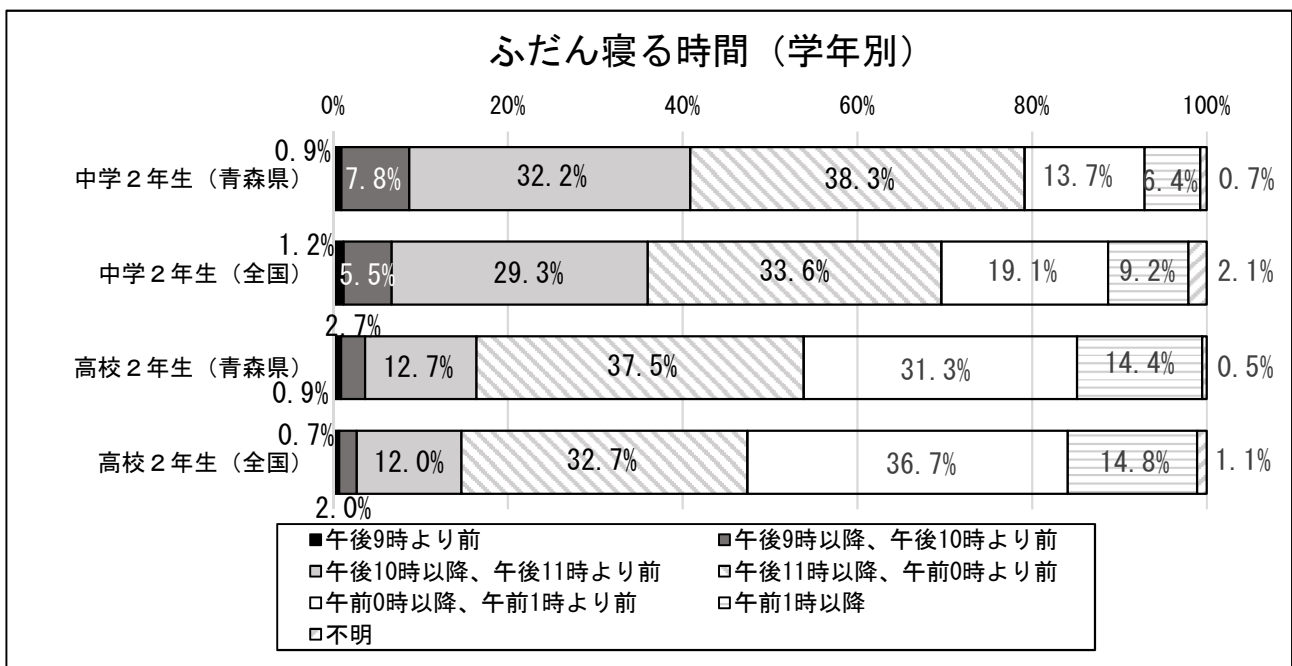
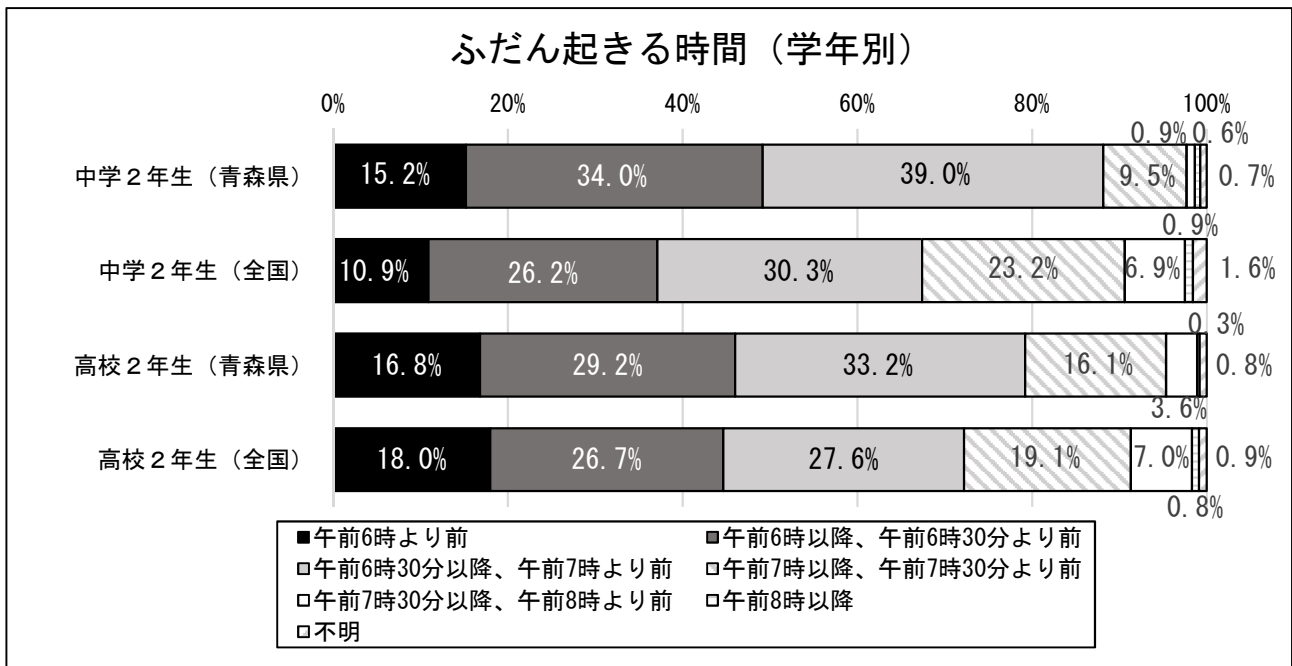
一方、全国の割合と比べて低かった項目は、「近所の人や知り合いの人にあいさつをすること」（9.1ポイント減）、「家であいさつをすること」（4.8ポイント減）、「朝、食事をとること」（2.3ポイント減）となっている。



② ふだん起きる時間・ふだん寝る時間（中2、高2）

ふだん起きる時間（P27参照）を学年別にみると、青森県、全国のいずれも「午前6時30分以降、午前7時より前」と回答する割合が最も高かった。いずれの学年も青森県は全国に比べ、「午前6時より前」と「午前6時以降、午前6時30分より前」と答えた者の割合の合計が高く、起きる時間が全国に比べ、早い傾向が見られる。

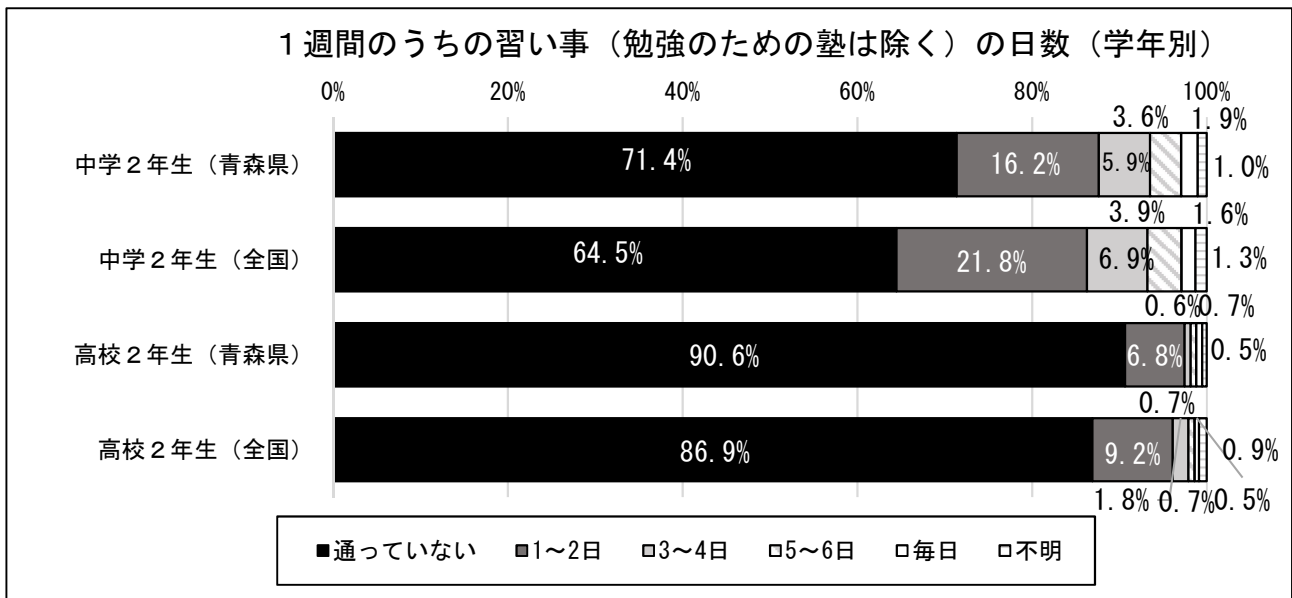
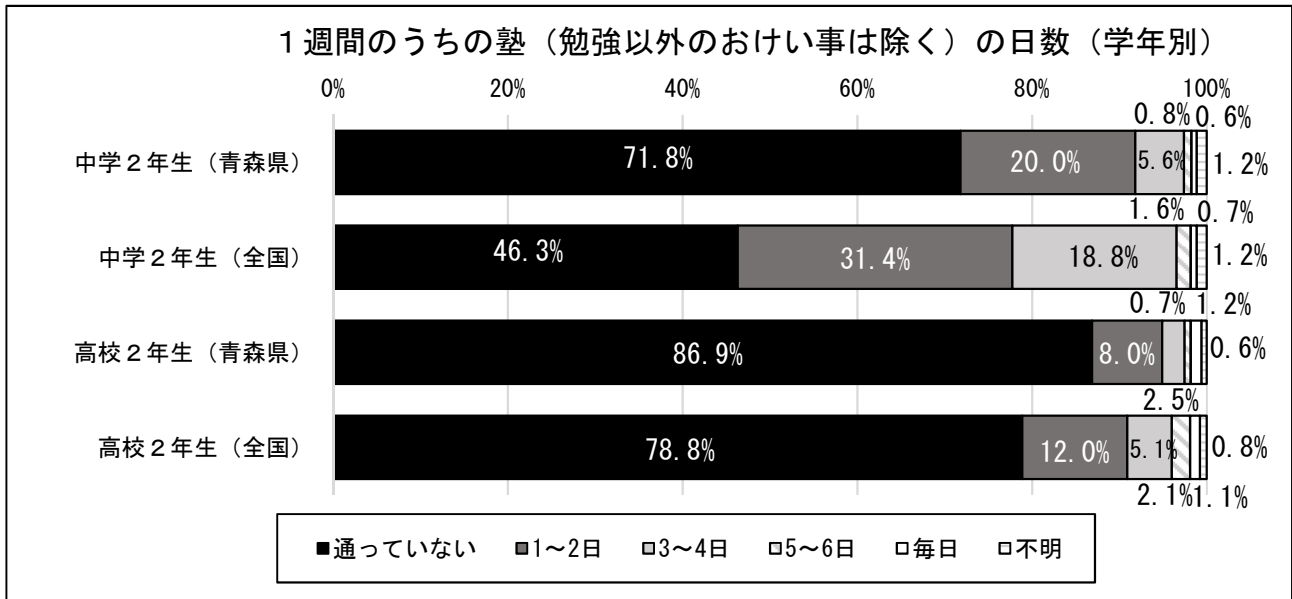
ふだん寝る時間を学年別にみると、青森県、全国の中学2年生、青森県の高校2年生は「午後11時以降、午前0時より前」の割合が最も高く、全国の高校2年生は「午前0時以降、午前1時より前」が最も高い。青森県は全国と比べると、いずれの学年も「午前0時より前」に寝る者の割合が高い。



### ③ 塾・習い事（中2、高2）

1週間のうちの塾（勉強以外のおけい事は除く）の日数（P34参照）を学年別にみると、青森県、全国のいずれも「通っていない」と回答する割合が最も高かった。特に中学2年生をみると、青森県は全国に比べ、「通っていない」と答えた者の割合が25.5ポイント増であった。

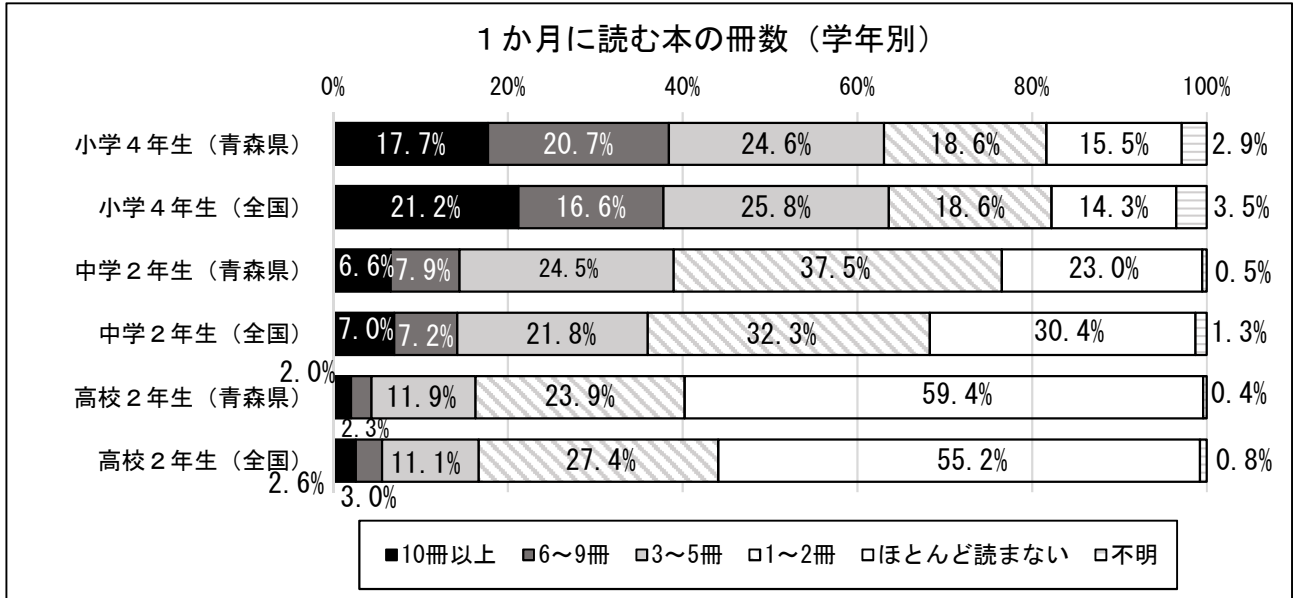
1週間のうちの習い事（勉強のための塾は除く）の日数を学年別にみると、青森県、全国のいずれも「通っていない」と回答する割合が最も高かった。青森県のいずれの学年も「通っていない」と「1～2日」を足した割合は全国の割合と比べるとあまり大きな差はみられない。



④ 読書活動（小4、中2、高2）

1か月に読む本（P27参照）を学年別にみると、学年が上がるにつれて読む本の冊数は減少し、高校生になると「ほとんど読まない」と回答した割合が、青森県、全国ともに5割以上になっている。

特に青森県の高校2年生は「ほとんど読まない」と回答した者が6割弱であり、全国と比べても4.2ポイント増となっている。



### 3 青少年の意識

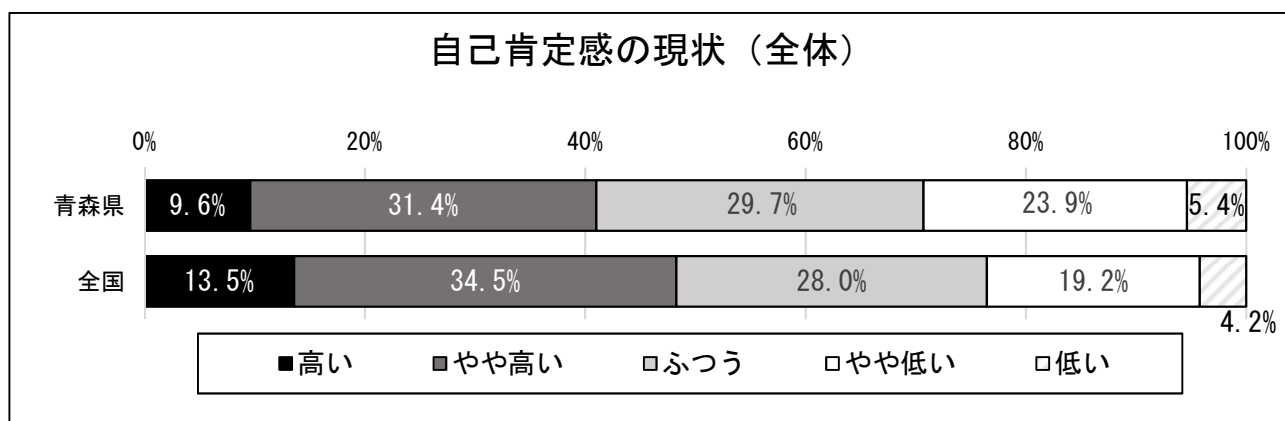
#### (1) 自己肯定感（小4、中2、高2）

本調査において、自己肯定感の現状を把握するため、自己肯定感に関連すると考えられる6項目（調査結果については、P20～21参照）について全国の調査結果と比較した。6項目とは、「学校の友だちが多い方だ」、「学校以外の友だちが多い方だ」、「勉強は得意な方だ」、「今の自分が好きだ」、「自分には自分らしさがある」、「体力には自信がある」であり、それぞれの調査結果の数値を得点化（「とても思う」を1点、「少し思う」を2点、「あまり思わない」を3点、「全く思わない」を4点）し、6項目の合計を項目数（6）で割ったものを平均点とし、1点以上1.6点未満を「高い」、1.6点以上2.2点未満を「やや高い」、2.2点以上2.8点未満を「ふつう」、2.8点以上3.4点未満を「やや低い」、3.4点以上4点未満を「低い」の5段階に分類した。

#### <全体>

小学校4年生、中学2年生、高校2年生の得点化した数値を集計したものを「自己肯定感の現状（全体）」とし、全国の調査結果と比較した。

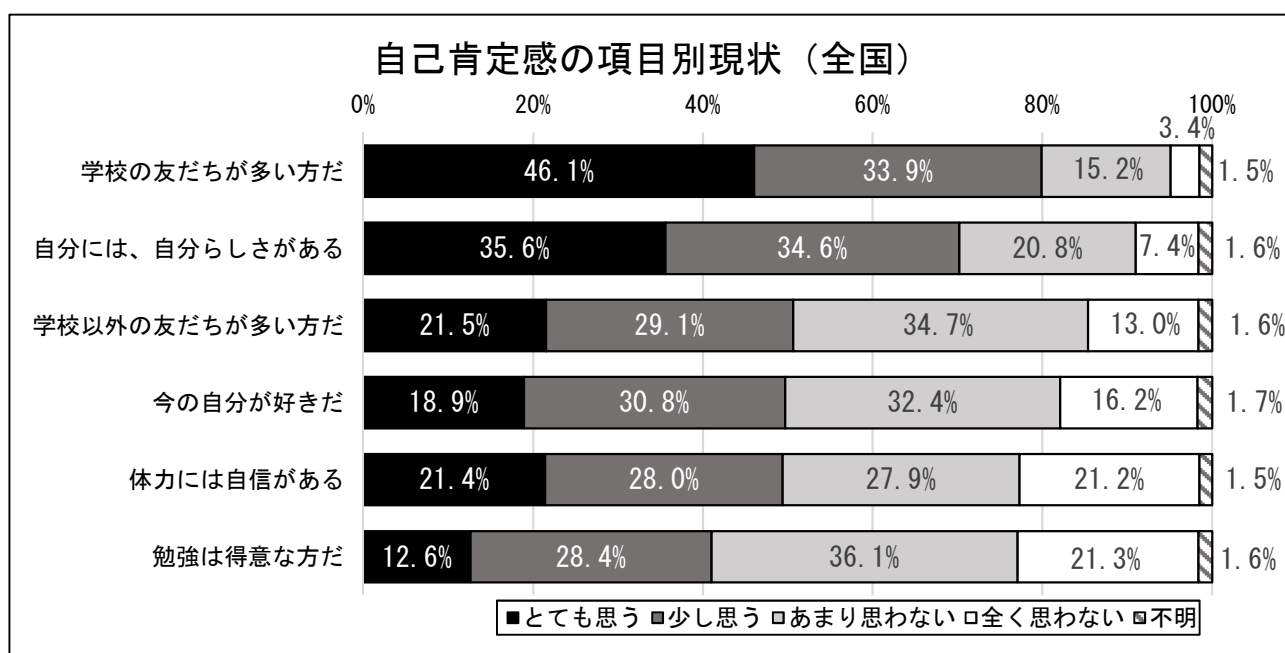
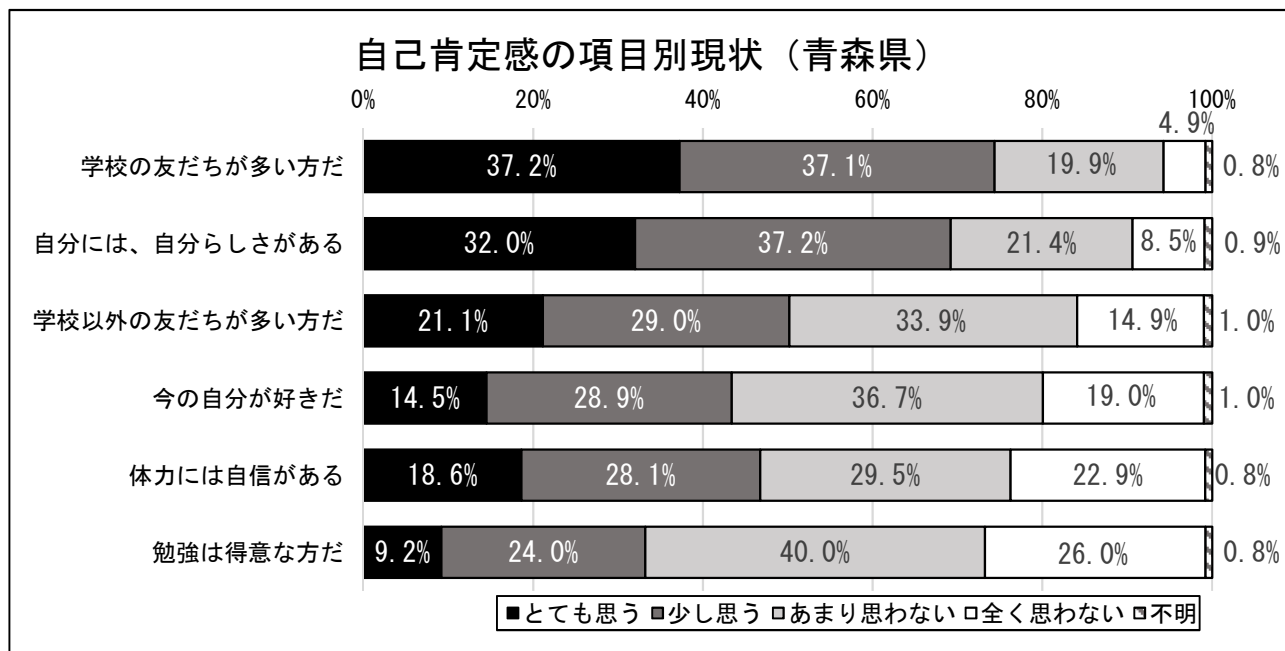
青森県は「高い」と「やや高い」の合計が41.0%となっており、全国と比較すると7.0ポイント低くなっている。



<項目別>

青森県の自己肯定感に関する項目に対して「とても思う」「少し思う」と答えた者の割合の合計をみると、「勉強は得意な方だ」（74.4ポイント）が最も高く、次いで「自分には、自分らしさがある」（69.2ポイント）や「学校以外の友だちが多い方だ」（50.2ポイント）となっている。

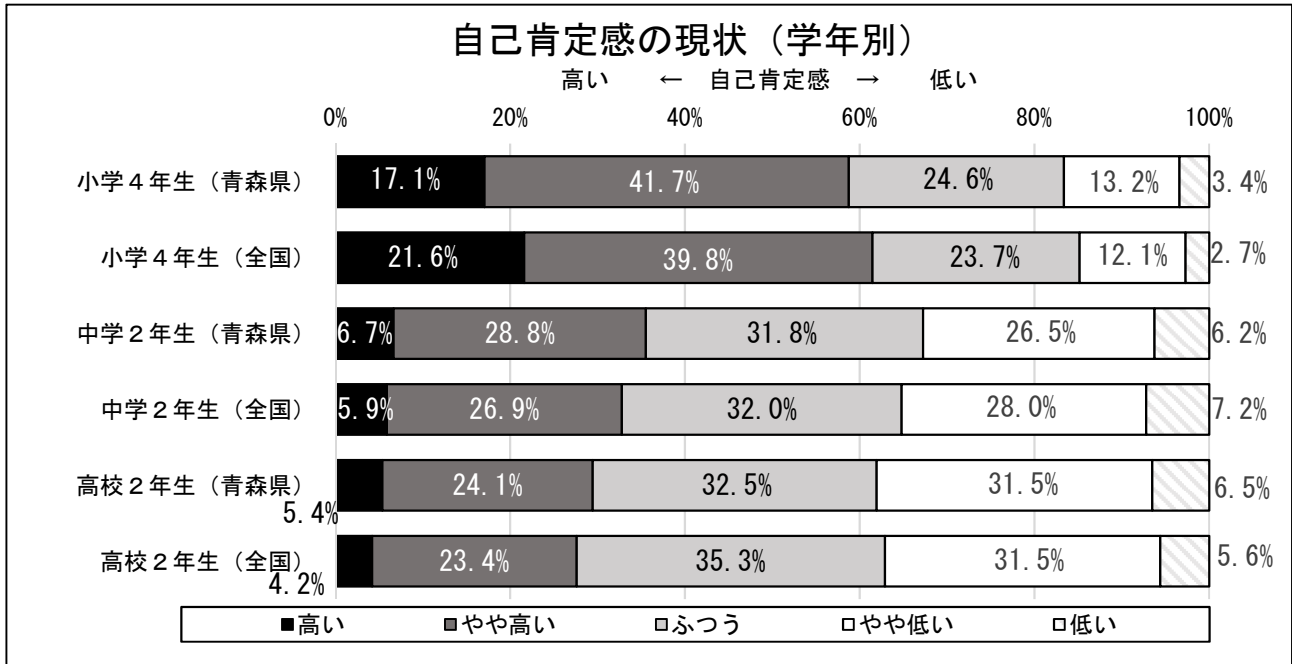
青森県の自己肯定感の項目別で「とても思う」と「少し思う」を足した割合を全国と比較すると、全体的に低くなっており、特に「勉強は得意な方だ」（7.8ポイント減）、「今の自分が好きだ」（6.3ポイント減）、「学校の友だちが多い方だ」（5.6ポイント減）となっている。



< 学年別 >

自己肯定感全体の現状を学年別にみると、学年が上がるにつれて、青森県と全国のいずれも「高い」「やや高い」の割合の合計は低くなり、小学生から中学生にかけては著しく低下する傾向がみられる。

青森県と全国の「高い」「やや高い」の割合の合計を比較すると、中学2年生は2.7ポイント増、高校2年生は1.8ポイント増となっている。一方、小学4年生は2.6ポイント減となっている。

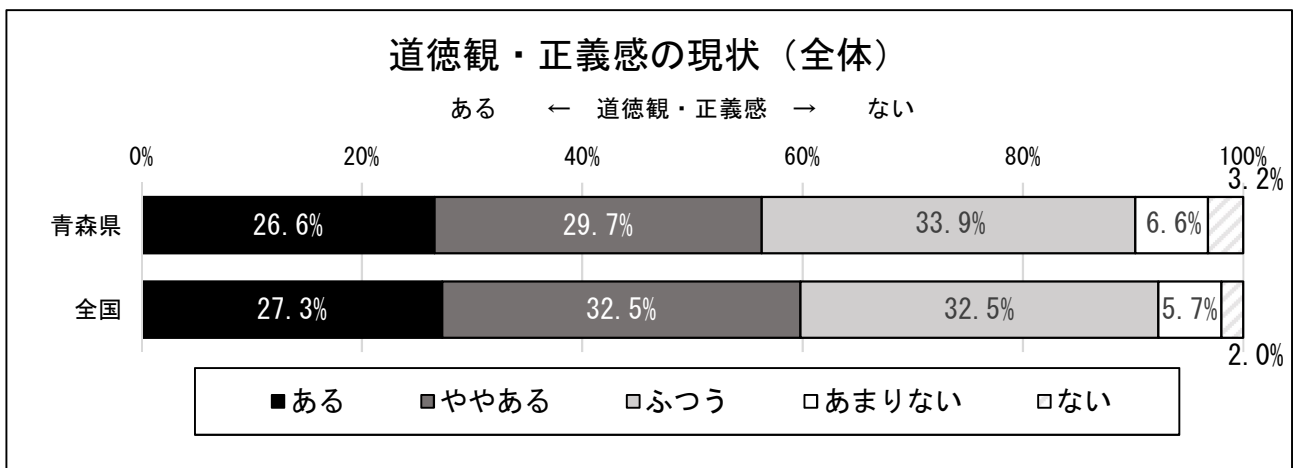


(2) 道徳観・正義感（小4、中2、高2）

本調査において、道徳観・正義感の現状を把握するため、道徳観・正義感に関連すると考えられる4項目（調査結果については、P12参照）について全国の調査結果と比較した。4項目とは、「家であいさつをすること」、「近所の人や知り合いの人にあいさつをすること」、「バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずること」、「友達が悪いことをしていたら、やめさせること」であり、それぞれの調査結果の数値を得点化（「必ずしている」を1点、「だいたいしている」を2点、「あまりしていない」を3点、「していない」を4点）し、4項目の合計を項目数（4）で割ったものを平均点とし、1点以上1.6点未満を「ある」、1.6点以上2.2点未満を「ややある」、2.2点以上2.8点未満を「ふつう」、2.8点以上3.4点未満を「あまりない」、3.4点以上4点未満を「ない」の5段階に分類した。

<全体>

小学校4年生、中学2年生、高校2年生の得点化した数値を集計したものを「道徳観・正義感の現状（全体）」とし、全国の調査結果と比較した。青森県は「ある」と「ややある」の合計が56.3%となっており、全国と比較すると3.5ポイント低くなっている。

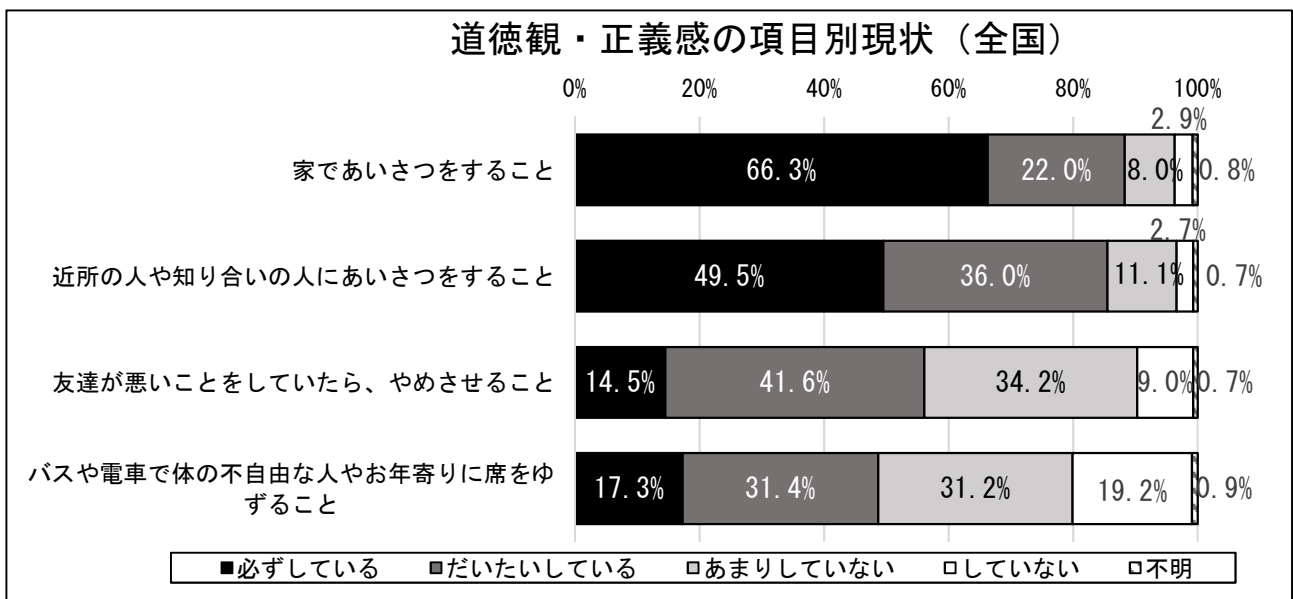
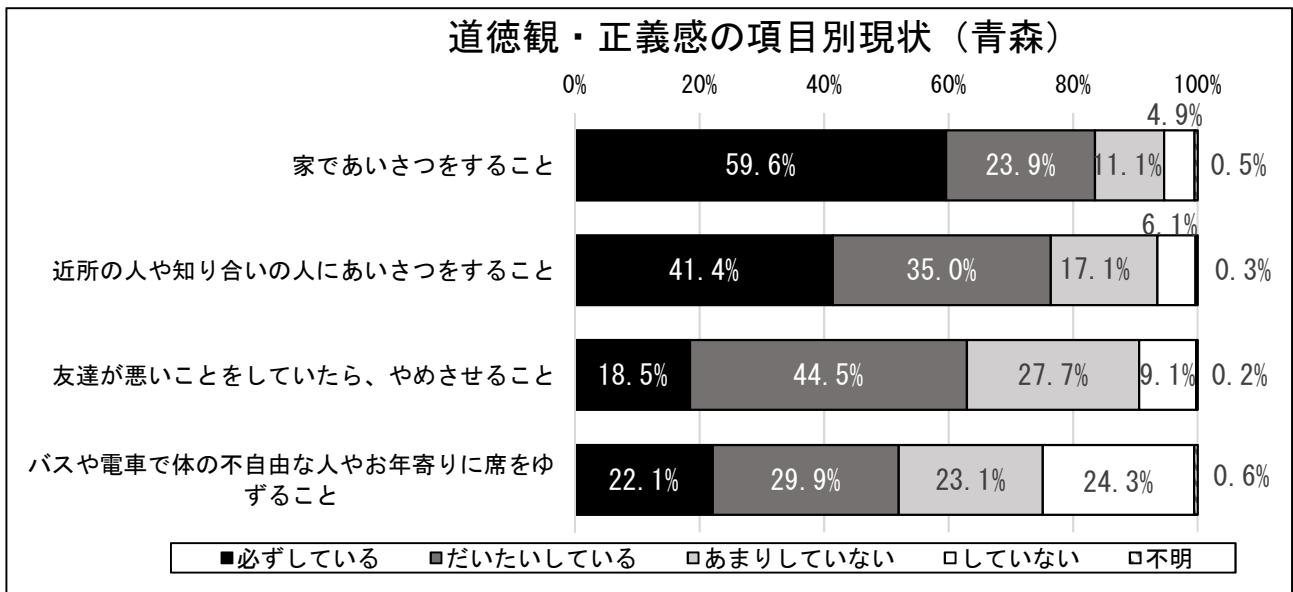




<項目別>

青森県の道徳観・正義感に関する項目に対して「ある」「ややある」と答えた者の割合の合計をみると、「家であいさつをすること」(83.5ポイント)が最も高く、次いで「近所の人や知り合いの人にあいさつをすること」(76.4ポイント)となっており、「あいさつ」に関する項目が高くなっている。

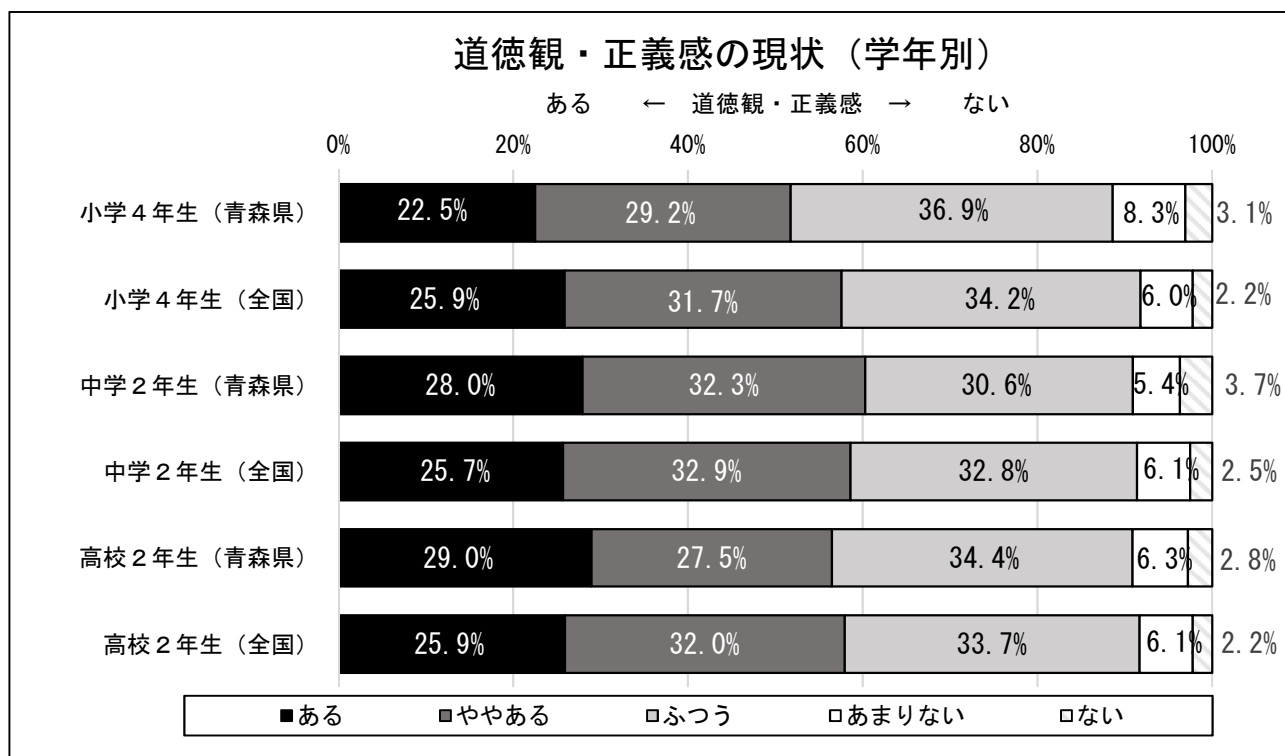
青森県の青少年の道徳観・正義感の項目別で「ある」と「ややある」を足した割合を全国と比較すると、「友達が悪いことをしていたら、やめさせること」(6.9ポイント増)、「バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずること」(3.3ポイント増)となっている。一方、「近所の人や知り合いの人にあいさつをすること」(9.1ポイント減)、「家であいさつをすること」(4.8ポイント減)となっている。



< 学年別 >

道徳観・正義感の現状を学年別にみると、「高い」「やや高い」の割合の合計は全国では3学年ではあまり変化がみられなかった。一方、青森県では小学生から中学生にかけては増加するが、中学生から高校生にかけては減少する傾向がみられる。

青森県と全国の「高い」「やや高い」の割合の合計を比較すると、中学2年生は1.7ポイント増となっている。一方、小学4年生は5.8ポイント減、高校2年生は1.4ポイント減となっている。



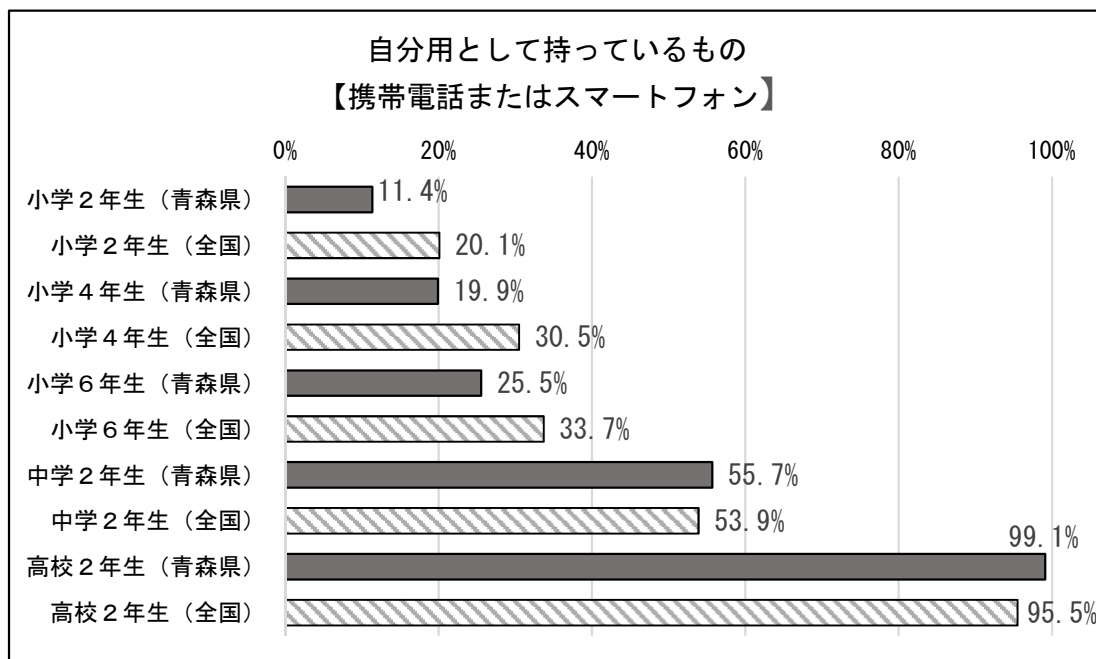
#### 4 青少年の携帯電話・スマートフォンの所有や使用

##### (1) 携帯電話・スマートフォンの所有や使用の実態

###### ① 携帯電話・スマートフォンの所有（小2・4・6㊟、中2、高2）

携帯電話・スマートフォンを所有している割合（P31、45参照）は、学年が上がるにつれて高くなり、青森県、全国はいずれも中学2年生になると5割以上、高校2年生になると9割以上が所有している。

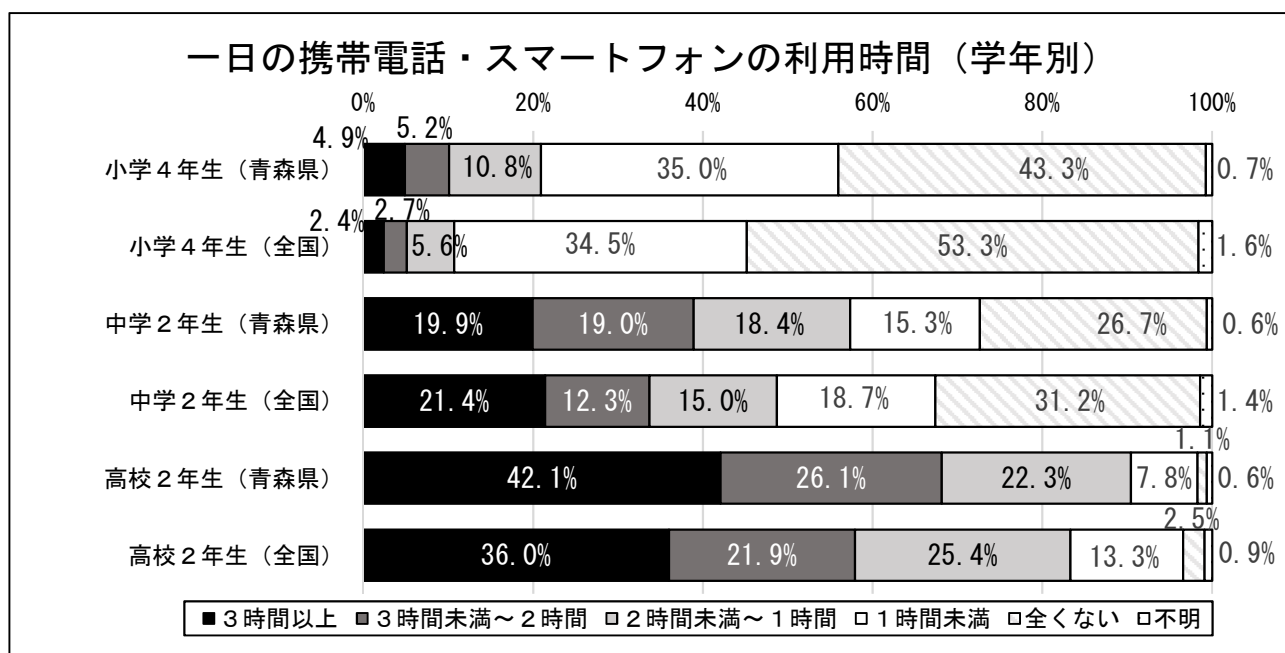
また、青森県で携帯電話・スマートフォンを所有している割合を全国と比較すると、小学生は低いですが、中学2年生、高校2年生は高くなっている。



###### ② 携帯電話・スマートフォンの利用時間（小4、中2、高2）

携帯電話・スマートフォンの利用時間では、学年が上がるにつれて、高くなっている。

また、青森県で携帯電話・スマートフォンを2時間以上利用する割合を全国と比較すると、いずれの学年も高くなっている。



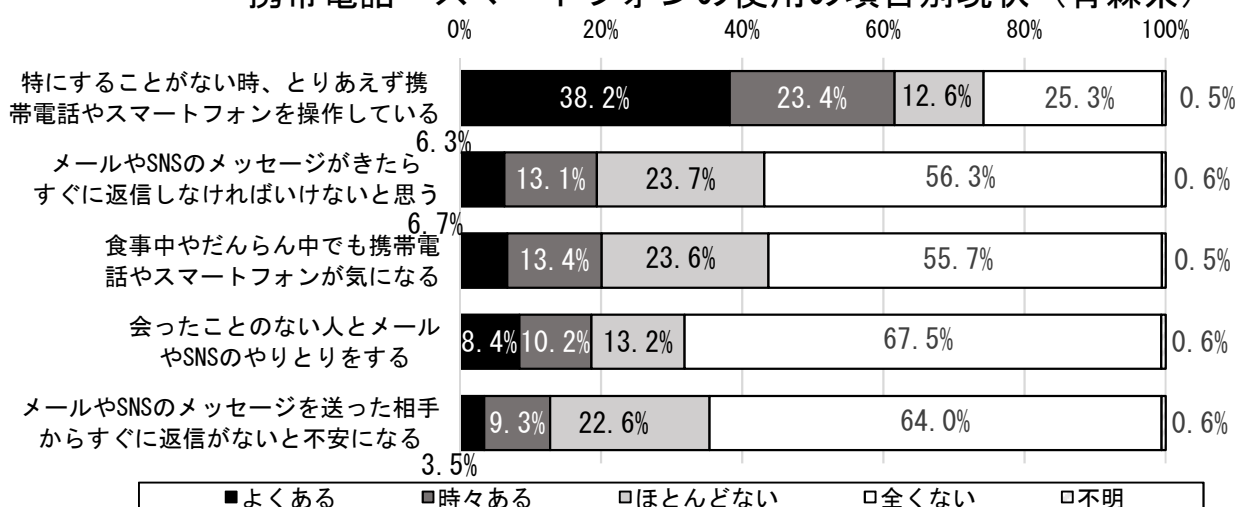
## (2) 携帯電話・スマートフォンの使用（小4、中2、高2）

<全体>

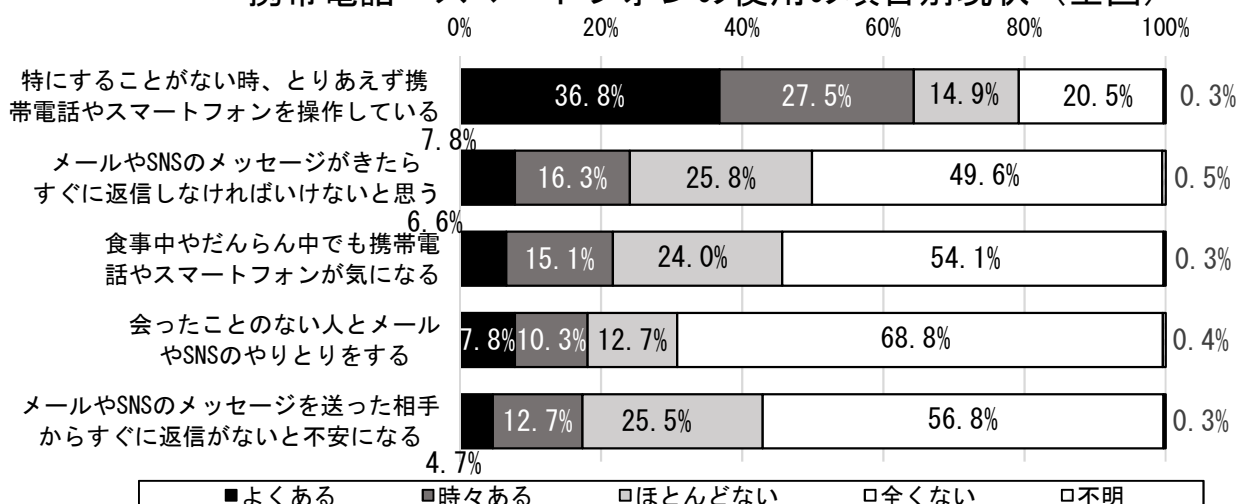
携帯電話・スマートフォンの使用について、「よくある」「時々ある」と答えた者の割合の合計をみると、青森県と全国ともに「特にすることがない時、とりあえず携帯電話やスマートフォンを操作している」が最も多く、6割以上になっている。

項目ごとにみると、青森県で「よくある」「時々ある」と答えた者の割合の合計は全国に比べ、低い項目が多い。特に低い項目は、「メールやSNSのメッセージがきたらすぐに返信しなければいけないと思う」（4.7ポイント減）、「メールやSNSのメッセージを送った相手からすぐに返信がないと不安になる」（4.6ポイント減）となっている。

### 携帯電話・スマートフォンの使用の項目別現状（青森県）



### 携帯電話・スマートフォンの使用の項目別現状（全国）

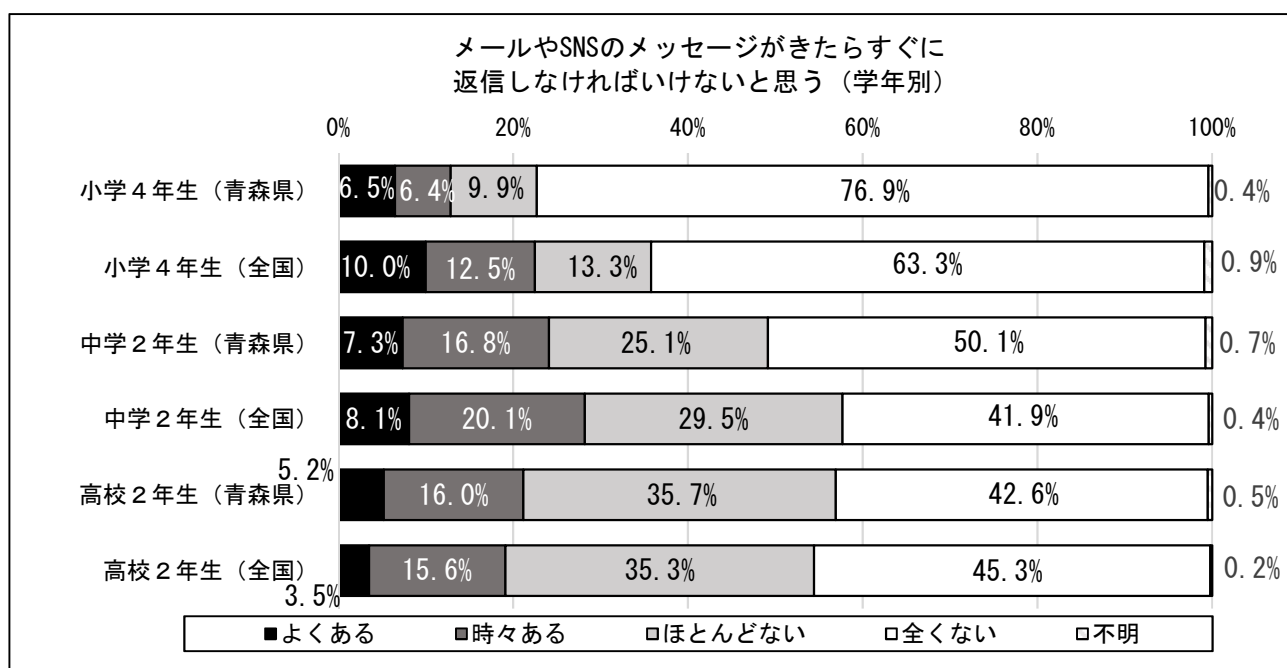
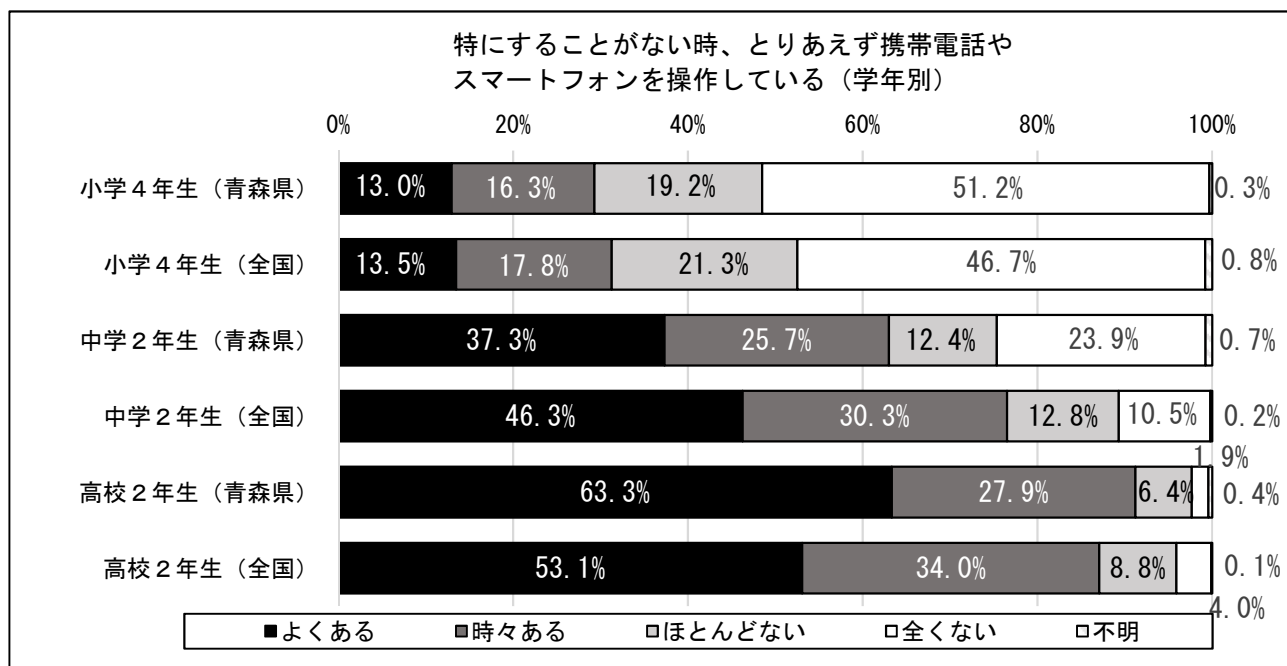


<学年別>

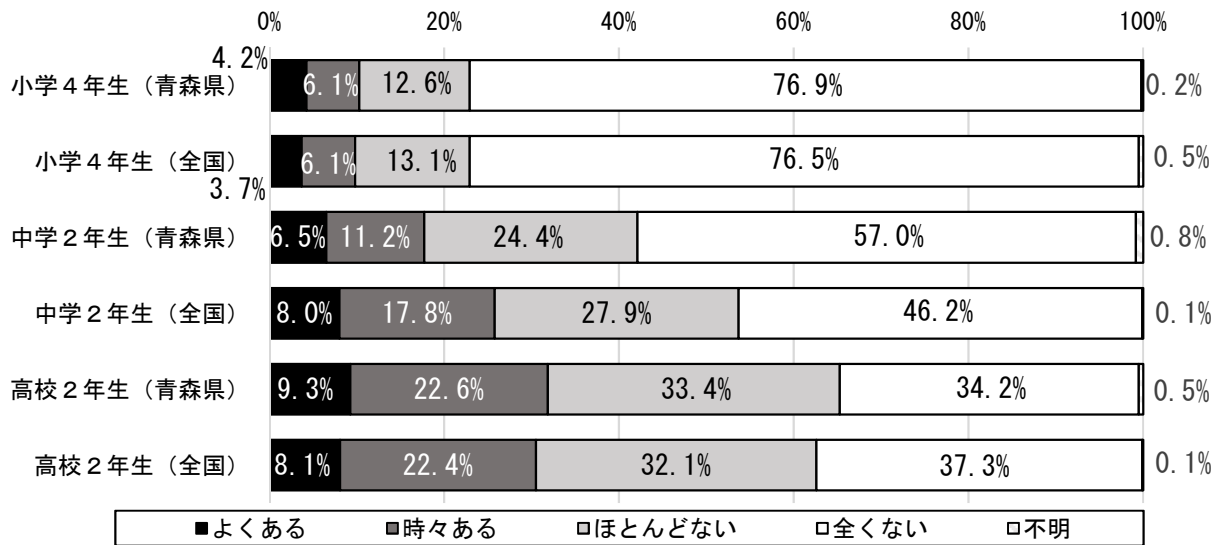
携帯電話・スマートフォンの使用について、「よくある」「時々ある」と答えた者の割合の合計をみると、青森県、全国ともに学年が上がるにつれて高くなる傾向がある。一方、「メールやSNSのメッセージがきたらすぐに返信しなければいけないと思う」だけは、中学2年生から高校2年生にかけて低くなっている。

項目別にみると、「特にすることがない時、とりあえず携帯電話やスマートフォンを操作している」において「よくある」「時々ある」と答えた青森県の中学2年生の割合は6割を超え、高校2年生の割合は9割を超えている。

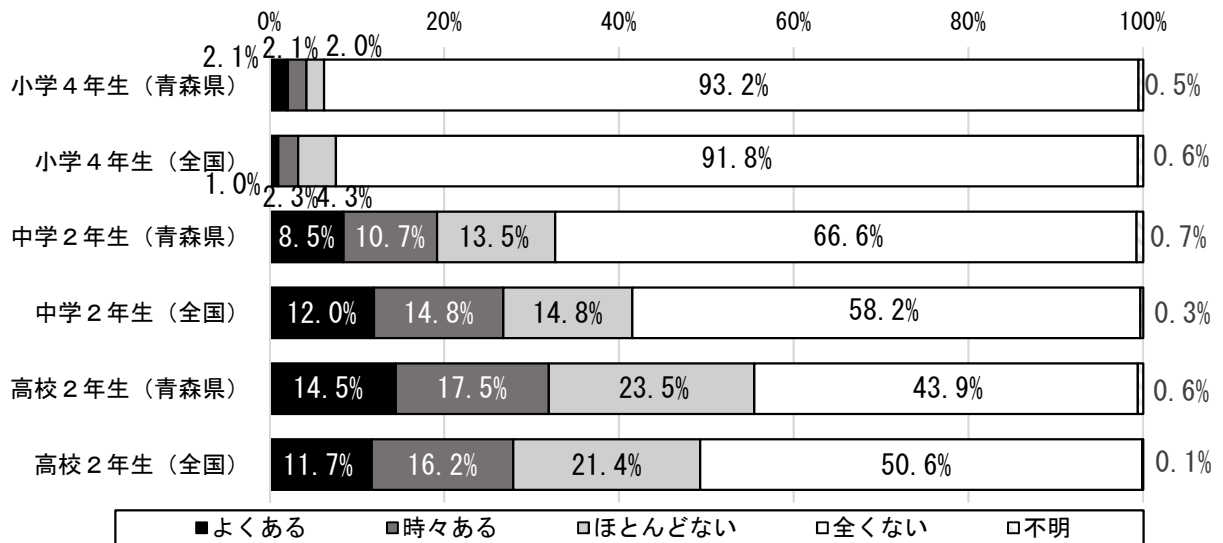
また、「会ったことのない人とメールやSNSのやりとりをする」において「よくある」「時々ある」と答えた青森県の中学2年生の割合は全国と比較すると、7.6ポイント減であるのに対し、高校2年生で比較すると4.1ポイント増となっている。



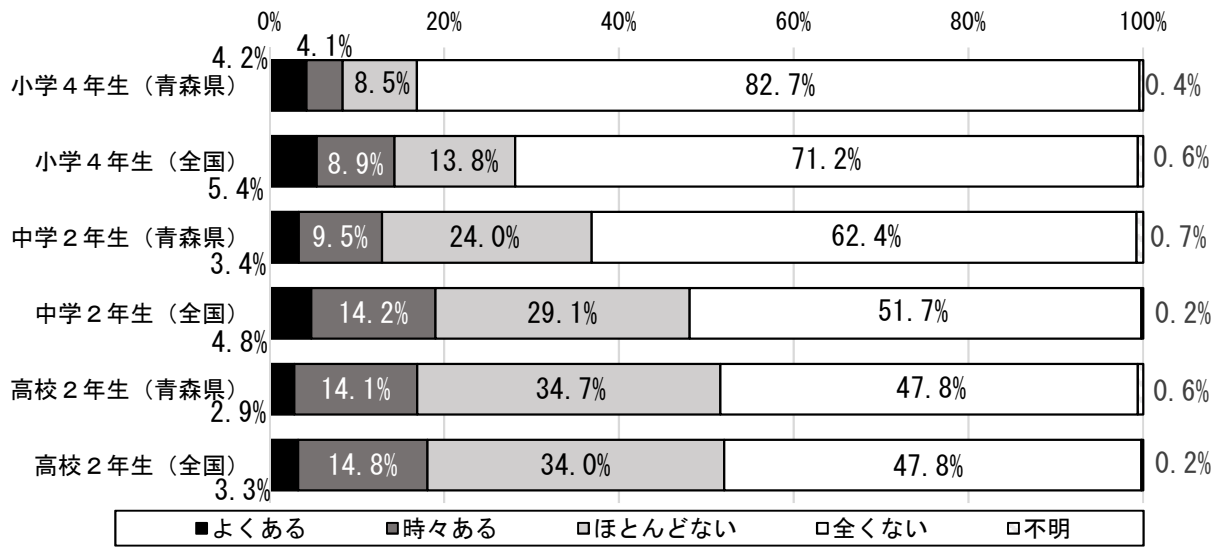
食事中やだんらん中でも携帯電話やスマートフォンが気になる（学年別）



会ったことのない人とメールやSNSのやりとりをする（学年別）



メールやSNSのメッセージを送った相手から  
すぐに返信がないと不安になる（学年別）



## 5 世帯収入や子ども（小学生）の教育費（学校以外）

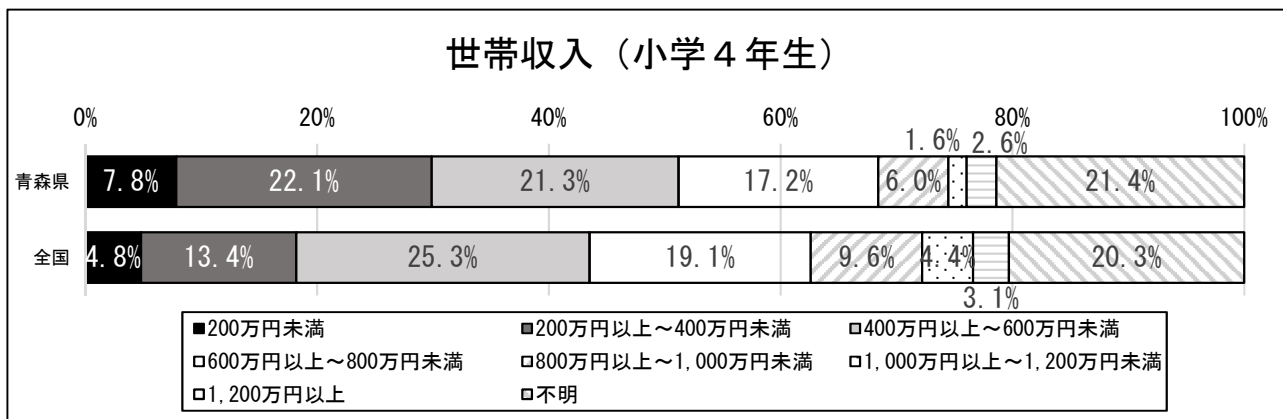
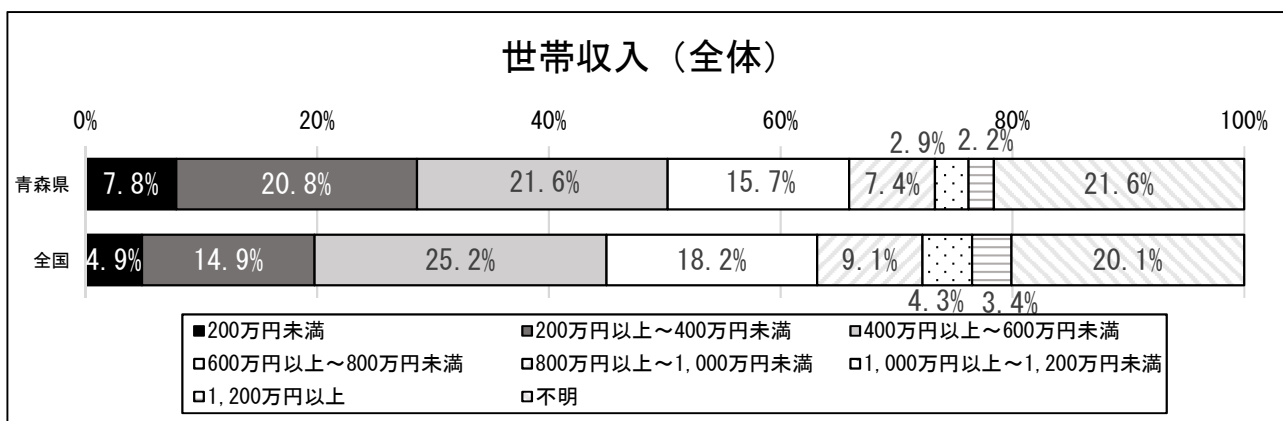
### （1）世帯収入や子どもの教育費（学校以外）（小2・4・6㊟）

#### ① 世帯収入

本県の小学校2・4・6年生の家庭の世帯収入についての数値を集計したものを「世帯収入（全体）」とした。

世帯収入の全体の現状は、青森県と全国ともに「400万円以上～600万円未満」と回答した割合が最も高くなっている。青森県では「200万円未満」「200万円以上～400万円未満」と回答した者を足した割合は28.6ポイントであり、全国と比べると8.8ポイント増となっている。

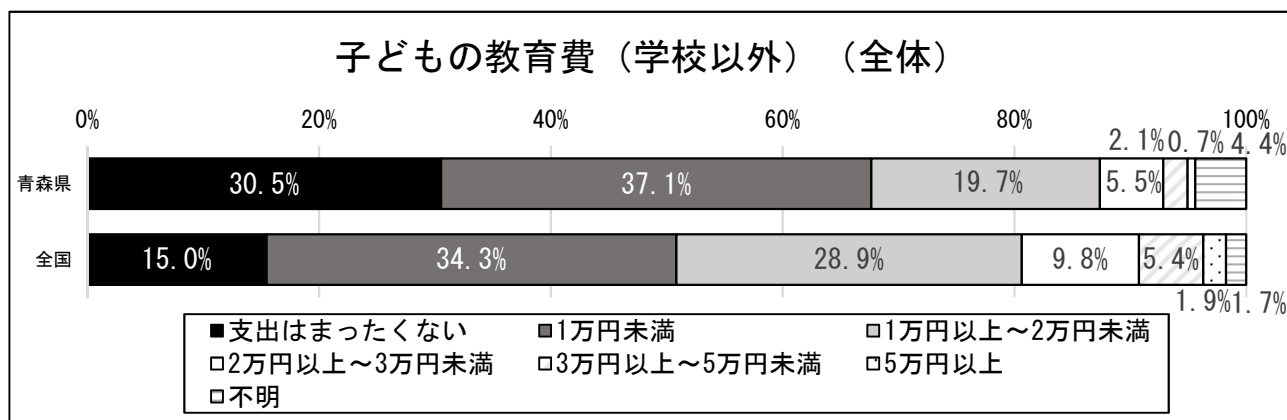
青森県の小学4年生では「200万円未満」「200万円以上～400万円未満」と回答した者を足した割合は29.9ポイントであり、全国と比べると11.7ポイント増となっている。





## ② 子どもの教育費（学校以外）の現状

子どもの教育費（学校以外）の現状は、青森と全国ともに「1万円未満」と回答した割合が最も高くなっている。青森県では「支出はまったくない」と回答した者の割合は30.5ポイントであり、全国と比べると2倍強となっている。



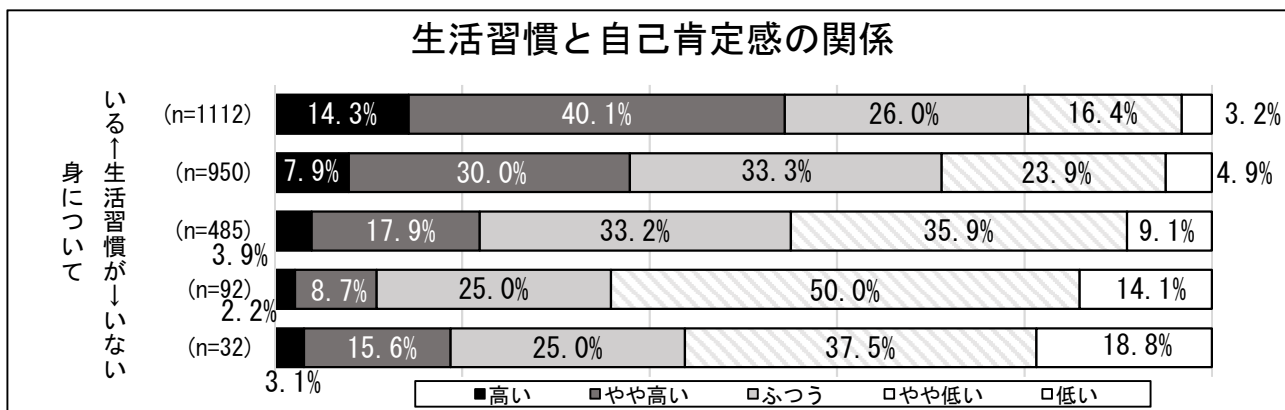
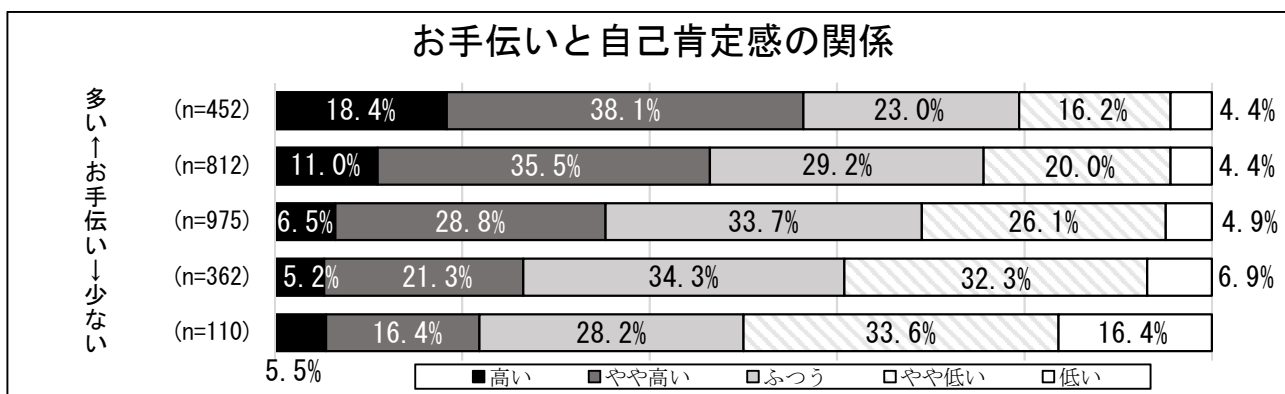
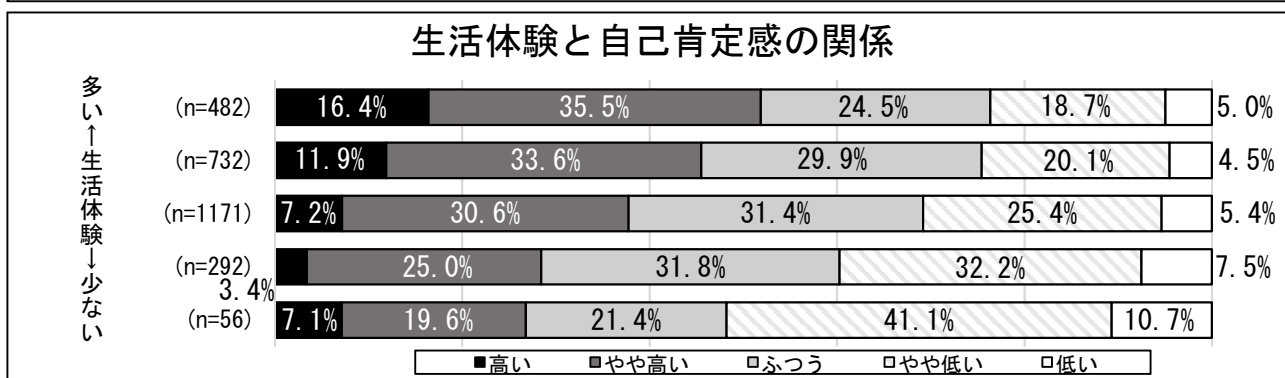
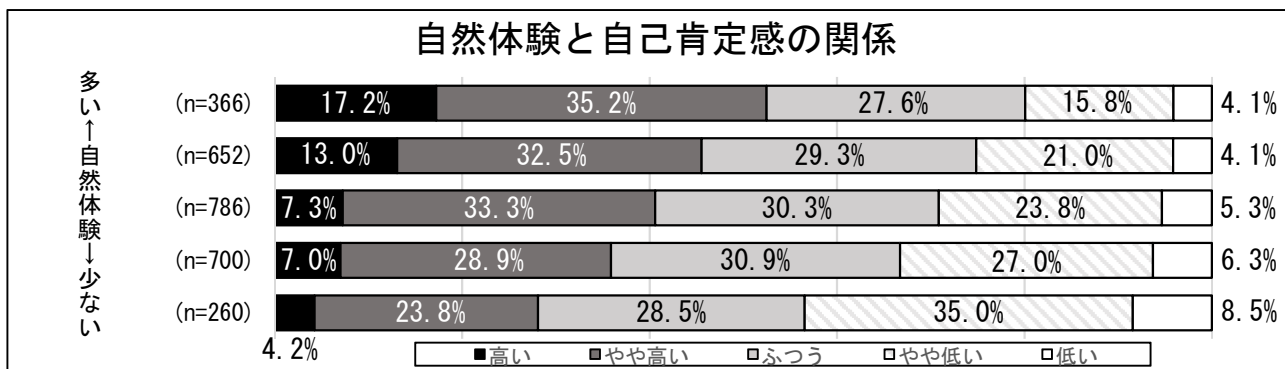
## 第4章 クロス集計について

### 1 自己肯定感

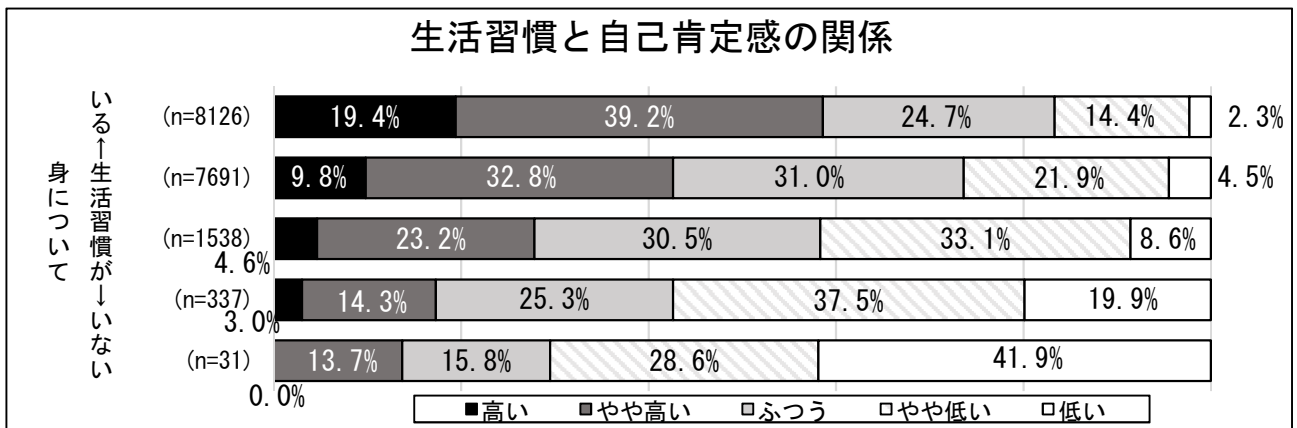
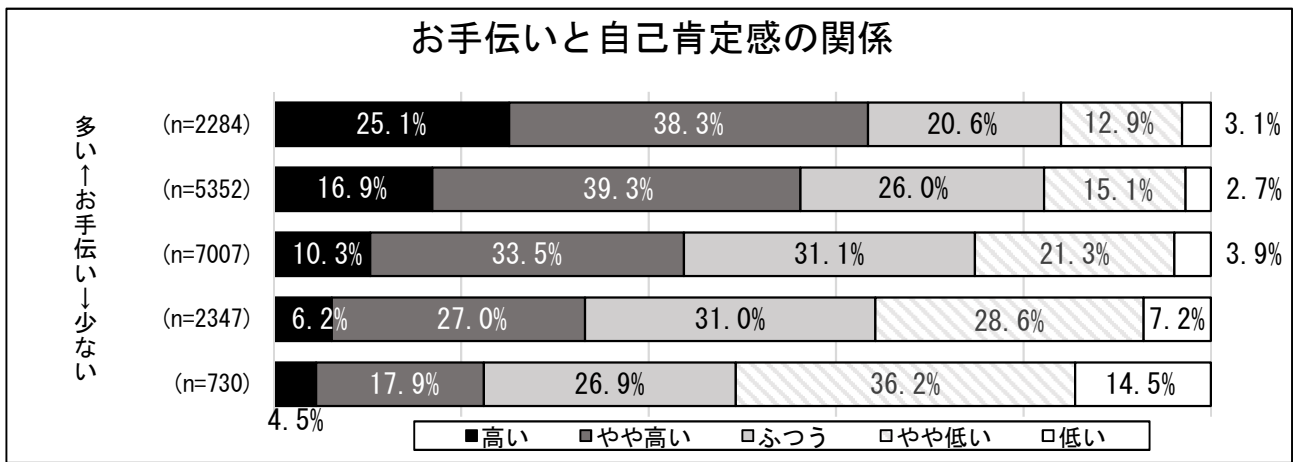
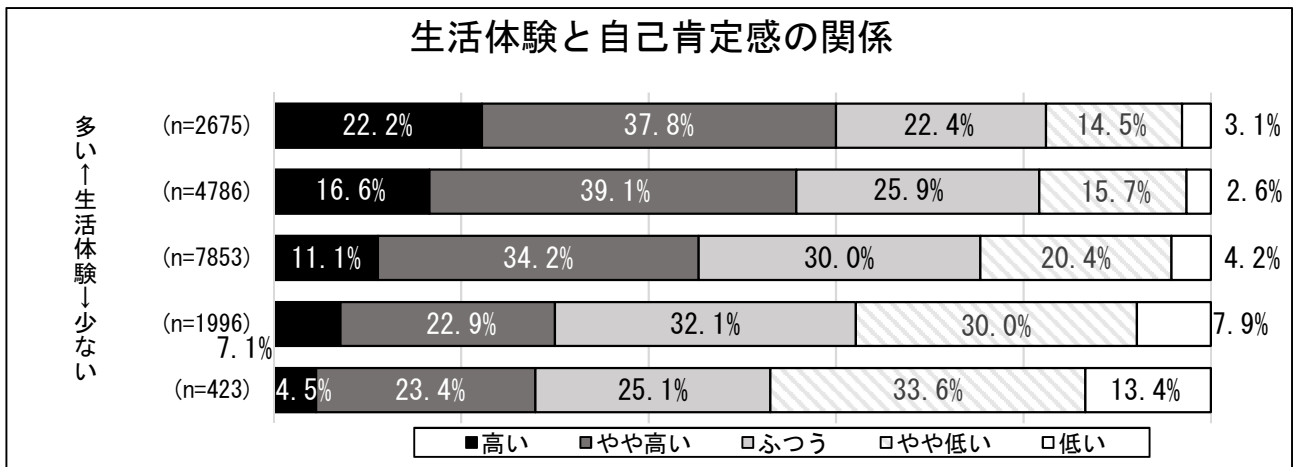
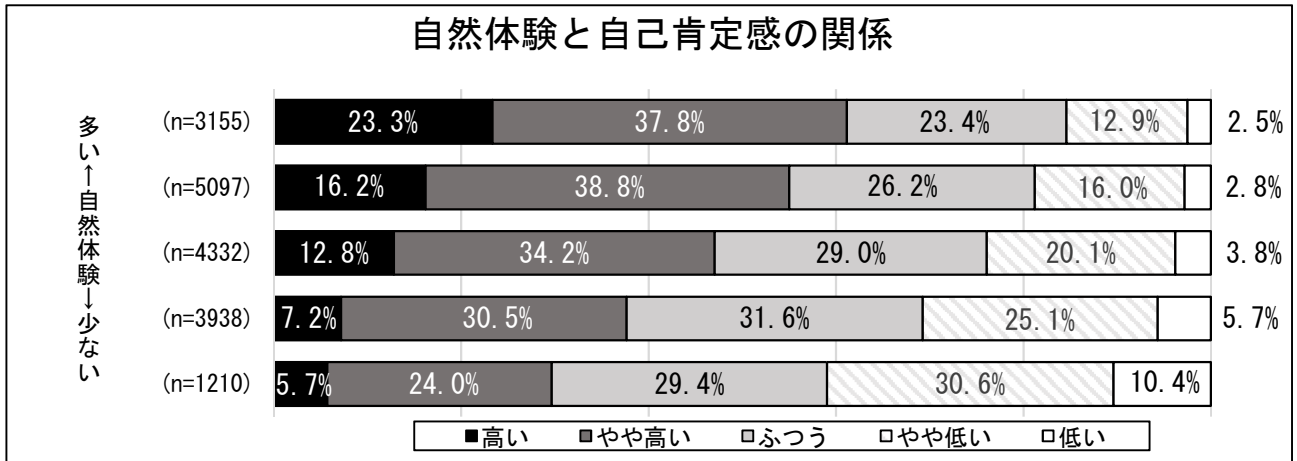
#### (1) 体験活動と自己肯定感の関係（小4、中2、高2）

体験活動と自己肯定感の関係をみると、自然体験や生活体験、お手伝いといった体験が豊富な者や、朝食をとる、あいさつをするといった生活習慣が身につけている者ほど自己肯定感が高くなる傾向がみられる。

<青森県>



<全国>



## (2) 自己肯定感に関する各項目の関係（小4、中2、高2）

自己肯定感に関する6つの項目の関係性を把握するため、青森県の学年（小学校4年生、中学校2年生、高校2年生）ごとに各項目の相関関係をみると、いずれの学年も「今の自分が好きだ」、「自分には自分らしさがある」は他の項目より、強い相関関係が見られる。

青森県と全国の相関関係を比べると、小学校ではあまり大きな差が見られない。一方、中学校2年生では、「学校以外の友だちが多い方だ」、「勉強は得意な方だ」（0.084ポイント減）や「勉強は得意な方だ」、「体力には自信がある」（0.070ポイント減）となっている。また、高校2年生では、「体力には自信がある」、「学校以外の友だちが多い方だ」（0.090ポイント増）となっている。

### <青森県>

自己肯定感に関する質問項目の相関（小学校4年生）

	学校の友だちが多い方だ	学校以外の友だちが多い方だ	勉強は得意な方だ	今の自分が好きだ	自分には、自分らしさがある	体力には自信がある
学校の友だちが多い方だ		0.201	0.229	0.322	0.338	0.272
学校以外の友だちが多い方だ	0.201		0.109	0.078	0.135	0.250
勉強は得意な方だ	0.229	0.109		0.363	0.358	0.275
今の自分が好きだ	0.322	0.078	0.363		0.523	0.256
自分には、自分らしさがある	0.338	0.135	0.358	0.523		0.270
体力には自信がある	0.272	0.250	0.275	0.256	0.270	

自己肯定感に関する質問項目の相関（中学校2年生）

	学校の友だちが多い方だ	学校以外の友だちが多い方だ	勉強は得意な方だ	今の自分が好きだ	自分には、自分らしさがある	体力には自信がある
学校の友だちが多い方だ		0.365	0.113	0.341	0.338	0.360
学校以外の友だちが多い方だ	0.365		0.104	0.209	0.153	0.351
勉強は得意な方だ	0.113	0.104		0.327	0.245	0.207
今の自分が好きだ	0.341	0.209	0.327		0.602	0.365
自分には、自分らしさがある	0.338	0.153	0.245	0.602		0.328
体力には自信がある	0.360	0.351	0.207	0.365	0.328	

自己肯定感に関する質問項目の相関（高校2年生）

	学校の友だちが多い方だ	学校以外の友だちが多い方だ	勉強は得意な方だ	今の自分が好きだ	自分には、自分らしさがある	体力には自信がある
学校の友だちが多い方だ		0.450	0.231	0.346	0.310	0.400
学校以外の友だちが多い方だ	0.450		0.116	0.186	0.225	0.374
勉強は得意な方だ	0.231	0.116		0.374	0.250	0.227
今の自分が好きだ	0.346	0.186	0.374		0.602	0.313
自分には、自分らしさがある	0.310	0.225	0.250	0.602		0.308
体力には自信がある	0.400	0.374	0.227	0.313	0.308	

<全国>

自己肯定感に関する質問項目の相関（小学校4～6年生）

	学校の友だちが多い方だ	学校以外の友だちが多い方だ	勉強は得意な方だ	今の自分が好きだ	自分には、自分らしさがある	体力には自信がある
学校の友だちが多い方だ		0.401	0.325	0.426	0.444	0.419
学校以外の友だちが多い方だ	0.401		0.246	0.253	0.296	0.360
勉強は得意な方だ	0.325	0.246		0.419	0.419	0.303
今の自分が好きだ	0.426	0.253	0.419		0.638	0.369
自分には、自分らしさがある	0.444	0.296	0.419	0.638		0.396
体力には自信がある	0.419	0.360	0.303	0.369	0.396	

自己肯定感に関する質問項目の相関（中学校2年生）

	学校の友だちが多い方だ	学校以外の友だちが多い方だ	勉強は得意な方だ	今の自分が好きだ	自分には、自分らしさがある	体力には自信がある
学校の友だちが多い方だ		0.371	0.197	0.384	0.387	0.392
学校以外の友だちが多い方だ	0.371		0.126	0.210	0.269	0.307
勉強は得意な方だ	0.197	0.126		0.405	0.324	0.277
今の自分が好きだ	0.384	0.210	0.405		0.613	0.394
自分には、自分らしさがある	0.387	0.269	0.324	0.613		0.384
体力には自信がある	0.392	0.307	0.277	0.394	0.384	

自己肯定感に関する質問項目の相関（高校2年生）

	学校の友だちが多い方だ	学校以外の友だちが多い方だ	勉強は得意な方だ	今の自分が好きだ	自分には、自分らしさがある	体力には自信がある
学校の友だちが多い方だ		0.497	0.219	0.342	0.327	0.360
学校以外の友だちが多い方だ	0.497		0.152	0.257	0.268	0.284
勉強は得意な方だ	0.219	0.152		0.388	0.260	0.222
今の自分が好きだ	0.342	0.257	0.388		0.581	0.331
自分には、自分らしさがある	0.327	0.268	0.260	0.581		0.311
体力には自信がある	0.360	0.284	0.222	0.331	0.311	

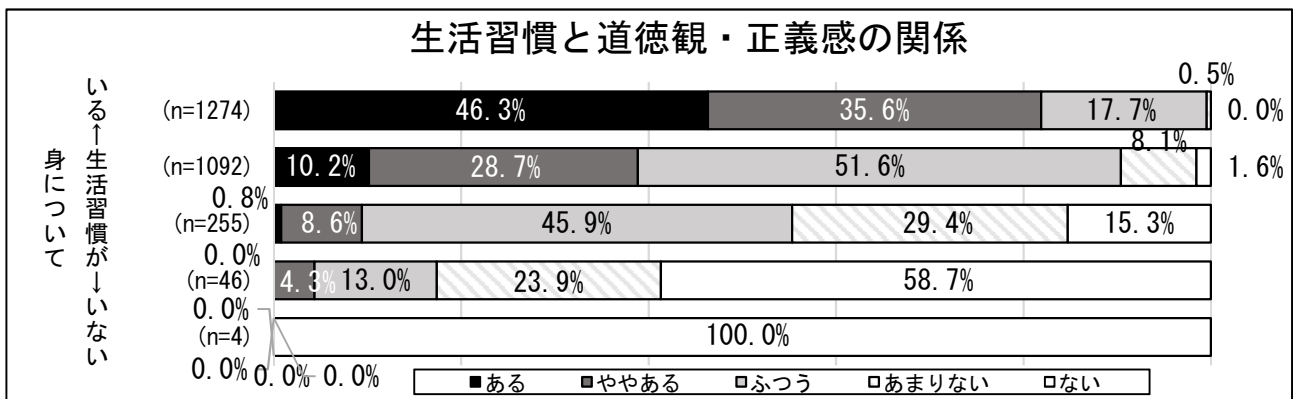
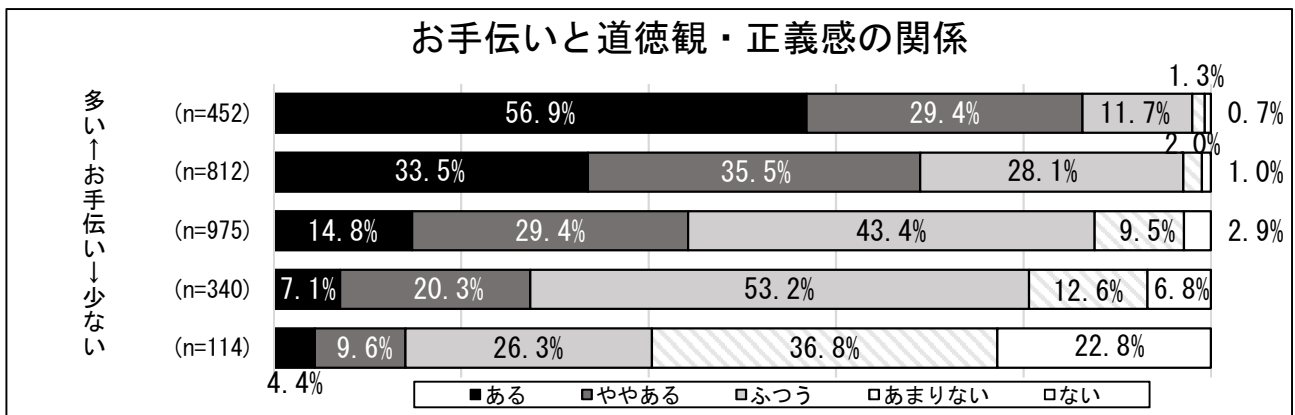
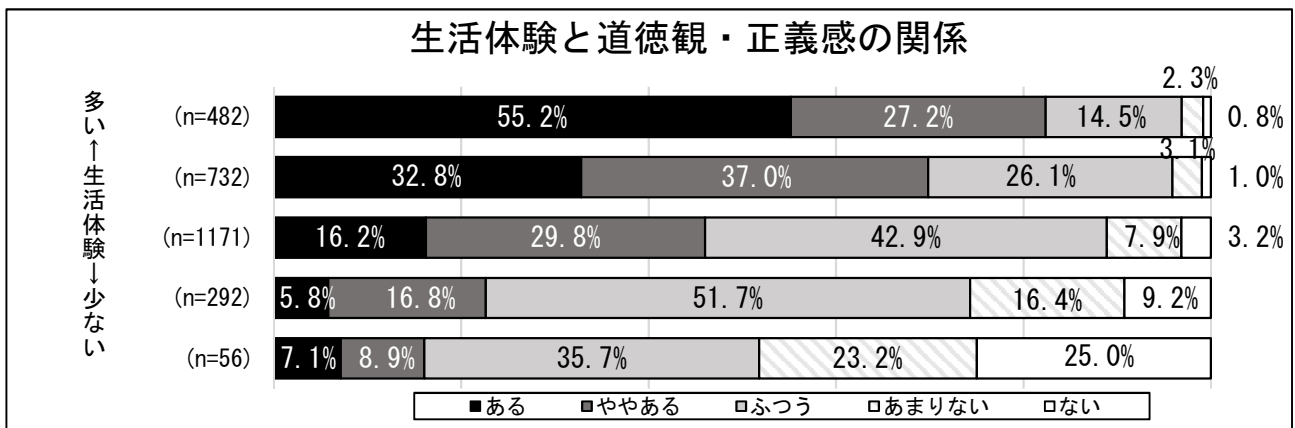
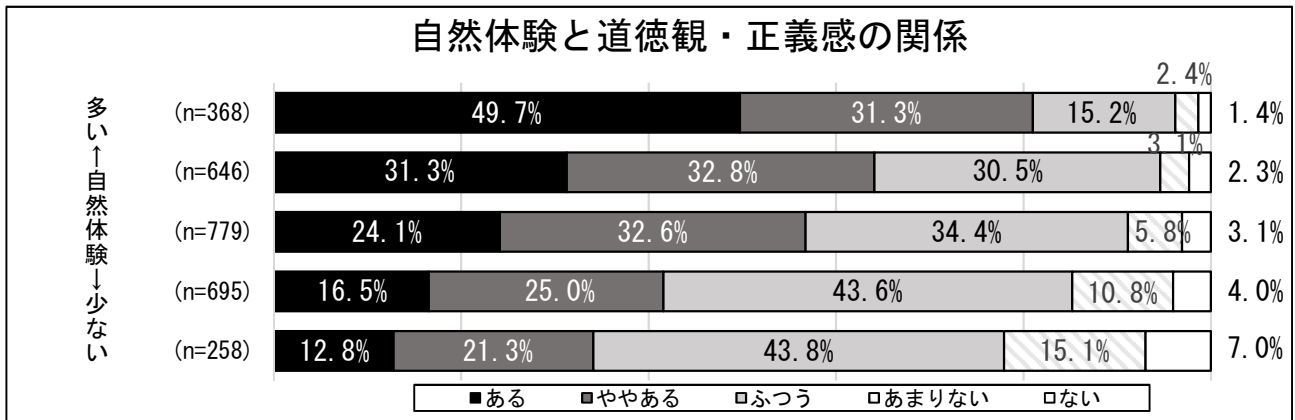
相関関係の強さの目安

相関係数	相関関係
0.0～±0.2	ほとんど相関がない
±0.2～±0.4	やや相関がある
±0.4～±0.7	相関がある
±0.7～±0.9	強い相関がある
±0.9～±1.0	極めて強い相関がある

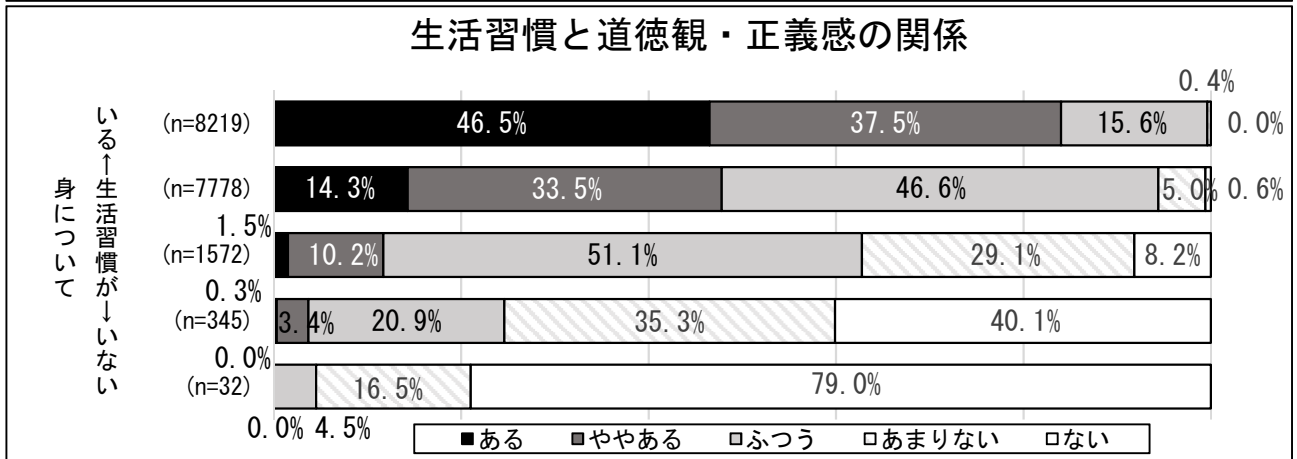
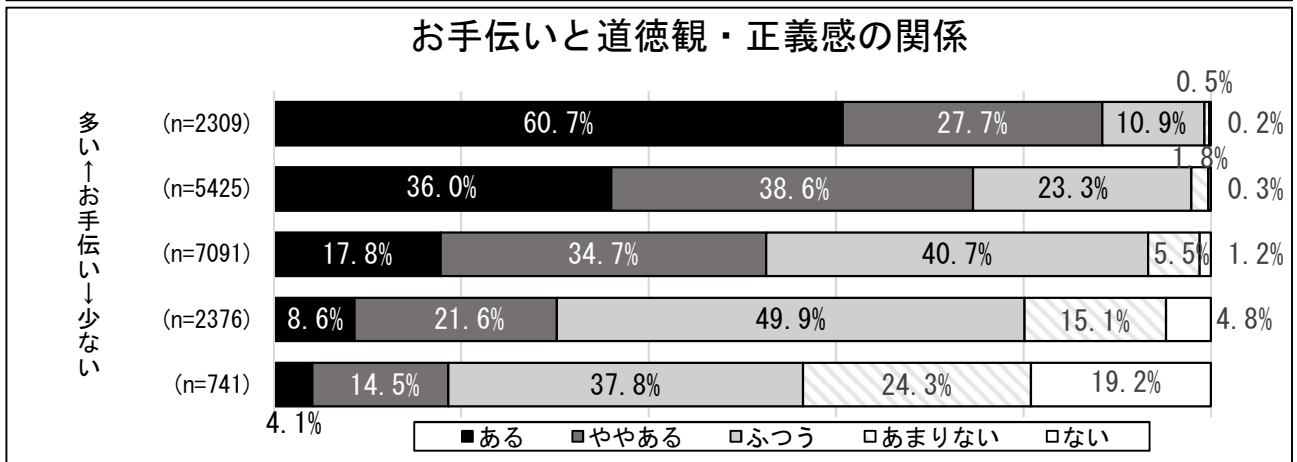
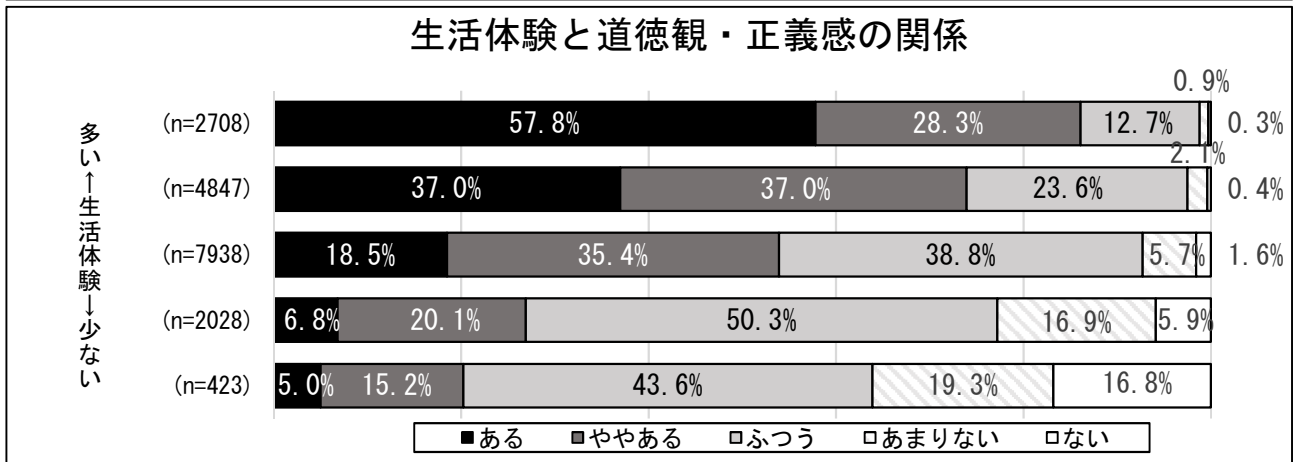
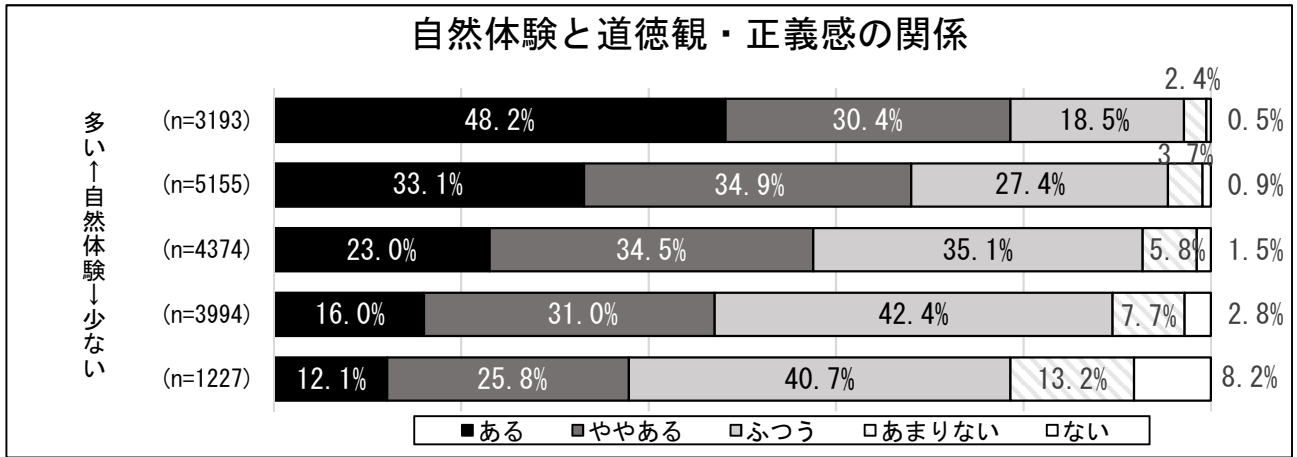
※相関関係とは、2つの変数の関連度合いを示す統計学的指標。相関係数による相関関係の強さの目安は、一般的に左表のように表される。

## 2 体験活動と道徳観・正義感の関係（小4・中2・高2）

体験活動と道徳観・正義感の関係では、青森県と全国ともに、自然体験や生活体験、お手伝いといった体験が豊富な者や、基本的な生活習慣が身についている者ほど道徳観・正義感が高くなる傾向がみられる。



<全国>

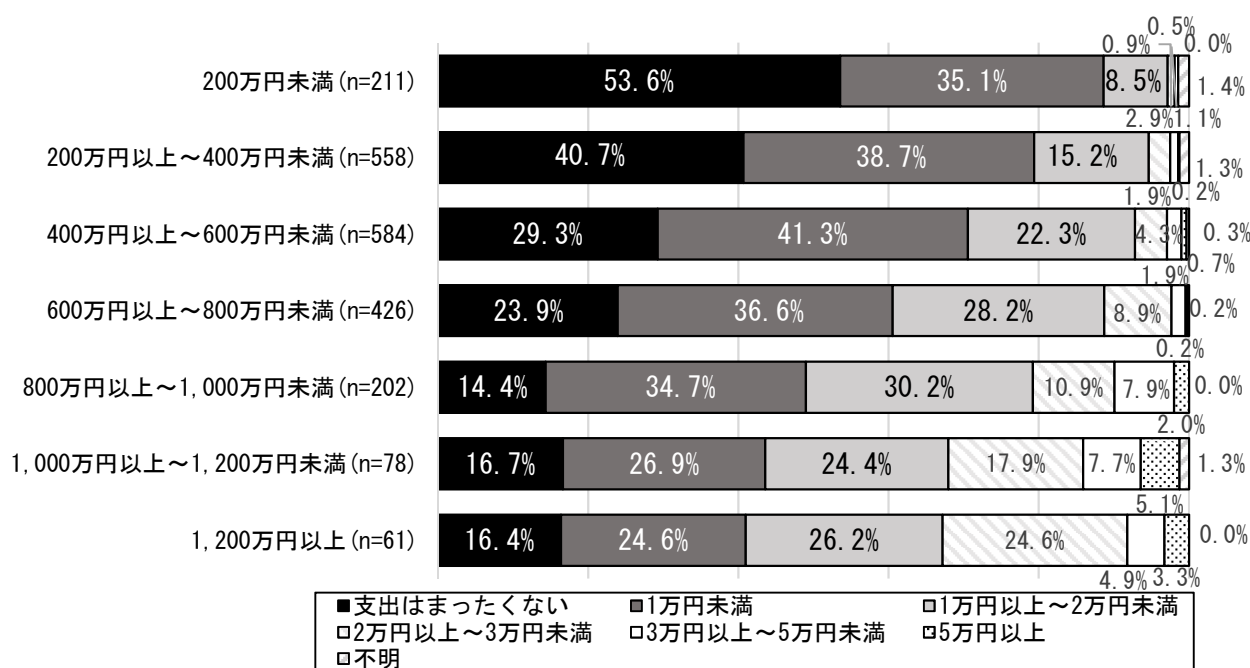


### 3 世帯収入と子どもの教育費（学校以外）との関係（小2・4・6歳）

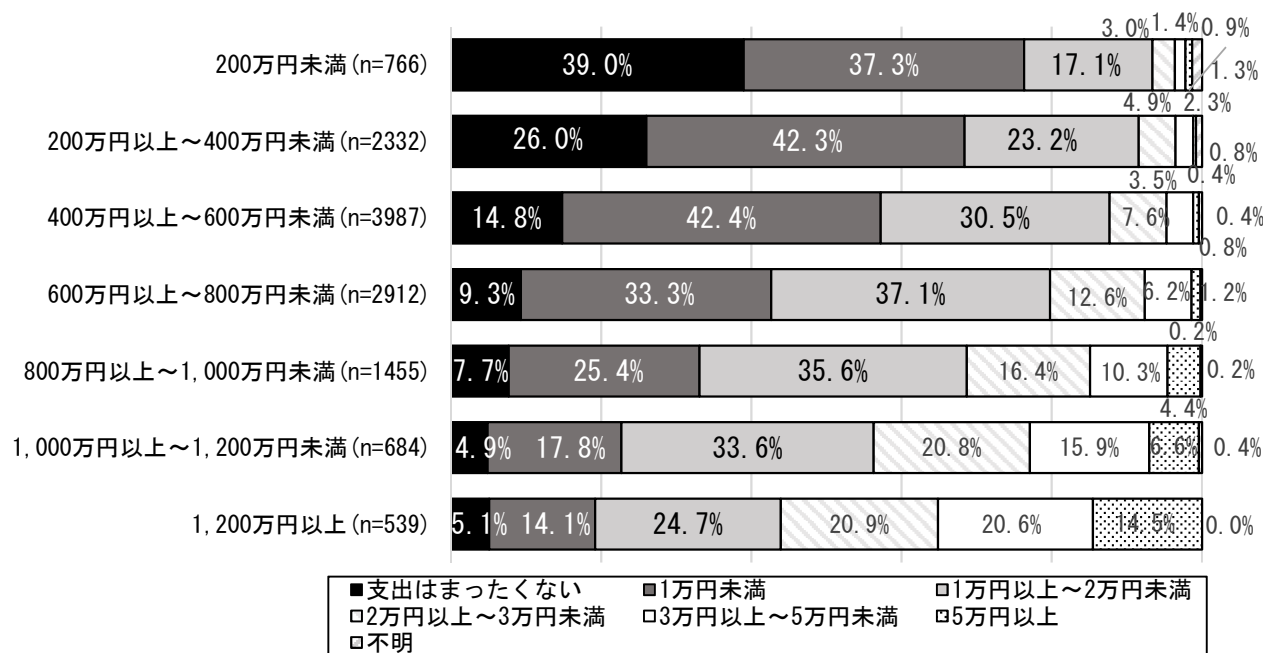
世帯収入と子どもの教育費（学校以外）との関係では、青森県と全国ともに世帯収入が多い家庭ほど子どもの教育費（学校以外）が高くなる傾向がみられる。

また、全国では、世帯収入が600万円以上の家庭では「1万円以上～2万円未満」の割合が高くなるのに対し、青森県では「600万円以上～1,200万円未満」の家庭でも「1万円未満」の家庭の割合が高くなる。

#### 世帯収入と子どもの教育費（学校以外）の関係（青森県）



#### 世帯収入と子どもの教育費（学校以外）の関係（全国）

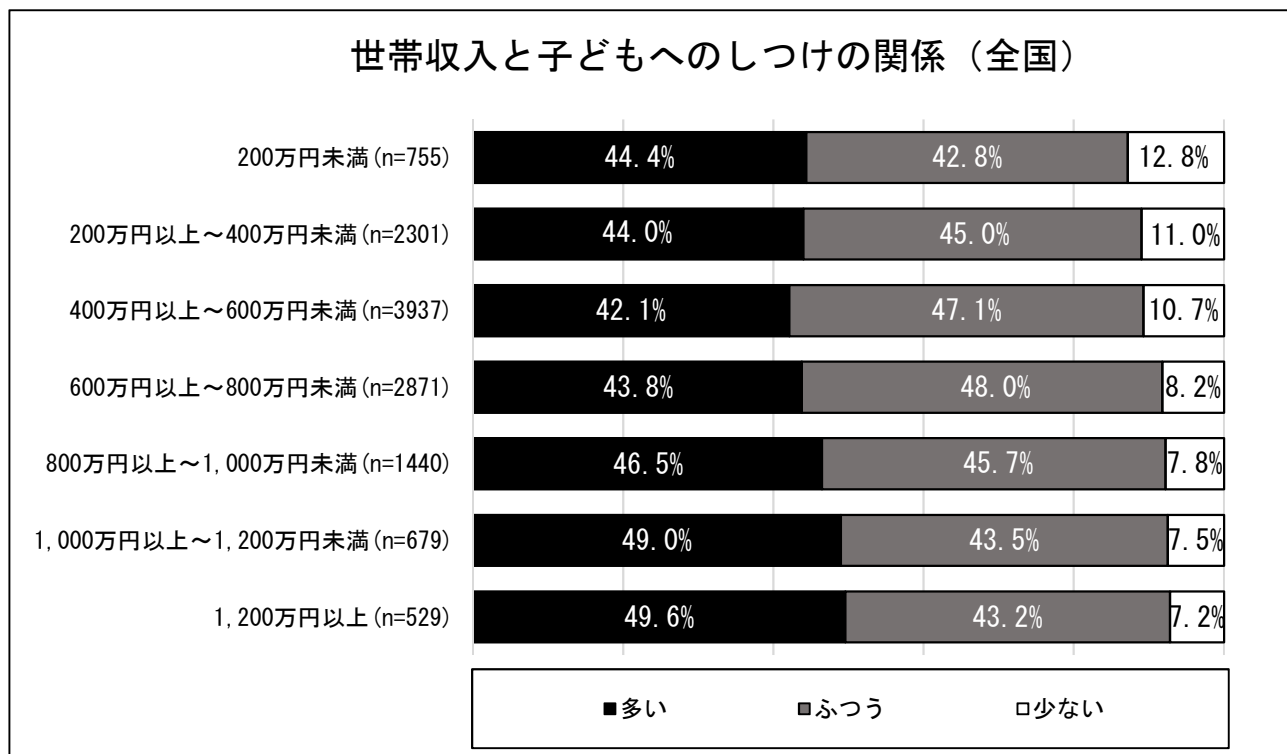
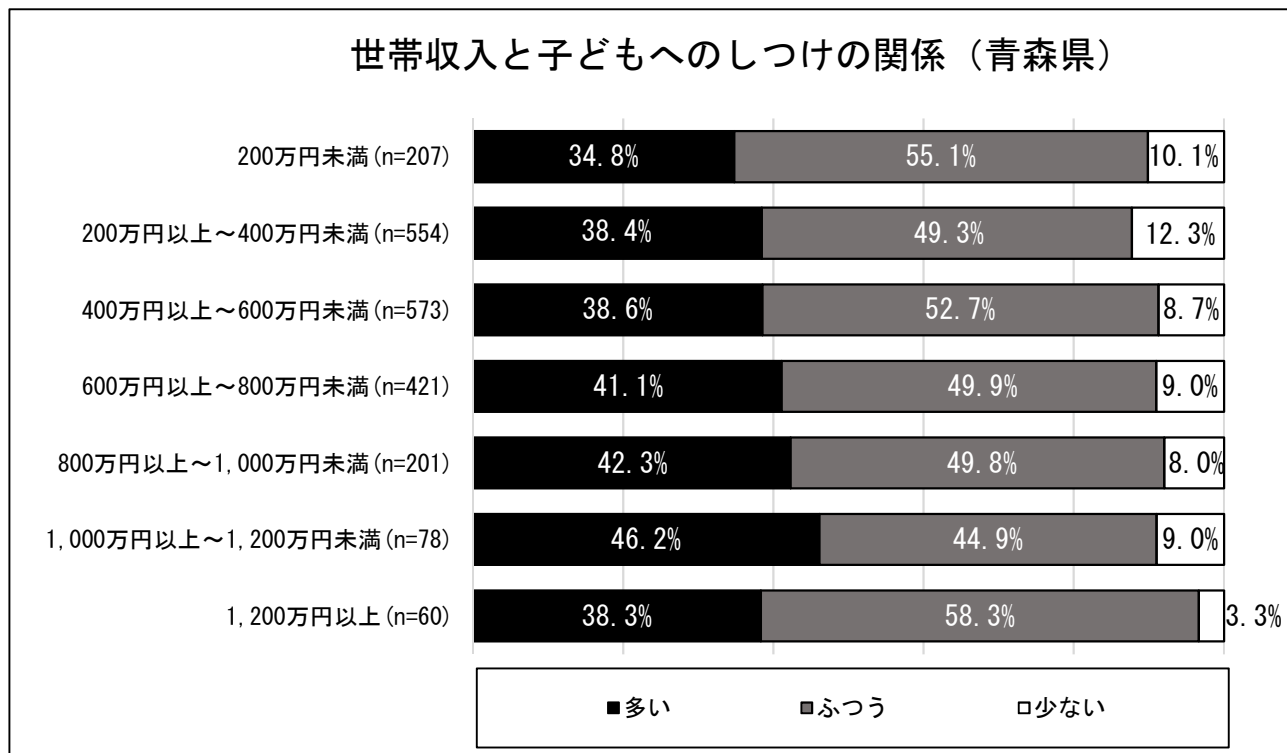




#### 4 世帯収入や子どもの教育費(学校以外)と子どもへのしつけの関係(小2・4・6㊦)

##### (1) 世帯収入と子どもへのしつけの関係

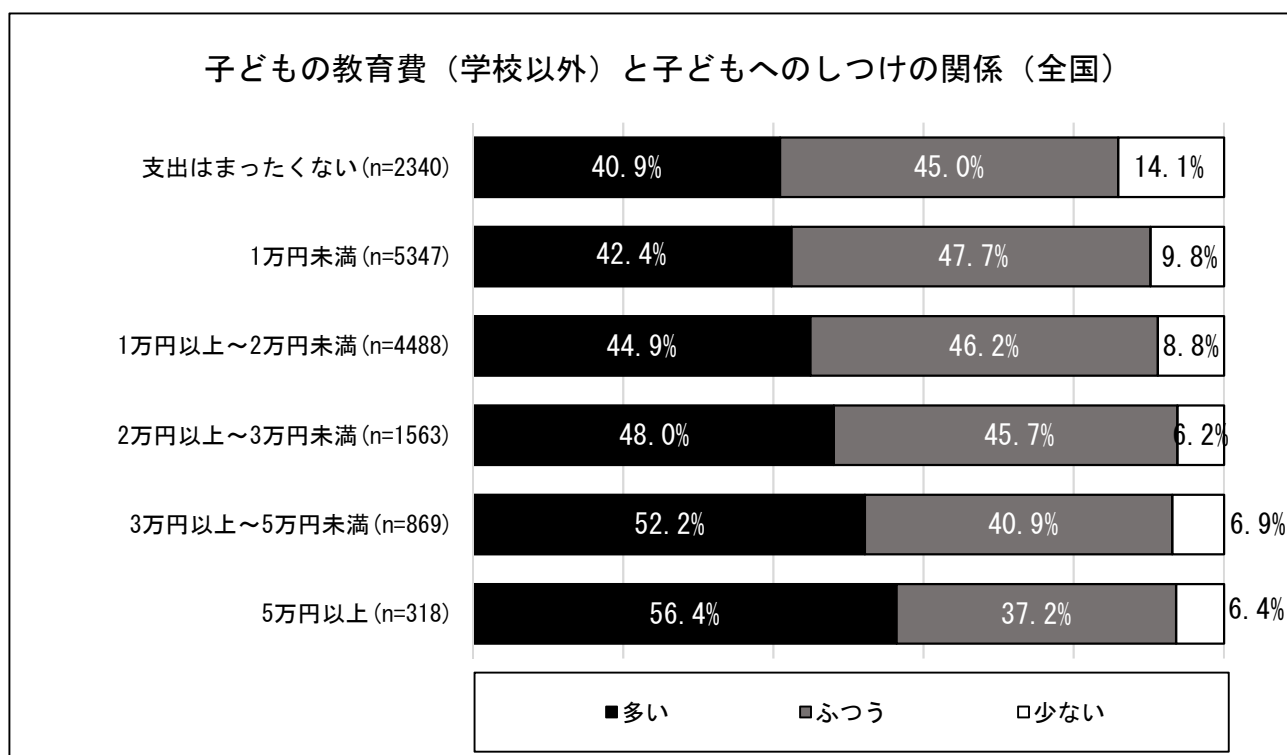
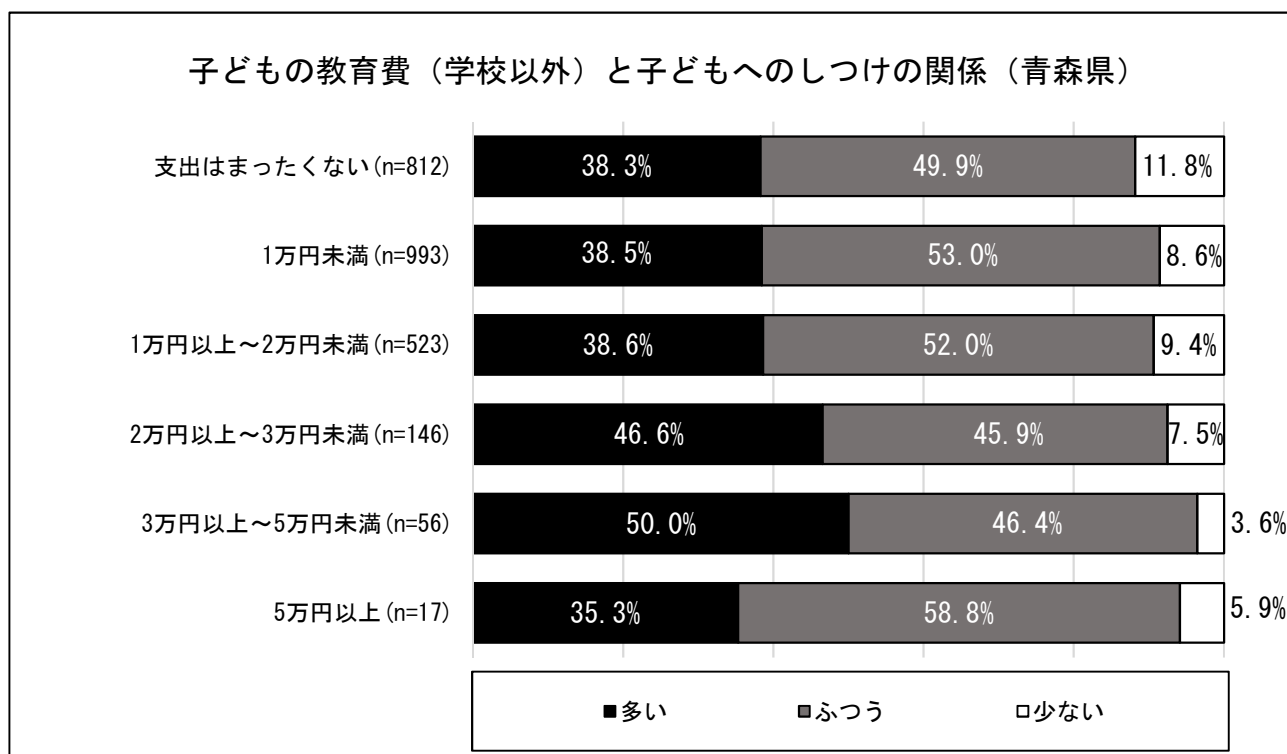
青森県は全国と比べてみると、世帯収入が高くなるにつれて、子どもへのしつけが多くなる傾向がみられる。



## (2) 子どもの教育費（学校以外）と子どもへのしつけの関係

青森県と全国ともに、子どもの教育費（学校以外）と子どもへのしつけの関係では、子どもの教育費が高い家庭ほど、子どもへのしつけが多くなる傾向がみられる。

青森県のしつけが「多い」と答えた割合をみると、「1万円以上2万円未満」（38.6%）、「2万円以上3万円未満」（46.6%）となっており「2万円」を境に割合が急激に高くなっている。



## 第5章 考察

### I あおもりの未来をつくる「人財」育成のために

弘前大学 教育学部 教授 宮崎 秀一

#### はじめに

青森県では全庁的に、県民一人ひとりが県にとっての「財（たから）」であるとの考えに立って、人材に代えて「人財」という表現を用いている。沖縄県において「命（ぬち）どう宝」（人の命は「宝」である）というのは、その歴史とともに受け継がれてきた。本県の人＝財は、生命の尊さを前提として、さらに積極的意味で、人が生き生きと生活していく姿を象徴するものといえるだろう

そしてとりわけ「あおもりの未来を切り拓く」のは「子ども・若者」であるとの認識の下、「第2次 青森県子ども・若者育成支援推進計画」が平成30年3月に策定された。同計画はその冒頭で、「次代の青森県を担う子ども・若者が、夢や希望をもちながら、心身ともに健やかに成長していくこと、そして次代を担う自立した人財として活躍し、活力に満ちた地域社会が創り上げられていくことは、県民すべての願いです。」とうたっている。

本稿では、今回の「青森県の体験活動に関する県民の実態調査」の趣旨にある「あおもりの未来をつくる人財の育成に関する生涯学習関連施策の方向性を検討することとの関連で、広く本県の子ども・若者の現状と課題について思うところを述べる。

#### 1 子どもを取り巻く環境と生活の実態 ～擬似体験の過多、現実体験の急減～

##### (1) 子どもの生活へのネット浸透の懸念

今回の調査のねらいである「体験活動」の実態に関しては、子どもの生活体験の中から自然に触れたり地域の人たちと交流したりする機会がますます失われつつあることが鮮明に浮かび上がった。それにとって代わるものとして、かつてはテレビの比重が圧倒的に大きかったが、今やその座はパソコンやスマホに奪われつつある。テレビはまだ辛うじて家族との団らんとも両立しうるが、パソコン、スマホの動画やゲームは一人で画面に向かうため、他者とのコミュニケーションは不要なのである。しかも、これも調査結果に表れたように、中学生の7割、高校生の8割が自宅に個室をもつので、まったく誰の干渉も受けず、何時間でもバーチャルな世界に浸る環境が整っている<sup>1</sup>。

しかし、こうした子どもの現象は大人社会の合せ鏡ともいえ、もはや国民の生活習慣病化している。Q18(a)「特にすることがない時、とりあえず携帯電話やスマートフォンを操作している」ことの頻度について、「よくある」と回答したのは中学2年の37.3%、高校2年では、実に63.3%にのぼる。「時々ある」を含めると、中学で63%、高校は91.2%（小学4年でも29.3%）である。大人も決して非難できないの

<sup>1</sup> 本県の子どものネット等の利用状況については、以前より詳細な意識調査と分析を行い、解説を行った。拙稿「青森県の子ども・若者の現状と未来」、『青少年の意識に関する調査』結果報告書、平成29年3月、青森県環境生活部 青少年・男女共同参画課、169-178頁。

ではないだろうか。

また 10 年前、「青少年が安全に安心してインターネットを利用できる環境の整備等に関する法律」という長いタイトルの法律が制定されたが（2008 年）、子どものネット被害事件がたびたび報道されている状況からすると、法のねらいが達成されているとは言い難い。むしろ、文科省がケータイ・スマホの学校持ち込みを解禁する方針に転じる<sup>2</sup>など、災害等への対応がねらいであるとしても、功罪について見解が分かれる中、子どもの世界にネットが入り込む流れは止まる所を知らない<sup>3</sup>。

ネットやゲームの過度な使用が脳にダメージを与えることが医学的にも検証されている一方、今や日常生活の必須アイテム化している以上、要は、大人も範を示しつつ情報モラル教育などを通じて適切な利用を促すことに尽きるであろう。

しかし、社会のネット化による子どもの体験的活動の減少傾向を許容してよいということにはならない。体験的活動が子どもの成長にとって不可欠であることは言うまでもなく、ネット化の進行を抑制するためにも、質的量的に充実していく必要がある。

## （2）体験的活動の有用性と格差

体験的活動の有用性は、第 1 に、学校教育における子どもの学習過程との視点から、体験的活動は習得した知識を実生活場面と結びつける場であり、授業で学ぶ意味を確認・体感する点にある。古くはデューイの影響を受けた大正期から戦後の経験主義教育、その後も問題解決学習、新しい学力（思考力、判断力、表現力）、生きる力、と今日まで継承されてきた教育観である。今般改訂された学習指導要領においても「主体的、対話的で深い学び」、「社会に開かれた教育課程」、「多角的、多面的」などのスローガンは体験的活動を抜きには成り立たないといってよい。

第 2 に、生涯学習の観点から重要なのは、体験的活動がもつキャリア教育的意義である。例えば、Q9 (a)「山登りやハイキング、オリエンテーリングやウォークラリー」という自然体験は、山岳ガイド、環境保全、レクリエーション・インストラクターなど、(p)「地域の清掃活動や廃品回収などに参加すること」などの社会体験は、自治体行政、資源リサイクル事業、など、様々な職業に目を向けさせることだろう。

この点は、学校カリキュラム中のキャリア教育にも当てはまることであるが、子どもの進路選択は本来家庭教育の範疇であり、何より子ども自身意思によって自己決定されるべきものである。確かに学校教育活動の中でも一定の体験活動が提供されるが、各校種・学年の年間指導計画の枠内で実施する活動には自ずと限界がある。結局のところ、家庭間における子どもの体験格差がキャリア選択の幅の広狭や進路選択の意欲を左右する。

舞田（2017）は総務省の社会生活調査の分析から、「社会階層」別に「小学生の体験格差」が歴然としていると指摘する<sup>4</sup>。そして「『①高い社会階層→②豊かな体験→

<sup>2</sup> 朝日新聞 2019 年 2 月 20 日

<sup>3</sup> 近年、同じく賛否が分かれる話題として、e-スポーツの急速な拡大があり、これもスポーツのジャンルに入るか単なるゲームか、学校の部活動として認知すべきか、など論議が起こっている。

<sup>4</sup> 舞田敏彦『データで読む教育の論点』147-149 頁。世帯別所得をⅠ（年収 300 万円未満）から 6 段階に分けると、ⅠとⅢ（500 万円以上）やⅣ（700 万円以上）との対比でも、テニス、スキー・スノボ、などのスポーツ活

③確かな学力→④高い教育・地位達成』というループ」の存在が見られるという。今回の調査した体験的活動の経験頻度も、保護者の時間的、経済的余裕の有無に規定され、同じ傾向が伺えると推測される。今後分析を試みたいと考える。

## 2 子どもの健やかな成長の保障 ～子どもの権利の視点から～

### (1) 自己肯定感、自尊感情

社会の未来を担う人財である子どもの健全育成が達成されているかを知る上で、子ども自身の自己肯定感や自尊感情の高低は、主観的要素を含みつつも、一つの基本的な評価尺度と見ることができる。

本調査では、自己肯定感に対応すると見なしうる Q8 (d)「今の自分が好きだ」に当てはまると答えたのは、小学4年生が、全面肯定 23.8%、一部肯定が 29.9%、計 53.7%。中学2年生は、同じく 10.7%、29.1%、計 39.8%。高校2年生が、9.3%、27.7%の計 37.0%であった。自尊感情に相当するであろう質問 (e)「自分には自分らしさがある」については、小4で全面肯定 44.3%、一部肯定 31.4%、計 75.7%。中2は同じく 29.8%、38.3%、計 68.1%。高2は 22.4%、41.8%、計 64.2%となる。結果は類似の調査同様、校種が上げるにつれて、自己肯定感、自尊感情ともに下がる傾向が見られた。中学以降は身体的成長の個体差、思春期特有の心理、学校の教育内容の増加、成績の競争圧力、特に高校では進路選択などで家族や友人との葛藤が蓄積せざるを得ないことが、反映していると思われる。

今回の結果では、むしろ、小4の児童が、(d)で自分が好きだとは「全く思わない」に 17.0%と、中2の 21.2%、高2の 18.7%と大差なく高めであり、(e)の自分には自分らしさがある、についても「全く思わない」が、小 8.0%、中 8.4%、高 9.1%と予想外に高かったことが目立った。小学段階での自己肯定感や自尊感情の低さは気になるところであり、課題として他の項目とのクロス分析による解明したい。

自己肯定感の向上は大きな課題であるが、自尊感情において中学生・高校生で6割以上、小学生で7割以上が「自分には自分らしさがある」と肯定的に回答していることからすると、今回の調査では本県における子どもはおおむね健全に育っていると言えてよいであろう。

### (2) 子どもの健全育成と子どもの権利保障

次に、子どもの健全育成を考える上で、子どものもつ権利の保障・充足という視点から検討してみたい。

2019年は国連が子どもの権利条約(児童の権利に関する条約)を採択して30年、我が国が批准して25年を迎える。そこで謳われている権利は、①生命を保障され生きる権利、②様々な害悪から守られる権利、③健やかに育つ権利、④意見を表明し社会に参加する権利に分類される<sup>5</sup>。同条約の草案作成にかかわったユニセフは、各国

---

動、美術鑑賞、クラシック音楽鑑賞、楽器演奏など芸術的活動、将棋、読書など趣味活動のすべてにおいて、格差が存在する。

<sup>5</sup> 中学校社会科の必修事項として教科書にも明記されている。(例)『新編新しい社会 公民』東京書籍、2016年、45頁。

に子どもの権利を基盤とした政策展開（right-based approach）を提唱している。

我が国における子ども・若者の健全育成施策に関していえば、「健全育成」概念には、前述のネット・スマホのデメリットなどの害悪からの保護という点で、②に最も近いイメージがある。しかし、よりポジティブな視点からは、（戦争や児童虐待等との関連から、①は当然として）、③および④を含めた健全育成のとらえかえしが必要と考える。

特に③は、国内法的には憲法が保障する「その能力に応じてひとしく教育を受ける権利」（第 26 条）の中に読み込むことができる。子どもが健全に成長する上で、教育を受ける＝学ぶことは不可欠であるが、これを形式的なく教育機会の均等と理解してはならない。権利条約は「児童の人格、才能並びに精神的及び身体的な能力をその可能な最大限度まで発達させること。」（第 29 条第 1 項 (a)）としていることに対応して、＜すべての子どもが現在の能力発達の状況と学習ニーズにふさわしい教育を保障される＞という解釈こそが条約の基本理念である「子どもの最善の利益」（第 3 条）にも叶う。

実際、2009 年に成立した、子ども・若者育成支援推進法は、子どもの権利条約の理念を踏まえて制定されている。同法は、その目的を「日本国憲法及び児童の権利に関する条約の理念にのっとり、・・・子ども・若者の健やかな育成、子ども・若者が社会生活を円滑に営むことができるようにするための支援その他の取組について」定めると明記しており（第 1 条）、さらに基本理念として、「子ども・若者について、個人としての尊厳が重んぜられ、・・・その意思を十分に尊重しつつ、その最善の利益を考慮すること」（第 2 条第二号）を掲げている。

先の自己肯定感、自尊感情に関する回答は、子どもの成長する権利の充足状況を包括的に推知させるものだったといえる。今回の調査項目からは他の個別的権利保障の状況を判断できる材料は乏しいが、以下の諸点を例として上げる。

#### ①学校での学習を通じて知識を得、理解する権利

Q8 (c) の「勉強は得意な方だ」に当てはまるか、の問に対し、「とても思う」・「少し思う」の合計が、小学 4 年 48.4%、中学 2 年 29.3%、高校 2 年 22.4%となっており、充足度は低いと言わざるを得ない。ただし、Q10「あなたの得意な教科は」との問いに対しては、教科によってかなりバラつきもある。

#### ②休息、余暇、レクリエーション・遊びの権利<sup>6</sup>

休息する権利が保障されているかに関連して、Q13「特に運動やスポーツもしないのに、ふだん疲れていると感じることはありますか。」に対する「いつも」・「時々」の合計は、小 32.1%、中 51.6%、高 62%と、中学・高校で高い。原因として都市部で良く指摘される学習塾通いによる多忙さについては、Q21（中 2 で 27%、高 2 で 12.4にとどまる）、習い事についても Q22（中 2 が 27.6%、高 2 が 8.8%）を見る限り相関性はなさそうである。部活動、特に運動部への所属割合が高い（Q20：中 2 で 73%、高 2 が 60.2%）こととの関連は別途分析が必要である。

<sup>6</sup>「締約国は、休息及び余暇についての児童の権利並びに児童がその年齢に適した遊び及びレクリエーションの活動を行い並びに文化的な生活及び芸術に自由に参加する権利を認める。」（子どもの権利条約 第 31 条第 1 項）

余暇における遊びやレクリエーションへの権利は、テレビ、DVD、テレビゲーム、マンガ本、スマホの利用など（Q12）の全てについて、機会が奪われることはないという点では充足されているが、現状では、逆に過剰な利用による弊害からの保護が問題になろう。

### ③文化的・芸術的活動等の権利<sup>7</sup>

子どもの権利条約は、本調査の中核を占める体験的活動も、子どもにとって重要な権利として明記している。今回は多様な体験活動について質問を設定しており、結果にも幅があった（Q9（f）「昆虫や水辺の生物」の採取：中2で29.1%、高2は19.6%、（h）「星や雲の観察」：中2は38.4%、高2は36.4%、（k）「米や野菜を植えたり育てたりすること」：中2が31.5%、高2が20.8%など）。また学校の部活動（文化部）への参加は、一定程度見られる（Q20：中2で23%、高2で26.1%）である反面、子ども会など校外の青少年団体への参加率は低い（Q19：中2は71.3%、高2は86.4%が所属なし）。

## 3 子ども・若者育成支援に向けて～課題と提言～

今回の調査に関連していくつか課題を取り上げ、個人的に提言を述べたいと思う。

### （1）成年年齢の引き下げと市民感覚の向上

公職選挙法等の改正により、参政権年齢が18歳以上に引き下げられ、すでに本県においても何度か国政選挙および地方選挙が行われている。国政選挙では投票率がかって全国最下位だったこともあり、選挙管理委員会では、これを機に高校等で投票の啓発に努めている。筆者もゼミ所属学生と県選管の依頼で、数回高校での模擬選挙に参加した。

今回の調査との関連では、Q7（m）「国や地域の政治や選挙について関心がある」かどうか、の間について、積極的肯定が小4で13.6%、中2が11.3%、高2が9.1%、消極的肯定は、小4が19.5%、中2が24.0%、高2で22.1%であった。高校生は実に合計で31.2%と3人に1人に満たず、中学生の35.3%、小学生の33.1%をも下回る危機的状況である。これは、続く（n）「新聞やテレビ、インターネットで、その日のニュースを読んだり見たりする」かの回答（積極的肯定：小41.1%、中37.1%、高23.1%）と関連し、Q10の「得意な教科」に対する回答（小：社会38.2%、中：社会29.7%、高：公民4.9%）に如実に表れている。推測の域を出ないが、社会科、公民科はいまだに教科書中心、暗記型学習のイメージが強いのではないだろうか。

特に公民分野では、日々変化する政治情勢や様々な社会的事件・事象が生きた教材として新聞紙上に満載である。本調査からは、あらためて子どもの主権者意識の向上が、本県の重大な課題であることが判明した。学校においては、意見の分かれるテーマについて討議するなど、社会科こそが新学習指導要領で強調されている「主体的、対話的で深い学び」の実践の場として期待されるであろう。家庭においても政治・社会問題を積極的に話題にすることによって、市民感覚、主権者意識を高めていく必要

<sup>7</sup> 「締約国は、児童が文化的及び芸術的な生活に十分に参加する権利を尊重しかつ促進するものとし、文化的及び芸術的な活動並びにレクリエーション及び余暇の活動のための適当かつ平等な機会の提供を奨励する。」（同条約 第31条第2項）これは、まさしく子どもに体験的活動を保障すべきことを謳ったものといえる。

がある。今後は民法改正に伴い 2022 年からは民事成年も 18 歳に引き下げられる。中学生、高校生 1・2 年のうちから、消費者など契約当事者として、家庭においても親権を解かれ自立した法主体となることへの自覚が求められる。学校と家庭にはそれへの備えと覚悟が問われる。そのためにも多様な体験的活動を提供することが一層求められるとあってよい。

### (2) 家庭の生活環境の格差に対する大学との連携による支援

近年、子どもの貧困対策の推進に関する法律が成立し (2013 年)、学習塾など学校外の学習機会を得られない家庭の子どもへの支援などが施策化されつつある。

筆者が顧問を務める学生サークルも、児童福祉施設の入所児童 (小・中学生) や一人親家庭の子ども (小・中・高) の教科学習支援を中心としたボランティア活動を行っている。これらの子どもは、経済的理由や家族に時間的余裕がないことなどから、学校行事以外で自然体験・社会体験的活動を経験することは困難であることが多い。学習支援に加えてミニキャンプや花見、クリスマス会などの活動も可能である。子どもたちにとって大学生は自分たちの兄や姉世代であり、親や学校教員とは違って素直に指導が届くいわゆるナナメの関係である。

前述の子ども・若者育成支援推進法 8 条に基づき政府が策定した「子ども・若者育成支援推進大綱」(平成 28 年 2 月) では、基本的な施策の「4 子ども・若者の成長を支える担い手の養成 (1) 地域における多様な担い手の養成」の中で、「(同世代又は年齢の近い世代による相談・支援)」との見出しの下で以下のように記述している。

「同世代又は年齢が近く価値観を共有しやすい学生等によるボランティアの導入を推進し、相談・支援を充実させる。非行など問題を抱えた少年の自立を支援する青年ボランティアの活動を促進するために必要な協力を行うとともに、非行少年を生まない社会づくりに資する学生ボランティアの能力向上のための研修等の実施を促進する。」

人的資源としては大学生を活用する枠組みを構築することで充足可能である。あとは予算面での行政の支援が求められる。

### (3) 子どもの自治・自律への支援

前述した子どもの権利条約の第④の権利領域は、子どもを保護の対象としてのみとらえるのではなく、権利行使の主体として社会に参加し意見を表明する権利を保障する。憲法上は、子どもも一国民である以上「個人として尊重される」こと (第 13 条前段)、「幸福追求に対する国民の権利」について「最大の尊重」を必要とされること (同条後段) から導かれる自己決定権、表現の自由 (同 21 条) に根拠を見出すことができる。

本調査では本県の子どもは一定の規範意識をもっている傾向が読み取れる (Q5 (g) 「バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずること」は、小学生で 29.9% だが、中学生は 59%、高校生は 66.3%。(h) 「友達が悪いことをしていたら、やめさせること」は、小 59.8%、中 63.5%、高 65.5%である)。また、自律性、主体性についても高い自覚をもった行動ができる (Q7 (a) 「自分の思ったことをはっきり



言う」：小4は62.3%、中2は68.2%、高2が69.7%、(b)「周りの人に迷惑をかけずに行動する」：小73.5%、中75.8%、高78.8%、(c)「自分でできることは自分でする」：小87.6%、中89.5%、高91.9%)。

子どもは多くの点で未熟なだけに大人による保護と支援が必要である。しかし、同時に育ちつつある自律性、主体性を認め促すことによって大人への成長を後押しすることも必要である。前述した18歳成年制への移行を機に、従来の子ども観・教育観を見直し、今日、最も意識の転換を求められるのは我々大人の側ではないだろうか。

## Ⅱ 子どもの自然体験参加や親のしつけを促す要因～保護者調査の結果から～

青森大学 社会学部 教授 柏谷 至

### 1 はじめに

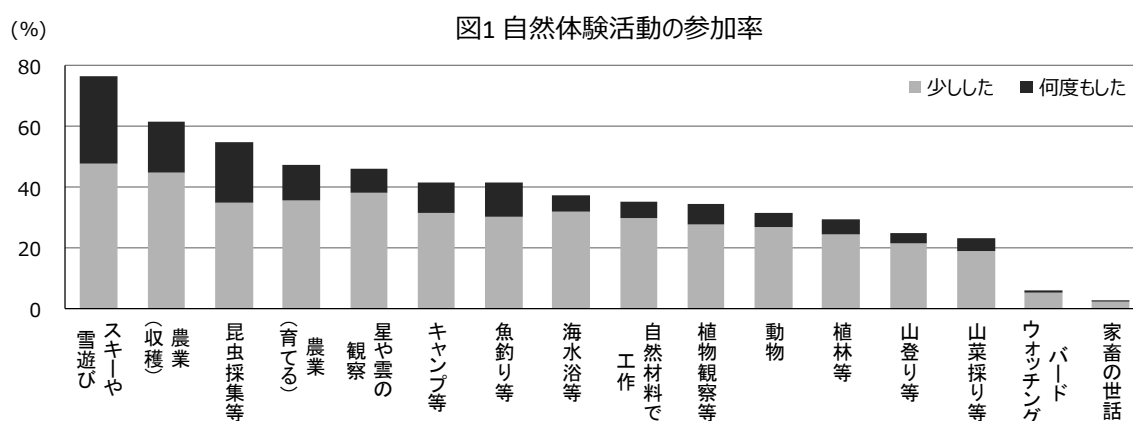
本節では、「青少年の体験活動に関する県民の実態調査」のうち、県内の小学校2・4・6年生の保護者を対象とする質問紙調査（以下、「保護者調査」）の結果から、子どもの自然体験活動への参加やしつけに対する親の行動や態度を測定し、それに影響を与えている要因について考察する。

本報告書でこれまで触れてきたとおり、子どもの自己肯定感や道徳観・正義感、自立的行動習慣の形成には、子どもたちの「体験」が大きな影響を与えている。また先行する調査では、保護者がしつけに力を入れている家庭ほど、子どもの自己肯定感や道徳観・正義感等が高くなると指摘されている<sup>1</sup>。

それでは、子どもたちを体験活動に参加させたり、子どもたちへのしつけを積極的に行ったりする保護者側の要因とは何だろうか。体験活動への参加や家庭でのしつけを充実させるためには、どのような方策が有効だろうか。本節では、保護者調査の回答項目の分析を通じて、こうした課題への接近を試みる。

### 2 自然体験活動への参加

保護者調査では問6で、平成30年4月から回答時点までの約1年間に子どもの自然体験活動に参加したか否かを尋ねている。図1は、16の活動種類別に参加率（「何度もした」「少しした」を合計した割合）の高い順に並べたものである。



各項目の相関は高く、ある活動に子どもたちを積極的に参加させている親は、別の活動にも積極的な傾向がある。この16項目に対して因子分析<sup>2</sup>を行ったところ、魚釣

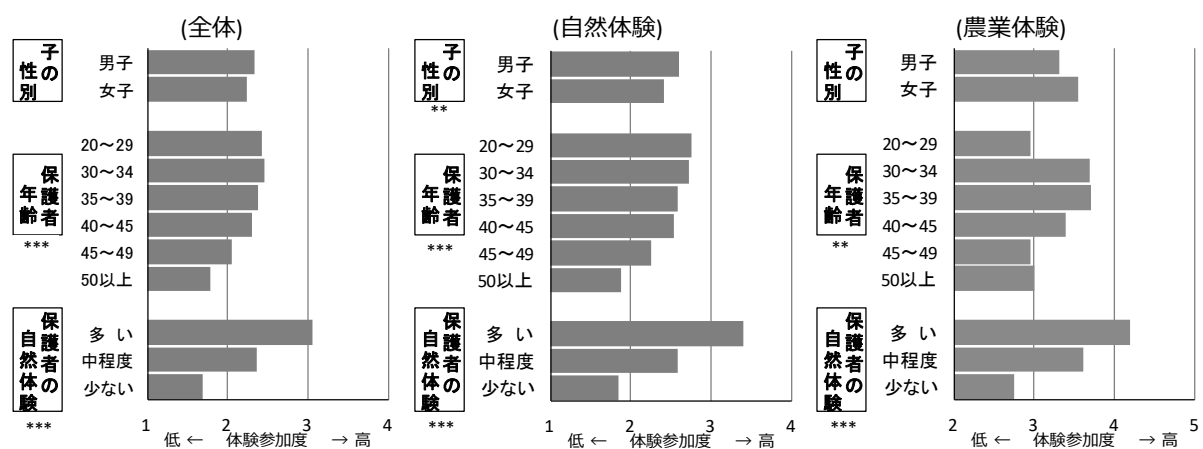
<sup>1</sup> 国立青少年教育振興機構「子どもの自己肯定感や道徳心は保護者の関わり次第で大きく変わる!～『青少年の体験活動等に関する実態調査(平成26年度調査)』結果の概要～」2016年5月2日付プレスリリース(2018年1月29日改訂)。国立青少年教育振興機構Webサイトより。

<sup>2</sup> 因子分析は、複数の回答項目に共通した潜在変数を仮定し、項目間の関連性を明らかにする統計分析手法である。今回の分析では因子抽出には主因子法を、軸の回転にはプロマックス回転を用いた。

りや昆虫採集、海や川で泳ぐなど、狭い意味での「自然体験活動への参加」と、米・野菜・果物を育てたり収穫したりする「農業体験への参加」という2つの因子が抽出された。そこで、自然体験活動への参加度を「自然体験」「農業体験」および項目全体の3種類について尺度化した<sup>3</sup>。それぞれの尺度は、数値が大きければ、保護者が自分の子どもを自然体験活動に積極的に参加させていることを、小さければ自然体験活動への参加に消極的であることを示している。

自然体験活動への参加は、どのような要因に影響を受けているのだろうか。まず、保護者や子どもの属性ごとに回答者をグループ化し、自然体験活動への参加度の平均値を比較した結果を図2に示す<sup>4</sup>。狭義の自然体験では男子を女子よりも積極的に参加させていること、保護者が若いと参加度が高く、年齢が高くなるにつれて参加度が低くなることが分かる。

図2 保護者・子どもの属性と自然体験活動参加



また、保護者自身の普段の自然体験（問12-1）を同様に尺度化<sup>5</sup>し、子どもの自然体験参加度との関連を見ると、日常生活の中で自然に触れている保護者のグループほど、自分の子どもにも積極的に自然体験をさせていることが見て取れる。親自身が体験活動に関心を持ち、子どもと一緒に体験することの大切さを示唆しているデータである。

次に図3では、世帯収入（問14）や教育費（問13 学校以外の教育にかける1ヶ月の平均支出）と自然体験活動への参加度との関連を示した。いずれの指標についても、世帯収入が高い層・教育費支出が大きい層ほど自然体験活動への参加度が高く、収入

<sup>3</sup> 尺度は、各項目の回答を「何度もした」=2点、「少しした」=1点、「しなかった」=0点として合計した後、合計点を10点満点に換算して作成した。各尺度に対応する回答項目、および尺度を構成する項目の一貫性を表す信頼性係数（クロンバックの $\alpha$ ）は以下の通り。

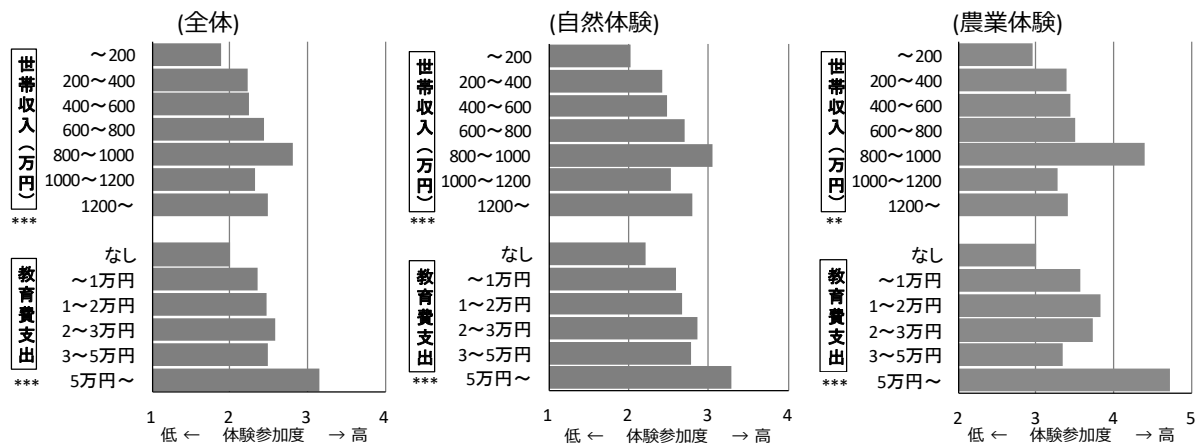
- ・全体…全項目（16項目、 $\alpha = 0.822$ ）
- ・自然体験…a 山登りなど、b 海や川で泳ぐなど、c 動物とふれあう、d キャンプ、e スキーや雪遊び、f 昆虫採集など、g 植物・岩石の観察、i 星や雲の観察、j 山菜などの採取、k 魚釣りなど、l 自然の材料で工作（11項目、 $\alpha = 0.777$ ）
- ・農業体験…n 米や野菜を植えたり育てたりする、m 米や野菜や果物などを収穫する（2項目、 $\alpha = 0.848$ ）

<sup>4</sup> これ以降、平均値の差は一元配置の分散分析を用いて統計的検定を行っている。図では、有意水準5%で差が認められるときには「\*」、1%のとき「\*\*」、0.1%のとき「\*\*\*」を、項目名（枠で囲んだ部分）の下に表示した。

<sup>5</sup> 尺度には問12-1の9項目すべてを用い、各項目の回答を「何度もある」=2点、「少しある」=1点、「ほとんどない」=0点として合計した後、合計点を10点満点に換算して作成した。信頼性係数（クロンバックの $\alpha$ ）は0.864となった。

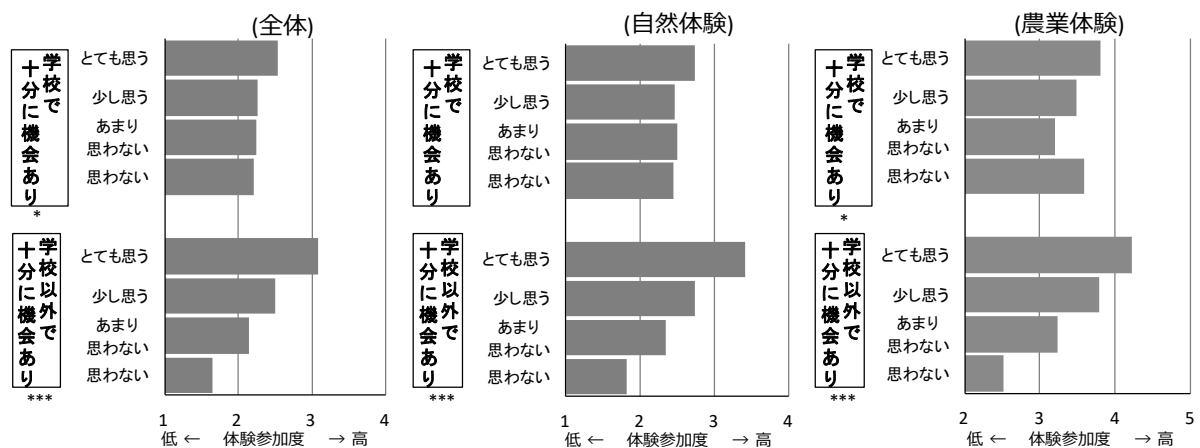
が低い・教育費支出が小さい層ほど参加度が低くなっている。自然体験活動への参加はその費用の支払い能力によって決まっていると見てよいのだろうか。この論点については、のちほど「考察」で議論したい。

図3 世帯収入・教育費支出と自然体験活動参加



最後に、子どもの体験活動についての意見に関する質問（問 9）から、体験機会の十分さについての評価と自然体験活動への参加度との関連を見てみよう（図 4）。学校以外の場で体験の機会が十分にあると評価している人ほど、子どもを自然体験活動に積極的に参加させていることが分かる。

図4 体験機会の評価と自然体験活動参加



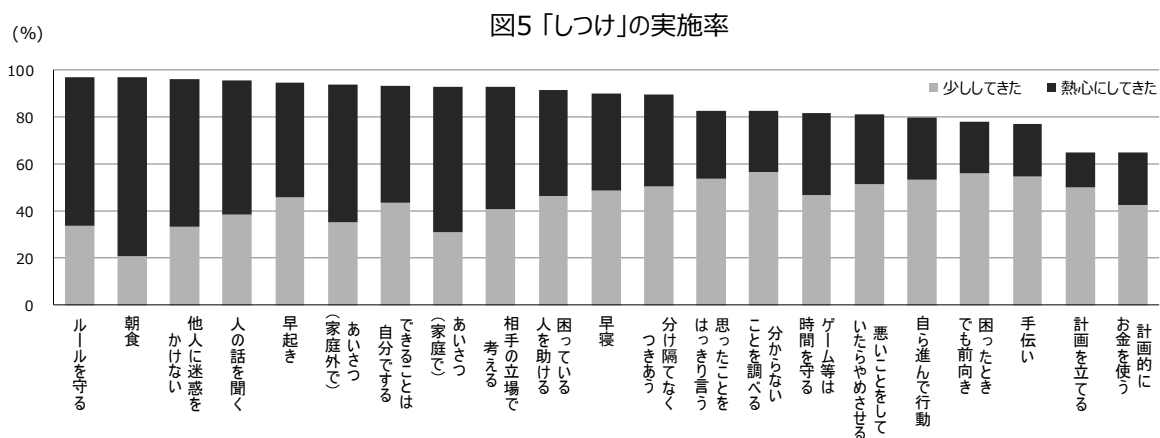
### 3 しつけ

子どものしつけについては、保護者調査の問 10 で、21 種類の行動・習慣をどのくらい身に付けさせようとしてきたかを問うている。各項目の「熱心にしてきた」「少ししてきた」という回答の割合を図 5 に示す。これら 21 項目についても因子分析を行った結果、次に挙げる 4 つの因子が抽出された。

- ・第 1 因子…「相手の立場になって考える」「ルールを守って行動する」「人の話をきちんと聞く」など、他者との「協調」に関するしつけと解釈できる因子

- ・第2因子…「先のことを考えて計画を立てる」「困った時でも前向きに取り組む」「人から言われなくても進んで行動する」など、行動の「自律性」に関するしつけと解釈できる因子
- ・第3因子…「夜更かしをしないで早く寝る」「起きなければいけない時間に起きる」「毎朝朝食をたべる」など、「規則的生活習慣」に関するしつけと解釈できる因子
- ・第4因子…「家で」および「近所の人や知り合いの人」に対する、「あいさつ」に関するしつけと解釈できる因子

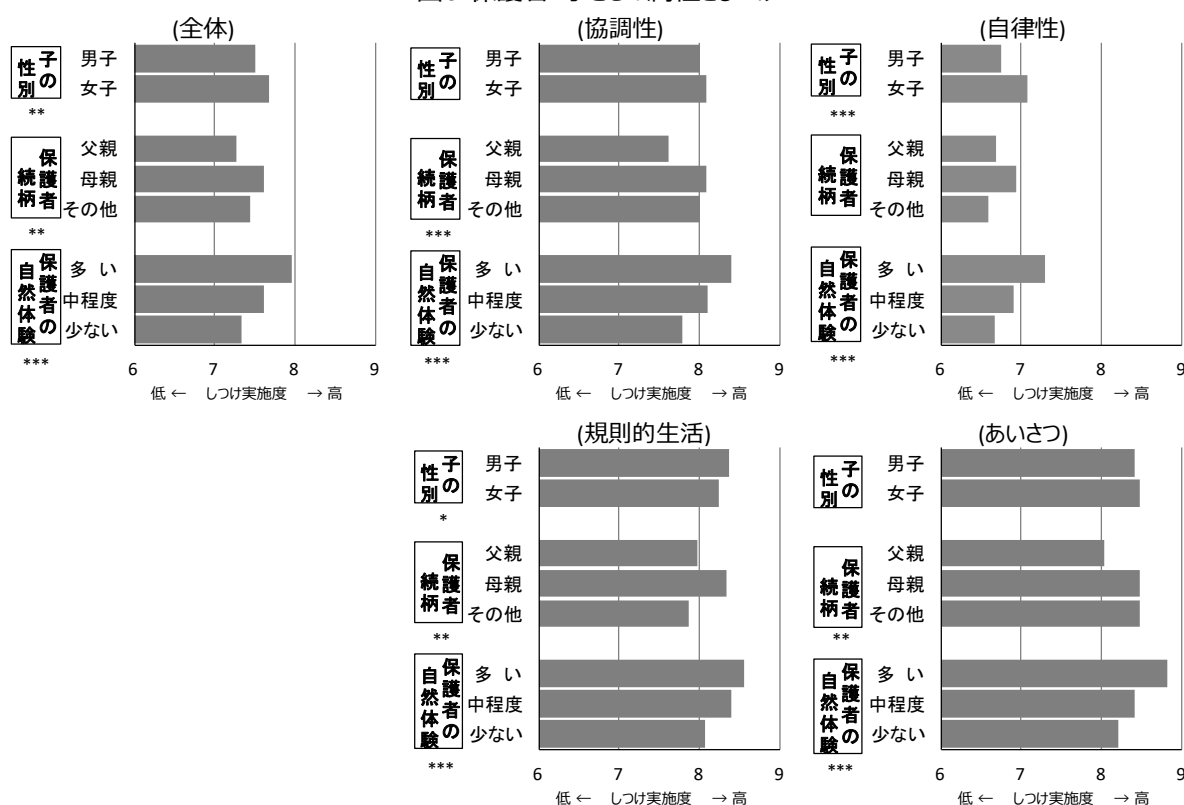
そこで「しつけ」の実施度については、しつけ「全体」および「協調性」「自律性」「規則的生活習慣」「あいさつ」の下位尺度を作成した<sup>6</sup>。それぞれの尺度は、数値が大きければ保護者がその分野のしつけを熱心に行ったことを、小さければあまり行わなかったことを示している。



<sup>6</sup> 尺度は、各項目の回答を「熱心にしてきた」=3点、「少ししてきた」=2点、「あまりしてこなかった」=1点、「全くしてこなかった」=0点として合計した後、合計点を10点満点に換算して作成した。各尺度に対応する回答項目および信頼性係数(クロンバックの $\alpha$ )は以下の通り。

- ・全体…b 起きなければならない時間に起きる、d 手伝いをする、f 家であいさつをする、g 近所・知り合いの人にあいさつをする、h ゲーム等は時間を守って遊ぶ、i 思ったことをはっきり言う、j 他人に迷惑をかけずに行動する、k できることは自分でする、l 分からないことを調べる、m 先のことを考えて計画を立てる、n 困った時でも前向きに取り組む、o 人から言われなくても進んで行動する、p 分け隔てなくつきあう、q 人の話をきちんと聞く、r 困っている人を助ける、s 相手の立場で考える、t ルールを守る、u 悪いことをしていたらやめさせる (18項目、 $\alpha=0.898$ )
- ・協調性…j 他人に迷惑をかけずに行動する、p 分け隔てなくつきあう、q 人の話をきちんと聞く、r 困っている人を助ける、s 相手の立場で考える、t ルールを守る、u 悪いことをしていたらやめさせる (7項目、 $\alpha=0.864$ )
- ・自律性…i 思ったことをはっきり言う、k できることは自分でする、l 分からないことを調べる、m 先のことを考えて計画を立てる、n 困った時でも前向きに取り組む、o 人から言われなくても進んで行動する (6項目、 $\alpha=0.835$ )
- ・規則的生活習慣…a 早く寝る、b 起きなければならない時間に起きる、c 毎朝朝食を食べる (3項目、 $\alpha=0.697$ )
- ・あいさつ…f 家であいさつをする、g 近所・知り合いの人にあいさつをする (2項目、 $\alpha=0.662$ )

図6 保護者・子どもの属性としつけ



保護者や子どもの属性としつけ実施度との関係を図6に示す。子どもの性別で比較すると、男子よりも女子に対してしつけ全体や自律性に関するしつけが積極的に行われている一方、規則的生活に関するしつけは男子に対しての方が、より積極的に行われている。保護者の続柄別では、回答者の母親の場合には、父親やその他（年齢から見て多くは祖父母と思われる）よりも積極的にしつけに関わっている。また、自然体験活動の場合と同様に、保護者自身の自然体験が多いほど、子どものしつけに積極的であることもわかる。他方、自然体験の場合には関連性が高かった保護者の年齢に関しては、統計的に有意な影響関係が見られなかった。

世帯収入や教育費支出との関連を見ると、世帯収入としつけとの間にはあまり明確な関係が見られないのに対し、教育費支出が多い層はしつけに積極的で、少ない層は消極的であるという傾向が見られる（図7）。また、体験機会の十分さについての評価としつけ実施度との関連（図8）については、学校・学校以外でも体験の機会が十分にあると考えている保護者ほどしつけに積極的であり、そうした機会が少ないと考えている保護者はしつけに消極的であるという結果が得られた。

図7 世帯収入・教育費支出としつけ

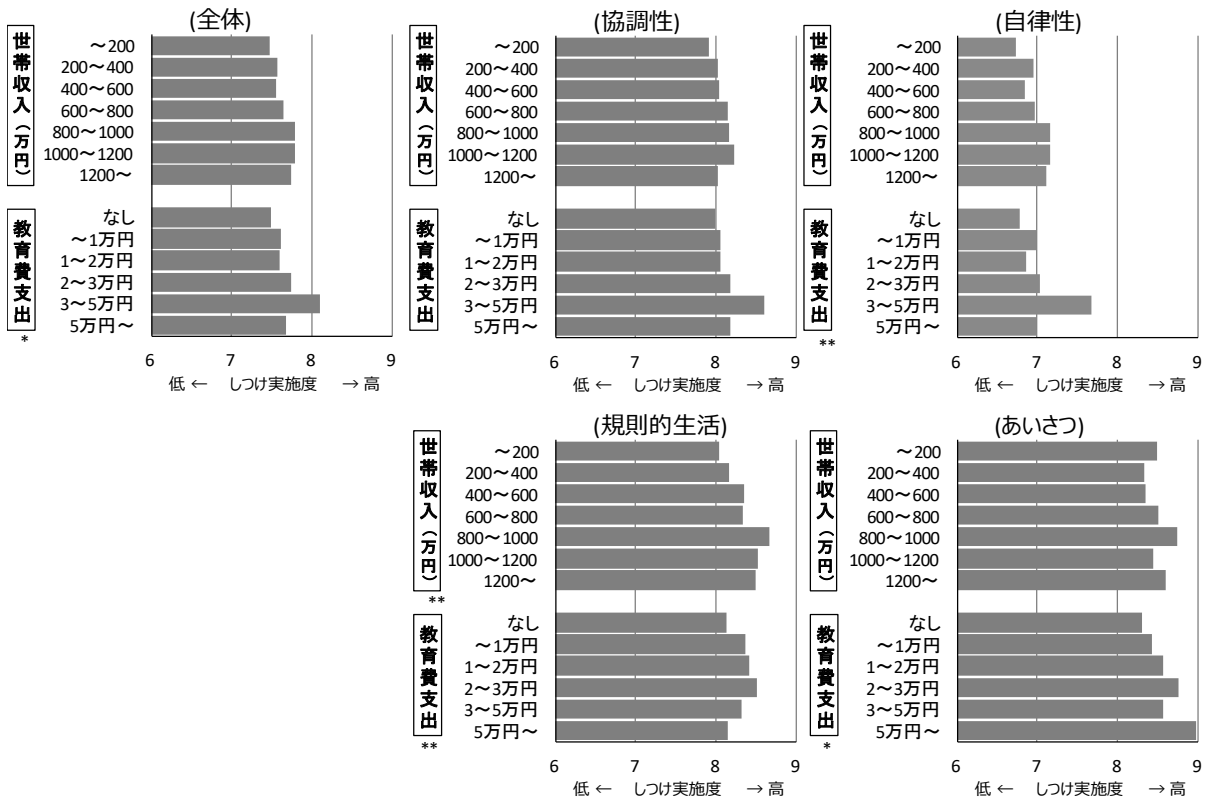
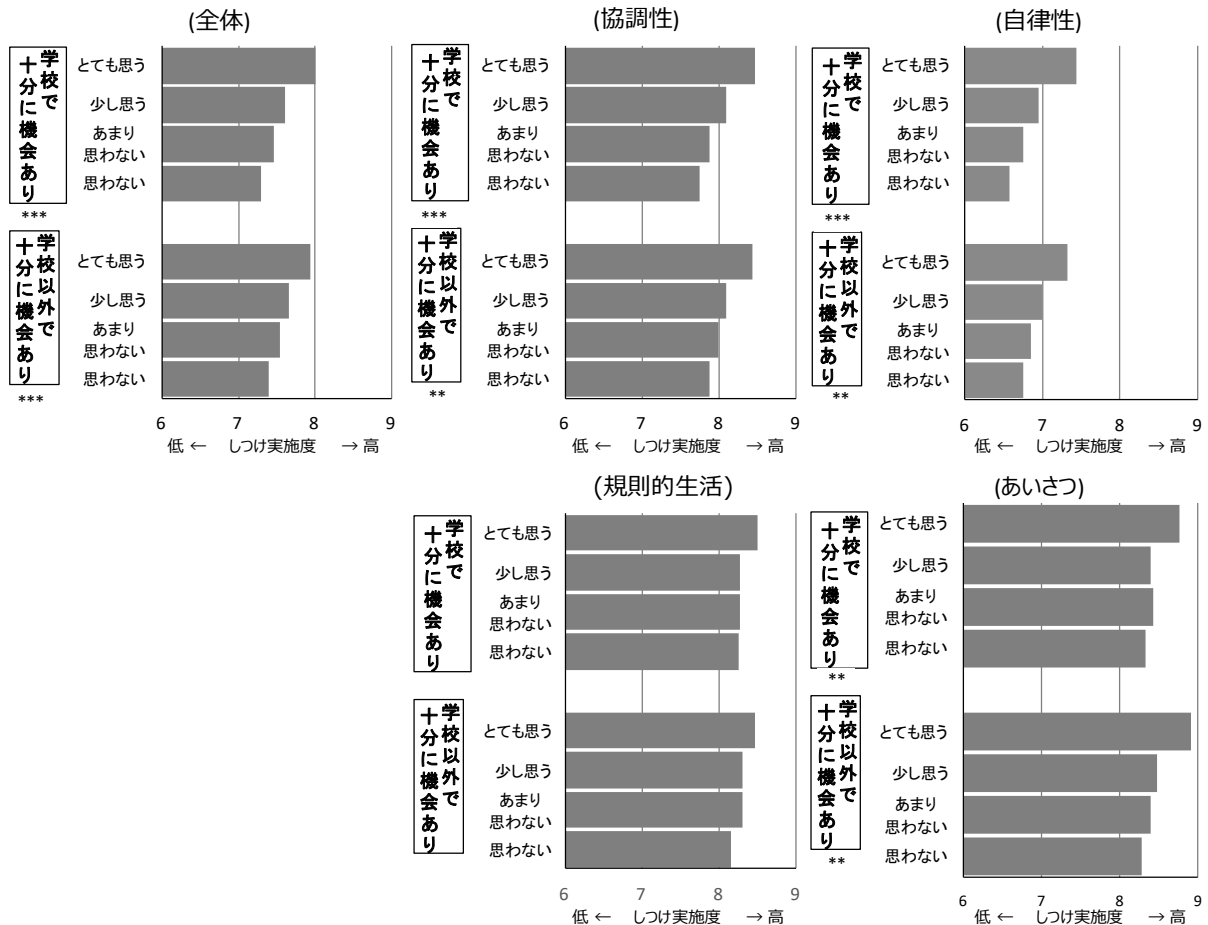


図8 体験機会の評価としつけ



#### 4 考察

本節では、自然体験活動への参加やしつけに対する保護者の積極性を尺度化として測定し、それに影響を与えている要因について分析してきた。その結果、両者に共通して影響を与えている要因として、その家庭の「教育費支出」、「体験機会の十分さ」についての保護者の評価、そして「親自身の自然体験」が上げられたので、これらについて若干の考察を加えてみたい。

本調査の分析結果からは、世帯収入と教育費支出が自然体験活動への参加度やしつけの実施度に、(互いに関連はしつつも)異なる影響を与えていることが示された。先行する調査(脚注1参照)でも、世帯収入と子どもへのしつけの間にはほとんど関係がみられないのに対し、子どもの教育費が高い家庭ほど子どもへのしつけが多くなる傾向が指摘されている。

教育費支出は家庭の経済力を反映しているものと考えられがちだが、本調査の結果からは、教育費支出の多寡には保護者が教育や子育てに対して持っている態度や価値観が反映していると予想できる。親世代の経済格差が子ども世代の格差につながらないようするためには<sup>7</sup>、親と子どもとの望ましい関わりを支援することが重要であると言える。

こうした視点から興味深いのは、体験機会の十分さについての保護者の評価が、自然体験活動への参加度としつけ実施度の両方に影響を与えているという調査結果である。同様に、保護者自身の日常的な自然体験の多さが、子どもの自然体験への積極性やしつけに対する態度にも反映していた。こうした評価や保護者の体験は、学校や地域社会の「教育力」に対する保護者の信頼感を反映しているのではないだろうか。子どもの子育てを担う保護者層への社会教育・生涯学習的な働きかけが、いっそう求められていると言えそうである。

---

<sup>7</sup> こうした論点について国際比較調査の結果から検討したものとして、内田伸子 2017 「学力格差は幼児期から始まるか—経済格差を超える要因の検討」『教育社会学研究』100:108-119.



平成30年度 生涯学習・社会教育総合調査研究事業  
青少年の体験活動に関する県民の実態調査 報告書

発行年月日 平成31年3月

編集・発行 青森県教育庁生涯学習課

〒030-8540 青森市長島一丁目1番1号

TEL 017-722-1111 (内 3138) FAX 017-734-8272

<http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/>

[education/aomorimanabi-e\\_shogai.html](http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/education/aomorimanabi-e_shogai.html)

調査・分析委託先 株式会社サンブラッソ・エイティープイ

〒038-0011 青森市篠田二丁目3番17号

TEL 017-762-7010 FAX 017-762-7011